

千葉県八千代市

あさまうち しろすじ おきづか
浅間内遺跡・白筋遺跡・沖塚遺跡

八千代市辺田前土地区画整理事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書

2007

八千代市辺田前土地区画整理組合

八千代市遺跡調査会

序 文

八千代市は、「住宅団地発祥の地」として知られるように、昭和30年代初頭における八千代台のまちづくりを契機として住宅団地の造成が進み、首都30km圏に位置する住宅都市として成長を続けてきました。

昭和60年代以降、市域北部における大学と住宅地のセット開発が行われ、文教都市としての側面も併せ持つようになっています。また、京成電鉄に加えて平成8年4月には東葉高速鉄道が開業したことで、都心へのアクセスもさらに便利となり、沿線を中心とした新しいまちづくりが進み、県内の中堅都市として発展しております。

このような状況のもと、八千代市遺跡調査会では、市内で行われる個人や民間企業の開発行為、土地区画整理事業などに先行する埋蔵文化財発掘調査に従事してまいりました。本報告書に掲載した調査は、市域の南東部に当たる村上地区において計画された、辺田前土地区画整理事業に先行するものです。この事業地については、平成2年度に埋蔵文化財についての照会があり、5年度から17年度までの間、断続的に八千代市遺跡調査会及び八千代市教育委員会が確認調査・本調査を実施してきたものです。

浅間内遺跡は、この事業に先行して第1次から第7次に亘る確認調査・本調査が行われ、旧石器時代から近世に至る豊富な内容をもつ、当地域の拠点的な遺跡であることが判明いたしました。白筋遺跡は、八千代市指定史跡である根上神社古墳周辺の遺跡で、今回の調査で同古墳の周溝の一部と平安時代の住居跡などを発見いたしました。沖塚遺跡は、財団法人千葉県文化財センターが東葉高速鉄道の軌道部分で行った調査で、旧石器や古墳時代初期の鍛冶遺構が検出され著名となった遺跡です。今回の調査では、旧石器及び縄文時代の遺物や陥穴、弥生時代中期前半の土器などが発見されました。遺跡が多く所在する村上地区にあって、3遺跡はそれぞれに個性をもち、八千代市域の歴史を語るためには欠くことのできない基礎資料を得ることができました。

過去の人々の生活に思いを馳せ、地域を慈しむ心を育てる教材として、本報告書が大いに活用されることを願っております。

最後になりましたが、調査の実施にあたり多大なご協力とご指導をいただいた事業者・土地所有者を初めとする皆様、厚く御礼申し上げます。また、調査や整理に従事された調査員、補助員の皆様に対して深く感謝いたします。

平成19年3月30日

八千代市遺跡調査会

会長 加賀谷 孝

凡 例

1. 本書は、千葉県八千代市村上に所在する浅間内遺跡・白筋遺跡・沖塚遺跡の、平成5年度～17年度に断続的に実施された発掘調査の結果をまとめたものである。
2. 発掘調査は、八千代市辺田前土地区画整理事業に先行するもので、八千代市辺田前土地区画整理組合と八千代市遺跡調査会の間で締結した委託契約に基づき、八千代市遺跡調査会が実施したものである。
3. 調査及び整理は以下のように実施した。

1) 浅間内遺跡

- 第1次確認調査：期間 平成6年4月11日～6月3日 面積1,100㎡/11,510㎡
- 第2次確認調査：期間 平成6年7月18日～20日 面積30㎡/200㎡
- 第3次確認調査：期間 平成7年1月30日～2月14日 面積450㎡/4,500㎡
- 第1次本調査：期間 平成6年6月20日～9月12日 面積1,000㎡
- 第2次本調査(平成6年度分)：期間 平成7年2月15日～3月31日 面積1,400㎡
- 第6次確認本調査：期間 平成12年10月26日～11月22日 面積82㎡/500㎡、本調査27㎡
- 第7次本調査：期間 平成16年3月10日～11月30日 面積2,800㎡

2) 白筋遺跡

- 第1次確認調査：期間 平成6年6月1日～10日 面積134㎡/1,340㎡
- 第2次確認調査：期間 平成10年7月16日～8月3日 面積545㎡/5,450㎡
- 第1次本調査：期間 平成10年8月19日～9月11日 面積260㎡

3) 沖塚遺跡(a地点)

- 確認調査：期間 平成5年4月1日～8月25日 面積3,600㎡/39,500㎡
- 本調査：期間 平成5年8月30日～平成6年3月15日 面積6,000㎡

4) 本整理：期間 平成17年4月8日～平成19年3月30日

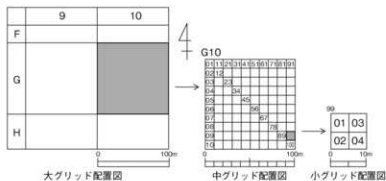
なお、辺田前土地区画整理事業に伴う各調査については、「第1章」にまとめた。

4. 現地調査は、常松成人、森竜哉、秋山利光が担当し、本整理については中野修秀が担当した。
5. 本書の図版作成は、中野修秀、植田正子、小弓場直子、立松紀代美、鶴田美保、寺澤洋子、長田京子、野中則子、日向洋子、見神光恵、山下千代子、綿貫優美子が行い、遺物の写真撮影は高屋麻里子が行い、編集及び執筆は中野が担当し、常松が加筆・補正を行った。第1章及び第2章7節(6)石造物の作図・解説は常松が担当した。
6. 遺構No.とトレンチNo.は、記号(アルファベット)と調査順の数字で表記した。記号は、原則として以下のとおりである。

住居跡 D 古墳 K 土坑(ピット) P 溝 M 掘立柱建物跡 H その他の遺構 I
グリッド G トレンチ T

7. なお、浅間内遺跡については、確認調査・本調査とも第7次に亘っており、遺構No.の「調査順の数字」は、第1次から第7次まで通しでつけている。本報告書では、住居跡は、D1～D9、D11～D15、D17、D18、D25、D28～D30、D74、D75、D81～D118を扱い、ピット・土坑は、P1～P49、P51、P53、P54、P62、P104、P106、P112、P128～P179、P196～P199、P585～P656を扱い、溝は、M1～M10、M26、M33～M35、掘立柱建物跡は、H1～H4、H9～H10、を扱っている。また、浅間内遺跡に関する過去の報告書において遺構No.は、73D、76D、574Pなど数字とアルファベットが逆になっているが、これは作業の便宜上のため生じたことであり、通しNo.については一貫している。

8. 調査区のグリッドについては、確認調査・本調査を通じて同じ区画法を用いている（下図を参照）。100m四方を大グリッドとし、F9、F10…、G9、G10…のようにアルファベットと数字の組み合わせで表現し、その中を10m四方100個の中グリッドに分け、G10-1G、G10-2G、…G10-100Gと表現した。必要に応じて中グリッドの中を5m四方の小グリッド4個に分け、G10-99-1G、…G10-99-4Gのように表現した。



9. 旧石器実測・観察の一部については、株式会社アルカに委託した。
10. 旧石器の一部・縄文石器の実測、弥生土器・土師器・須恵器の実測の一部については、埋蔵文化財発掘調査支援協同組合に委託した。また、石器に関して橋本勝雄氏のご教示を受けた。
11. 石造物については、木原律子氏のご教示を受けた。
12. 金属製品の実測の一部については、新成田総合社に委託した。
13. 遺構 No. は、浅間内遺跡の掘立柱建物跡 H1～H4、H9、H10を除いては、原則として現地呼称をそのまま用いている。なお浅間内遺跡 P34、P50、P61、P105、沖塚遺跡 P1、P4、P5は、欠番となっている。また、住居跡内のピットにも欠番が生じている場合がある。
14. 遺構実測図中のスクリーントーンは、特に指摘が無い場合は、以下のとおりである。
 火床・焼土 カマド 粘土・古期ピット
-
15. 住居跡平面図中の一点鎖線（- - - - -）は、床硬化面の範囲を表す。
16. 土層説明の土色の表記法については、一部、小山正忠・竹原秀雄「新版標準土色帖」（13版1993. 1）を用いた。
17. 遺物出土状況図の遺物 No. は、遺物実測図の No. と一致している。また、写真図版の遺物 No. も同じである。
18. 遺物実測図中のスクリーントーンは、特に指摘が無い場合は、以下のとおりである。
 須恵器・灰軸陶器 灰軸 赤彩 使用面・タール・煤・鉄軸・鉄サビ 黒色処理・セシイ土器
-
19. 発掘調査から整理作業の間において、以下の諸氏・諸機関にご指導・ご協力をいただきました。記して感謝いたします。
 伊藤弘一 井上哲朗 宇田川浩一 大鷹依子 小川和博 角張淳一 木原律子 齋藤弘道
 鈴木正博 高橋（中村）敦子 豊田秀治 鳴田浩司 橋本勝雄 峰村篤 村田一男
 株式会社アルカ 株式会社竹中土木 新成田総合社 千葉県教育庁文化財課埋蔵文化財発掘調査支援協同組合 八千代市教育委員会 八千代市辺田前土地区画整理組合
20. 出土した遺物・写真・図面等の調査資料は、八千代市教育委員会が保管している。

目 次

序文
凡例
目次

第1章	1
1. 調査に至る経緯	1
(1) 照会と回答	1
(2) 発掘調査	2
(3) 本整理	2
2. 各遺跡の概要	3
(1) 浅間内遺跡の立地	3
(2) 浅間内遺跡におけるこれまでの調査	3
(3) 白筋遺跡の立地	3
(4) 白筋遺跡におけるこれまでの調査	5
(5) 沖塚遺跡の立地	5
(6) 沖塚遺跡におけるこれまでの調査	5
(7) 周辺の遺跡	5
3. 各調査の概要	10
(1) 浅間内遺跡第1次～3次確認調査	10
(2) 浅間内遺跡第1次本調査	10
(3) 浅間内遺跡第2次本調査(平成6年度分)	10
(4) 浅間内遺跡第6次確認本調査	10
(5) 浅間内遺跡第7次本調査	11
(6) 白筋遺跡第1次確認調査	11
(7) 白筋遺跡第2次確認調査, 第1次本調査	11
(8) 沖塚遺跡確認調査, 本調査	11
第2章 浅間内遺跡の調査	15
1. はじめに	15
2. 旧石器時代	17
(1) 基本層序	17
(2) PTP-3	17
(3) 調査区出土の旧石器	17
3. 縄文時代	19
(1) 陥穴	19
(2) 陥穴出土遺物	23
(3) ビット	23
(4) ビット出土遺物	29
(5) 遺構外出土の縄文式土器	35
(6) 遺構外出土の土製品	49
(7) 遺構外出土の石器	51
4. 弥生時代	53
(1) 竪穴住居跡	53
(2) ビット	76
(3) ビット出土遺物	76
(4) 遺構外出土遺物	76
5. 古墳時代	78
(1) 竪穴住居跡	78
(2) ビット	91
(3) ビット出土遺物	91
(4) 遺構外出土遺物	91
6. 奈良平安時代	97
(1) 竪穴住居跡	97
(2) 掘立柱建物跡	186

	(3) ビット	190
	(4) ビット出土遺物	199
	(5) 遺構外出土遺物	199
7. 中・近世	(1) ビット	201
	(2) ビット出土遺物	203
	(3) 溝	203
	(4) 溝出土遺物	211
	(5) 遺構外出土遺物	211
	(6) 石造物	217
8. 時期不明	(1) ビット	220
第3章 白筋遺跡の調査 226		
1. はじめに		226
2. 旧石器時代		226
3. 縄文時代		226
4. 根上神社古墳	(1) 根上神社古墳の概要	227
	(2) M3	229
5. 奈良平安時代	(1) 竪穴住居跡	229
6. 中・近世	(1) 溝	233
	(2) 遺構外出土遺物	233
7. 時期不明	(1) ビット	233
	(2) 溝	233
第4章 沖塚遺跡(a地点)の調査 235		
1. はじめに		237
2. 旧石器時代	(1) 旧石器時代の遺構と遺物	237
	(2) 調査区出土の旧石器	241
3. 縄文時代	(1) 陥穴	243
	(2) 陥穴出土遺物	249
	(3) ビット	249
	(4) ビット出土遺物	251
	(5) 遺構外出土遺物	251
4. 弥生時代	(1) 遺構外出土遺物	259
5. 古墳時代		261
6. 奈良平安時代	(1) 方形周溝状遺構	261
7. 中・近世	(1) 塚群	261
	(2) ビット	261
	(3) 溝	261
	(4) 遺構外出土遺物	261
8. 時期不明	(1) ビット	267
第5章 成果と課題 278		
	(1) 浅間内遺跡	278
	(2) 白筋遺跡	282
	(3) 沖塚遺跡	282
参考文献		285
報告書抄録		287
写真図版		

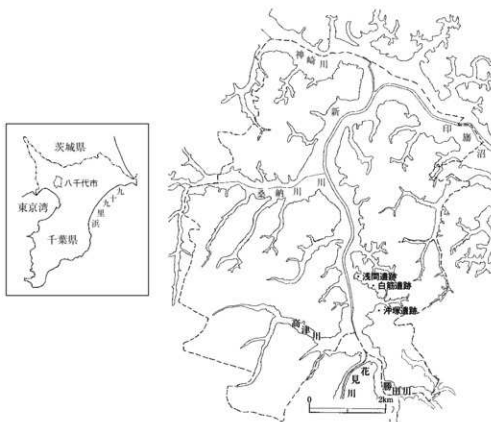
第1章

1 調査に至る経緯

(1) 照会と回答

浅間内遺跡の発掘調査原因である八千代市辺田前土地区画整理事業は、東葉高速鉄道村上駅周辺地区の都市計画道路や公園等の公共施設の整備改善及び宅地の利用増進を図り、健全な市街地を造成することを目的として、平成5(1993)年の八千代市辺田前土地区画整理組合(以下「組合」と略)の設立認可以来、継続されている事業である。

この事業に伴う事業地内の文化財及び埋蔵文化財の取扱いについては、平成2(1990)年5月に組合(当時は設立準備委員会)から照会が提出され、平成3(1991)年4月に千葉県教育委員会(以下「県教委」と略)によって、事業区域596,000㎡のうちの98,000㎡について、「遺跡有り」の回答が出されている。区域内の遺跡名は、沖塚遺跡、白筋遺跡、浅間内遺跡、根上神社古墳(市指定文化財)である。その後、組合と八千代市教育委員会(以下「市教委」と略)との間で文化財の取扱いについて協議がもたれた。根上神社古墳については現況保存としたが、その他の遺跡については記録保存を原則とし、発掘調査を行うという方針で協議が進められた。また、発掘調査の組織は、事業の進捗・効率を考慮し、八千代市遺跡調査会(以下「調査会」と略)とし、調査費用は、事業者である組合の負担によって行うこととした。



第1図 八千代市と辺田前地区遺跡群の位置



第2図 事業範囲図

(2) 発掘調査

平成5年度の組合認可を受け、区画整理事業全域に係る土木工事の発掘届は、同年1月25日に組合から提出された。さらに同年2月18日に組合・市教委・調査会の三者間で埋蔵文化財に関する協定を締結し、調査に着手することとなった。

平成5年度は、沖塚遺跡の確認調査及び本調査を行った。平成6年度は浅間内遺跡の第1次確認調査・第2次確認調査・第3次確認調査・第1次本調査・第2次本調査（一部1400㎡）、白筋遺跡第1次確認調査を行った。平成7年度は浅間内遺跡第2次本調査（3000㎡）・第3次本調査を行った。平成8年度は浅間内遺跡第3次本調査の基本整理の残務を行った。平成10年度は白筋遺跡の第2次確認調査・第1次本調査を行った。

平成11年度からは、組合の要請により、可能な部分については、国庫補助及び県費補助を受けて市教委が直営で行うという方針に改め、浅間内遺跡の第4次確認調査を行った。平成12年度は、直営で第4次本調査・第5次確認調査、白筋遺跡第3次確認調査を行った。また、補助対象にならない都市計画道路部分は、組合の負担で、第6次確認本調査として行った。平成13年度は、直営で第5次本調査・第7次確認調査を行った。平成15年度～16年度は、組合の負担で、第7次本調査を行った。

(3) 本整理

辺田前土地区画整理事業は、事業変更が行われ期間が延長された。埋蔵文化財調査についても当初の協定締結から10年が経過し実情に合わないものになっていた。そこで、浅間内遺跡の第7次本調査の開始に先立ち、本整理の実施を見据えた内容の協定を再度締結することとした。予算の総額と、組合の解

散までに本整理を終了させることなどを定め、平成16年3月5日に組合・市教委・調査会の三者間で埋蔵文化財の調査及び整理に関する協定を締結した。

引き続き、沖塚遺跡確認調査・本調査、白筋遺跡第1次～第2次確認調査・第1次本調査、浅間内遺跡第1次～第3次確認調査・第1次～第3次本調査・第6次確認本調査・第7次本調査について、本整理を行うための協議を、県教委の指導のもと組合と市教委間で行った。その結果、本整理事業は、全体を二分し、国庫補助・県費補助を受けて行う直営体制と、組合の負担による調査会体制と並行して行い、各1冊の報告書を作成して平成18年度中に終了させるということで合意に達した。

直営班は、浅間内遺跡の第2次本調査(平成7年度分)・第3次本調査を担当し、それ以外の部分を調査会が担当することにし、直営班は平成17年2月1日から本整理を開始し、調査会は平成17年4月8日に組合との委託契約を締結し同日から開始した。

2 各遺跡の概要

(1) 浅間内遺跡の立地

浅間内遺跡は、市域の南部、新川の東岸に位置する。北を新川の低地から入る小谷に、南を入り江状の辺田前・沖塚前低地によって画された台地上に立地する。この低地は、平戸川(開削によって花見川と繋げられ、現在は新川と呼称する)の最上流地域にあって広大な面積である。台地上の標高は、24～26mである。この台地上西端には、浅間神社が鎮座し、地名の由来となっている。

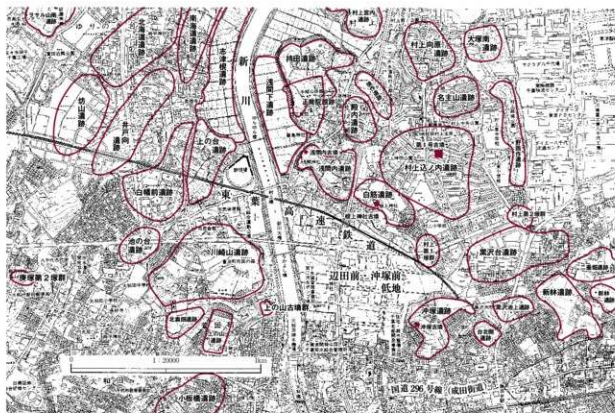
(2) 浅間内遺跡におけるこれまでの調査

浅間内遺跡は、昭和57(1982)年度に市教委が県費補助を受けて実施した、埋蔵文化財包蔵地所在調査において初めて認識され、縄文時代後期及び奈良・平安時代の遺物包含地として八千代市の遺跡No.204に登録された(市教委1983)。

本遺跡では、これまで辺田前土地区画整理事業に先行する調査が断続的に行われてきた。まとめると第1表のとおりであり、多くの成果が出ている。これらのうち、平成11年度に実施した第4次確認調査(市教委2000)、平成12年度に実施した第4次本調査・第5次確認調査(市教委2002)、平成13年度に実施した第5次本調査・第7次確認調査(市教委2003a)については、それぞれ国庫補助と県費補助を受けており、報告書を刊行している。第4次確認調査・第4次本調査の地点では、古墳時代終末期住居跡1軒、古墳時代前期土坑12基を調査した。第5次確認調査の地点では、遺構は検出されなかった。第5次本調査地点は、浅間内遺跡範囲内の南東端に当たり、本報告書の対象である第1次本調査の最南端地区に接している。旧石器、縄文時代中期土坑4基、弥生時代後期住居跡1軒、同土坑2基、奈良時代住居跡3軒、平安時代住居跡2軒、同土坑3基、近世墓坑1基、近現代炭焼窯1基、同土坑3基、溝6条などが調査された。

(3) 白筋遺跡の立地

白筋遺跡は、浅間内遺跡と国道16号を挟んで南東に隣接する遺跡である。辺田前・沖塚前低地を南に臨む台地縁辺にある。この遺跡の範囲内に、市内最大の前方後円墳として市の史跡に指定されている根上神社古墳が所在している。台地上の標高は、21～28mである。



第3図 辺田前地区遺跡群と周辺の遺跡



第4図 辺田前地区周辺の旧地形 明治15年第一師管地方二万分一迅速測図に加筆

(4) 白筋遺跡におけるこれまでの調査

白筋遺跡は、千葉県教育委員会が昭和46(1971)年に刊行した『千葉県記念物所在地図』に追加No.274米ノ内南部遺跡として初出し、昭和57(1982)年度に市教委が県費補助を受けて実施した埋蔵文化財包蔵地所在調査において、奈良・平安時代の遺物包含地帯で帯鎖・鉄鎌・刀子が出土した遺跡として八千代市の遺跡No.208に登録された(市教委1983)。

本遺跡における調査は、すべて辺田前土地区画整理事業に伴うものである。平成12年度に行なわれた第3次確認調査は、市教委が行ったもので、既に報告されている(市教委2002)。根上神社古墳の北西～西の隣接地210㎡を対象として調査し、北西部で同古墳の周溝を確認した。調査後この周溝確認部分は、同古墳の一部として指定範囲に加えられることとなった。

(5) 沖塚遺跡の立地

沖塚遺跡は、辺田前・沖塚前低地の南東の台地上に位置する。沖塚遺跡の北の低地には、かつて黒沢池が存在したが、現在は消滅した。台地上の標高は、21～25mである。

(6) 沖塚遺跡におけるこれまでの調査

沖塚遺跡は、昭和57(1982)年度に市教委が県費補助を受けて実施した、埋蔵文化財包蔵地所在調査において初めて認識され、平安時代の遺物包含地として八千代市の遺跡No.215に登録された(市教委1983)。

本遺跡範囲内の西部に沖塚古墳が所在し、宅地造成に先行する調査が昭和63年度に実施された。その結果、貝化石岩を使用して構築された横穴式石室などが発見された。石室は既に盗掘を受けていたらしく、内部から出土したのは人骨と小鉄片2点のみであった(堀部1991)。人骨は、分析の結果、成人男性5体、青年女性1体、未成年3体の少なくとも9体とのことであった(市教委2003b)。

遺跡範囲内の北東部では、東葉高速鉄道建設に先行する調査が、財団法人千葉県文化財センターによって、平成2年度・4年度に行われた。818㎡を調査し、その結果、旧石器遺物集中箇所、縄文時代陥穴、古墳時代初期の鍛冶遺構、10世紀前半の住居跡などが発見された(大鷹1994)。

平成11年度には、遺跡中央やや南寄りの748.84㎡で宅地造成が計画され、これに先行してb地点として市教委が確認調査を行った。遺構・遺物とも確認されなかった(市教委2000)。

(7) 周辺の遺跡(第3図)

3遺跡が所在する村上地区は、遺跡密度が比較的高い地域である。浅間内遺跡の東方、白筋遺跡の北東に隣接する公団村上団地の建設に伴う村上込ノ内遺跡の調査では、旧石器～近世に至る遺構・遺物が検出されている。169軒の住居跡や24棟の掘立柱建物跡などである。この遺跡内には村上第1号古墳があり、横穴式石室の中から直刀2点、鉄鎌100点以上などが出土した(天野努ほか1975)。浅間内遺跡の北方には、殿内遺跡があり、八千代市歴史民俗資料館(現・八千代市立郷土博物館)建設に先行する調査で、古墳時代前期・後期、奈良平安時代の住居跡が計37軒検出された。谷を隔てた北側には正覚院がある。県指定文化財である木造釈迦如来立像1軀(附・木造舍利塔1基)、市指定文化財の釈迦堂1棟(附・厨子1基)、宝篋印塔1基などを所有する古刹であり、正覚院館跡として中世の堀跡や土塁が確認されている。正覚院館跡の一部交わって持田遺跡があり、古墳時代後期の住居跡12軒などが検出されている(市教委1995)。

根上神社古墳の南東方約300m、沖塚遺跡の北方同じく300mに当たるところに村上第1塚群がある。



第5図 浅間内遺跡の各調査地点 No.は第1表に対応

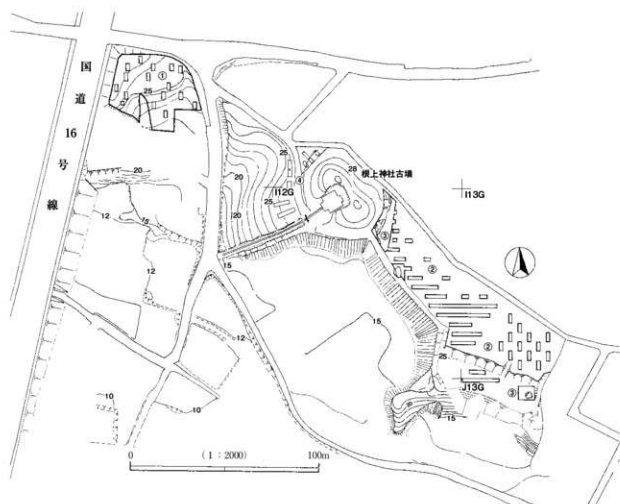
第1表 浅間内遺跡の発掘調査一覧

年度	調査名	面積 (㎡)	第5図No.	主な結果	文献
平成6年度	第1次確認調査	1,100 /11,510	①	縄文～平安時代住居跡39軒など。 第1次、第2次本調査へ。	市教委 (1996)
	第2次確認調査	30/200	②	溝1条。本調査せず。	
	第3次確認調査	450/4,500	③	弥生～平安時代住居跡16軒など。 第2次、第3次本調査へ。	
	第1次本調査	1,000	④	弥生～平安時代住居跡11軒など。	
	第2次本調査	1,400	⑤	古墳～平安時代住居跡10軒など。	
平成7年度	第2次本調査	3,000	⑥	(2次・3次合わせて) 縄文～平安時代住居跡51軒、古 墳1基、方形周溝状遺構2基、 土坑281基など。	市教委 (1997) 市教委 (2007)
	第3次本調査	4,300			



第6図 浅間内遺跡の各調査地点遺構配置図

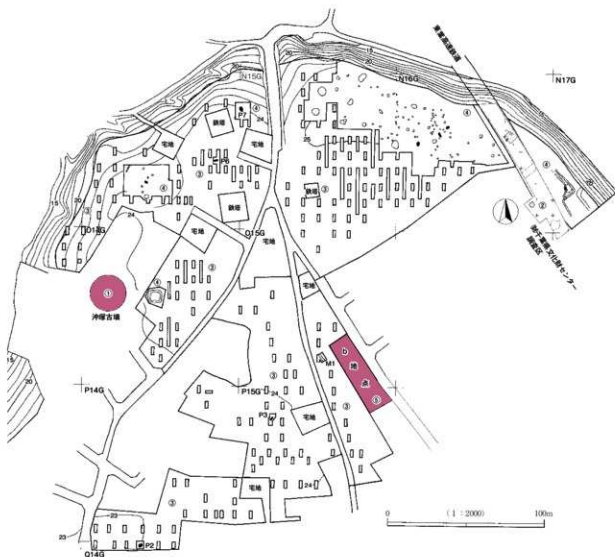
平成11年度	第4次確認調査	150/570	⑦	古墳時代住居跡1軒など。 第4次本調査へ。	市教委(2000)
平成12年度	第5次確認調査	94/1,054	⑧	遺構なし。本調査せず。	市教委(2002)
	第4次本調査	98	⑨	古墳時代後期住居跡1軒、古墳時代前期ピット12基。	
平成13年度	第6次確認本調査	500	⑩	奈良時代住居跡2軒など。	市教委(2003a)
	第5次本調査	1,400	⑪	旧石器、縄文時代土坑4基、弥生時代住居跡1軒、奈良時代住居跡3軒、平安時代住居跡2軒など。	
	第7次確認調査	284/3,600	⑫	住居跡20軒、土坑10基、溝2条など。第7次本調査へ。	
平成15～16年度	第7次本調査	2,800	⑬	旧石器、縄文時代土坑19基、弥生時代住居跡10軒、古墳時代住居跡7軒、奈良平安時代住居跡22軒など。	



第7図 白筋遺跡各地点遺構配置図

第2表 白筋遺跡の発掘調査一覧

年度	調査名	面積 (㎡)	第7図No.	主な結果	文献
平成6年度	第1次確認調査	134 / 1,340	①	縄文早期土器、土師器、土玉など。	市教委 (1996)
平成10年度	第2次確認調査	545 / 5,450	②	古墳周溝、中世以降の溝。	
	第1次本調査	260	③	平安時代住居跡1軒	
平成12年度	第3次確認本調査	94 / 210	④	古墳周溝、ビット1基	市教委 (2002)
	本調査1				



第8図 沖塚遺跡各地点遺構配置図

第3表 沖塚遺跡の発掘調査一覧

年度	調査名	面積 (㎡)	第8図 No.	主な結果	文献
昭和63年度	沖塚古墳本調査	1,600	①	古墳、横穴式石室、人骨、須恵器など	市教委(2003b)
平成2年度	本調査	643	②	旧石器、縄文、古墳時代鍛冶工房	千文セ(1994)
平成4年度	本調査	175		平安時代住居跡1軒	
平成5年度	確認調査	3,600	③	旧石器、縄文時代陥穴、土坑、方形周溝状遺構、塚、溝	市教委(1995)
	本調査	6,000	④	縄文早期～晩期土器など	
平成12年度	b地点確認調査	106 / 748.84	⑤	なし	市教委(2000)

円墳2基、円形周溝1基、中近世の塚10基などが調査された（天野努ほか1975、竹石1979）。円墳は、いずれも墳麓に主体部の土坑をもち、周溝は伴わない形態であった。第3号墳には、玉類や直刀などの副葬品が出土した。塚からは、土師器や寛永通宝、縄文土器などが出土した。村上第1塚群の一部は未調査で現存している。

沖塚遺跡の北側、辺田前・沖塚前低地の東奥にあった黒沢池からさらに東に延びる谷に臨んで、台北側遺跡・黒沢池上遺跡・新林遺跡・二重堀遺跡など縄文時代を主体とした遺跡群がある。いずれも遺構・遺物密度は高いとは言えないが、縄文時代各時期の遺物が確認されており、興味深いフィールドである。

西方、新川を隔てた萱田町には、弥生時代後期～古墳時代中期を中心とした集落跡である川崎山遺跡、奈良平安時代の集落跡である上の台遺跡がある。さらにその西～北方は、萱田遺跡群が連なっている。

3 各調査の概要

(1) 浅間内遺跡第1次～3次確認調査

浅間内遺跡の調査は、平成6年度に着手した。発掘届は、平成6年3月10日に調査会から提出され、同年4月1日に組合・調査会間で調査の委託契約を締結し、同年4月11日から6月3日まで、耕作の関係で調査できない部分を除いた11,510㎡を対象として、第1次確認調査を実施した。その後、耕作物の問題が解決することに調査を行ない、同年7月18日から20日に200㎡を対象として第2次確認調査を、平成7年1月30日から2月14日に4,500㎡を対象として第3次確認調査を実施した。

(2) 浅間内遺跡第1次本調査

確認調査の結果を受けて、本調査を実施した。第1次本調査は、平成6年5月20日に調査会からの発掘届、同年6月17日に組合・調査会間の委託契約（第2次確認調査を含む）締結、6月20日から9月12日まで国道16号線の西に隣接した区域1,000㎡を対象として実施した。

平成6年6月20日～24日重機による表土除去。21日～7月1日遺構ブラン検出。6月21日～29日H10Gの表土除去（組合の提供作業）。6月23日～30日基準点測量（提供作業）。7月1日～9月12日F11G調査。8月1日～9月9日H10G調査。8月25日～9月1日G10・G11G調査。9月6日空撮実施（実機）。7月～8月は、少雨による乾燥と猛暑に悩まされた。

(3) 浅間内遺跡第2次本調査（平成6年度分）

第2次本調査は、浅間内台地の西部4,400㎡を対象とし、平成6年11月4日に発掘届を提出、委託契約（第3次確認調査を含む）は同年12月8日に締結した。平成6年度は、このうち1,400㎡を平成7年2月15日から3月31日に調査した。

(4) 浅間内遺跡第6次確認本調査

第6次確認調査は、遺跡の南東部の一角を対象に行った。都市計画道路になる区域であるため、調査会が調査を行うこととし、平成12年10月23日に組合・調査会間の委託契約を締結、同12年9月19日に土木工事の発掘届が提出され、同年9月22日に発掘届を提出し10月26日から調査を開始した。26日～31日トレンチを6箇所設定、手掘り。30日～11月2日重機による掘削。10月30日～11月6日清掃、遺構検出。確認調査の結果、住居跡2軒を検出した。この2軒について引き続き11月9日から本調査を実施し、11月22日に終了した。

(5) 浅間内遺跡第7次本調査

平成13年度に実施した第7次確認調査の結果を受けて、第7次本調査を計画し、平成16年2月9日に発掘届を提出、同年3月5日に組合・調査会間の委託契約を締結して、3月10日に調査を開始した。10日～4月1日重機表土除去、2 tトラックで廃土運搬。3月15日～4月1日梨の根の除去作業。対象地は梨畑であったため、66本の梨の根があった。梨の根は原則として人力で除去し、廃土に混じらないようにまとめ、処理は業者に委託した。3月19日～4月7日清掃、遺構検出。7日～8月27日遺構調査。工事計画に合わせ、西側を先行させる。8月24日～11月30日東側の遺構調査。30日現場撤収、調査終了。

(6) 白筋遺跡第1次確認調査

浅間内遺跡第1次確認調査と同時に調査準備に入り、平成6年3月10日に発掘届を提出、同年4月1日に組合・調査会間の委託契約を締結した。同年6月1日から6月10日に調査を実施した。

(7) 白筋遺跡第2次確認調査、第1次本調査

平成10年6月1日に発掘届を提出、同年7月9日に組合・調査会間の委託契約を締結した。同年7月16日に調査を開始した。16日トレンチ設定。17日～23日重機表土除去。23日清掃、遺構検出。27日からトレンチ調査。30日現地調査終了。8月3日基本整理終了。

確認調査の結果260 m²を本調査することとし、8月18日に組合・調査会間の委託契約を締結、8月19日に調査を開始した。19日～20日重機表土除去。20日～24日清掃、遺構検出。24日遺構調査開始。9月10日現地調査終了。11日基本整理終了。

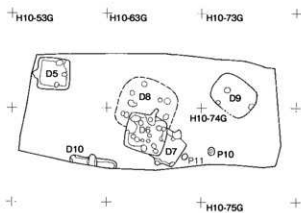
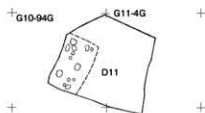
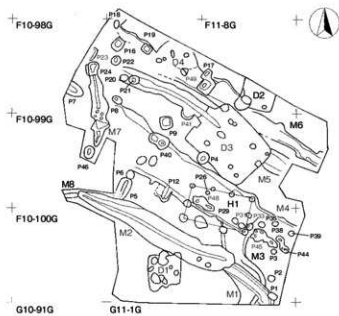
(8) 沖塚遺跡確認調査、本調査

沖塚遺跡の調査が辺田前土地区画整理事業に先行する埋蔵文化財調査の最初であった。平成5年3月1日に調査会が確認調査の発掘届を提出、3月8日に組合・調査会間の確認調査の委託契約を締結、4月1日、面積39,500 m²を対象として調査を開始した。1日～5日準備作業。6日現場作業開始。7月13日～8月25日一部の遺構調査。

本調査は、面積6,000 m²を対象として7月29日発掘届を提出。8月30日組合・調査会間の委託契約を締結。8月30日に調査を開始した。概ね西側から調査を進める。30日～10月4日重機表土除去作業。8月30日～9月1日清掃、遺構検出。9月1日遺構調査開始。11月25日～12月24日東側区域の重機表土除去作業、4 t キャリヤー廃土運搬作業。12月13日～22日清掃、遺構検出。平成6年3月15日調査終了。

引用・参考文献

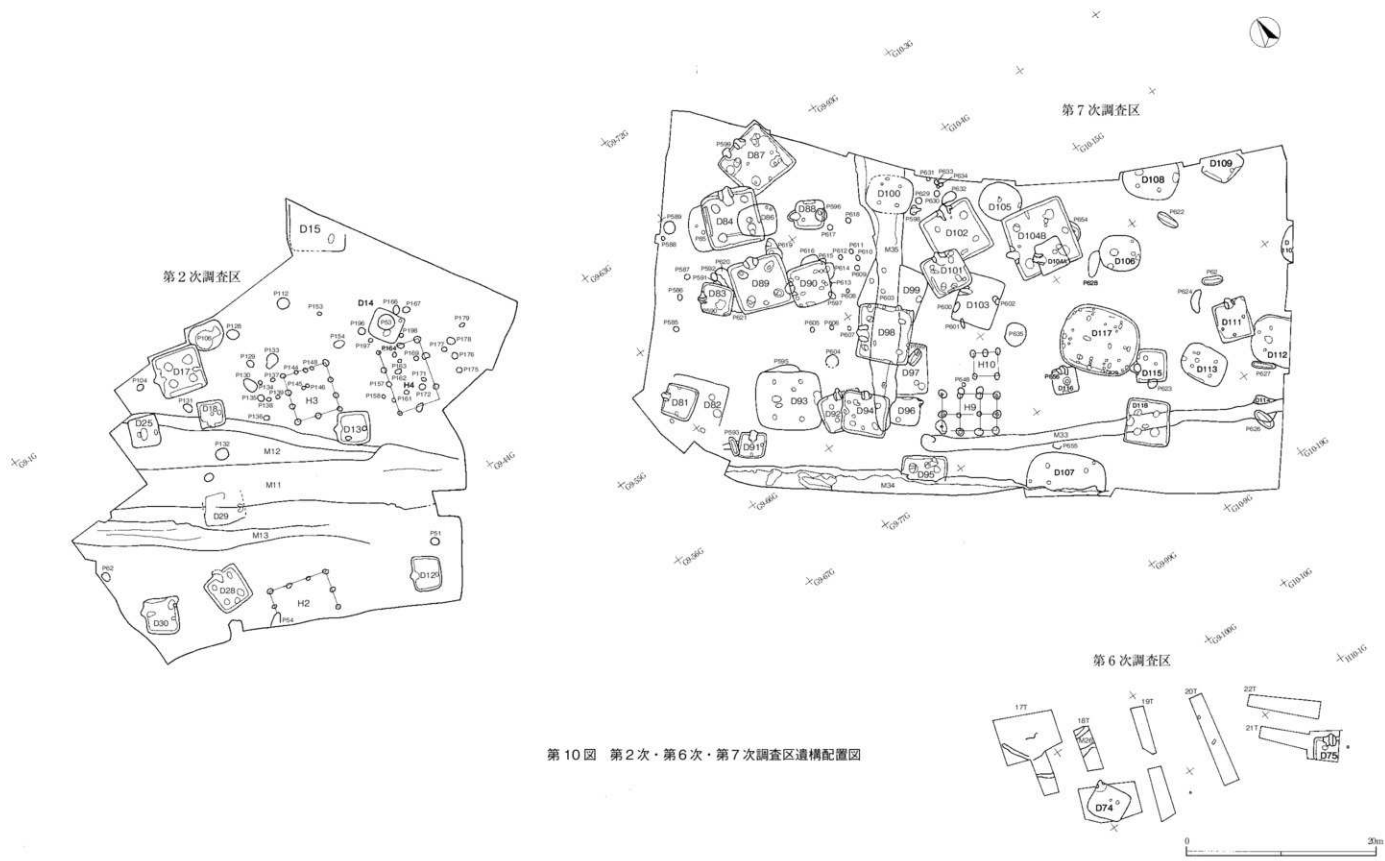
- 天野努ほか(1975)『八千代市村上遺跡群1974』日本住宅公団東京支所・財団法人千葉県都市公社
財団法人千葉県文化財センター(1997)『千葉県埋蔵文化財分布地図(1)－東葛飾・印旛地区(改訂版)』
竹石健二ほか(1979)『八千代市村上古墳群』八千代市都市部都市計画課
千葉県教育委員会(1976)『千葉県記念物所在地図』



※D10は既報告である



第9図 第1次調査遺構配置図



第10図 第2次・第6次・第7次調査区遺構配置図

第2章 浅間内遺跡の調査

1 はじめに

第1章とも重複するが、本書に掲載する対象となるのは、第1次・第2次・第6次・第7次調査についてである。第3次調査は、第2次調査とは一連の調査であったが、国庫補助の対象となったため、単独にて刊行となる。こうした行政的な線引きにより、報告が泣き別れになることは珍しいことではない。本書はあくまでも、対象となる調査の事実報告を主眼に置ものとする。

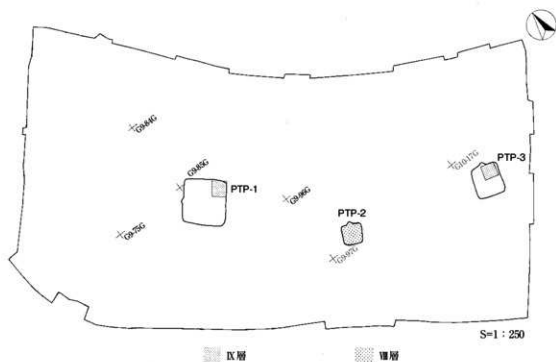
記述の方法であるが、旧石器時代から中・近世に至るまで、時代順に記載してゆくものとし、各次調査毎には行わない。そして、諸般の事情により、時代別の遺構配置図は掲載できなかった。

また、浅間内・白筋・沖塚の3遺跡とも、現地調査ではトータル・ステーションによる遺物取り上げを行っているが、本文中に使用した挿図では、遺物分布図及び接合関係図は、基本的には載せていない。この点に関する内容的な不備は、報告者に責があるということを予めお断りしておく。

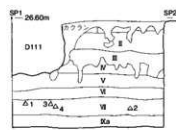
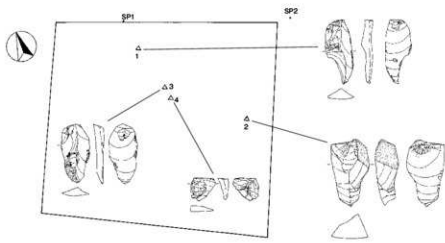
2 旧石器時代

旧石器時代の遺構は、各次・各地区において下層調査を行っているが、単独で石器類が出土することにはあるにせよ、確実に遺物集中箇所と認定できたものは、第5次調査で1地点、第7次調査で1地点の計2地点と、面積に比較してごく小敷にとどまっている。このうち、第5次調査分は既報告である。

第7次調査における下層調査は、掘り方調査後の堅穴住居跡を利用し、PTP-1 (D98)・PTP-2 (D116)・PTP-3 (D111) の計3箇所のテスト・ピットを設定して行った。このうち、PTP-1・PTP-3は2m×2mの設定で、PTP-2のみ住居の平面プラン(方形)そのものをグリッドに見立て、掘り下げた。いずれも台地上の平坦部分に位置する。結果は、PTP-1がⅨ層、PTP-2はⅧ層まで下げたものの遺物は出土せず、PTP-3でのみ石器類が出土した。



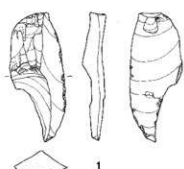
第11図 第7次調査旧石器時代調査区



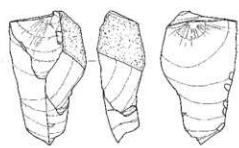
PTP-3 遺物分布図

土層説明

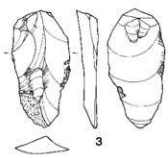
- I層 7.5YR3/3 暗褐色 しまり有り。
- II層 7.5YR4/5 褐色 径2mm 褐色スコリアまばら。
- III層 7.5YR4/4 褐色 径1mm 黄スコリア、橙スコリア、黒スコリア。しまり有り。粘性有り。
- IV層 7.5YR4/6 褐色 径1~2mm 橙スコリア、赤褐色スコリア、黒スコリア。しまり有り。粘性有り。
- V層 7.5YR5/6 明褐色 径1~2mm 橙スコリア、黒スコリア。しまり有り。粘性有り。
- VI層 7.5YR5/6 明褐色 径1~2mm 橙スコリア、黒スコリア。しまり有り。粘性有り。
- VII層 7.5YR5/6 明褐色 径1~2mm 橙スコリア、クロスコリア、褐色スコリア 青灰色スコリア。しまり有り。粘性強い。
- Ka層 7.5YR4/4 褐色 径1~2mm 褐色スコリア、黒色スコリア、しまり有り。粘性強い。



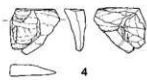
1



2



3



4



第12図 第12図 PTP 実測図

(1) 基本層序 (第12図)

基本層序に関しては、さしあたって専用のテスト・ビットを設定してはいない。また、第1次・2次・6次・7次の各調査(確認・本調査の両者を含む)では、調査方法が微妙に異なっているため、地点毎の土層柱状図を作成することができなかった。そこで今回は、次節において記すところの、PTP-3の断面図を用いることにする。

I層 (暗褐色土) しまりあり。表土。

II層 (褐色土) 径2mm 褐色スコリアまばら。

III層 (褐色土) 立川ルーム最上層。径1mm黄スコリア・橙スコリア・黒スコリア含む。

IV層 (褐色土) 径1~2mm橙スコリア・赤褐色スコリア・黒スコリア含む。

V層 (明褐色土) 第一黒色帯に相当する。径1~2mm橙スコリア・黒スコリア含む。

VI層 (明褐色土) AT包含層。径1~2mm 橙スコリア・黒スコリア含む。

VII層 (明褐色土) 第二黒色帯上部。径1~2mm 橙スコリア・各色スコリア(黒・褐色・青灰色)。

IXa層 (褐色土) 第二黒色帯下部上半。径1~2mm 褐色スコリア・黒スコリア含む。

(2) PTP-3 (第12図)

D111の北東コーナーに設定した下層調査のテスト・ビットである。調査の結果、4点の石器が出土した。産出層準は立川ルーム層VII層に相当する。遺物出土状況は、平面分布的に見るとやや散漫であるが、径2mの範囲内に納まっている。そして、垂直分布的に見ると出土レベルの上下差は比較的少ない。これらから鑑み、テスト・ビットという狭小な調査区における4点ということも考慮し、一応遺物集中箇所と認定しておきたい。

なお、土層断面図は北壁で作成したため、西側はD111のカマドと重なり、攪乱を受けている。

出土遺物 (第12図)

1~4は剥片。

1 長さ6.864cm, 幅2.725cm, 厚さ1.063cm, 重量13.62g。凝灰岩。

2 長さ6.902cm, 幅3.900cm, 厚さ2.423cm, 重量53.96g。黒色安山岩。

3 長さ6.318cm, 幅2.969cm, 厚さ0.958cm, 重量12.60g。頁岩。

4 長さ2.371cm, 幅2.655cm, 厚さ0.906cm, 重量5.24g。ガラス質黒色安山岩。

(3) 調査区出土の旧石器 (第13図)

ここでは、浅間内遺跡の全調査区を対象に、遺構覆土からの出土及びグリッド一括も含める。あくまでも報告者が認定しえたものの中から、さらに抽出したものに限って図化し、掲載することにする。

1は削器。長さ7.196cm, 幅3.191cm, 厚さ1.586cm, 重量42.14g。ガラス質黒色安山岩。

2~6は剥片。

2 長さ4.468cm, 幅3.147cm, 厚さ0.874cm, 重量13.86g。ガラス質黒色安山岩。

3 長さ3.626cm, 幅3.236cm, 厚さ0.865cm, 重量10.38g。珪質頁岩。

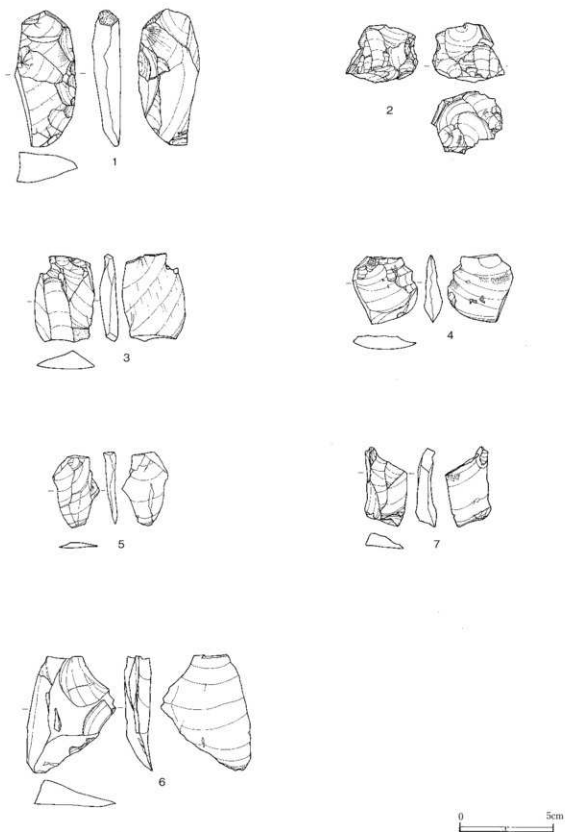
4 長さ3.839cm, 幅2.224cm, 厚さ0.854cm, 重量3.30g。ガラス質黒色安山岩。

5 長さ6.316cm, 幅4.390cm, 厚さ1.260cm, 重量29.66g。頁岩。

6 長さ3.793cm, 幅2.099cm, 厚さ0.971cm, 重量7.26g。頁岩。

7は石核。長さ3.155cm, 幅3.793cm, 厚さ3.164cm, 重量31.52g。頁岩。

このうち、4~6は第7次調査M34の覆土中遺物より抽出したものである。溝という比較的規模の大きい遺構の覆土中とはいえ、PTP-3の遺物集中箇所を除いて一番数がまとまっている。



第13圖 遺構外出土旧石器

3 縄文時代

縄文時代の遺構は、本調査を行った地点では、第2次・第3次・第5次・第7次調査区で検出されており、第1次・第4次・第6次調査区では検出されていない。検出されなかった方は、いずれも台地縁辺部や大きく開析した谷頭に位置する調査区であるという傾向を指摘できるかも知れない。

本節では、例外的な処置ではあるが、風倒木痕(P106)の記述も行う。それは、埋没土中から150点の遺物(縄文式土器146点・石器類4点)が出土しているため、これを遺構外のグリッド出土で扱うことに対して、些かならぬ疑問を抱いたためである。ただし、「遺構」の概念を狭義で捉えた場合、人間が掘削・使用したもの、という立場から見れば、自然災害の産物である風倒木痕は、その範囲からは逸脱するものと解釈している。それこそが、ここで例外的な処置、と断っている所以でもある。

以下、陥穴から記してゆくことにしたい。

(1) 陥穴(第14図・第15図)

P54(図面類の記録なし。)

位置 G9-26G。重複関係 H4と重複か。長軸 ほぼ北東-南西。平面形 上部、底部とも長楕円形か。断面形 横断面形は漏斗形。底部施設 不明。規模 記録なし。覆土 8層に分層できた。遺物 縄文式土器17点が出土。備考 以上は野根の記載に基づくもので、参考資料にはならう。

P593(第14図)

位置 G9-65G。重複関係 D91・M33に破壊される。長軸 ほぼ北北東-南南西。平面形 上部、底部とも長楕円形を呈する。断面形 横断面形は漏斗形。底部施設 検出されず。規模 上部で2.01m×0.76m、底部で1.73m×0.10m、検出面からの深さ1.17mを測る。覆土 6層に分層でき、上層は黒褐色土系、下層は褐色土系の土で埋まっている。遺物 縄文式土器8点(燃糸文1・阿玉台7)・石器類1点(黒曜石剥片)が出土。

P599(第14図)

位置 G9-85G。重複関係 D97に破壊される。長軸 ほぼ東北東-西西南。平面形 上部は楕円形、底部は隅丸長方形を呈する。断面形 壁は垂直気味だが、途中崩落によりオーバーハングする。底部施設 検出されず。規模 上部で1.74m×1.06m、底部で1.24m×0.55m、検出面からの深さ2.52mを測る。覆土 25層に分層。第21層は1cm程のロームブロックを含む褐色土でしまりがあり、二回目の底面か。遺物 縄文式土器18点(燃糸文17・阿玉台1)・石器類1点(黒曜石剥片)。

P622(第14図)

位置 G10-16G。重複関係 単独で検出。長軸 ほぼ北北西-南南東。平面形 上部、底部とも長楕円形を呈する。断面形 横断面形は漏斗形。中段を中心に、長軸でオーバーハングする。底部施設 検出されず。規模 上部で2.42m×1.05m、底部で2.28m×0.09m、検出面からの深さ1.42mを測る。覆土 10層に分層。自然堆積で、全体にしまりがある。遺物 縄文式土器20点(燃糸文9・阿玉台11)・土師器3点(上層のため、攪乱による混入と判断した)が出土。

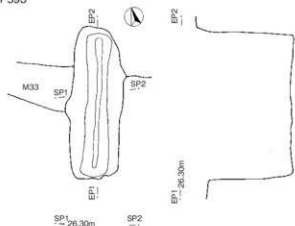
P625(第15図)

位置 G10-17G。重複関係 単独で検出。長軸 ほぼ北西-南東。平面形 上部、底部とも長楕円形を呈する。断面形 横断面形は漏斗形。底部施設 検出されず。規模 上部で2.14m×0.86m、底部で1.81m×0.14m、検出面からの深さ1.42mを測る。覆土 13層に分層でき、第6層を境に、上下の層に不整合面が認められる。遺物 縄文式土器2点(燃糸文1・阿玉台1)が出土。

P626(第15図)

位置 G10-8・G10-18Gにまたがる。重複関係 D114・M33に破壊される。長軸 ほぼ北北西-南

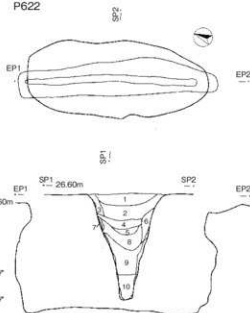
P593



P593土層説明

- 1 灰褐色土 径0.5~3mm 黄スコリア少量。M33覆土。
- 2 黒褐色土 径0.5~2ミリ黄スコリア少量。
- 3 暗褐色土
- 4 褐色土 粘性あり。
- 5 褐色土 ローム主体。粘性あり。
- 6 褐色土 ローム主体。粘性強い。

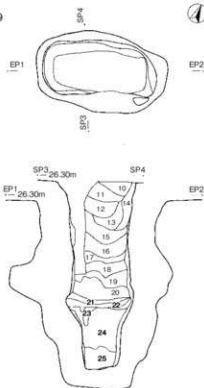
P622



P622土層説明

- 1 黒褐色土 しまりあり。
- 2 黒褐色土 径0.5~2mm 黄スコリア少量。しまりあり。
- 3 暗褐色土 ロームまじり。しまりあり。粘性あり。
- 4 黒褐色土 径0.5mm 黄スコリア極少量。しまりあり。
- 5 黒褐色土 径0.5mm 黄スコリア極少量。しまりあり。粘性あり。
- 6 暗褐色土 ロームまじり。粘性あり。
- 7 褐色土 しまりあり。粘性あり。
- 8 暗褐色土 ロームにじむ。しまりあり。粘性あり。
- 9 褐色土 径3cm ロームブロック極少量。しまりあり。粘性あり。
- 10 暗褐色土 径1cm ロームブロックまじり。粘性あり。

P599



P599-1 (S=1/3)

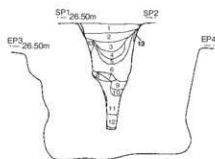
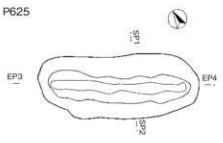
P599土層説明

- 10 暗褐色土 径0.5~2mm 黄スコリア多量。焼土粒子極少量
- 11 暗褐色土 径0.5mm 以下黄スコリア。
- 12 黒褐色土 径0.5~1mm 黄スコリア。
- 13 黒褐色土 径0.5~1mm 黄スコリア。
- 14 褐色土 径0.5~1mm 黄スコリア。粘性あり。
- 15 暗褐色土 径0.5~1mm 黄スコリア多量。粘性あり。
- 16 暗褐色土 径0.5~1mm 黄スコリア。径0.5~3mm ロームブロック。粘性あり。
- 17 褐色土 ローム、径3cm ロームブロックまじり。粘性やや強い。
- 18 褐色土 ロームまじり。粘性やや強い。
- 19 褐色土 ローム主体。径5cm ロームブロックまじり。粘性やや強い。
- 20 褐色土 極めてかたいローム。しまりあり。粘性あり。
- 21 褐色土 径1cm 以下ロームブロックまじり。粘性強い。
- 22 黒褐色土 粘性強い。
- 23 褐色土 粘性強い。
- 24 褐色土 粘性強い。
- 25 黒褐色土 粘性強い。

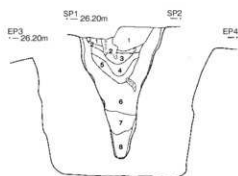
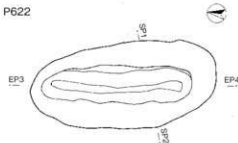


第14図 陥穴実測図(1)

P625



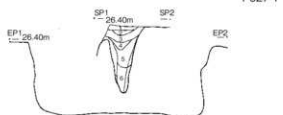
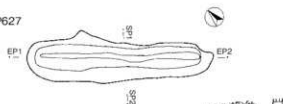
P622



P625土層説明

- 1 暗褐色土 しまりあり。
- 2 黒褐色土 径0.5~2mm 黄スコリア極少量。しまりあり。
- 3 黒褐色土 径0.5~1mm 黄スコリア極少量。しまりあり。
- 4 黒褐色土 径0.5~1mm 黄スコリア極少量。しまりあり。粘性あり。
- 5 暗褐色土 径0.5~1mm 黄スコリア極少量。粘性あり。
- 6 暗褐色土 ロームにじむ。しまりあり。粘性あり。
- 7 褐色土
- 8 褐色土 ロームまじり。径1cm ロームブロック少量。粘性あり。
- 9 褐色土 ロームまじり。粘性あり。
- 10 褐色土 ロームまじり。粘性あり。
- 11 褐色土 ローム主体。径1~2cm ロームブロック。粘性あり。
- 12 褐色土 ロームまじり。粘性あり。
- 13 褐色土 ロームまじり。粘性あり。
- 13 褐色土 ローム主体。しまりあり。

P627



P627-1

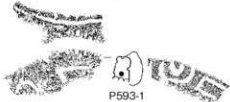


P626土層説明

- 1 褐色土 しまりあり。
- 2 褐色土 しまりあり。
- 3 暗褐色土 径0.5~1mm 黄スコリア多量。しまりあり。粘性あり。
- 4 暗褐色土 しまりあり。粘性あり。
- 5 褐色土 径1mm 黄スコリア少量。粘性あり。
- 6 褐色土 径1cm ロームブロックまじり。粘性あり。
- 7 褐色土 粘性やや強い。
- 8 褐色土 径1~2cm ロームブロックまじり。粘性あり。

P627土層説明

- 1 暗褐色土 径0.5mm 以下黄スコリア少量。
- 2 暗褐色土 径0.5mm 以下黄スコリア少量。
- 3 暗褐色土 径0.5mm 以下黄スコリア少量。しまりあり。粘性あり。
- 4 褐色土 径0.5mm 以下黄スコリア少量。しまりあり。粘性あり。
- 5 褐色土 ローム主体。粘性あり。
- 6 褐色土 粘性あり。



P593-1

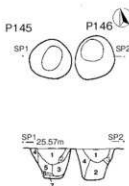
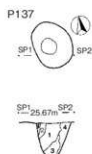
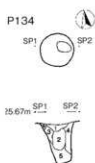
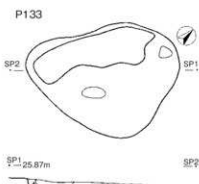
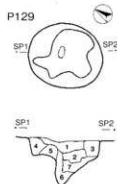
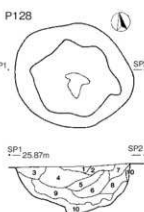
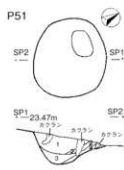


P593-2

P593-3

P593-4

第15図 陥穴実測図(2)



P51土層説明

- 1 暗褐色土
- 2 暗黄褐色土
- 3 暗黄褐色土
- 4 暗黄褐色土

しまりあり。
しまりあり。
しまりあり。色調2より明るい。
しまりあり。色調3より明るい。

P128土層説明

- 1 黒色土
- 2 にぶい黄褐色土
- 3 明黄褐色土
- 4 にぶい黄褐色土
- 5 黒色土
- 6 にぶい黄褐色土
- 7 黄褐色土
- 8 灰黄褐色土
- 9 黒褐色土
- 10 黄褐色土

径1mm ローム粒子少量。しまりあり。
径1mm ローム粒子少量。しまりあり。
径1mm ローム粒子少量。しまりあり。
径1mm ローム粒子少量。しまりあり。
径1-2mm ローム粒子多量。
径1-2mm ローム粒子少量。しまりあり。
径1-2mm ローム粒子少量。しまりあり。
径1-3mm ローム粒子少量。しまりあり。
径1-3mm ローム粒子少量。しまりあり。

P129土層説明

- 1 黒色土
- 2 黄褐色土
- 3 黄褐色土
- 4 黒褐色土
- 5 明黄褐色土
- 6 黄褐色土
- 7 明黄褐色土

径1-2mm ローム粒子少量。しまりあり。粘性あり。
径1-3mm ローム粒子少量。
径1mm ローム粒子極少量。硬軟。
径1-2mm ローム粒子少量。しまりあり。
径1-2mm ローム粒子多量。しまりあり。
径1-3mm ローム粒子多量。
径1-5mm ローム粒子多量。

P133土層説明

- 1 黒褐色土
- 2 灰黄褐色土
- 3 黒色土
- 4 黄褐色土

径1mm ローム粒子少量。
径1mm ローム粒子少量。
径1-3mm ローム粒子少量。
径1-2mm ローム粒子少量。

P134土層説明

- 1 黒褐色土
- 2 明黄褐色土
- 3 にぶい黄褐色土
- 4 黄褐色土
- 5 黒褐色土

径1mm ローム粒子少量。
径1-2mm ローム粒子多量。しまりあり。
径1-2mm ローム粒子少量。しまりあり。
硬軟。
径1-2mm ローム粒子少量。しまりあり。硬軟。
径1-5mm ローム粒子多量。しまりあり。硬軟。

P137土層説明

- 1 黒色土
- 2 暗褐色土
- 3 黒褐色土
- 4 暗黄褐色土

径1mm ローム粒子少量。しまりあり。粘性強い。(柱状)
径1mm ローム粒子少量。しまりあり。粘性強い。
径1mm ローム粒子少量。しまりあり。粘性強い。
径1-2mm ローム粒子少量。しまりあり。

P139土層説明

- 1 黒褐色土
- 2 褐色土
- 3 黄褐色土
- 4 にぶい黄褐色土
- 5 暗黄褐色土

径1-3mm ローム層粒子少量。しまりあり。粘性強い。(柱状)
径1-3mm ローム層粒子極少量。しまりあり。
径1-3mm ローム粒子少量。しまりあり。硬軟。
径1-2mm ローム粒子少量。しまりあり。硬軟。
径1-3mm ローム粒子少量。しまりあり。硬軟。

P145土層説明

- 1 黒褐色土
- 2 黒色土
- 3 黒色土
- 4 灰黄褐色土
- 5 褐色土
- 6 黒色土
- 7 黄褐色土

径1-2mm ローム粒子少量。しまり。粘性あり。
径1mm ローム粒子極少量。
径1mm ローム粒子少量。しまりあり。粘性強い。
径1mm ローム粒子少量。しまりあり。
径1mm ローム粒子極少量。しまりあり。硬軟。(柱のあたり面)
ロームブロック多量。しまりあり。硬軟。

P146土層説明

- 1 黒色土
- 2 黒褐色土
- 3 灰黄褐色土
- 4 黄褐色土

径1-2mm ローム粒子少量。しまりあり。粘性強い。
径1-2mm ローム粒子少量。しまりあり。粘性強い。
径1-2mm ローム粒子少量。しまりあり。
径1-5mm ローム粒子少量。しまりあり。硬軟。

P148土層説明

- 1 にぶい黄褐色土
- 2 黒色土
- 3 明黄褐色土

径1-3mm ローム粒子多量。
径1-2mm ローム粒子少量。しまりあり。粘性強い。
径1-3mm ローム粒子少量。しまりあり。硬軟。

第16図 ビット実測図(1)

南東。平面形 上部、底部とも長楕円形を呈する。断面形 横断面形は漏斗形。底部施設 検出されず。規模 上部で2.48m×1.17m、底部で1.73m×0.13m、検出面からの深さは1.74mを測る。覆土 8層に分層でき、第6層までが埋め戻しで、以下は自然堆積。遺物 縄文式土器2点(捻糸文1・阿玉台1)・石1点・陶磁器1点(これは、明らかにM33からの混入と判断した)が出土。

P627(第15図)

位置 G10-18G。重複関係 D112に破壊される。長軸 ほぼ北西-南東。平面形 上部、底部とも長楕円形を呈する。断面形 横断面形は漏斗形。底部施設 検出されず。規模 上部で2.48m×0.67m、底部で2.13m×0.09m、検出面からの深さ1.03mを測る。覆土 6層に分層でき、中層にしまり、下層では粘性あり。遺物 縄文式土器5点(捻糸文2・阿玉台3)が出土。

(2) 陥穴出土遺物(第14図・第15図)

P593-1~4は阿玉台式土器。1は口縁片。祖形的な扇状把手が付くもので、口縁内面にも施文する。2は波状縁。有節線文を施す。3は平縁。口縁部文様帯は区画文を構成し、区画内には有節線文を密に充填する。さらに口唇上にも施文し、やや幅広い内稜を有するもの。4は胴部片。突起を付し、有節線文が施される。P599-1は阿玉台式土器の胴部片。ごく小片で、器面調整痕以外は施していない。P627-1は阿玉台式土器の胴部片。ひだ状の装飾を施す。

以上はあくまでも凶化できた遺物であって、必ずしも遺構の所属時期を示すものではない。

(3) ビット(第16図~第19図)

P51(第16図)

位置 G9-34G。重複関係 単独。長軸 ほぼ北西-南東。平面形 上部円形、底部楕円形。壁・底面 壁は垂直気味で、底面は丸みを帯び、鍋底状。規模 0.84m×0.76m、検出面からの深さは0.29mを測る。覆土 4層に分層でき、暗褐色土系で、しまりに富む。遺物 縄文式土器1点が出土。

P106(第16図)

位置 G9-21G。重複関係 単独。長軸 ほぼ東-西。平面形 不整な楕円形。壁・底面 凹凸に富む。規模 3.80m×2.84m、検出面からの深さ0.58mを測る。覆土 15層に分層でき、地山捻転層が認められる。遺物 縄文式土器146点、石器類4点が出土。性格 風倒木痕(自然災害)。

P128(第16図)

位置 G9-21G。重複関係 単独。長軸 ほぼ西北西-東南東。平面形 楕円形。壁・底面 底面はかなり不整形で、二段状にくぼむ。規模 1.30m×1.11m、検出面からの深さは0.49mを測る。覆土 10層に分層でき、全体にしまりがある。遺物 黒曜石1点が出土。

P129(第16図)

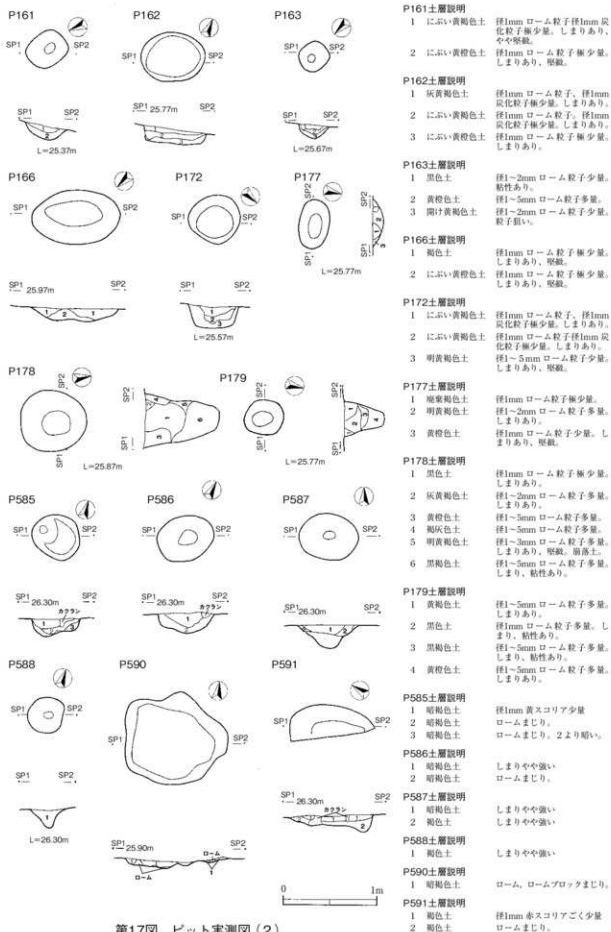
位置 G9-21G。重複関係 単独。長軸 ほぼ北東-南西。平面形 不整円形。壁・底面 底面はかなり不整形で、二段状にくぼむ。規模 0.80m×0.70m、検出面からの深さ0.48mを測る。覆土 7層に分層でき、埋め戻しか。遺物 縄文式土器3点が出土。

P133(第16図)

位置 G9-11G。重複関係 単独。長軸 ほぼ北東-南西。平面形 不整な楕円形。壁・底面 テラスを一段有し、両端がビット状にくぼむ。規模 1.65m×1.22m、検出面からの深さ0.16m。覆土 4層に分層できた。遺物 縄文式土器45点、黒曜石1点、土師器1点(攪乱による混入)。

P134(第16図)

位置 G9-21G。重複関係 単独。長軸 ほぼ東-西。平面形 上部円形、底部は楕円形。壁・底面 ほぼ垂直に立ち上がる。規模 0.37m×0.35m、検出面からの深さは0.44mを測る。覆土 5層に分層で



第17図 ビット実測図(2)

きた。全体にしまりに富む。遺物 縄文式土器6点が出土。性格 柱穴か。

P137(第16図)

位置 G9-21G。重複関係 単独。長軸 ほぼ北西-南東。平面形 円形。壁・底面 ほぼ垂直にたちあがる。規模 0.52m×0.42m。検出面からの深さ0.36mを測る。覆土 4層に分層できた。全体にしまりがあり、粘性に富む。遺物 縄文式土器1点が出土。性格 柱穴か。

P139(第16図)

位置 G9-23G。重複関係 単独。長軸 ほぼ西北西-東南東。平面形 上部円形、底部やや不整な円形。壁・底面 ほぼ垂直に立ち上がる。規模 0.43m×0.39m。検出面からの深さ0.17mを測る。覆土 5層に分層できた。全体にしまりに富む。遺物 縄文式土器1点が出土。性格 柱穴か。

P145(第16図)

位置 G9-22G。重複関係 単独。長軸 ほぼ西北西-東南東。平面形 円形。壁・底面 壁はほぼ垂直に立ち上がる。規模 0.45m×0.41m。検出面からの深さ0.33mを測る。覆土 7層に分層できた。6層は「あたり」である。遺物 縄文式土器6点が出土。性格 柱穴か。

P146(第16図)

位置 G9-22G。重複関係 単独。長軸 ほぼ北北東-南南西。平面形 円形。壁・底面 壁はほぼ垂直に立ち上がる。規模 0.47m×0.41m。検出面からの深さ0.33mを測る。覆土 4層に分層できた。全体にしまりがある。遺物 縄文式土器4点が出土。性格 柱穴か。

P148(第16図)

位置 G9-32G。重複関係 単独。長軸 ほぼ北東-南西。平面形 上部円形、底部はやや不整な楕円形。壁・底面 壁は垂直気味で、鍋底状。規模 0.35m×0.33m。検出面からの深さ0.22mを測る。覆土 3層に分層できた。上層はややしまりに欠けるが、中・下層はしまりあり。遺物 なし。

P161(第17図)

位置 G9-32G。重複関係 単独。長軸 ほぼ北北西-南南東。平面形 上部円形、底部は楕円気味。壁・底面 壁は垂直気味で、鍋底状。規模 0.43m×0.35m。検出面からの深さ0.14mを測る。覆土 2層に分層でき、黄褐色土系。しまりがあり、堅緻。遺物 縄文式土器5点、石鏃1点。

P162(第17図)

位置 G9-32G。重複関係 単独。長軸 ほぼ東北東-西南西。平面形 楕円形。壁・底面 壁は垂直気味で、底面は丸みを帯びる。鍋底状。規模 0.69m×0.53m。検出面からの深さ0.15mを測る。覆土 3層に分層でき、黄褐色土系。全体にしまりあり。遺物 縄文式土器13点が出土。

P163(第17図)

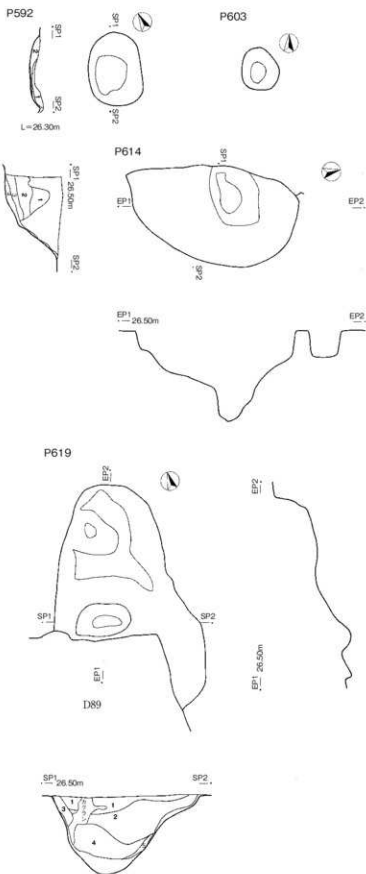
位置 G9-32G。重複関係 単独。長軸 ほぼ(北北東-南南西)。平面形 円形。壁・底面 壁は垂直気味で、底面は丸みを帯びる。鍋底状。規模 0.31m×0.29m。検出面からの深さ0.14mを測る。覆土 3層に分層できた。ともにややしまりを欠く。遺物 縄文式土器1点が出土。

P166(第17図)

位置 G9-42G。重複関係 単独。長軸 ほぼ北東-南西。平面形 楕円形。壁・底面 壁は垂直気味で、底面は丸みを帯びる。鍋底状。規模 0.94m×0.58m。検出面からの深さ0.14mを測る。覆土 2層に分層できた。ともにしまりがあり、堅緻。遺物 縄文式土器2点が出土。

P172(第17図)

位置 G9-42G。重複関係 単独。長軸 ほぼ北西-南東。平面形 円形。壁・底面 壁は垂直気味で、底面は丸みを帯びる。鍋底状。規模 0.56m×0.53m。検出面からの深さ0.23mを測る。



P592土層説明

- 1 褐色土
- 2 褐色土

P614土層説明

- 1 暗褐色土 径1~2mm 黄スコリア、焼土
粒子少量。
- 2 褐色土
- 3 暗褐色土 径2~5mm 黄スコリア。
- 4 暗褐色土 径1~2mm 黄スコリア。粘性
ややあり。

P619土層説明

- 1 暗褐色土 径0.5mm 黄スコリア極少量。
- 2 暗褐色土
- 3 褐色土
- 4 暗褐色土
- 5 褐色土 粘性ややあり。

第18図 ビット実測図(3)

覆土 3層に分層できた。しまりに富み、最下層は堅緻。遺物 縄文式土器1点が出土。

P177(第17図)

位置 G9-42G。重複関係 単独。長軸 ほぼ東-西。平面形 楕円形。壁・底面 壁は垂直気味で、底面は丸みを帯びる。鍋底状。規模 0.52m×0.33m。検出面からの深さ0.12mを測る。覆土 3層に分層できた。ともにしまりに富み、1層と3層は堅緻。遺物 縄文式土器2点が出土。

P178(第17図)

位置 G9-42G。重複関係 単独。長軸 ほぼ(南-北)。平面形 円形。壁・底面 ほぼ垂直に立ち上がる。規模 0.70m×0.67m。検出面からの深さ0.78mを測る。覆土 6層に分層できた。全体にしまりがある。遺物 縄文式土器4点、石器類1点。性格 柱穴か。柱は抜去されていた。

P179(第17図)

位置 G9-42G。重複関係 単独。長軸 ほぼ(南-北)。平面形 円形。壁・底面 壁はほぼ垂直に立ち上がる。規模 0.42m×0.37m。検出面からの深さ0.43mを測る。覆土 4層に分層できた。ともにしまりがあり、2層・3層では粘性がある。遺物 縄文式土器1点が出土。性格 柱穴か。

P585(第17図)

位置 G9-63G。重複関係 単独。長軸 ほぼ北西-南東。平面形 不整な円形。壁・底面 一段テラスを有し、さらにピット状に下がる。規模 0.53m×0.48m。検出面からの深さは0.62mを測る。覆土 3層に分層でき、暗褐色土系。遺物 縄文式土器1点(熱系文系)出土。

P586(第17図)

位置 G9-63G。重複関係 単独。長軸 ほぼ北東-南西。平面形 上部・底部とも楕円形。壁・底面 底面は楕円形で「あたり」のように硬化。規模 0.62m×0.48m。検出面からの深さは0.23mを測る。覆土 2層に分層でき、暗褐色土系。遺物 縄文式土器1点が出土。性格 柱穴か。

P587(第17図)

位置 G9-73G。重複関係 単独。長軸 ほぼ(東-西)。平面形 楕円形。壁・底面 底部に向かってすぼまる。規模 0.65m×0.49m。検出面からの深さは0.26mを測る。覆土 2層に分層でき、しまり強い。遺物 縄文式土器8点(阿玉台式)が出土。

P588(第17図)

位置 G9-73G。重複関係 単独。長軸 ほぼ正円形なのでなし。平面形 上部円形、底部楕円形。壁・底面 先すぼまり状。規模 0.39m×0.38m。検出面からの深さは0.20mを測る。覆土 暗褐色土の単一土層で、しまりやや強い。遺物 縄文式土器2点が出土。

P590(第17図)

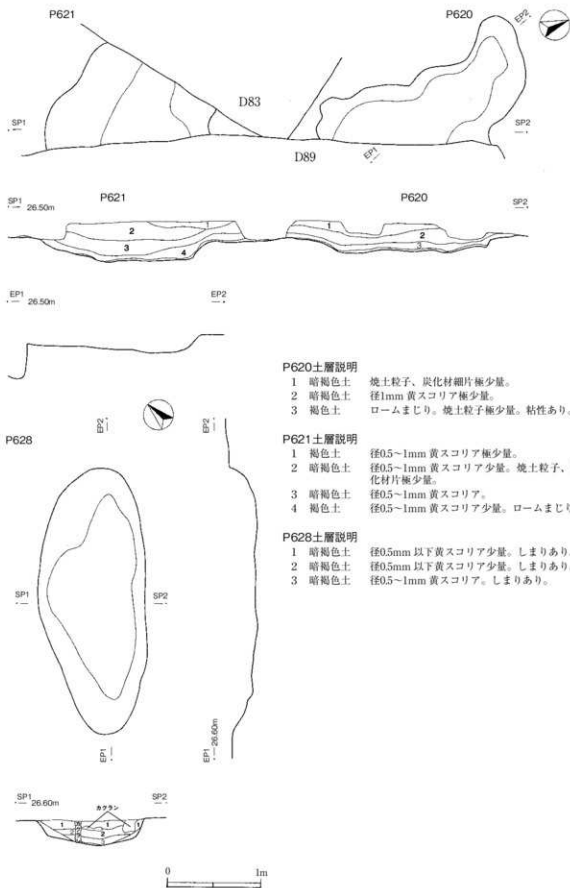
位置 G9-74G。重複関係 単独。長軸 ほぼ西北西-東南東。平面形 上部不整な五角形、底部不整な六角形。壁・底面 凹凸に富む。規模 1.14m×1.00m。検出面からの深さは0.09mを測る。覆土 暗褐色土の単一土層。遺物 縄文式土器4点(阿玉台式)が出土。

P591(第17図)

位置 G9-73G。重複関係 単独。長軸 ほぼ北西-南東。平面形 上部楕円形、底部楕円形。壁・底面 長軸の片側が深くなる。規模 0.91m×(0.36)m。検出面からの深さは0.19mを測る。覆土 2層に分層でき、褐色土系。遺物 縄文式土器2点(阿玉台式)が出土。

P592(第18図)

位置 G9-73G。重複関係 単独。長軸 ほぼ北東-南西。平面形 上部楕円形、底部やや不整な楕円形。壁・底面 全体に皿状に掘り込む。規模 0.78m×0.56m。検出面からの深さは0.13mを測る。



P620土層説明

- 1 暗褐色土 焼土粒子、炭化材細片極少量。
- 2 暗褐色土 径1mm 黄スコリア極少量。
- 3 褐色土 ロームまじり。焼土粒子極少量。粘性あり。

P621土層説明

- 1 褐色土 径0.5~1mm 黄スコリア極少量。
- 2 暗褐色土 径0.5~1mm 黄スコリア少量。焼土粒子、炭化材片極少量。
- 3 暗褐色土 径0.5~1mm 黄スコリア。
- 4 褐色土 径0.5~1mm 黄スコリア少量。ロームまじり。

P628土層説明

- 1 暗褐色土 径0.5mm 以下黄スコリア少量。しまりあり。
- 2 暗褐色土 径0.5mm 以下黄スコリア少量。しまりあり。
- 3 暗褐色土 径0.5~1mm 黄スコリア。しまりあり。

第19図 ビット実測図(4)

覆土 2層に分層でき、褐色土。遺物 縄文式土器3点(捻糸文1・阿玉台2)。

P603(第18図)

位置 G9-85G。重複関係 D99・M35に破壊される。長軸 ほぼ(北-南)。平面形 不整形。壁・底面 皿状。規模 0.44m×0.41m。検出面からの深さは0.10mを測る。覆土 暗褐色土系の単一土層。遺物 縄文式土器1点(阿玉台式)が出土。

P614(第18図)

位置 G9-84G。重複関係 D90に破壊される。長軸 ほぼ北西-南東。平面形 不整形。壁・底面 凹凸に富む。規模 1.86m×(1.04m)。検出面からの深さ1.05mを測る。覆土 4層に分層できた。遺物 縄文式土器7点・土師器2点(D90からの流入)が出土。性格 風倒木痕。

P619(第18図)

位置 G9-73・74Gにまたがる。重複関係 D89に破壊される。長軸 ほぼ北北東-南南西。平面形 不整形。壁・底面 テラスを有する浅い方(旧)、楕円形にくぼむ深い方(新)の2基の重複。規模 2.32m×(1.56m)。検出面からの深さは0.61m(浅)、0.96m(深)を測る。覆土 5層に分層でき、暗褐色土と褐色土が互層。遺物 縄文式土器22点・土師器1点(D89からの流入)出土。

P620(第19図)

位置 G9-73G。重複関係 D89に破壊される。長軸 ほぼ北西-南東。平面形 不整形。壁・底面 壁はだらだらと立ち上がり、底面は凹凸に富む。規模 (2.31m)×(1.86m)。検出面からの深さは0.18m。覆土 3層に分層でき、自然堆積か。遺物 縄文式土器84点・石器類1点が出土。

P621(第19図)

位置 G9-74G。重複関係 D83・89に破壊される。長軸 ほぼ北西-南東。平面形 不整形。壁・底面 壁はだらだらと立ち上がり、底面は凹凸に富む。規模 (1.62m)×(1.31m)。検出面からの深さは0.22mを測る。覆土 4層に分層できた。遺物 縄文式土器48点・土器片錘1点・石器類1点。その他、住居跡からの流入で土師器3点・須恵器1点が出土。性格 P620に近似する。

P628(第19図)

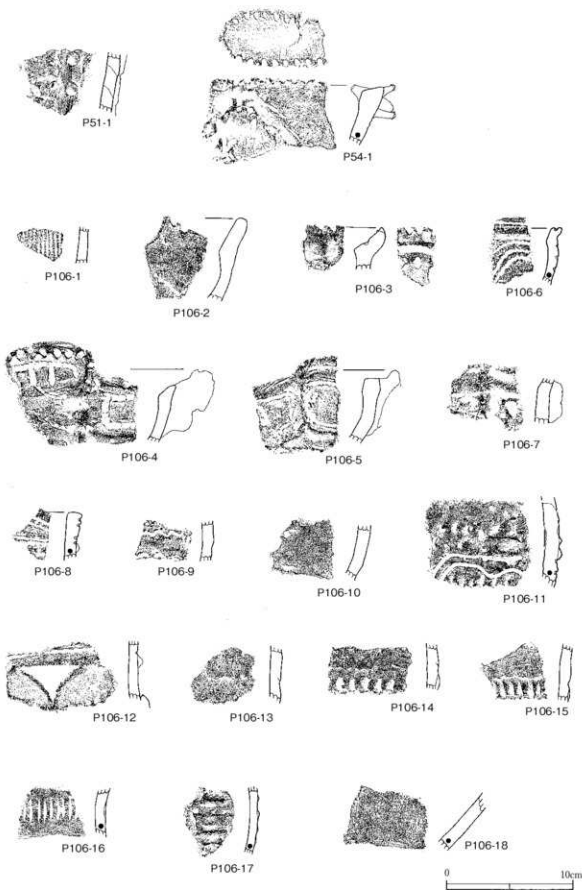
位置 G10-6G。重複関係 D106に破壊される。長軸 ほぼ北西-南東。平面形 上部楕円形、底部不整形。壁・底面 壁はゆるやかに立ち上がり、底面は凹凸。規模 2.82m×1.14m。検出面からの深さは0.26mを測る。覆土 4層に分層でき、暗褐色土系。遺物 縄文式土器5点が出土。

(4)ピット出土遺物(第20図~第23図)

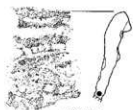
第20図 P51-1は阿玉台式土器の胴部片。P54は紙数の都合上、本項で扱う。1は阿玉台式土器の波状縁。P106-1は早期捻糸文系土器の胴部片で、J型。2~18は阿玉台式土器。うち2~8は口縁。2は波状縁で、非対称かつ片側のみキサミを施す。4・5は未発達な扇状把手を有し、隆線で区画文を構成し、区画内には単列の角押文や有節線文を沿わせる。9~18は胴部。ひだ状の裝飾や二枚貝の腹縁を用いたキサミを施している。18は浅鉢の胴部片で、赤彩の痕跡は認められなかった。

第21図 P129-1・2は阿玉台式土器の口縁。1は角押文、2は有節線文を施文する。P133-1~8は阿玉台式土器。1~3は波状縁で、阿玉台Ia式。2は片側のみキサミを施す。4・5は平縁。6~8は胴部片。P134-1は阿玉台式土器の胴部片。P145-1・2は阿玉台式土器。1は口縁部に隆線で幅狭な区画文を構成し、区画内には単列の角押文を沿わせる。P162-1・2は阿玉台式土器。1は複合口縁で無文のもの。2は胴部片。P177-1は胴下半~底部。P178-1は阿玉台式土器。横位の隆線を1条貼付する。2は磨石。自然礫をそのまま用いており、側面に使用面がある。

第22図 P585-1は早期捻糸文系土器の胴部片で、J型。P587-1・2は阿玉台式土器。1は波状



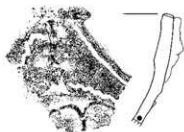
第20図 縄文ビッド出土遺物(1)



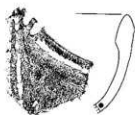
P129-1



P129-2



P133-1



P133-2



P133-3



P133-4



P133-5



P133-6



P133-7



P133-8



P134-1



P145-1



P145-2



P178-1



P162-1



P162-2



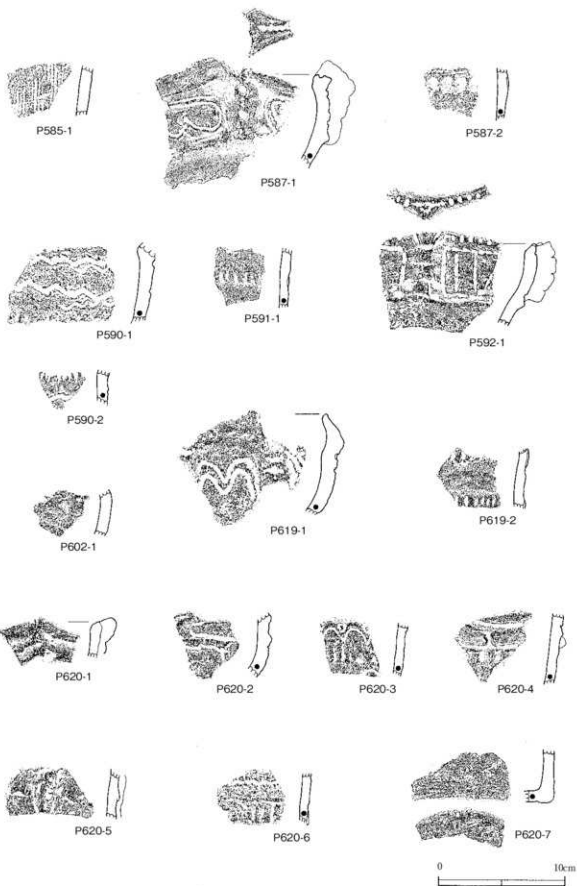
P177-1



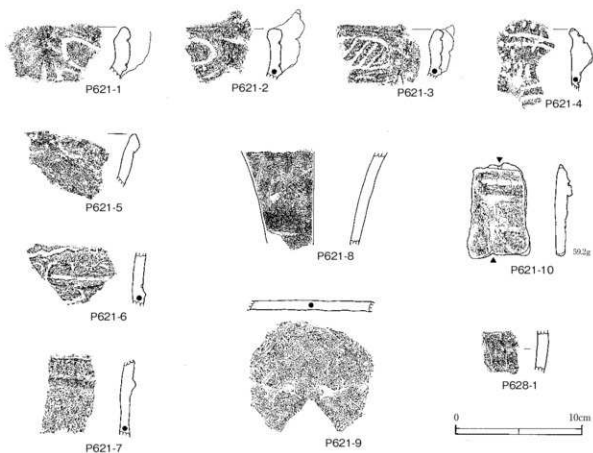
P178-2



第21図 縄文ピット出土遺物(2)



第22図 縄文ピット出土遺物(3)



縄文ピット出土遺物(4)



第1次調査区遺構外

第23図 縄文ピット出土遺物(4)・第1次調査区遺構外出土遺物



第24圖 遺構外繩文式土器 撚糸文土器(1)

緑で、波頂部下に縦長の突起を付し、そこを起点に隆線で区画文を描き、区画内には二列の有節線を沿わせる。2は胴部片。P590-1・2は阿玉台式土器の胴部。1は横位に波状沈線を2条施す。P591-1は阿玉台式土器の胴部。P592-1は阿玉台式土器の口縁。粘土棒を芯に粘土板で囲った突起を付し、隆線で区画文を構成し、区画内には単列の有節線を沿わす。P602-1及びP619-1・2は阿玉台式土器。1は口縁で、扇状把手を付け、二列の有節線で波状文を描く。阿玉台I b式。P620-1~7は阿玉台式土器。1は波状口縁で、突起を付す。2~6は胴部片。3は単列の有節線で波状文を描く。5は輪積み痕を残し、縦位の隆線を垂下するもの。7は底部で、網代圧痕が残る。

第23図 P621-1~9は阿玉台式土器。1~5は口縁部で、うち1~3は平縁に縦位の突起を付し、これを起点に区画文を描き、区画内には単列の有節線を沿わす。5は複合口縁で、無文。10は土器片鏝。(5) 遺構外出土の縄文式土器(第23図~第37図)

第1次調査区(第23図)

1~4は早期燃糸文系土器の胴部片で、J型。5は阿玉台式土器で、波状縁のもの。6は加曾利EⅢ式~EⅣ式土器の胴部片。地文縄文2段LRを施文する。7は土器片鏝。長軸中央に索溝を刻むもので、一端を欠損する。

縄文早期燃糸文系土器(第24図・第25図)

燃糸文系土器は、第1次調査で4点、第2次・7次合わせて総計408点が出土している。

第24図1~32・33・34・38は井草式土器。このうち、1~20・31・32・(33・34)は井草Ⅰ式、21~30・38は井草Ⅱ式に比定される。大枠で見た使用原体による施文型は、井草Ⅰ式がY型である33・34を除いてJ型で、井草Ⅱ式では21がJY型、22~30はJ型で、38はM型。

1は口縁部が外反・肥厚し、施文域は口唇部・口縁部・頸部・胴部に加え、口縁内面にも有するもので、いわゆる「井草Ⅰ式直前段階」に該当すると思われる。

2は口縁部が強く外反・肥厚するもので、施文域は口唇部・口縁部・頸部・胴部に加え、口縁下に刺し切り状の刺突列を施文する。3は頸部に原体側面圧痕による鋸歯状文を施すものである。

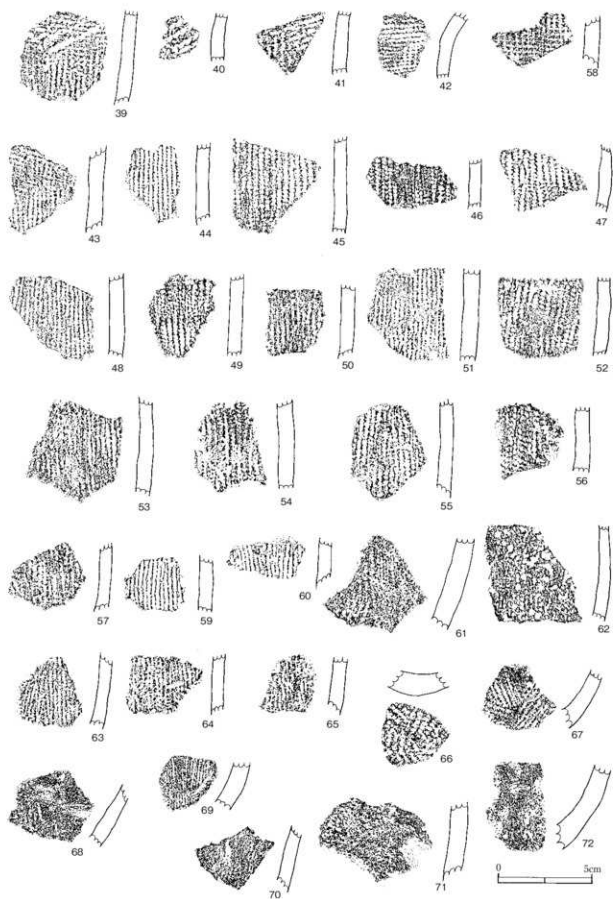
4~20・31・32は施文域が口唇部・口縁部・頸部・胴部の四帯構成を採るもの。これらはさらに、口縁の肥厚が比較的強く、頸部の縄文が斜行施文のもの(4~12)、口縁下に比較的狭小な無文部を有し、頸部の縄文が横走施文のもの(13~20)と、口縁部の肥厚は弱い、口縁から頸部にかけて縄文を斜行施文するもの(31・32)に分けられる。33は施文域が口唇部・口縁部・頸部・胴部に加え、口縁内面にも有するもので、絡条体条痕を施す。本例は口縁部の肥厚が極めて弱い。34は器面が荒れて属性の判断が困難な部分もあるが、口縁下に比較的狭小な無文部を有し、頸部は燃糸文を横走施文する。

21は比較的狭小な頸部無文帯を有し、口唇部~口縁部に縄文2段LR、胴部は燃糸文Rを施文する。

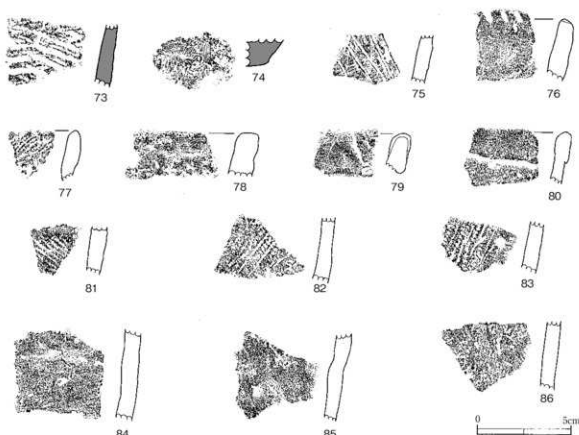
22~30は施文域が口唇部・口縁部・胴部の三帯構成で、頸部無文帯を有するもの。これはさらに、口縁が強く外反・肥厚するもの(22~27)、口縁は直上気味で肥厚するもの(28)と、口縁の外反・肥厚が極めて弱いもの(29・30)に分けられる。(22)・23・27は口唇部と口縁部で施文方向を変え、羽状効果となる。38は口縁下に長楕円形の「補修孔」を有する。これは表側の一方向からの穿孔である。

同図35は口縁が直上し、内側に肥厚する。縄文2段RLを口縁部は斜行施文し、口縁以下では縦走施文するが、頸部に横位の原体側面圧痕を施す。施文された縄文の条間は比較的密接している。諸属性を見る限り、稲荷台式ないしそれ以降とも考えられるが、報告者の力が及ばず、今回は類例が検索できなかった。とりあえず挿図に掲載するのみとし、所属型式は未定としたい。

同図36は口縁が直上し、口唇部形態は丸棒状となるもの。縄文2段RLを口縁部は斜行施文、無文部を介さずに胴部は縦走施文する。縄文の条間は密接し、夏島式に比定したい。37は夏島式のM型。



第25圖 遺構外繩文式土器 燃糸文系土器(2)



第26図 遺構外縄文式土器 縄文前期土器群

第25図は頸部以下～底部を集めた。39は頸部が横走、胴部が縦走施文で、頸部に斜位の原体側面圧痕を施す。40は頸部に斜位の原体側面圧痕、胴部は縄文の縦走施文。41は頸部が斜行、胴部が縦走施文。42・58・43は頸部が横走、胴部が縦走施文で、重複部分が格子状の施文効果となる。井草Ⅰ式。同図44～57・59・60・63～65は条間の密接した縄文を縦位施文した胴部片で、井草式土器。第25図66～72は底部。66・67は条間の密接した縄文を施しており、井草式土器。70～72は無文土器で、燃糸文系土器全体の出土傾向から見て、そのほとんどは井草式土器に伴うものと解釈される。

縄文前期土器群 (第26図)

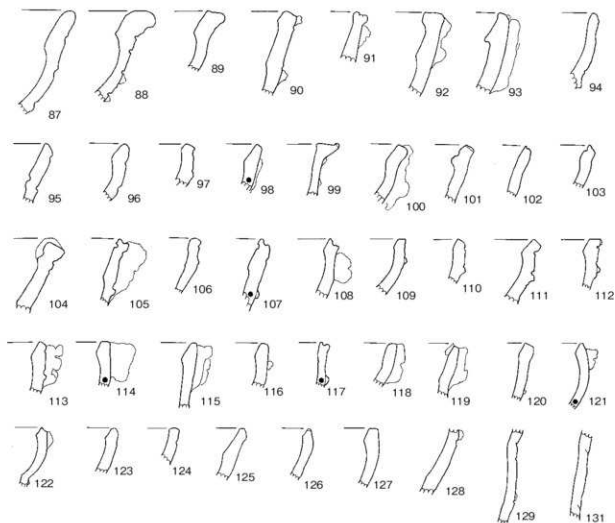
前期土器群は、第2次・7次調査で出土し、その内訳は黒浜式2点、浮島式1点、前期末葉17点である。今回はそのほとんどを図化・掲載した。

第26図73・74は前期前半黒浜式土器。73は異条斜縄文(附加条縄文)を羽状(菱形)施文するものである。74は底部付近の破片で、73ともども胎土に繊維を含有する。

同図75は沈線をやや雑に、数条斜行施文するもので、前期後半浮島式土器に位置づけたい。

同図76～86は前期末葉の土器群である。76～80は口縁片で、いずれも平縁のものばかりであって、波状縁は1点もなかった。76は口唇部にキザミを施すもの。77は肥厚した口縁部が複合口縁状となる。縄文2段LRを施文する。78は器壁が厚く、かつ何の装飾も施していない。79は口縁内面から口唇をまたぐ形で突起を貼付するもので、これ以外の装飾は施されない。80は複合口縁で、無文かつ無装飾である。81～86は胴部片。81は地文縄文2段LRを施す。84～86は調整痕のみの胴部片を集めた。

82・83は同一個体で、地文は附加条縄文の可能性がある。本例は斜行施文であるが、全体の雰囲気は早期燃糸文系を彷彿させるものがあり、最後まで分類に悩んだという経緯がある。誤った位置づけかも知れないということを、予めお断りしておきたい。今回、あえて恥を忍んで掲載した次第である。



※●「雲母混入型」の胎土（本書の阿玉台式土器に共通する）
 第27図 遺構外縄文式土器 阿玉台式土器断面図（1）

阿玉台式土器（第27図）～（第34図）

阿玉台式土器は、第1次調査1点、第2次・7次調査合計でテンバコ20箱分、計104.065kgが出土した。

第27図・第28図87～131は阿玉台I a式土器を中心として集めた。主な遺物について記す。

87・88は波状緑で、波頂部から蛇行隆線を垂下し、その両脇に単列の角押文を沿わせる。両者は属性の細部を見ると、87は片側のみ口唇部にキザミを施し、88は波頂部に突起を付すという相違点がある。

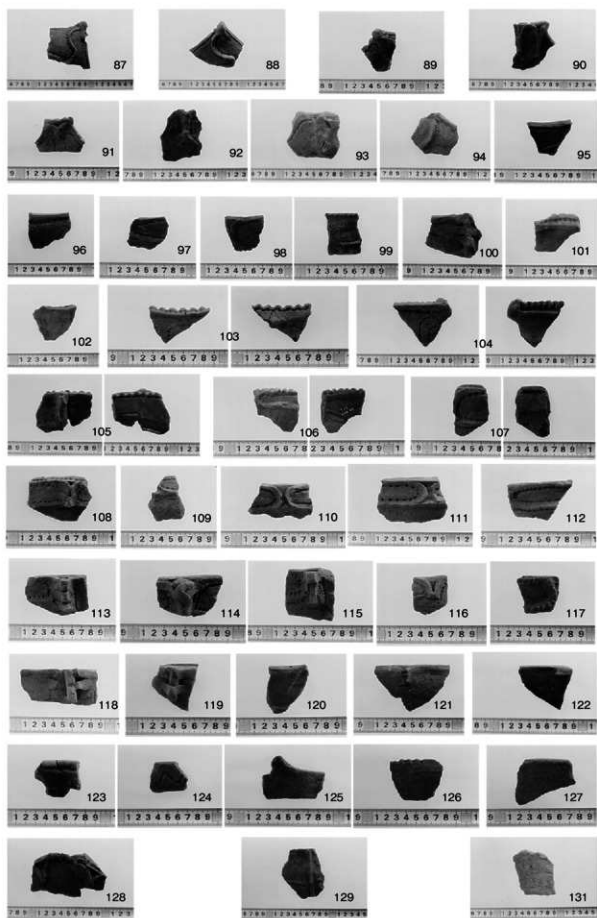
90～93は富士山形を呈する波状緑。これらは、波状口縁の形態で括ったが、属性の細部を見ると、波頂部下に長楕円形の突起を付す（90）、口唇部にキザミを施し、波頂部からY字状の隆線を垂下する（91）、波頂部下に縦位の突起を付す（92・93）など、本来的には別々の類型を構成するものである。

101・103～107は口縁の内側に文様及び装飾を施すもの。103～105は口唇をひだ状にし、内面はこれに沿うように連続刺突を施す。107は隆線で楕円形区画文を構成するもので、本来的には別の類型。

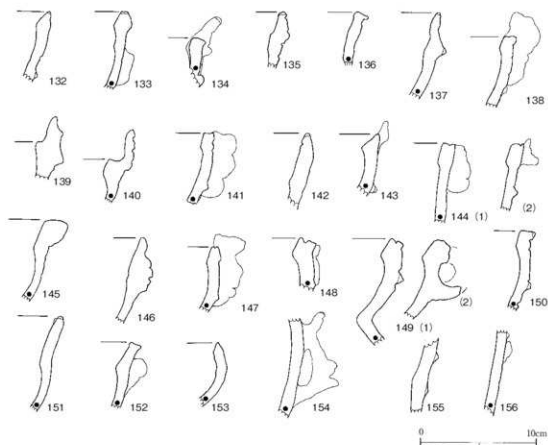
108～112は口縁部文様帯として隆線で楕円形区画文を描き、これを横位に連携する。区画内には隆線脇に単列の角押文を沿わせる。108は区画文の相接部分に縦位の突起を付す。本来的には別の類型。

113～115は口縁下に、粘土棒を芯にこれを粘土板で囲んだ縦位の突起を付し、これを起点に口縁部文様帯を構成するもの。115は内稜の幅が広くなり、属性の中に新しい要素を持っているものである。

118・119・121は口縁下に、縦位の突起を付すのみのもの。128～130は頸部以下の破片を集めた。



第28図 遺構外縄文式土器 阿玉台式土器(1)



第29図 遺構外縄文式土器 阿玉台式土器断面図(2)

第29図・第30図132～156は阿玉台Ⅰb式土器を中心として集めた。主な遺物について記す。

132は波状縁。口縁部文様帯は単列の角押文による区画文で、区画内には同じく単列の角押文を密に充填する。その方向は斜位。本例は内縁があまり発達しておらず、阿玉台Ⅰa式であるかも知れない。

133～140は平縁で、扇状把手を付けるものである。扇状把手は、口縁下に貼付された一对の縦位の突起の間に付されるのが一般的である。133は隆線による区画文の相接部分をまたく形で付されており、やや異なる例となる。今回の資料は、134～137など比較的未発達なものも多く、138・140は典型的なものであるが、全体的には古い様相を示している。扇状把手は区画文の起点にもなっていて、区画内には単列の有節線を沿わせる。138は把手下を含め、単列の有節線を描線として渦巻状の装飾を充填する。

141は平縁。口縁下に縦位の突起を付し、そこを起点に隆線で枠状区画文を描き、区画内には単列の有節線を沿わせ、さらに有節線による波状文を充填するもの。

142は小波状縁。形状は富士山形に近く、片方から隆線を貼付し、もう一方では口縁下に垂下させる。隆線上にはキザミを施す。内面には単列の角押文による装飾を施しており、阿玉台Ⅰa式になるか。

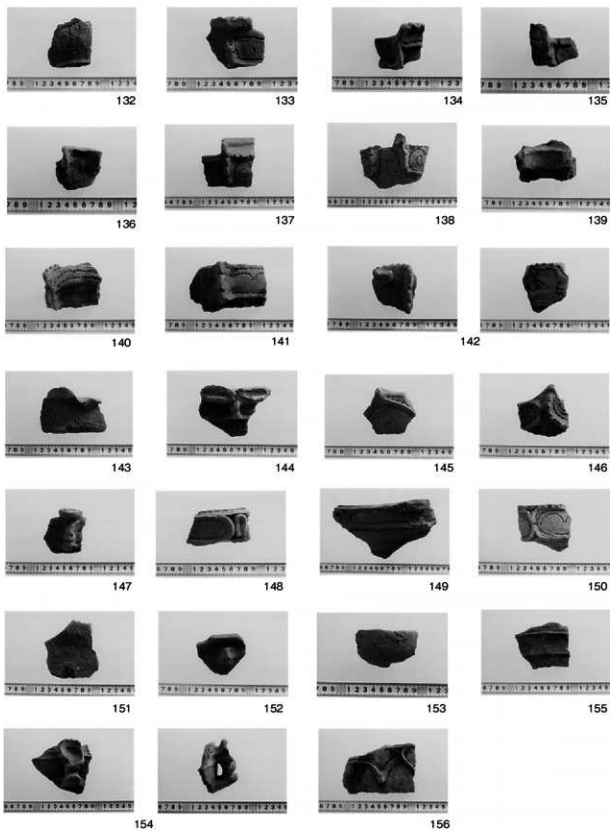
144は口縁端に一对の耳状突起を付し、この相接部分には縦位の突起を付して、これを起点に隆線で区画文を描き、横位に連携する。区画内には単列の有節線を沿わせている。

145・146は波状縁。隆線で区画文を描き、区画内には有節線を沿わせる。145は単列で、146は同一施工具での反復施文による二列(複列ではない)の施文となっている点で、本来的には別の類型。

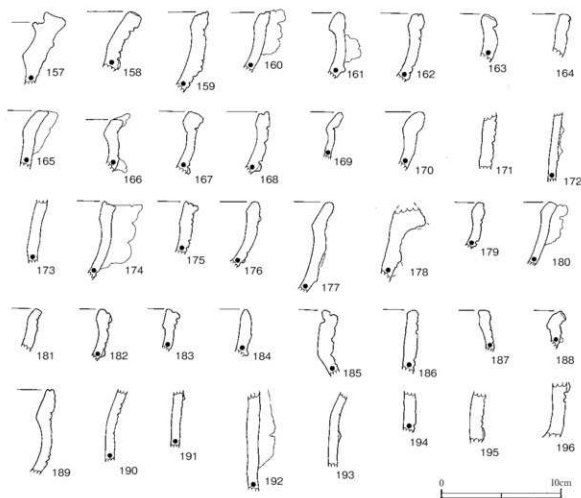
148～150は口縁下に隆線による楕円形区画文を描き、これを横位に連携するもの。区画内には単列の有節線を沿わせる。150ではさらに、有節線による波状文を充填する。149は橋状把手を付す。

154は大振りな橋状把手を取り付け、そこに花弁状と耳状の装飾を施したものである。

156は胴部。隆線による波状文を横位に連携し、これを重畳する。隆線脇には単列の有節線を施す。



第30図 遺構外縄文式土器 阿玉台式土器(2)



第31図 遺構外縄文式土器 阿玉台式土器断面図(3)

第31図・第32図は阿玉台Ⅰb式土器及び阿玉台Ⅱ式土器を集めた。

157～173が阿玉台Ⅰb式として位置づけられる。これらの内、157～160・162・164は有節線文が平行施文されている。ただし、二叉状施文具ではなく、施文法は1条ずつ施したものである。従って、「二列」と表現し、「複列」とは区別する。ていねいな施文の場合は、判断に苦しむものが少なくない。

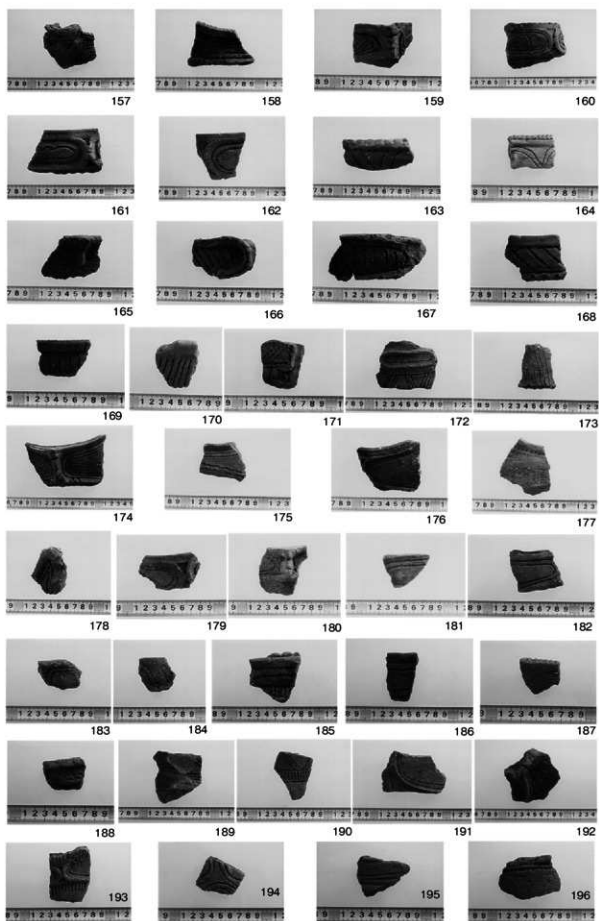
157・158は波状縁。157は波頂部に花卉状ないし盃状の装飾を施し、その下に突起を付す。158は口縁が肥厚し、幅広の内稜を有する。口縁部文様帯の下端区画の隆線に沿って二列、口縁に沿って単列の有節線を施文し、さらに有節線を波状施文したものを充填するもの。193は阿玉台Ⅰb式の胴部片。

159は口縁に縦位の突起を付し、これを起点に区画文を構成して横位に連携する。区画内には二列の有節線を沿わせ、さらに単列の有節線を斜位に、多条化して充填するもの。

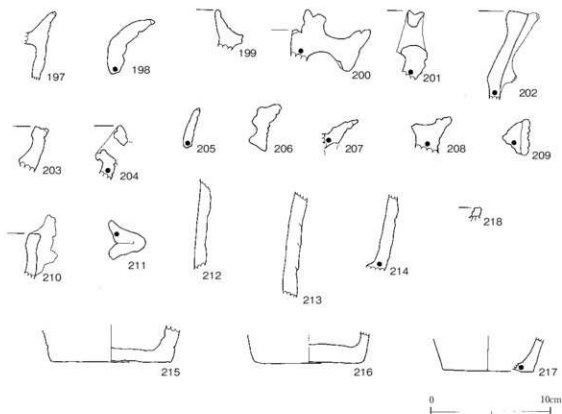
160～162は平縁。隆線が楕円形区画文を描き、これを横位に連携するもの。区画内には、有節線を二列沿わず(160・162)、単列沿わず(161)例があり、160・161では単列の有節線を波状施文したものなどを充填する。165～171は口縁部文様帯の区画内に、単列の有節線を密に充填するもの。

174～192・194～196は阿玉台Ⅱ式として位置づけられる。これらは、隆線脇や区画内に沿って複列の角押文・有節線文を施文する。施文具は、主として先端を二叉状にしたものを使用している。

174～182は波状縁。これらは、口縁に接して付した縦位の突起を起点に隆線で区画文を描き、これを横位に連携するもの(174・180)、隆線による楕円形区画文を横位に連携するもの(179)などに分けられ、本来的には各々が別の類型を形成するものである。



第32図 遺構外縄文式土器 阿玉台式土器(3)



第33図 遺構外縄文式土器 阿玉台式土器断面図(4)

第33図・第34図197～218は把手・突起類及び胴部～底部などを集めた。

197は耳状の把手で、有節線を2条施文する。なお、本例は天地が逆で、スケールを付して撮影したままの掲載であるため、修正していない。初歩的かつ致命的な間違いであるが、報告者に責がある。

198～200は花卉状、ないし耳状(199)の装飾を施したもの。198・199は有節線を施すが、200では有節線に沿う形で刺突を施している。これらが付けられた土器本体は、各々別の類型と思われる。

201・204は波状線の波頂部に付けられた環状把手。201は下端から区画線の隆線を垂下させる。204は外面のみならず、内面にも花卉状の装飾を施し、有節線と刺突を加えている。

203は扇状把手がせり上がり、中心に穿孔したような形状であるが、外面は無文・無装飾で、内面のみに有節線を施している。本例は見かけの形態の類似だけで、発生論的にも扇状把手とは無縁である。

208は波状線の波頂部に盃状の突起を付し、下端から隆線を垂下する。装飾は、細かな凹形刺突を密に充填している。本例は勝坂式の影響が見られる点で、むしろ第35・36図に組み入れるべきか。

211は胴中位に付された突起。ここを起点に隆線による区画文を横位に連携させている。突起は折り曲げた粘土棒を縦に3本束ねて整形したもので、器面から剥落したため、製作法が判明した訳である。

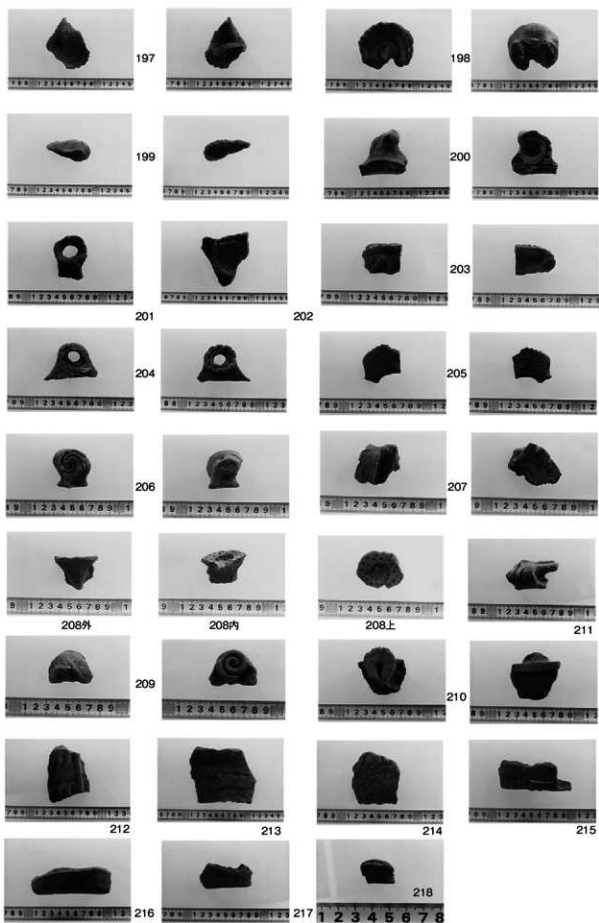
209・210は口縁部に貼付された突起。209は内面のみ装飾が見られ、細い粘土紐を巻いて蝸牛状の突起を付している。210は口縁端部に楕円形の吸盤状の突起を貼付したものの。

212～214は胴部。212は縦位の隆線を付し、ひだ状の装飾を施す。213は輪積み帯を残し、無装飾のもの。214はひだ状の装飾のみを施している。213は阿玉台I a式、212・214は阿玉台I b式。

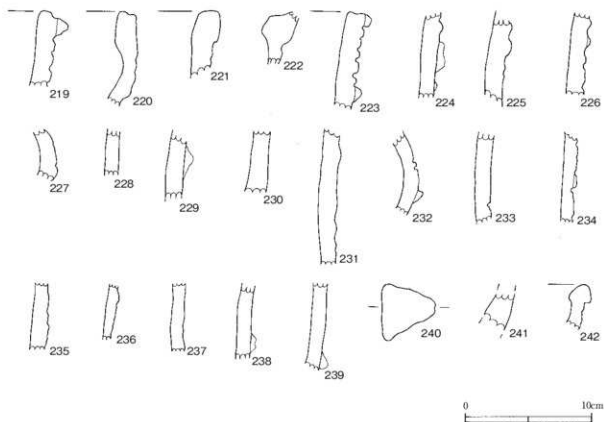
215～217は底部。217は比較的小形な深鉢形土器のものと思われる。

218はミニチュア土器の口縁部に付された耳状の突起で、単列の角押文を施している。その他の部位の破片を含め、ミニチュア土器としては唯一の出土例である。阿玉台I a式に比定される。

明記した物以外の時期的な位置づけは、阿玉台I b式に比定される蓋然性が高い。



第34図 遺構外縄文式土器 阿玉台式土器(4)



第35図 遺構外縄文式土器 勝坂式土器断面図

勝坂式土器（第35図219～242）

勝坂式土器は、第2次調査区から8点、第7次調査区から35点が出土している。

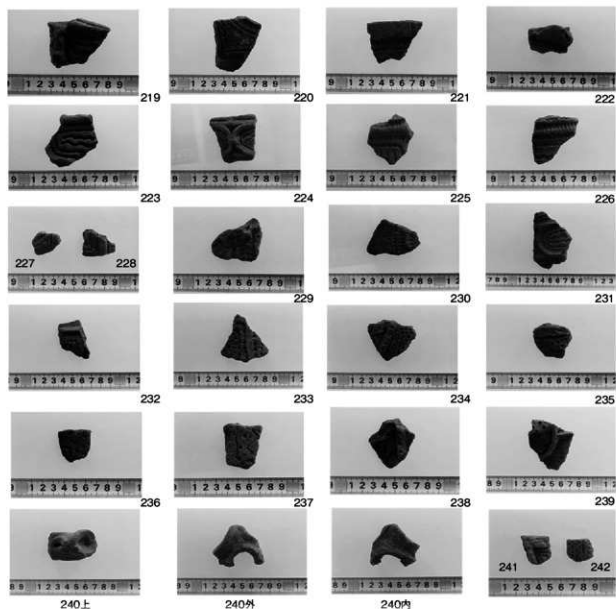
今回の報告にあたり、型式細分が必要な場合は、下総考古学研究会の細別基準に基づいている。この知的優先権は下総考古学研究会にあり、誤りがある場合は報告者の理解不足ということで、その責があるものとする。ただし、同研究会では厳密な概念規定に基づき、「縄紋時代」「文様帯」「押圧紋」などの用語を用いているが、本報文では、「縄文時代」「押圧文」の用語を用いることにする。先の知的優先権に抵触するかも知れないが、行政発掘による調査報告書という性格上、汎用性の高い学術用語を選択せざるをえなかった。この点については、御寛恕を乞いたい。

219・220・223・224は典型的な勝坂Ⅰ式土器及びそれに近似したものである。横割区画文土器の系統で、223・224は隆線で楕円形区画文を描き、これを横位に連携する。区画内には結節沈線を1条ないし2条沿わせ、さらに波状施文したものを充填している。219・220は波状縁。219は波頂部下に縦位の突起を貼付し、これを起点に区画文を構成する。220は三角形区画文を構成する。

225～229は勝坂Ⅰ式に近似するものである。いずれも横割区画文土器の系統であるが、226は隆線脇の施文が結節沈線というよりは連続押圧文に近いものがあり、新しい要素を持つ。

230・231は勝坂Ⅱ式ないし、それに近似するものである。横割区画文が体部（胴部－報告者註－）下半まで及ぶもので、隆線で楕円形区画文を構成し、区画内には連続押圧文を沿わせる。

232～239は在地化した勝坂式及び勝坂式土器の影響を受けた土器である。隆線で区画文を構成し、区画内には233・234では結節沈線を沿わせており、さらに極めて細い円形刺突を密に充填している。ここに括ったものは、区画内に細い円形刺突を密に充填するという属性が共通する。ただし、オリジナルに近い233・234と比較して239は、断面が三角形の隆線を貼付しており、胎土的にも阿玉台式土器

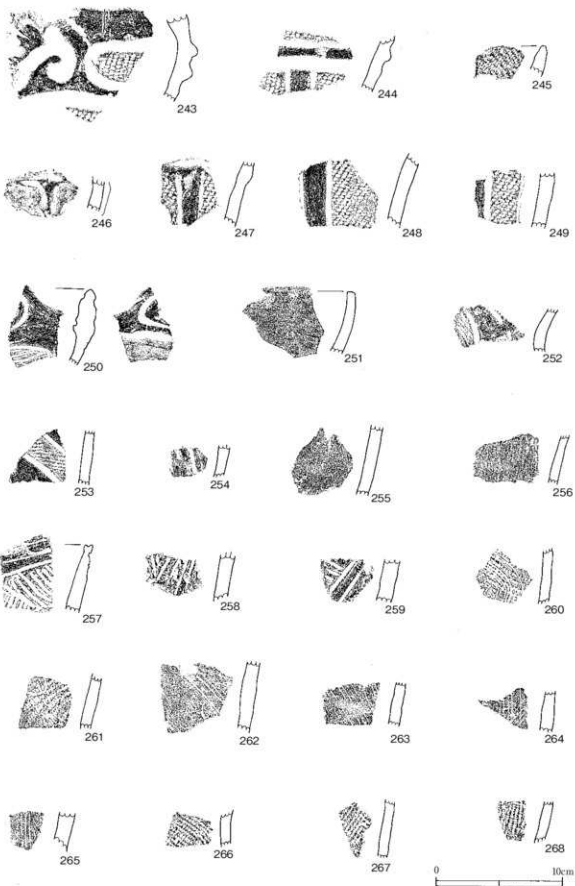


第36図 遺構外縄文式土器 勝坂式土器

と何ら変わらないものがある。これなどは、むしろ阿玉台式の枠組みで捉えるべきか。

240は橋状把手に大小の眼鏡状突起を付したものである。时期的には勝坂Ⅲ式として捉えたい。なお、本例は器面に対して縦位に付けられたものであり、写真の間違いであって、報告者に責がある。

始めに記しておくべきであったが、縄文中期中葉の阿玉台式土器と勝坂式土器のみ、遺物写真と断面実測図による体裁となっている。しかも写真と実測図が別々である。このような、世にも奇異な体裁となったのには理由がある。まず、良質な画仙紙が尽きてしまい、拓本を採ることが困難となったこと。これにより写真の脇に断面図を添える形を採用することになり、縮尺を合わせるため、スケールを付して撮影が行われた訳である。次の問題は写真の引き伸ばしで、写真屋に断られてしまったこと。これはデジタルカメラのデータからの引き伸ばしも模索したが、今度はコスト的に高く、予算的に無理となった。抽出した250点余の資料を、何としてでも掲載するべく取った最終手段が、この形である。



第37圖 遺構外繩文式土器 中期～後期土器群

加曾利 E 式土器 (第37図243~249)

加曾利 E 式土器は、第 1 次調査区で 2 点、第 2 次・第 7 次調査区で 21 点が出土した。

243・244・247~249は加曾利 E Ⅱ式のキャリバー形深鉢。243は口縁端を欠くが、口縁部~胴部片。口縁部文様帯は主文様が渦巻文で、副文様は楕円形区画文となっており、隆沈線で描かれ、これを横後に繰り返しつつ連携する。地文は縄文 2 段 RL を用い、胴部文様帯とのヨコ一次区画文は、隆線により明瞭に施されている。口縁は小波状ないし、小振りの把手が付けられていたものと思われる。244はその同一個体で、胴部片。楕円形区画文の下端と、隆線によるヨコ一次区画文が見られる。胴部文様帯は地文縄文 2 段 RL 施文後、一対の縦位沈線を引いて区画された内側を磨消する、いわゆる磨消懸垂文である。懸垂文の沈線は太く明瞭で、画線内の磨消もていねいに行っている。

247~249は胴部片で、磨消懸垂文が施されるもの。地文縄文は、いずれも 2 段 RL を用いている。

245は口縁片で、小波状を呈する。地文縄文 2 段 RL を施すのみで、粗製土器の類である。加曾利 E Ⅱ式ないしは加曾利 E Ⅲ式に比定される。246は文様を区画する隆沈線が残存し、地文部分は剥落している。これも加曾利 E Ⅱ式ないし E Ⅲ式に比定されるものである。

称名寺式土器 (第37図250~256)

称名寺式土器は遺跡全体でも少なく、図化したものが、今回出土したものの全てである。

250は口縁片で、波状縁。波頂部の内外面に、沈線で文様を施す。欠損部分が多く、意匠については不明。本例は沈線による意匠内に、条線を充填するものである。

251も口縁片で、こちらは平縁。口縁は内傾気味に立ち上がり、口唇部は角頭気味となる。無文系粗製土器と考えられるが、粗製土器の口縁部無文帯に相当する可能性もある。

252~256は胴部片。252・253は沈線で意匠を描き、画線内に縄文を充填する。縄文は握りの細い 2 段 LR を使用している。三段階細分での (中) 段階に相当する。

254は沈線で意匠を描いて、画線内に列点を充填するもの。三段階細分での (新) 段階に相当するものである。255・256は胴下半の無文部分の破片。

堀之内式土器 (第37図257~268)

堀之内式土器は遺跡全体で 17 点が出土した。全て堀之内 1 式土器に比定される。

257は口縁片。口縁端から口唇部に粘土粒を貼付して小突起とする。口縁下に比較的狭小な無文部を形成し、文様は沈線による区画内に多条化沈線を充填するものであるが、小片のため詳細は不明。

258・259も基本的には区画内に多条化沈線を充填するものようである。

260・261は縄文を地文とし、この上に沈線で装飾を施すもので、粗製土器の類に近いものがある。

262・263は斜沈線をラフに施した粗製土器。264・265は縦位に条線を施した条線系粗製土器である。

266~268は縄文系粗製土器。266は使用原体が正反の場合で、267・268は縄文 2 段 LR である。

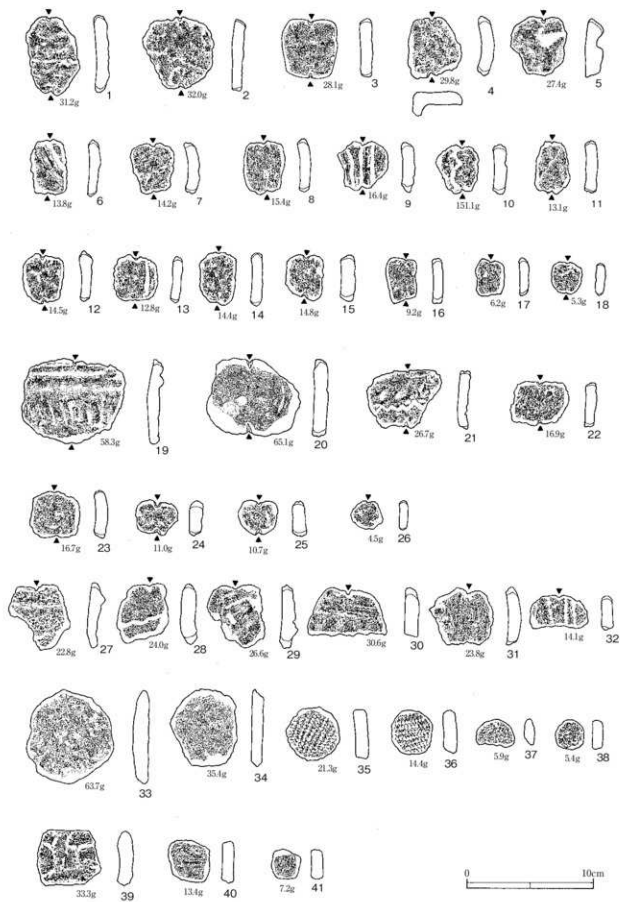
その他、形式不明の土器片 48 点が、遺跡全体から出土した。

(6) 遺構外出土の土製品 (第38図)

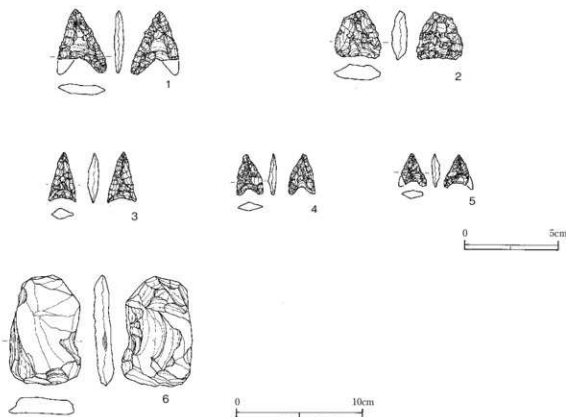
1~32は土器片錘。諸般の事情により図示できなかったが、各次調査区から土器片錘 7 点が出土しており、それを合計したものが総数となる。

1~18は長軸中央に索溝を持つものである。最もポピュラーな形状で、今回も大多数を占める。素材とした土器片の部位は、圧倒的に胴部片で、4のみが底部付近を用いる。製作法的には、打ち欠き整形後は、側面を磨っていないものがほとんどで、磨っていてもごく軽度である。

19~26は短軸中央に索溝を持つものである。今回は 8 点検出され、以外に多かった。素材とした土器片の部位は、やはり圧倒的に胴部片であるが、20は丸ごと底部円板を使用している。製作法は長軸例



第38図 遺構外土製品



第39図 遺構外石器

と何ら変わりはない。異なるのは、法量に関してであって、長辺が10cmを超える大形品と4cm未満の小形品が多く、5cmを中心した中形品は極端に少なかった。

27～32は欠損品を集めた。欠損前であるが、概ね27～29が長軸中央に索溝を持つもの、30～32が短軸中央に索溝を持つものと思われる。

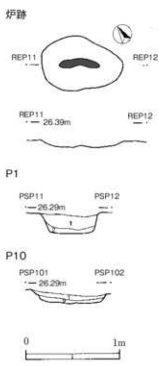
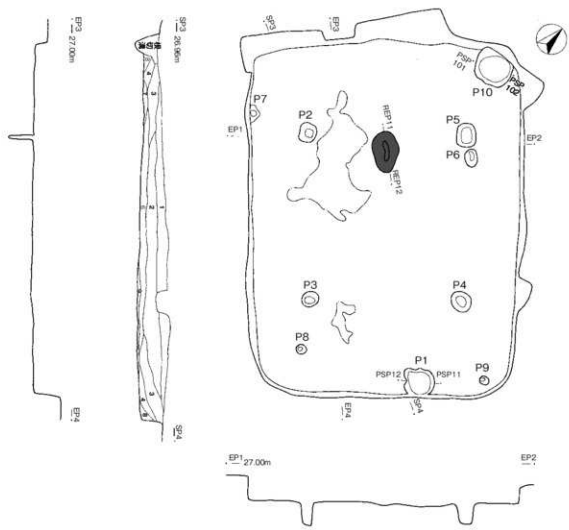
31～35は土製円盤。このうち、39～41は方形に近い形状で、土器片錘の未成品とも見せなくはないが、観察の結果、その可能性は極めて低いと判断した。諸般の事情により図示できなかったが、各次調査区から土製円盤2点が出土しており、それを合計したものが総数となる。

(4) 遺構外出土の石器 (第39図)

1～5は石鏃。ここに図示したものは、全て無茎凹基式。図示しなかったものを含め、有茎石鏃は1点も検出されていない。それから、今回は岩種鑑定を行っていないため、岩種(石材)をの記載は参考である。図示しなかったものも含め、石鏃は黒曜石を素材とした例が大多数で、3のみメノウ。1長さ35.32mm、幅22.64mm、厚さ4.58mm、重さ2.58g。2長さ25.25mm、幅23.71mm、厚さ7.56mm、重さ4.34g。3長さ25.77mm、幅15.07mm、厚さ5.10mm、重さ1.40g。4長さ21.72mm、幅23.97mm、厚さ4.58mm、重さ2.58g。5長さ35.32mm、幅22.64mm、厚さ4.58mm、重さ2.58g。

6は分銅形打製石斧。くびれが弱く、刃部の両端があまり突出せず、蘭玉状に近い形状である。長さ86.22mm、幅55.90mm、厚さ12.82mm、重さ91.0g。ホルンフェルス。

諸般の事情により図示できなかったが、各次調査区から石鏃4点・磨製石斧1点・打製石斧2点・ハンマーストーン1点・磨石類1点・石皿1点が出土しており、それを合計したものが総数となる。また、黒曜石のフレイク・チップ類は、第2次調査区で141.7g、第7次調査区では188.2gが出土している。遺構としての石器製作跡は検出できなかったが、存在した可能性を示唆するものである。



D3土層説明

- 1 暗褐色土 しまり弱。
- 2 黒褐色土 本遺跡中最も黒い土層。
- 3 黒褐色土 黄色粒子多量。サラッとした感触。
- 4 暗褐色土 黄色粒子少量。しまりよい。
- 5 暗黄褐色土 下層ほど黄褐色土が主となる。黄色粒子多量。
- 6 暗褐色土 黒褐色土混じり。黄色粒子多量。
- 7 褐色土 黄褐色土混じり。
- 8 暗黄褐色土 ローム混じり。しまりよい。
- 9 黄褐色土と暗褐色土混じり合う。

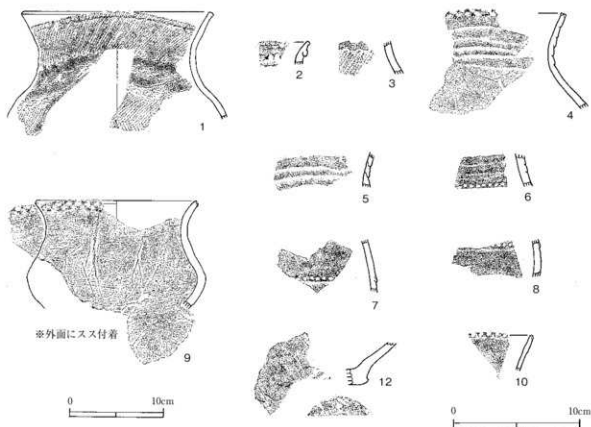
P1土層説明

- 1 褐色土 炭化材含む。焼土粒子少量、黄色粒子多量。
- 2 褐色土 黄褐色土混じり。炭粒微量含む。1よりしまりよい。

P10土層説明

- 1 暗褐色土 黄色粒子含む。
- 2 暗褐色土 黄色粒子、黄色土まじり。

第40図 D3実測図



第41図 D3出土遺物

4. 弥生時代

弥生時代の遺構は、本調査を行った地点では、第1次調査区・第3次調査区・第5次調査区・第7次調査区で検出されており、第2次調査区・第4次調査区及び第6次調査区では検出されなかった。第1次(第5次含む)・第3次及び第7次調査区は、各々が距離を持って位置しているため、それぞれ一つのグループとして捉えることができる。時期的には、大枠で見ても弥生時代後期の所産である。

出土した土器片は小片が多く、図化にあたっての縮尺は、個々の土器が持つ属性が的確に示せるように、あえて統一していない点を予めお断りしておく。

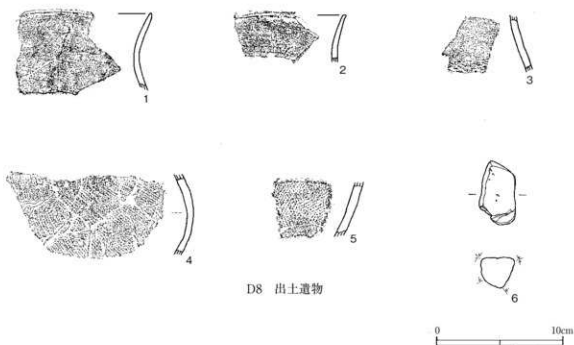
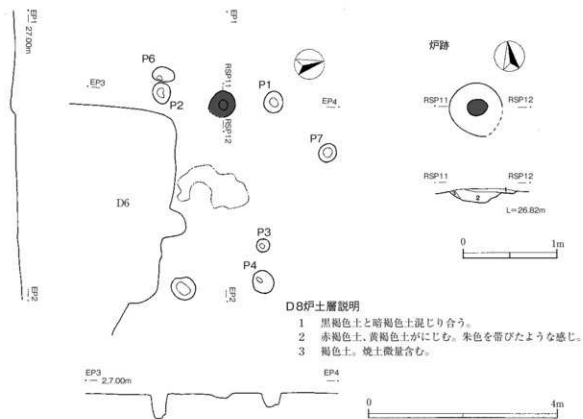
(1) 竪穴住居跡(第40図～第59図)

D3(第40図)

位置 F11～19G中心、重複関係 M4・5に破壊される。平面形 隅丸長方形を呈する。規模 7.76m×5.77m、遺構確認面からの深さ0.56m。壁 きっちりとは掘られ、垂直に立ち上がる。床 全体にしっかりとした直床。炉の西脇帯は焼けており、極めて硬化している。壁溝 部分的に認められたが、幅0.05m程で狭く、図化していない。炉 中央よりも奥壁寄り、主柱穴を結ぶラインのやや内側。地床 炉で、火床部は焼けている。ピット 10本検出。うちP2～P5の4本が主柱穴。P2は方形の掘り方。P2～P6で柱痕検出。P1は出入口に該当するか。P7～P9は用途・機能不明。貯蔵穴 P10はやや不整な隅丸長方形を呈し、底面は平坦で、貯蔵穴か。覆土 9層に分層できた。下層の6・7層は埋め戻し土。中層の2層は黒褐色土。遺物出土状態 覆土上層・中層・下層に廃棄行為が認められる。特に中層の2層が目立つ。建て替え 認められなかった。

出土遺物(第41図)

出土総数は223点で、うち215点をトータル・ステーションで取り上げた。



第42図 D8実測図

図示した11点は、いずれも甕と思われる。1は口縁～胴上半の残存。推定口径20.4cm。残存高11.3cm。口唇部から口縁部に附加条縄文を帯状施文し、頸部及び胴部との境には結節文を横位に重畳施文する。胴部は附加条縄文を羽状施文する。2は口縁片。複合口縁で、口縁下端にキザミを施す。3は頸部～胴上半。胴部との境に結節文を施し、胴部は附加条縄文。4は口縁～胴上半の大破片。口唇部をひだ状にし、頸部は輪積み帯をそのまま残す。5は頸部片で、4と同様の装飾を施したもので、6は頸部片。輪積み帯を消しきっておらず、胴部との境には円形刺突列を施す。7・8は胴部片で、6と同様の装飾を施したもので、胴部との境には低い段が付く。9は口縁～胴中位の残存。推定口径17.2cm。推定最大径18.8cm。残存高11.4cm。口唇部をひだ状にし、器外面は極めて細かいハケナデを施し、器内外面にススが附着する。10は口縁片で、口唇部をひだ状にする。12は底部。外面に木葉痕が残る。

D8 (第42図)

位置 H10-63G 中心。重複関係 D6・7に破壊される。平面形 壁を消失しており、不明。規模不明。壁 消失していた。床 ソフトロームの直床であるが、部分的に暗褐色土系混じる貼床となる。土間状の硬化部分あり。壁溝 検出されず。炉 P1とP2を結ぶ中間あたりで検出。地床がで、顕著な火床面は認められなかった。ビット 7本検出。うちP1及びP2が主柱穴である。P5は出入口に該当するか。P3・P4・P6・P7は用途・機能不明。覆土 暗褐色土及び褐色土が0.02～0.03mの層厚で残存していたのみ。遺物出土状態 炉の周辺の床面を中心に、ややまとまって廃棄されているが、全体的に少量である。建て替え 認められなかった。

出土遺物 (第42図)

出土総数は23点で、その全てをトータル・ステーションで取り上げた。

1～5は甕。1・2は口縁片で、ともに単口縁かつナデ調整のみ。3は頸部片。胴部との境に結節縄文を施す。4・5は胴部片。4は胴中位で、附加条縄文を斜行施文する。5は胴下半で、附加条縄文を施す。6は砥石で、完存。長さ5.0cm。幅2.6cm。厚さ2.8cm。重量12.9g。三ないし四面の使用面が認められる。このうち、裏面の使用面はあまり顕著ではない。

D9 (第43図)

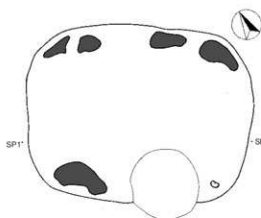
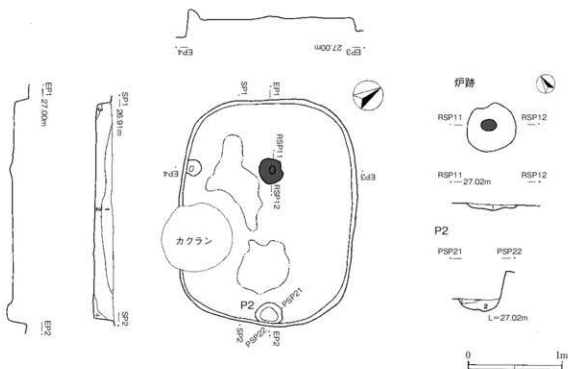
位置 H10-73Gで検出。重複関係 単独。平面形 隅丸長方形を呈する。規模 4.85m×3.77m。遺構確認面からの深さ0.42m。壁 きっちり掘られ、垂直に立ち上がる。床 直床で、全体に硬くしまっているが、炉の西脇と南脇が特に硬化している。壁溝 廻らせていない。炉 中央奥壁寄り。地床 炉で全体に凹凸があり、火床部は良く焼けている。ビット 2本検出され、いずれも主柱穴ではない。

P2は出入口に該当する可能性あり。覆土 4層に分層できた。壁際に沿って焼土層が分布する。これは床面に接したものと、若干浮いたものがある。2層までは、廃屋後の焼却行為とそれに伴う埋め戻しと思われる。1層は自然堆積の可能性が高い。遺物出土状態 全体の傾向として、覆土中層にまとまりがあり、一部は上層に及ぶ。平面的には、個体毎のまとまりがやや見られるものの、傾向は指摘できない。1は南東コーナー付近に廃棄されており、接合距離は最大で2mを測る。2層のみならず、1層のものも接合した。これ以外の個体では、最大で接合距離が3mを超える例があった。建て替え 認められなかった。

出土遺物 (第43図・第44図)

出土総数は131点で、うち91点をトータル・ステーションで取り上げた。

1～10・12・13は甕。1は推定口径20.7cm。器高18.5cm。底径6.3cm。全体がうかがえる。複合口縁で、底部は木葉痕。器面の内外面ともヘラケズリ後ヘラナデ調整。ナデつけた跡が、ごく細かな目のハケナデに見える部分がある。2は推定最大径17.0cm。残存高9.3cm。胴中位～胴下半の残存。最



焼土検出状況

D9土層説明

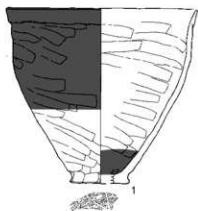
- | | |
|--------|----------------------|
| 1 黒褐色土 | 黄色粒子を一樣に含む。暗褐色土が混じる。 |
| 2 暗褐色土 | 1層と明瞭に分かれる。黄色粒子多量。 |
| 3 暗褐色土 | 焼土粒子まじり。 |
| 4 暗褐色土 | 3に似るが焼土含まない。 |

P2土層説明

- | | |
|-------|------------------------------|
| 1 褐色土 | 黄褐色土少量。焼土粒子微量。しまり強い。 |
| 2 褐色土 | しまり暗い色調。黄褐色土少量。焼土粒子微量。しまり強い。 |

D9伊土層説明

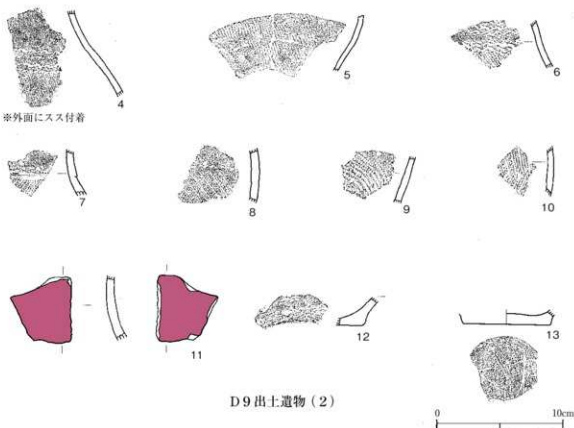
- | | |
|--------|--------------------|
| 1 暗褐色土 | 黒色味強い。焼土粒子、ブロック含む。 |
|--------|--------------------|



D9出土遺物(1)



第43図 D9実測図



D9出土遺物(2)

第44図 D9出土遺物

大径を胴中位にもち、附加条縄文を施す。3は推定最大径13.0cm、残存高9.2cm。胴上部～胴中位の大破片で、頸部に向かってびれが強く、あるいは壺形になるか。附加条縄文を施文し、かなり細目の原体を使用する。4・6・7は頸部～胴上部。頸部には結節縄文を施し、胴部は附加条縄文を施文。結節縄文が4は1条ずつ二段で、6・7は2条1組となっており、さらに7は胴部との境にゆるい段がついている。5は胴部片で、附加条縄文を施す。8・9も胴部片で、附加条縄文を施すが、使用原体は各々で異なる。10も胴部片で、附加条縄文を羽状施文する12・13は底部。13は木葉痕をミガキで消しかけている。11は壺形土器の頸部。器面はやや荒れているが、内外面に赤彩を施す。本例のみ南関東系。

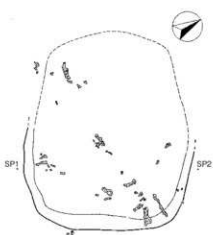
D86(第45図)

位置 G9-83Gを中心に、73Gにまたがる。重複関係 D84の破壊を受ける。平面形 隅丸長方形(楕円気味)を呈する。規模 3.68m×(4.24m)。遺構確認面からの深さ0.69m。壁 垂直気味に立ち上がる。床 直床で、部分的に貼床。中央部が硬化している。壁溝 廻らせていない。炉 中央やや北寄り。地床炉で、炉底は凹凸があり、火床部は焼けている。ピット 3本検出。P3を除いて覆土に焼土・炭化材片含む。覆土 6層に分層でき、最下層には焼土・炭化材を多く含む。遺物出土状態 目立った傾向は認められず。建て替え 認められなかった。

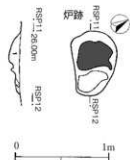
出土遺物(第45図・第46図)

出土総数は214点で、うち88点をトータル・ステーションで取り上げた。

1～26は甕。1・2は口縁部で、同一個体。複合口縁で、附加条縄文施文後、口縁下端にキザミを施す。3・4は口縁部～頸部。単口縁で、輪積み帯をそのままに残し、4は口唇部に装飾を施す。5・6はこれらと同類型の胴部で、附加条縄文を施文する。7～9は口縁部～頸部。いずれも輪積み帯を残しつつ、ヘラナデなどで器面を調整してこれを消しかけたもので、9は口唇部をひだ状にする。胴部以下



炭化材検出状況

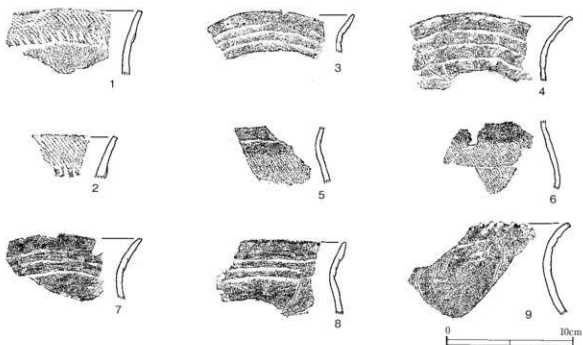


D86土層説明

- 1 暗褐色土 径0.5~2mm 黄スコリア、径0.5mm 焼土粒子少量。
- 2 黒褐色土 径0.5~1mm 黄スコリア、粘性あり。
- 3 暗褐色土 径0.5~2mm 黄スコリア、径1mm 焼土粒子少量、粘性あり。
- 4 暗褐色土 径2~3mm 炭化材片、ローム混じり。粘性あり。
- 5 暗褐色土 焼土、炭化材多量。粘性有り。

D86炉土層説明

- 1 灰褐色土 径0.5~2mm 焼土粒子均一に含む。ローム少量。
- 2 暗褐色土 径1mm ロームブロック。径1~5mm 黄スコリア多量。



第45図 D86実測図

には附加条縄文などの地文を一切施さない一群である。10～12は口縁片で、口唇部をひだ状にし、輪積み帯を残すものであるが、胎土や器面調整から見て、先述の3～6の一群には属さず、7～9の類に含まれる。13は頸部～胴部片。胴部に附加条縄文を施す。14～18は附加条縄文を施文した胴部片。各々が使用した原体は異なる。19～21は頸部～胴部片で、頸部に結節縄文を施したもの。19は1条、20・21は多条化。22は附加条縄文を施文した胴部片。23の原体は燃糸か。24は附加条縄文を羽状施文した胴部片。25・26は器面調整のみの胴部片。27は壺形土器の口縁部～頸部。推定口径21.0cm。残存高67cm。複合口縁で、縄文施文後、口縁下端にキザミを施す。頸部外面から内面全体に赤彩。南関東系。D105(第47図)

位置 G10-4・5Gにまたがる。重複関係 D104Bの破壊を受ける。平面形 楕円形(小判形に近い)を呈する。規模 4.42m×4.05m。遺構確認面からの深さ0.12m。壁 丸みを持ってゆるやかに立ち上がる。床 直床で、炉周辺など部分的に貼床。炉の南側に鳥状の硬化面がある程度。壁溝 廻らせていない。炉 2箇所。床面中央やや西寄り。地床炉。火床部は焼けている(炉1)。その東側に焼土が分布した程度の小規模な地床炉がある(炉2)。ピット 1本検出。南壁際で検出。平面形は略半月形を呈し、床面中央に向かって傾斜する。覆土 5層に分層できた。1・2層を見る限りは自然堆積。遺物出土状態 床面直上が目立ち、その他では、3層中から出土した。建て替え 認められなかった。

出土遺物(第47図)

出土総数は29点で、うち24点をトータル・ステーションで取り上げた(平面分布図を図示)。

1～7は甕。1は口唇部を欠くが口縁片。複合口縁で、附加条縄文施文後、口唇直下に刺突列、口縁下端にはキザミを施す。2は頸部～胴上部片。胴部には附加条縄文を施文。3は附加条縄文と結節縄文を施した胴部片である。4～7は附加条縄文を施文した胴部片であるが、各々使用した原体は異なる。8は鉢形土器の口縁部。口唇上に細縄文を施し、口縁部は羽状縄文を施文する。南関東系。9は軽石製の砥石で、二面に使用面が認められる。長さ72mm、幅109mm、厚さ75mm、重量96.6g。

D106(第48図)

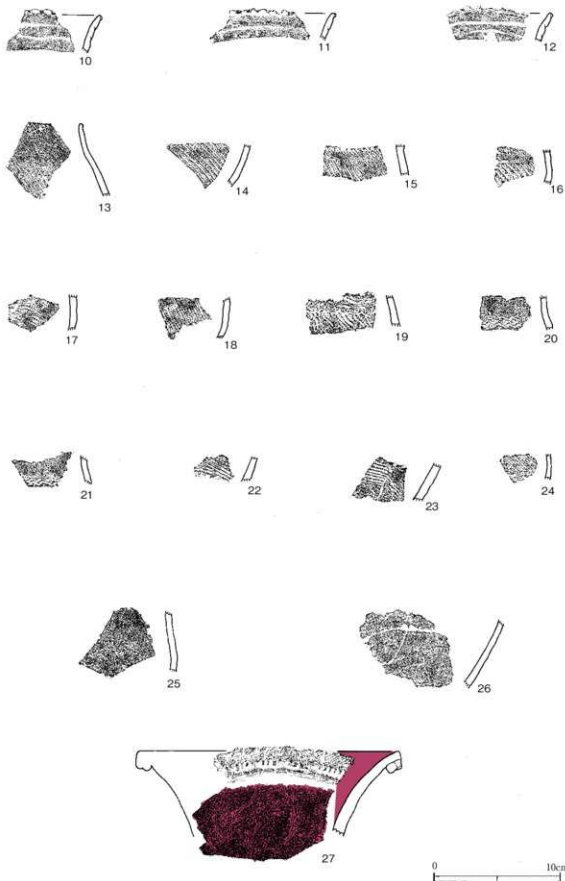
位置 G10-6G中心に16Gにまたがる。重複関係 単独。平面形 やや胴の張る小判形を呈する。規模 4.42m×3.82m。遺構確認面からの深さ0.30m。壁 壁際は丸みを帯びるが、垂直気味に立ち上がる。床 直床。炉の南側一帯が硬化している。壁溝 廻らせていない。炉 床面中央西寄り。地床炉で火床部は良く焼けており、10cm位焼土が堆積。ピット 4本検出。うちP1を除いて浅い。覆土 7層に分層できた。自然堆積か。遺物出土状態 覆土中層～床面に目立つ。建て替え 認められなかった。

出土遺物(第48図・第49図)

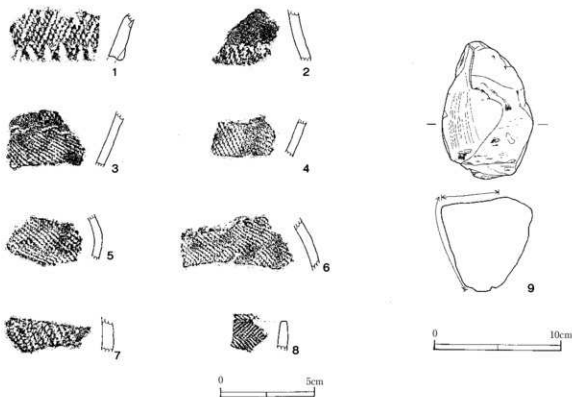
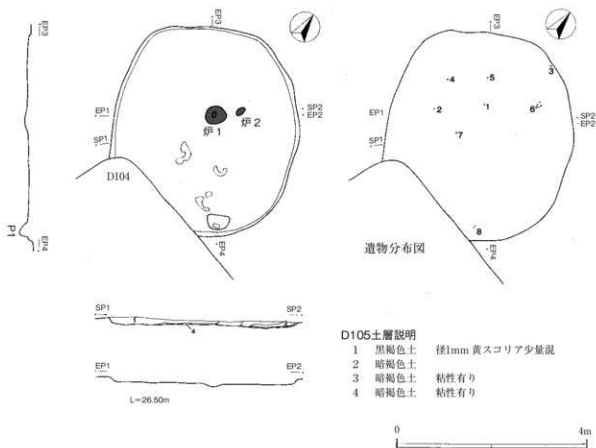
出土総数は272点で、うち139点をトータル・ステーションで取り上げた。

1～21は甕。1は口縁～頸部。推定口径20.0cm。残存高8.6cm。複合口縁で、附加条縄文施文後、口縁上下端にキザミを施す。頸部は器面調整のみで、胴部との境には結節縄文か。2は口縁部～頸部片。口唇上から口縁にかけて附加条縄文を施文する。3・4は頸部～胴中位の大破片。3は胴部に附加条縄文を施す。4は頸部に2条1組の結節縄文を多段施文し、胴部は附加条縄文を施文。5は輪積み帯を残した頸部片。6・7は頸部～胴部片。胴部との境にゆるく段を有し、6はキザミ列を、7は円形刺突列を施す。8～19は附加条縄文を施文した胴部片で、8～10は同一個体。他も含め、各々が使用した原体は異なる。20は胴下半～底部で附加条縄文を施す。21は胴上部～胴下半。推定最大径18.4cm。残存高14.5cm。内外面とも最終器面調整はヘラナデ。外面の胴上部から胴下半にかけてスガが付着しており、その部分からはやや赤変化している。内面の胴下半には「オコケ状」の炭化物が付着する。

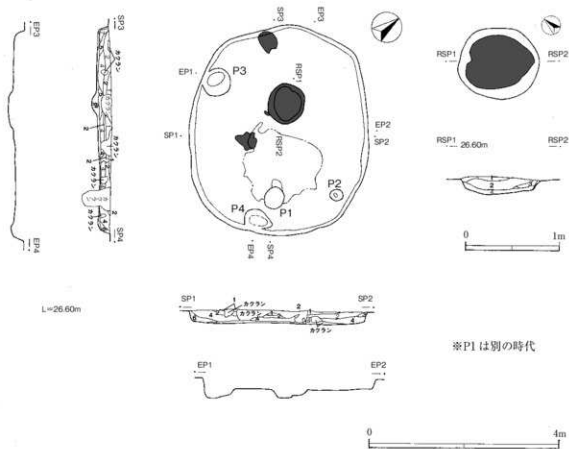
22～24・26・27は南関東系。このうち、24が鉢形土器で、他は壺形土器である。22は推定口径



第46図 D86出土遺物



第47図 D105実測図

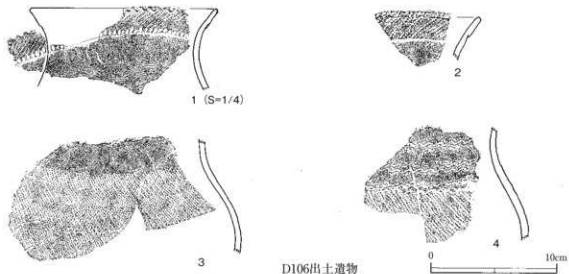


D106土層説明

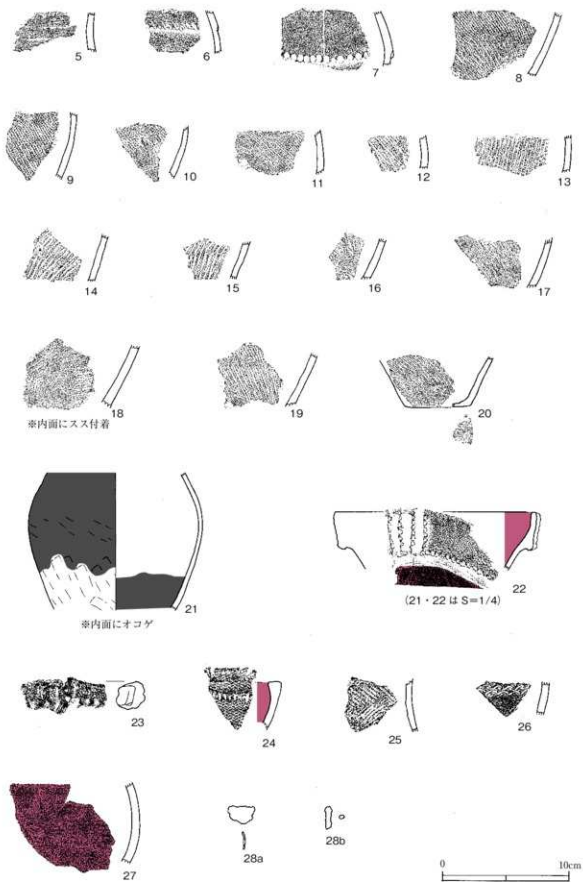
- | | | |
|---|-------|--------------------|
| 1 | 黒褐色土 | 径0.8mm 黄スコリア。 |
| 2 | 黒褐色土 | 径0.5~1mm 黄スコリア。 |
| 3 | 暗褐色土 | 径1~2mm 黄スコリア。粘性有り。 |
| 4 | 黒褐色土 | 径1~2mm 黄スコリア。粘性有り。 |
| 5 | 暗赤褐色土 | 径1~2mm 黄スコリア。粘性有り。 |
| 6 | 褐色土 | ロームまじり。粘性有り。 |
| 7 | 褐色土 | 焼土粒子、ロームまじり。粘性有り。 |

D106炉土層説明

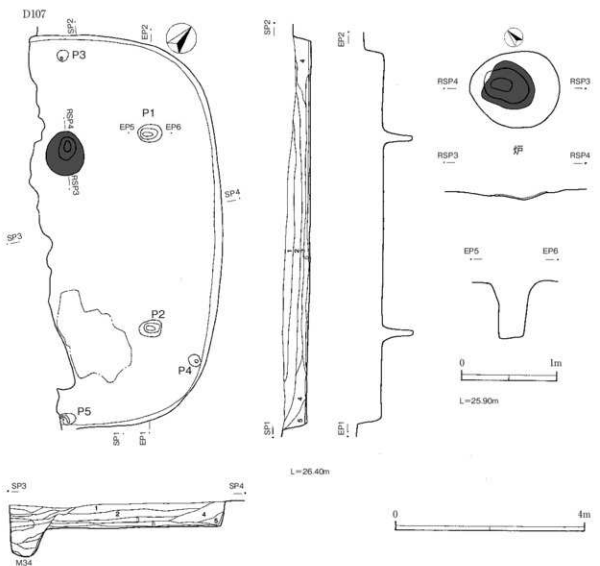
- | | | |
|---|---------|---------------|
| 1 | 赤褐色土 | 径1~3mm 焼土粒子。 |
| 2 | 赤褐色土 | 径1~5mm 粒子多量。 |
| 3 | にぶい赤褐色土 | 焼土粒子極少量。粘性有り。 |
| 4 | 褐色土 | ローム主体。焼土まじり。 |



第48図 D106実測図

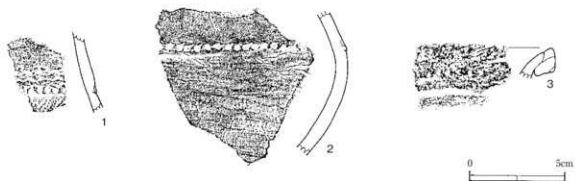


第49図 D106出土遺物

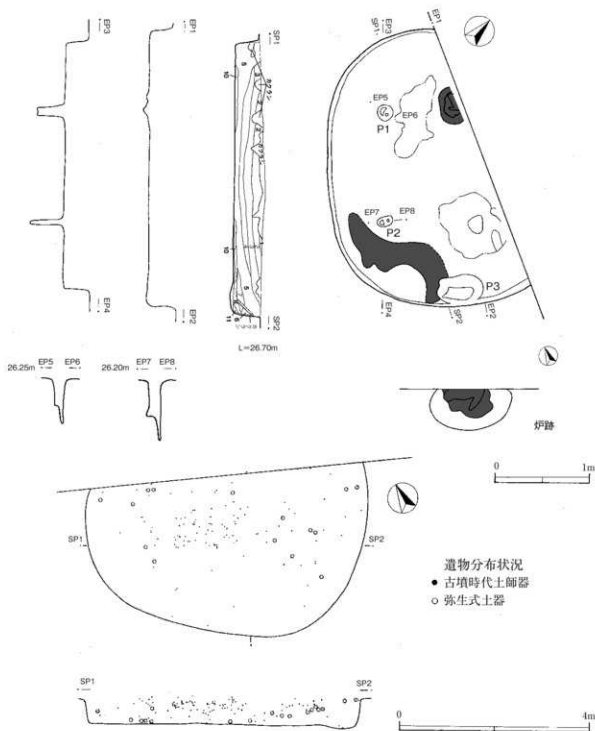


D107土層説明

- | | | | | | |
|---|--------------|---------------------------|---|------|---------------------------|
| 1 | 黒褐色土 | 径0.5~2mm 黄スコリアごく少量混 | 5 | 暗褐色土 | 径1~2mm 黄スコリア含、しまりあり。 |
| 2 | 黒褐色土 | 径0.5~2mm 黄スコリア少量混 | | 黒褐色土 | |
| 3 | 黒褐色土 | 径1~2mm 黄スコリア多量含しまりあり、粘性あり | 6 | 褐色土 | 径1~2mm 黄スコリア含、しまりあり、粘性有り。 |
| 4 | 暗褐色土
黒褐色土 | 径1~2mm 黄スコリア多量含しまりあり | | 黒褐色土 | |



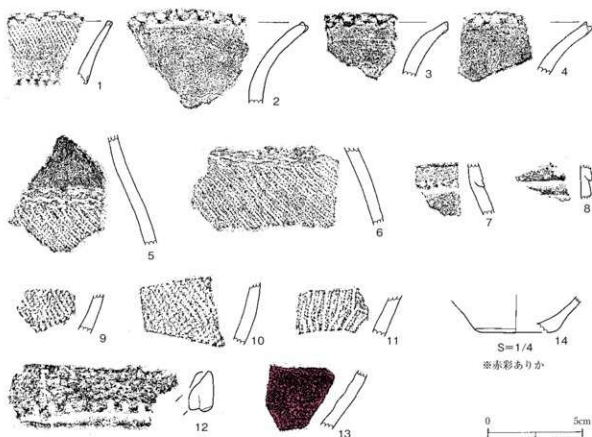
第50図 D107実測図



D108土層説明

- | | | | |
|--------|-------------------------------------|---------|--|
| 1 黒褐色土 | 径0.5~1mm 黄スコリアごく少量含。 | 7 黒褐色土 | 径0.5~1mm 黄スコリア、径0.5~1mm 焼土粒子多量含。しまりあり、粘性強。 |
| 2 黒褐色土 | 径0.5~1mm 黄スコリアごく少量含。 | 8 赤褐色土 | 焼土多量含、しまりあり、粘性強。 |
| 3 黒褐色土 | 径0.5~1mm 黄スコリアごく少量含粘性あり。 | 9 暗褐色土 | 径1~3mm 黄スコリア、ローム混。しまりあり、粘性強。 |
| 4 黒褐色土 | 径0.5~1mm 黄スコリアごく少量含粘性やや強。 | 10 暗褐色土 | 径0.5~2mm 黄スコリア、径0.5mm~2mm 焼土粒子多量含、しまりあり、粘性強。 |
| 5 黒褐色土 | 径0.5~1mm 黄スコリア径0.5~1mm 焼土粒子混、粘性やや強。 | 11 褐色土 | ローム主体。焼土混。しまりあり、粘性強。 |
| 6 褐色土 | ローム主体。しまりあり。粘性強。 | | |

第51図 D108実測図



第52図 D108出土遺物

21.8cm, 残存高6.2cm。複合口縁で、羽状縄文を施文後、縦位の棒状浮文を4本貼付し、キザミを施す。また、口縁下端にもキザミを施している。頸部外面から内面に赤彩を施すが、内面を中心に器面の剥落がやや目立つ。23も複合口縁で、縦位の棒状浮文を貼付し、口縁下端にはキザミを施したものである。本例は22よりも口縁部が幅狭で、かつ器面が荒れており、縄文及び赤彩の有無は不明。24は口縁部～体部片。口唇部～口縁部に網目状燃糸文を施文後、口縁下端にキザミを施す。26は結節縄文を施文し、27は外面に赤彩を施す。25は羽状縄文を施文した壺形土器の頸部片。本例は胎土に石英・長石粒子がやや目立ち、他の南関東系とした土器群とは異なっているため、そのカテゴリからは除外した。

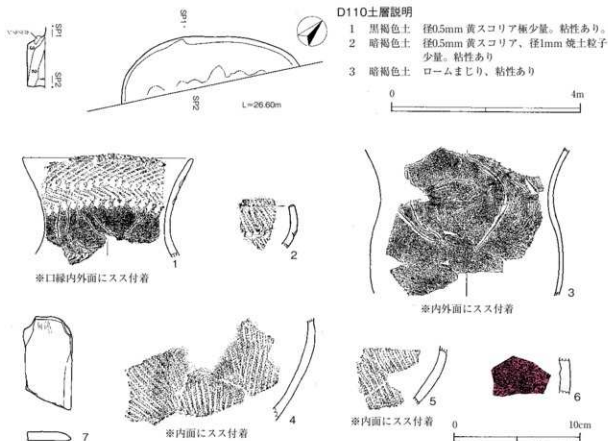
28a・28bは同一番号で取り上げられており、ごく軽度のクリーニングをした際に分離したもので、当初は癒着していたものである。aは板状、bは棒状の不明鉄製品。a長さ22cm, 幅1.4cm, 厚さ0.2cm, 重量1.6g。b長さ1.8cm, 幅3.5cm, 厚さ0.6cm, 重量1.3g。

D107(第50図)

位置 G9-87Gを中心に、97・98Gにまたがる。重複関係 M34に破壊される。平面形 小判形を呈する。規模 8.40m × (4.05m)。遺構確認面からの深さ0.56m。壁 はほぼ垂直に立ち上がる。北東壁の上層は暗褐色土。床 直床で、平坦。ごく部分的に貼床。炉跡の南側が硬化している。壁溝 廻らせていない。炉 中央やや北西壁寄り。地床炉で、火床部は焼けている。ピット 5本検出。うちP1及びP2が支柱穴で、楕円形の掘り方。覆土 6層に分層でき、自然堆積。遺物出土状態 覆土上層では古墳時代～奈良・平安時代の土師器及び須恵器が出土。建て替え 認められなかった。

出土遺物(第50図)

出土総数は154点で、うち74点をトータル・ステーションで取り上げた。覆土上層では古墳時代の土師器36点、奈良・平安時代の土師器16点、須恵器10点が出土している。



第53図 D110実測図

1・2は甕。1は頸部片で、キザミと結節縄文を施す。2は胴部片で、頸部との境にはゆるい段がつけられ、円形刺突列を施文する。3は壺形土器の口縁片。複合口縁で、南関東系。

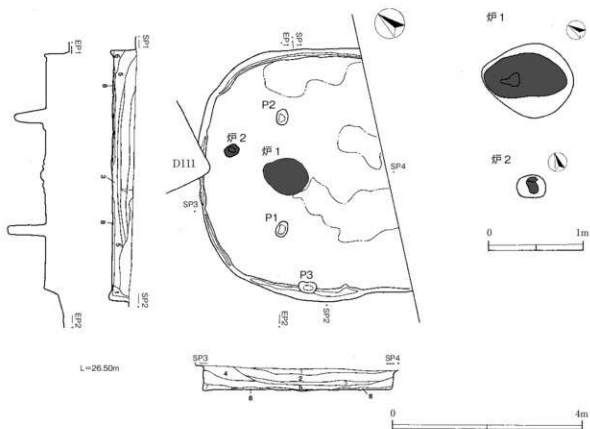
D108(第51図)

位置 G10-15Gを中心に、16Gにまたがる。重複関係 単独。平面形 小判形を呈する。規模 5.93m × (3.70m)、遺構確認面からの深さ0.64m。壁 垂直に立ち上がるが、床面との境付近が若干抉れる。床 跡跡南側は貼床。その他はハードロームの直床で、平坦。炉の北西及び南側が硬化している。壁溝廻らせていない。炉 中央やや北西壁寄り。地床炉で、火床部は焼けている。ピット 3本検出。うちP1及びP2が支柱穴である。覆土 11層に分層でき、黒褐色土系の上層は自然堆積、中層以下は埋め戻しと思われる。遺物出土状態 自然堆積土の覆土上層から中層の上部にかけては、古墳時代前期を中心とする遺物が廃棄されており、数量的には大多数を占める(約500点)。しかしながら、埋め戻し土である覆土下層から床面直上では弥生式土器が出土し、これを以って時期決定をした。本跡は例外的に遺物分布図を付したが、分布図の○印で示したものが弥生式土器である。これのみを伝えるために作成した図なので、それ以上の情報はあえて盛り込まなかった。建て替え P1・P2では認められた。

出土遺物(第52図)

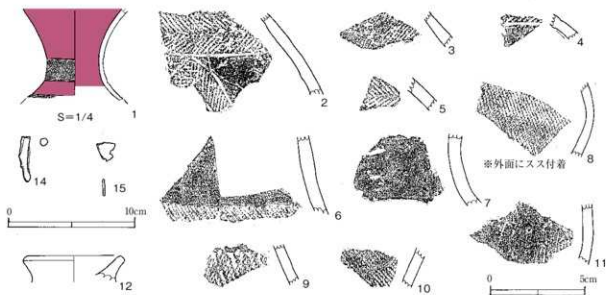
出土総数は516点で、うち166点をトータル・ステーションで取り上げた。弥生式土器は合計22点(在地系13点・南関東系9点)である。

1～11は甕。1は口縁部。複合口縁で、口縁下にキザミを施す。2～4は口縁片。いずれも口唇部をひだ状にする。5・6は同一個体で、頸部～胴部。頸部に結節縄文を多段・多条化施文するもの。7は頸部から胴部片で、胴部との境に円形刺突列を施す。8は輪積み帯を残す頸部片。9～11は附加条縄文を施文した胴部片。12～14は壺形土器で、南関東系である。12は口縁片。複合口縁で、口縁部に



D112土層説明

- | | | | |
|--------|-----------------------------|--------|-------------------------------------|
| 1 黒褐色土 | 径0.5mm 黄スコリア少量。粘性あり。 | 7 黒褐色土 | 径0.5~2mm 黄スコリア。粘性あり。 |
| 2 黒褐色土 | 径0.5~1mm 黄スコリア。粘性あり。 | 8 暗褐色土 | 径1~3mm ロームブロック少量。ロームにじむ。しまりあり。粘性あり。 |
| 3 黒褐色土 | 径0.5~1mm 黄スコリア2より多い。粘性あり。 | | |
| 4 黒褐色土 | 径0.5~3mm 黄スコリア多量。 | | |
| 5 暗褐色土 | 径0.5~5mm 黄スコリア。粘性あり。 | | |
| 6 暗褐色土 | 径0.5~2mm 黄スコリア。ロームにじむ。粘性あり。 | | |



第54図 D112実測図

羽状縄文を施文する。13は胴部片で、外面に赤彩を施す。14は胴部から底部片。

D110(第53図)

位置 G10-27Gで検出。重複関係 単独。平面形 楕円形を呈するか。規模(3.87m)×(1.12m)、遺構確認面からの深さ0.38m。壁 やや丸みを持ち、ゆるやかに立ち上がる。床 直床。中央に向かって硬化面が顕著。壁溝 検出部分では廻らせていない。炉 検出されなかったが、未調査区域にあるものと思われる。ピット 検出されなかったが、未調査区域にあるものと思われる。覆土 3層に分層でき、上層は自然堆積と思われる。遺物出土状態 ほとんどが床面直上ないし床面付近から出土した。廃屋後、あまり時間を置かずに廃棄を行ったものと推察される。建て替え 認められなかった。

出土遺物(第53図)

出土総数は47点で、うち23点をトータル・ステーションで取り上げた。

1～5は甕。1・2は口縁部～頸部片。1は単口縁で、口縁部に附加条縄文を羽状施文後、絡条体圧痕文を口縁直下と口縁下端に施す。2は複合口縁で、口縁部は附加条縄文を施文する。器形的には鉢形土器の可能性もある。3は頸部～胴下半付近。残存高11.7cm。内外面とも極めて目の細かいハケナデ後ヘラナデ。外面にススが付着する。4・5は附加条縄文を施文した胴部片。6は壺形土器の胴部片で、外面に赤彩を施す。南関東系。7は砥石。扁平で、側面が鈍い蛤刃状になっている。長さ6.8cm、幅3.6cm、厚さ0.6cm、重量26.1g。砂岩製。

D112(第54図)

位置 G10-17Gを中心に、18Gにまたがる。重複関係 D111に破壊される。平面形 小判形を呈する。規模 5.38m×(4.06m)、遺構確認面からの深さ0.46m。壁 ほぼ垂直に立ち上がる。床 直床で平坦。炉の周辺から中央一帯と、北東壁際が硬化している。壁溝 北東と南西に一部途切れる他は全周か。炉 P1-P2間の中央(炉1)と、北西壁寄り(炉2)の2箇所。炉1の火床部は焼けているが、炉2は部分的にしか焼けていない。ピット 3本検出。うちP1及びP2が主柱穴で、卵形の掘り方である。P3は用途不明。覆土 8層に分層でき、自然堆積か。遺物出土状態 覆土上層では古墳時代～奈良・平安時代の遺物が出土している。建て替え 認められなかった。

出土遺物(第54図)

出土総数は139点で、うち51点をトータル・ステーションで取り上げた。覆土上層では古墳時代土師器2点、奈良・平安時代土師器26点、須恵器6点出土。その他弥生中期の土器4点が出土している。

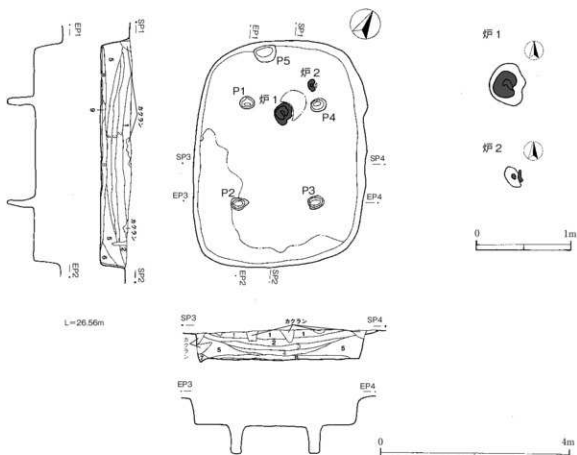
1～5は壺形土器で、同一個体。1は頸部で、残存高9.7cm。頸部の中位に上下を沈線で画した中に縄文を充填した文様帯を有し、肩部の縄文部分も一部残る。器内外面に赤彩を施す。2～5は肩部片。2は磨消縄文で結紐文を描く。他は小片で、縄文部分の破片である。文様構成を復元すると、頸部の中位には帯縄文を施し、胴上部(肩部)は帯縄文に結紐文が相接したものが器面を廻っていたものと考えられる。これらの諸属性から、弥生中期宮ノ台式土器に比定したい。

6～11は甕。6は頸部～胴上部。胴部は附加条縄文を施文。7は頸部片で、一部胴上半が残存。胴部は附加条縄文を施す。8～10は附加条縄文を施した胴部片で、使用した原材は各々で異なる。11は胴部片で、器面調整はケズリ後ナデ。12は蓋形土器のつまみ部分。推定径5.4cm、残存高1.4cm。

14・15は不明鉄製品。14長さ3.5cm、幅0.8cm、厚さ0.7cm、重量2.5g。15長さ1.3cm、幅1.5cm、厚さ0.1cm、重量0.7g。

D113(第55図)

位置 G10-7Gを中心に、17Gにまたがる。重複関係 単独。平面形 小判形を呈する。規模 4.83m×3.70m、遺構確認面からの深さ0.66m。壁 ほぼ垂直に立ち上がる。床 中央部分が貼床で、他は直



D113土層説明

- | | |
|------------------------------------|--|
| 1 黒褐色土 径0.5~1mm 黄スコリア極少量。しまり、粘性あり。 | 6 暗褐色土 径1mm 黄スコリア少量。ロームにじむ。しまり、粘性あり。 |
| 2 黒褐色土 径0.5~1mm 黄スコリア極少量。しまり、粘性あり。 | 7 褐色土 径1~2mm 黄スコリア、ロームまじり。粘性あり。 |
| 3 黒褐色土 径0.5~1mm 黄スコリア極少量。粘性あり。 | 8 暗褐色土 径0.5~2mm 黄スコリア少量。ロームまじり。しまり、粘性あり。 |
| 4 黒褐色土 径0.5~1mm 黄スコリア極少量。しまり、粘性あり。 | 9 暗褐色土 粘土粒子含む。しまり、粘性あり。炉の上。 |
| 5 黒褐色土 径0.5~2mm 黄スコリア極少量。しまり、粘性あり。 | |



※外面にスス付着
※内面にスス又はタール付着

※▶は頂部縄文帯の上下端と胴部縄文帯の上端を示す。

※▷は胴部縄文帯の下端で、同一部位を示す。

※土圧による歪みのため、復元径は合わない。



第55図 D113実測図

床。炉の北側と、北西～南東壁際が硬化している。壁溝 西壁下で部分的に検出した。幅8cm程の小規模なものである。炉 P1～P4間のもの(炉1)と、北東コーナー寄りのもの(炉2)の2箇所。炉1の火床部は焼けているが、炉2は規模も小さく、あまり焼けていない。ピット 5本検出。うちP1～P4が主柱穴で、いずれも長楕円形を呈し、中段を有する掘り方である。P5は北西壁際で検出。楕円形(「D」字形に近い)でごく浅く(12cm)、用途不明。覆土 9層に分層できた。5層以下は埋め戻して、それより上は自然堆積。遺物出土状態 覆土上層では古墳時代～奈良・平安時代の遺物が出土している。建て替え 認められなかった。

出土遺物(第55図1～第56図35)

出土総数は458点で、うち201点をトータル・ステーションで取り上げた。覆土上層では古墳時代土師器19点、奈良・平安時代土師器6点、須恵器13点出土。

1は甕。口縁端部を欠くのみで、他は完存。口径14.7cm、器高16.8cm、底径6.3cm。複合口縁で、口縁部及び胴部に附加条縄文を施し、頸部は結節縄文を施文する。胴下半の底部付近は縦位及び斜位のヘラケズリ、底部は木葉痕が明瞭である。外面の頸部以下には全体ではないが、スガが付着している。

2は壘形土器。個々は小片となり、大きくは上半分と下半分の2ブロックで廃棄されていたが、他に同一個体の破片は覆土中から散漫に出土した。上半分と下半分は、残存部位は重なり合うものの、接合面が無いので、ツーピースのまま図化・報告する。a口径13.7cm、残存高14.0cm。b推定最大径18.0cm、残存高12.7cm、底径7.6cm。a・bから見た推定復元器高24.0cm前後。複合口縁で、最大径を胴中位に持ち、底部は若干張り出す。口縁部に附加条縄文を施し、頸部には上下端を結節縄文で画した帯縄文を施文しており、胴上部にも同様の帯縄文を施文する。胴下半はハケナデ後、ヘラミガキを施す。外面のほぼ全体にスガが付着し、内面の胴下半以下には「オコゲ状」の付着が認められる。

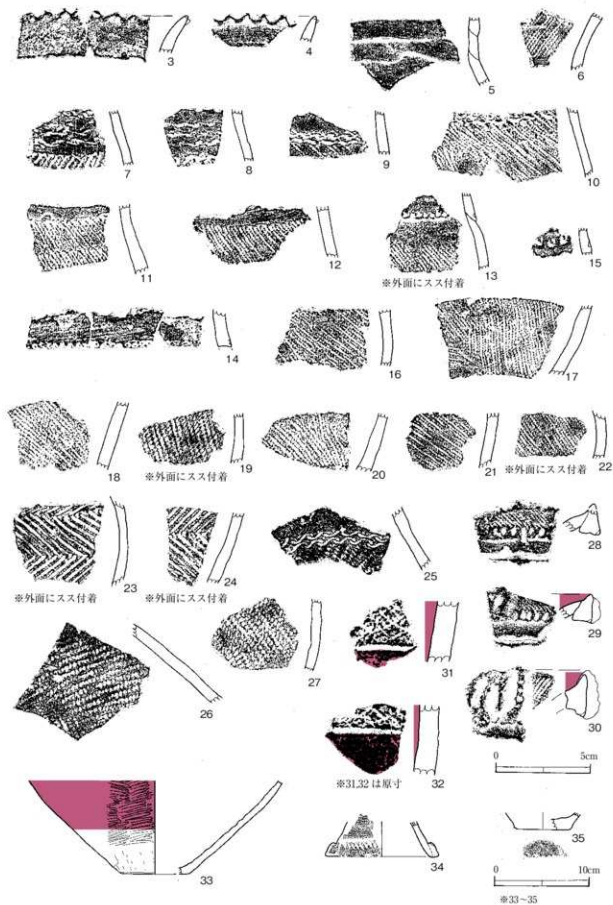
3～27・35は甕。3・4は口縁片で、口唇部をひだ状にする。5は頸部片で、輪積み帯を残すもの。6は頸部に飾描文を施したもので、唯一の出土である。7～9は頸部片で、結節縄文を重畳施文するもの。10は頸部～胴上部片で、7～9とほぼ同様の構成。11・12は頸部～胴部片で、附加条縄文を施文する。13～15は頸部～胴部片で、頸部と胴部の境に刺突列を施す。16～22は胴部片で、附加条縄文を施文したものの。23・24は胴部片で、同一個体。附加条縄文を羽状施文したもので、東関東系か。25・26も胴部片で、同一個体。羽状縄文と結節縄文を施す。27も胴部片で、羽状縄文を施文したものの。以上の3点は、縄文に見る属性では南関東系と等しいが、胎土その他から見て一応除外して捉えている。35は胴下半～底部。附加条縄文を施しており、底部外面には木葉痕が明瞭である。

28～34は南関東系。28は壘形土器の口縁部か。29・30は壘形土器の口縁部。複合口縁で、縄文を施文後、縦位の棒状浮文を貼付する。31・32は同一個体で、鉢形土器か。網目状燃糸文を施文し、内外面に赤彩を施す。33は壘形土器の胴下半～底部片で、外面には赤彩の痕跡が見られる。34は台付鉢形(高坏)土器の台部。裾は折り返し状となり、キザミを施す。

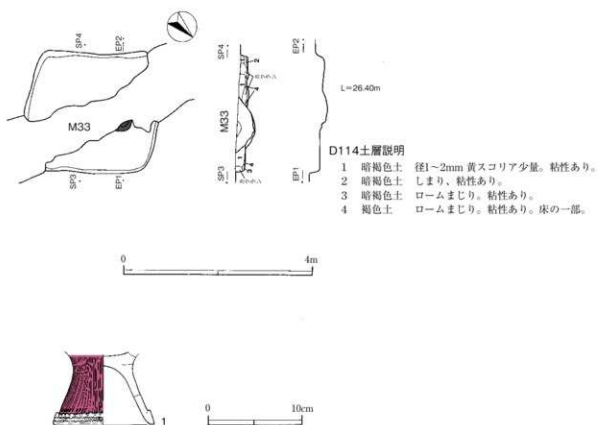
D114(第57図)

位置 G10～18Gを中心に、8Gに一部かかる。重複関係 M33に破壊される。平面形 やや不整な隅丸方形を呈する。規模 2.86m×2.60m、遺構確認面からの深さ0.22m。壁 垂直気味に立ち上がる。床 直床か。残存部には硬化面は見られない。壁溝 廻らせていない。炉 中央やや西壁寄り。地床炉で、火床部は焼けている。ピット 検出されず。覆土 4層に分層でき、暗褐色土主体。遺物出土状態 ほぼ床面付近から台付鉢(高坏か)形土器の台部が出土。その他陶磁器1点が出土したが、これはM33の混入である。建て替え 認められなかった。

出土遺物(第57図1)



第56図 D113出土遺物



第57図 D114実測図

出土総数は10点で、うち5点をトータル・ステーションで取り上げた。

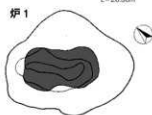
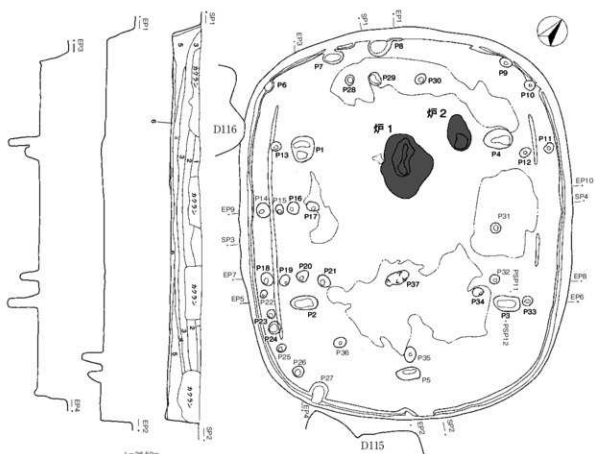
1は台付鉢(高坏)形土器の台部。台部径10.4cm、残存高7.6cm。台の裾は折り返し状となり、網目状燃糸文が施文される。台部外面は縦位の密なヘラミガキを行い、赤彩を施す。南関東系。

D117(第58図)

位置 G10-6Gを中心に、7G・G9-96G・97Gにまたがる。重複関係 D115・116の破壊を受ける。平面形 小判形を呈する。規模 8.30×7.03m。遺構確認面からの深さ0.72m。壁 ほぼ垂直に立ち上がる。南東部分の壁上部は暗褐色土で、これを除去するとゆるやかな傾斜がつく。床 ほぼ直床で、部分的に貼床。炉周辺の半径約1mを除いた外側が硬化している。壁溝 北西壁を除いて全周する。その他、南西と北東で古期の壁溝を検出した。炉 P1-P4間のもの(炉1)と、そのやや東側に隣接するもの(炉2)の2箇所。炉1の火床部は焼けているが、炉2は規模も小さく、全体的にあまり焼けていない。ピット 37本検出。うちP1~P4が支柱穴である。P5は梯子穴と思われ、出入口。P6~P37は補助的な柱穴と思われる。覆土 6層に分層でき、自然堆積。遺物出土状態 覆土上層では古墳時代~奈良・平安時代の遺物が出土している。本跡は自然埋没の遺構なので、完全に埋没するまでに、600年近くかかったことを示している。建て替え 周溝の知見から、反復拡張型の建て替えが認められた。拡張後もP1に建て替えの可能性が見られ、都合、1回以上の建て替えが行われたことになる。

出土遺物(第58図1~第59図38)

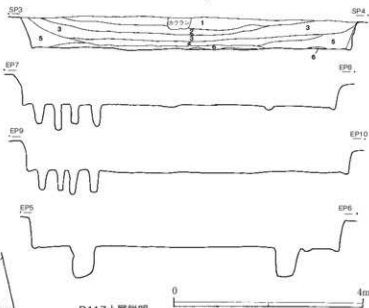
出土総数は1192点で、うち426点をトータル・ステーションで取り上げた。覆土上層では古墳時代土師器391点、奈良・平安時代土師器70点、須恵器21点が出土している。しかし、覆土下層~床面では弥生式土器262点が出土(在地系229点・南関東系33点)したばかりでなく、炉跡の覆土中からは弥生式土器のみが出土した。この点を重視し、炉跡出土土器を以て本跡の時期を決定した訳である。



※34~36 は炉跡出土 (原寸) 36



35



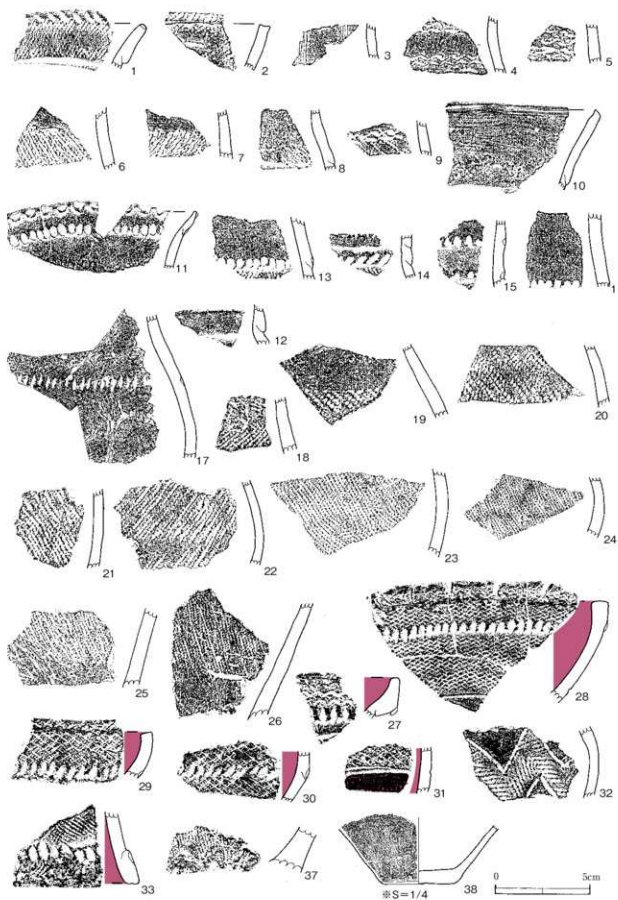
D117土層説明

- 1 黒褐色土 径0.5mm 黄スコリアごく少量含。粘性あり。
- 2 黒褐色土 径0.5mm 黄スコリアごく少量含。粘性あり。
- 3 黒褐色土 径0.5~1mm 黄スコリアごく少量含。粘性やや強。
- 4 黒褐色土 径0.5~1mm 黄スコリア含。粘性強。
- 5 黒褐色土 径0.5~2mm 黄スコリア多量含。粘性強。
- 6 暗褐色土 径0.5~2mm 黄スコリア多量含。ローム混。しまりあり。粘性強。

P3土層説明

- 1 暗褐色土 径0.5~1mm 黄スコリアごく少量含。柱状。
- 2 褐色土 ローム混。しまりあり。粘性あり。
- 3 暗褐色土 径0.5~1mm 黄スコリア少量含。ローム混。粘性あり。

第58図 D117実測図



第59圖 D117出土遺物

住居の形態から、本跡を弥生時代の所産と判断することは、比較的容易と思われる。とはいえ、もっと多角的な視点から厳密に検討する必要性を感じた。現に、D108は接合・復元作業が終了した時点では、古墳前期と判断しかけていて、抽出遺物も同期のものに限っていたからである。

1～26は甕。1・2は口縁片。1は複合口縁で、口唇上にキザミを施す。2は口唇部から口縁部にかけて附加条縄文を施文する。3は頸部片。縦位の櫛描文を施すもので、唯一の出土である。4・5も頸部片で、結節縄文を重畳施文するもの。6～8も頸部片で、附加条縄文を施す。9は結節縄文と附加条縄文を施した頸部片。10・11は口縁部～頸部片。10は複合口縁を呈し、11は口唇部をひだ状にし、口縁下に刺突を施すもの。12は頸部片で、輪積み帯をそのままに残すもの。13～16は頸部片で、円形刺突列を施文するもの。13は胴部との境に、14は輪積み帯上に、15では二列の施文となる。17は頸部～胴部片。上記とほぼ同様に、頸部と胴部の境に円形刺突列を施したもの。18は胴部片で、附加条縄文を羽状施文するもの。東関東系か。19も胴部片で、縄文を施文する。20～26は胴部片で、附加条縄文を施文するもの。各々の使用した原体は異なるものである。

27～33は南関東系。27は壺形土器の口縁部で、結節縄文を施文し、赤彩を施す。28～31は鉢形土器。28は網目状捺糸文を施す。29・30は同一個体。網目状捺糸文を施文し、内外面に赤彩を施す。31もほぼ同様で、本例はD113の31・32と同一個体で、遺構間での同一個体の例となる。32は壺形土器の胴部。磨消縄文で山形文を描く。33は台付鉢形（高坏）土器の台部で、内面に赤彩を施すものである。

34～36は埴跡出土。34・35は附加条縄文を施した胴部片で、各々は別の原体を使用している。36は壺形土器の胴部片で、外面に赤彩を施している。南関東系である。

37・38は甕。ともに胴部～底部。37は附加条縄文を施し、38はヘラケズリ後ヘラミガキ。

29・30及び34～36は極めて小片のため、原寸で図化した。

(2) ビット (第60図)

P589 (第60図)

位置 G9-73G。重複関係 単独。長軸 ほぼ北北東-南南西。平面形 上部はやや不整な円形。底部はやや不整な楕円形。壁・底面 壁は垂直気味に立ち上がる。底面は比較的凹凸が少ない。いわゆるタライ状。規模 1.25m×1.17m。検出面からの深さは0.28mを測る。覆土 3層に分層でき、埋め戻しか。遺物 縄文式土器7点・弥生式土器1点が出土。備考 本跡に最寄りの弥生時代の住居跡はD86であるが、10m以上離れている。それだけに、1点のみ出土した弥生式土器を、偶然の混入とは見なすことができない。

P648 (第60図)

位置 G9-86G。重複関係 単独。長軸 ほぼ南-北。平面形 円形。壁・底面 壁は垂直気味に立ち上がる。底面は丸みを帯びる。規模 0.35m×0.37m。検出面からの深さは0.42mを測る。覆土 2層に分層でき、暗褐色土系。遺物 弥生式土器1点が出土。

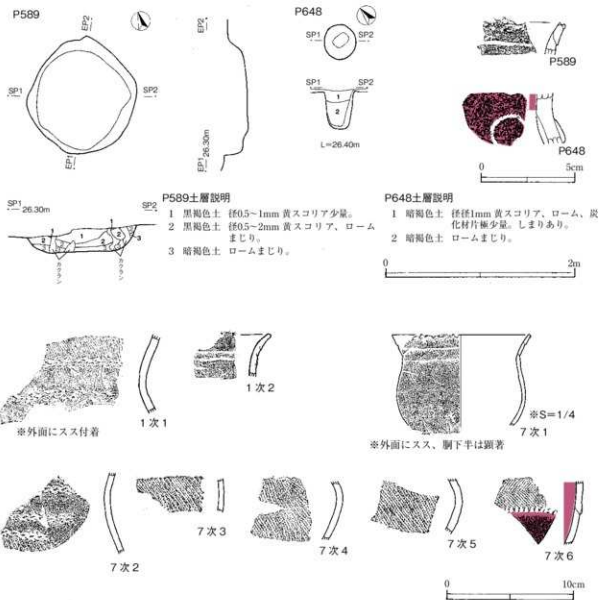
(3) ビット出土遺物 (第60図)

1はP589出土。甕の口縁部。口縁は外反気味に立ち上がり、外面に成形痕である輪積み帯を残すもので、ヘラナデにより消しかけている。在地系。

2はP648出土。壺形土器の頸部。外面は円形浮文を貼付しており、内面はヘラナデ調整。内外面に赤彩を施す。内面は半分程剥落している。南関東系。

(4) 遺構外出土遺物 (第60図)

弥生式土器は、遺構の検出されなかった第2次調査区と第6次調査区からは、各々1点ずつと、ごくわずかな数しか出土しなかった。遺構を検出した第1次調査区と第7次調査区からは、各々コンテナ1



第60図 ビット及び遺構外遺物実測図

箱分出土している。本項では、遺構出土遺物の内容を補完することを主な目的としているため、抽出した遺物は決して多くはない。ただし、各調査区で唯一の出土例も含むので、看過できない。

第1次調査 1・2は甕。1は頸部～胴部片。胴中位に無文帯を形成し、頸部と胴部は附加条縄文による帯縄文で、各々の上端と下端の区画は2条1組の結節縄文による。2は口縁部～頸部片。頸部に輪積み帯を残すもので、ヘラナデで消しかけている。1は第1次調査区でも唯一の例である。

第7次調査 1～5は甕。1は口縁～胴中位の大破片。推定口径10.5cm、残存高10.5cm。口唇部をひだ状にし、頸部は輪積み帯を残す。2は頸部～胴上部片。頸部及び胴部との境に2条1組の結節縄文を施し、胴部は附加条縄文を施文する。3～5は胴中位の破片で、同一個体。附加条縄文を施す。6は鉢形土器の口辺～体部片。口唇部を欠くが、複合口縁で、羽状縄文を施文後、口縁下端にキザミを施す。体部外面から内面にかけて赤彩。南関東系。この類例は第7次調査区でも唯一である。

5. 古墳時代

古墳時代の遺構は、本調査を行った地点では、第1次～第4次調査区及び第7次調査区で検出されており、第6次調査区からは検出されなかった。竪穴住居跡を時期的に大枠で見ると、古墳時代前期が（第1次調査区・第3次調査区・第7次調査区、古墳時代中期が第2次調査区・第3次調査区・第7次調査区、古墳時代後期は第3次調査区・第4次調査区・第7次調査区となる。

(1) 竪穴住居跡（第61図～第72図）

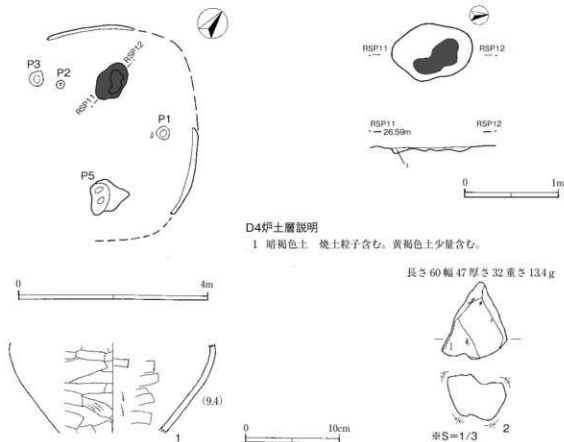
D4（第61図）

位置 F11～8Gで検出。重複関係 M6に破壊される。平面形 隅丸方形か。規模（4.10m×3.80m）、遺構確認面からの深さ0.12～0.24m。壁 垂直気味に立ち上がる。床 貼床。ロームを主に、褐色土・暗褐色土が斑状に入る。細かい凹凸があり、炉の周辺が若干硬化している。壁溝 調査部分からは検出されず。炉 やや北壁寄りに設ける。地床炉で、火床部は良く焼けていて、凹凸がある。長軸の両端がくぼむ。ピット 3本検出。うちP1が主柱穴である。覆土 5層に分層できた。床面中央部に堆積する4層は、黄褐色土混じりの褐色土で、自然堆積ではない可能性がある。遺物出土状態 大破片は覆土下層から出土した。建て替え 認められなかった。備考 P1周辺に炭化材が分布していた。

出土遺物（第61図）

出土総数は12点で、うち2点をトータル・ステーションで取り上げた。

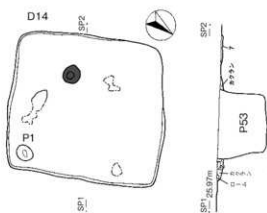
1は甕の胴中位～底部が残存する。最大径を胴中位に持つものと思われる。器外面はヘラケズリ後、ナメ方向を主とするヘラナデ調整を施し、器内面もヘラケズリ後ヘラナデを施すが、ヨコ方向を主とする。本例はナデつけの痕跡が目細かなハケ目に近似するもので、破片では弥生式土器との峻別が困難であった。接合後、器形・整形及び器面調整を再検討し、古墳時代の土師器と判断するに至る。



D4炉土層説明

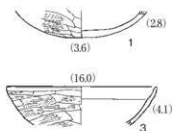
1 暗褐色土 焼土粒子含む。黄褐色土少量含む。

第61図 D4実測図

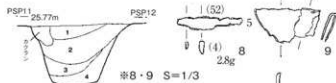
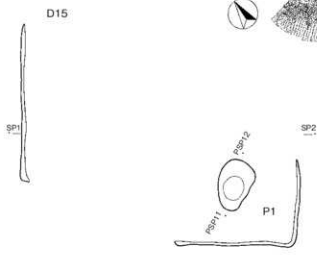
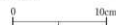


D14土層説明

- 1 褐色土
- 2 暗黄褐色土
- 7 暗褐色土 部分的に黒色土を含む。しまり弱い。



D14 出土遺物



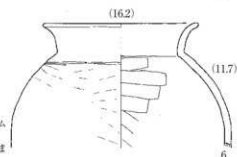
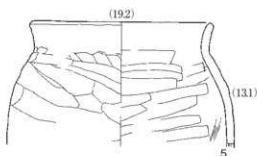
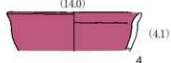
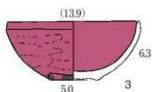
※8・9 S=1/3

D15土層説明

- 1 黒褐色土 暗褐色土混
- 2 暗褐色土 黄褐色土混
- 3 暗褐色土 2より黄褐色土やや少量
- 4 暗褐色土
- 5 暗褐色土 黄褐色土混

D15-P1土層説明

- 1 暗褐色土 黄色粒子多量。しまり弱い。
- 2 暗褐色土 黄色粒子多量。しまり弱い。
- 3 暗褐色土 黄色粒子多量。径1cm ロームブロック、しまり弱い。
- 4 暗黄褐色土 径1cm ロームブロック、しまり特に弱い。



第62図 D14・D15実測図

D14(第62図)

位置 G9-31・32・41・42Gにまたがる。重複関係 P53に破壊される。平面形 隅丸方形を呈する。規模 3.38m×3.08m。遺構確認面からの深さ0.17m。壁 ほぼ垂直気味に立ち上がるが、現存部分が浅く、いま一つ不明。床 貼床で、北西及び南東に島状硬化範囲がある。壁溝 廻らせていない。炉 P53により、完全に破壊されている。ピット 1本検出。南東コーナー寄りにあり、主柱穴ではない。覆土 4層に分層できた。遺物出土状態 特に目立った廃棄ブロックは見られず、全体に散漫な分布である。南東コーナー付近に4点の土器が廃棄されており、下からP1を検出した。建て替え 認められなかった。

出土遺物(第62図)

出土総数は59点で、うち21点をトータル・ステーションで取り上げた。

1・3は土師器環。1は体部以下の残存で、3は口縁～体部の残存。内稜を有し、器内外面ともヘラケズリ後ヘラミガキで、内面のミガキはいいである。1も同様の調整を施す。2は須恵器甕の胴部片。

D15(第62図)

位置 F9-40・50G・G9-31・41Gにまたがる。重複関係 一応は単独であるが、攪乱による破壊が目立つ。平面形 隅丸方形を呈するか。規模 5.93m×不明。遺構確認面からの深さ0.20m。壁 ほぼ垂直に立ち上がる。床 攪乱と攪乱の狭間に島状の硬化部分あり。壁溝 残存部分では廻らせていない。炉 残存部分では検出されず。ピット 1本検出。南東コーナー付近で検出し、貯蔵穴の可能性がある。覆土 7層に分層できた。遺物出土状態 南東コーナー付近に2箇所の廃棄ブロックが認められた。建て替え 認められなかった。

出土遺物(第62図)

出土総数は208点で、うち26点をトータル・ステーションで取り上げた。

1・2は須恵器甕の胴部片。タタキ整形で、外面は平行タタキ目、1の内面には青海波紋が見られる。3・4は土師器環。3は口縁～底部が残存。口縁はやや内傾気味に立ち上がり、体部外面～内面はヘラケズリ後ヘラミガキ。内外面とも焼成後赤彩を施す。4は口縁～体部。口縁は短く立ち上がり、内稜を有する。内外面とも焼成後赤彩を施す。5～7は土師器甕。基本的には口縁部内外ナデ、胴部外面ヘラケズリ、内面ヘラナデであるが、6は胴部外面の最終調整にヘラナデを行う。8～9は鉄製品。8は刀子か。9は部分的に鉄を地金として、薄くした銅を巻くか被せたもので、いかなる製品かは不明である。

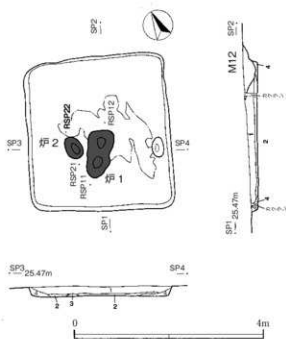
D25(第63図)

位置 G9-11Gで検出。重複関係 単独。平面形 隅丸方形を呈する。規模 3.06m×3.32m。遺構確認面からの深さ0.23m。壁 垂直気味に立ち上がる。床 直床で、炉の周囲から、南東壁の出入口にかけてが硬化している。壁溝 廻らせていない。炉 床面中央付近を中心に、3基検出。北壁の中央部。いずれも火床部は焼けている。ピット 1本検出。南東の壁際に掘られており、梯子穴と思われる。覆土 4層に分層できた。遺物出土状態 北西コーナー付近にややまとまりが見られる他は、散漫な分布を示す。建て替え 認められなかった。

出土遺物(第63図)

出土総数は70点で、うち43点をトータル・ステーションで取り上げた。

1は土師器環で、底部を欠く。口縁はやや内傾気味に立ち上がり、体部外面～内面はヘラケズリ後ヘラミガキ。内外面とも焼成後赤彩を施すが、体部下端にスス附着。2は壺で、胴下半～底部を欠損。口縁部内外ナデ、胴部外面ヘラケズリ後ヘラナデ、内面ヘラナデで、外面胴中位にスス附着。外面赤彩か。3は石製紡錘車で、上面に線刻が有る。4は土師器甕胴部を再利用した転用砥石。溝状の使用面を持つ。

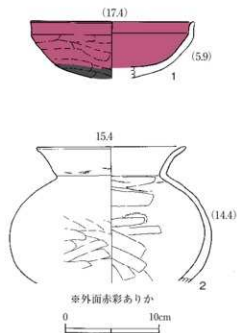
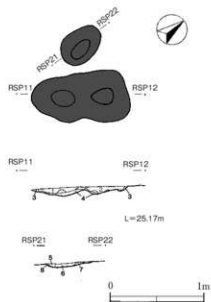


D25土層説明

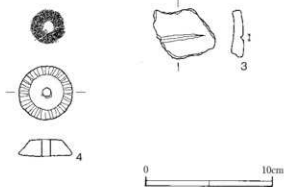
- 1 黒褐色土 黄色粒子一様に含む。焼土粒子微量
- 2 暗褐色土 ロームまじり
- 3 暗褐色土 焼土含む
- 4 暗黄褐色土 ロームブロック含む

D25炉土層説明

- 1 赤褐色土 焼土粒子多量
- 2 暗赤褐色土 黒色土と焼土まじり合う。
- 3 暗黄褐色土
- 4 黄褐色土 地山の掘りすぎ。上面は被熱をうける
- 5 黒色土
- 6 黄褐色土 焼土にじむ
- 7 暗褐色土 焼土粒子をまばらに含む
- 8 暗黄褐色土



径 42 幅 13 厚さ 13 重さ 30.5g 長さ (49) 幅 (39) 厚さ 9 重さ 15.8g



第63図 D25実測図

D82(第64図)

位置 G9-64Gを中心に、G9-65Gにまたがる。重複関係 D81に破壊される。平面形 方形を呈する。規模 6.00m×(5.42m)、遺構確認面からの深さ0.23m。壁 ほぼ垂直に立ち上がる。床 ソフトローンを床とした直床。P3の周囲のみ硬化している。壁溝 廻らせていない。炉 D81により破壊されている。ピット 5本検出。うちP1・P2・P4・P5が主柱穴である。P3は貯蔵穴か。覆土 5層に分層できた。遺物出土状態 平面分布的には幾つかのまとまりが見られるが、廃棄ブロックと認定する程ではない。垂直分布的には上層～下層まで万遍なく出土している。建て替え 認められなかった。

出土遺物(第64図)

出土総数は341点で、うち259点をトータル・ステーションで取り上げた。

1～3は土師器。1は坏で、底部を欠く。半球形を呈し、内稜を有する。体部外面へラケズリ、内面はへラケズリ後ヘラナデ。内面と外面の口縁～体部中位にかけて赤彩を施す。

2は鉢で、口縁～胴上半が残存する。口縁はやや内傾気味に立ち上がる。口縁部はナデ、胴部外面はへラケズリ後ヘラミガキ、内面はヘラナデに加え、部分的にヘラミガキ。

3は壺の肩部～胴部である。胴部は球状に膨らむ。器外面は荒れている。内面はヘラナデ。

D85(第65図)

位置 G9-73Gで検出。重複関係 D84に破壊される。平面形 隅丸長方形を呈するか。規模(3.65m)×4.94m、遺構確認面からの深さ0.17m。壁 ほぼ垂直に立ち上がる。床 炉の周囲はローム掘り残しの直床で、他は貼床。部分的に硬化している。壁溝 廻らせていない。炉 西壁寄りに設ける。地床炉で、火床部は焼けている。ピット 1本検出。P1のみで、主柱穴か。覆土 2層に分層できた。遺物出土状態 高坏・小形壺・土玉は床面密着、他は覆土上層に目立つ。建て替え 認められなかった。

出土遺物(第65図)

出土総数は284点で、うち218点をトータル・ステーションで取り上げた。

1～10は土師器。1・2は高坏。1は全形がわかる資料。坏部は外稜を有し、比較的浅めの器形となる。脚部は長めで柱状を呈しており、内面は中実部分が目立ち、裾部は直線気味かつ「ハの字」状に開く。坏部外面はへラケズリ後ヘラナデ、内面はヘラミガキ。脚部外面～裾部にかけてへラケズリ後ヘラミガキ、内面はへラケズリ。坏部内面～外面全体にかけて、焼成後に赤彩を施す。2は坏部のみ残存。外稜を有し、外面はハケナデ後ヘラミガキ、内面はヘラミガキ。内外面とも赤彩を施している。

3は小形の壺か。口縁～頸部の残存。外面頸部にハケナデの痕跡があり、外面～口縁内面にかけて赤彩。

4は小形壺。外面～口縁内面はへラケズリ後ヘラミガキ、胴部内面はヘラナデを施す。

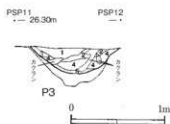
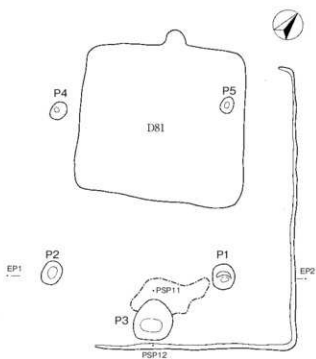
5は大埴。口縁端部を欠くが、胴下半までは器形復元ができる。外面～口縁内面はへラケズリ後でないヘラミガキ、胴部内面はヘラナデ。外面全体に赤彩を施している。

6～9は甕。6は口縁～胴中位の残存。外面～口縁内面までハケナデで、胴部内面はヘラナデ。外面全体にスガが付着する。7は口縁～胴下半の残存。外面～口縁内面までハケナデで、この後へラケズリと部分的にヘラナデを施し、内面はヘラナデ後、部分的にヘラミガキ。外面の胴上部にスガが付着。8は外面～口縁内面までハケナデで、この後胴部外面はへラケズリ。本例は胎土中に雲母・石英粒がやや目立つ。9は小形台付甕の台部。内外面ともハケナデ後、外面はへラケズリ。

10は瓶で、単孔式。胴部～底部が残存する。外面はハケナデ後、胴下半～底部付近はへラケズリ。内面はヘラミガキを施す。底部の中央に小孔(焼成前)を穿っている。

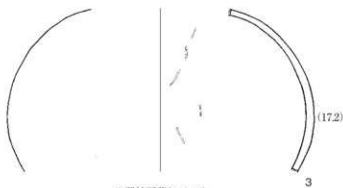
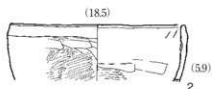
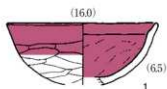
11は土玉。孔辺の調整は行わず、表面も基本的に無調整である。

12・13は鉄製品で、不明。ともに棒状で、断面は12が略円形、13は方形を呈する。



D82-P3土層説明

- 1 暗褐色土 径1~2mm 黄スコリア多、しまり強。
- 2 暗褐色土 径0.5mm 黄スコリア少量含、しまり強。
- 3 褐色土 ローム主体、暗褐色土少量混。しまり強。
- 4 暗褐色土 しまり強。
- 5 暗褐色土 ローム主体、しまり強。



*器外面荒れている



第64図 D82実測図

D93(第66図)

位置 G9-73Gを中心に、64・65・74Gにまたがる。重複関係 D92・P595に破壊される。平面形 隅丸長方形を呈する。規模 7.03m×6.16m。遺構確認面からの深さ0.49m。壁 ほぼ垂直であるが、上部の褐色土の部分で、多少ゆるやかに立ち上がる。床 ほぼ全面に直床であるが、部分的に貼床あり。P2-P3間に若干の硬化面がある。壁溝 廻らせていない。炉 中央部北壁寄りに2基併設。ともに地床炉で、北側の炉1はブロック状の火床部が認められたが、南側の炉2は明瞭な火床部が認められない。ピット 6本検出。うちP1~P4が主柱穴である。P5は円形で底面が平坦なピットであって、用途不明。P6は貯蔵穴と推定される。覆土 9層に分層でき、自然堆積である。上層は黒褐色土系。遺物出土状態 覆土上層に目立つが、1の壺は上層と下層のものが接合した。建て替え 認められなかった。

出土遺物(第67図)

出土総数は1056点で、うち523点をトータル・ステーションで取り上げた。

1~5は土師器。1は壺。複合口縁で、外面~口縁内面にかけてハケナデ調整。これは、口縁部はヨコ方向、頸部はタテ方向、内面ではヨコ方向となっている。そして、口縁内面はハケナデ後部分的にヘラミガキを行う。2は小形壺。外面はハケナデ後、ヘラミガキ。内外面とも赤彩を施す。4は粗製な壺か。頸部から「逆ハの字状」に立ち上がり、口縁は複合口縁であるが、下端は必ずしも平行になっておらず、雑な作りである。内外面ともヘラケズリ後ヘラナデ調整。

3~5は高坏。3は坏部のみが残存で、口縁端部を欠き、脚部はジョイント部分から欠損している。外稜を有し、比較的鋭角に立ち上がる。内外面ともハケナデ調整後、ヘラミガキを施すが、外面ではタテ方向のていねいなものに対し、内面では方向はややランダムである。そして、内外面とも赤彩を施す。4・5は同一個体であるが、接合しない。4は坏部である。外稜を有さず、やや内湾気味に立ち上がる。内外面ともヘラケズリ後ヘラナデ調整。5は脚部で、裾部を欠損する。上端は坏部の内面が残存しているため、ジョイントの方法は不明である。柱状で、かつ直線的であって、中実構造となっている。ヘラケズリ後ヘラミガキ調整で、赤彩を施している(4は肉眼では赤彩を確認できず)。

14は砥石。形状は不定形なもので、一部分が残存。二面にわたって使用面が認められる。

15・16は鉄製品で、棒状な部分の残存。図の配置は便宜的なもので、いかなるものかは不明。

D97(第68図)

位置 G9-85Gを中心に、86Gにまたがる。重複関係 P599を破壊するが、D98・M35に破壊される。平面形 方形を基調とする。規模 (3.33m)×5.40m。遺構確認面からの深さ0.12m。壁 浅く、攪乱もあるため、不明瞭。床 貼床。P3とP1の周辺に塊状の硬化面あり。壁溝 廻らせていない。炉 検出されず。ピット 4本検出。うちP1・P2・P4が主柱穴である。覆土 5層に分層できた。断面図の6層は、P599の覆土である。遺物出土状態 平面分布的には、いたって散漫で、垂直分布的に見ても、散漫なものがある。建て替え 認められなかった。

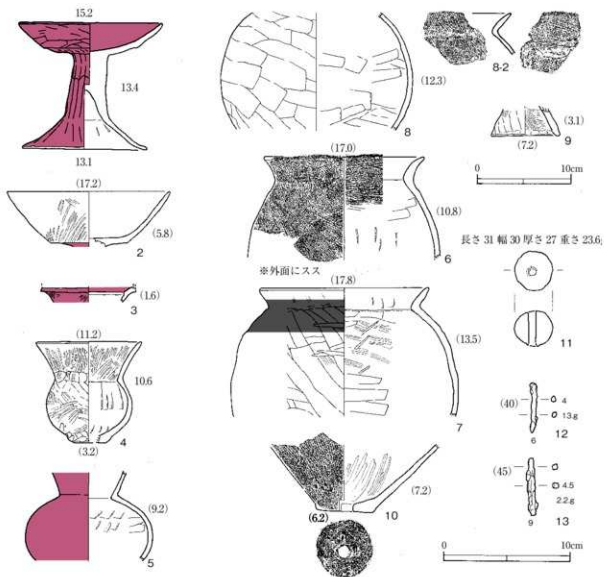
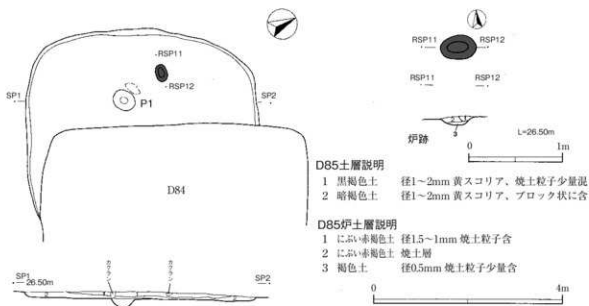
出土遺物(第68図)

出土総数は88点で、うち41点をトータル・ステーションで取り上げた。

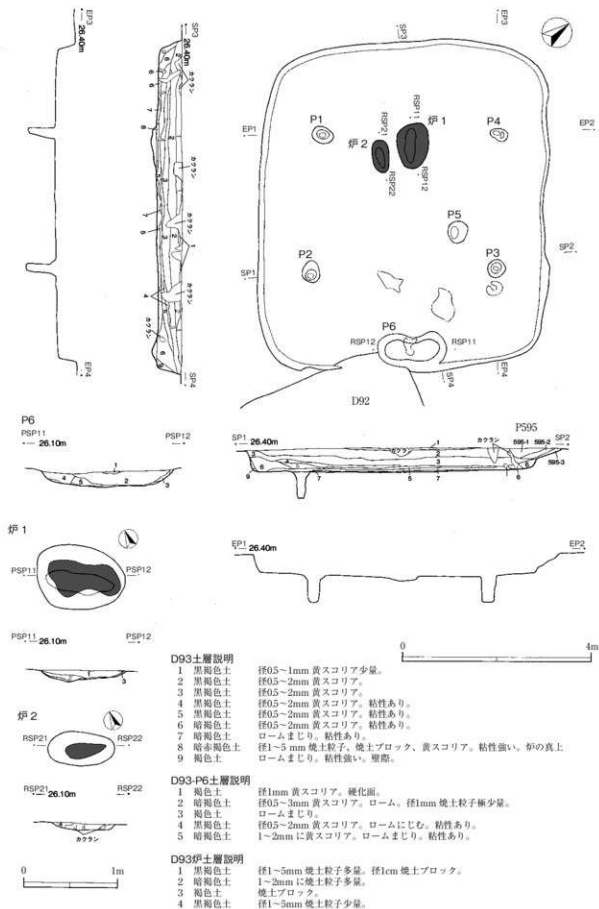
1~5は土師器。1・2は壺の口縁~頸部。ほぼ二個体とも同様の製法である。複合口縁で、外面~口縁内面はハケナデ調整で、内面は部分的にヘラミガキが入る。両者は床面上に倒位の状態で、かつ近接して出土したものである。転用品としての使用法も考えられるが、今回は壺として作図した。

3は甕。口縁~胴上部の残存。外面~口縁内面はハケナデ、胴部内面はヘラナデ調整を施すが、口縁内面はナデツケによりハケ目がやや不明瞭である。そして、口縁内面にスガが付着している。

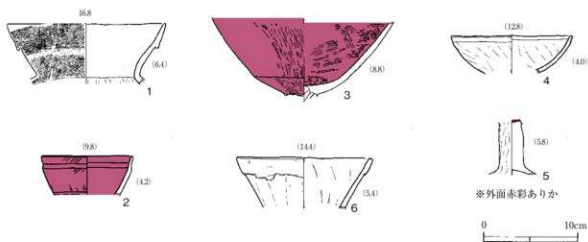
4・5は鉢。4はハケナデ後、ヘラケズリ→ヘラミガキを施す。随所にハケナデの痕跡が認められる。



第65図 D85実測図



第66図 D93実測図



長さ41 幅36 厚き35 重き15.5g



14



16



15



第67図 D93出土遺物

D99(第69図)

位置 G9-85Gを中心に、84Gにまたがる。重複関係 D98・101・M35の破壊を受ける。平面形隅丸方形を呈する。規模 6.35m × (5.32m)、遺構確認面からの深さ0.05m～0.15m。壁 残存高があまりないため、不明瞭。床 ソフトローム中に掘り込んだ直床。特に顕著な硬化面は見られない。壁溝廻らせていない。炉 検出されず。ピット 5本検出。うちP1・P2・P4・P5が支柱穴である。P6は粘土が検出され、粘土貯蔵庫か。P3は欠番である。覆土 5層に分層できた。暗褐色土系の土が主体。遺物出土状態 覆土下層、特に床面から0.10m浮いたレベルに集中。建て替え 認められなかった。

出土遺物(第69図)

出土総数は237点で、うち218点をトータル・ステーションで取り上げた。

1～9は土師器。1は高坏。小形有稜坏に台部が付いた形状で、本来的には須恵器を模倣したものである蓋然性が高い。外面～坏部内面はヘラケズリ後ヘラミガキで、赤彩を施す。極めて精製品である。

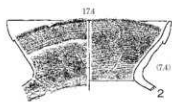
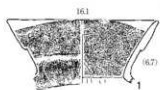
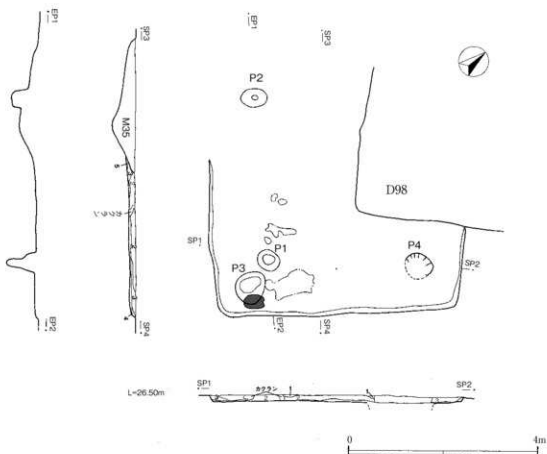
2・3は坏。ともに口縁はやや内傾気味に立ち上がり、半球形を呈するもの。調整は体部外面～内面がヘラケズリ後ヘラミガキであるが、内面は装飾的に放射状のヘラミガキを施しているものである。

4・5は甕で、同一個体。単口縁で内外面ナデ、胴部外面はヘラケズリ、内面はヘラナデ。

6・7は壺。6は小形壺で、口縁はナデ、胴部外面はヘラケズリ後ヘラミガキ、内面ヘラナデ。内面にスガが付着。7は短頸のもの。口縁はナデ、胴部外面はヘラケズリ後ヘラミガキ、内面はヘラナデ調整。

8は大形甕で、胴上半から上を欠く。単孔式。内外面ともにヘラケズリ後ヘラナデ調整であるが、内面はよりていねいに行い、下地のヘラケズリは、底部付近以外ではほとんど確認できない。

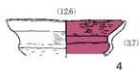
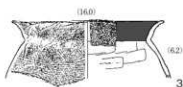
9は大形鉢。胴下半～底部を欠損する。口縁内外面ともナデ、胴部外面はナナメ方向を主とするヘラケズリ、内面はヘラナデ調整である。



1・2の出土状況

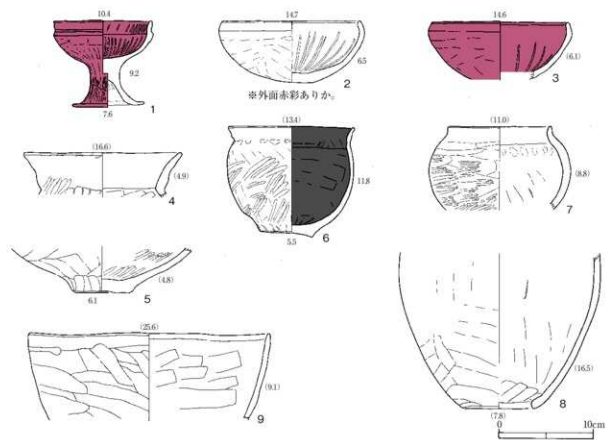
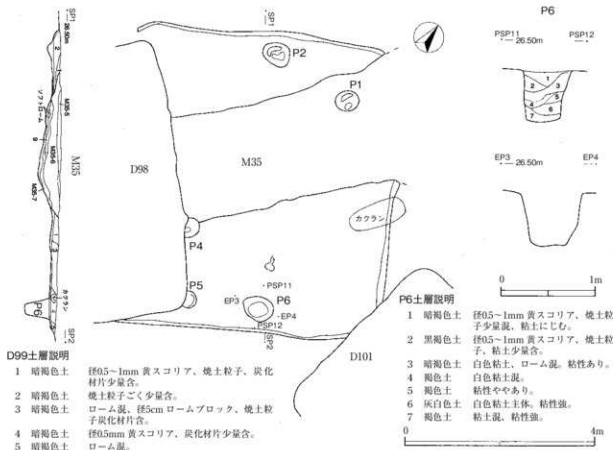
D97土層説明

- | | | |
|---|------|---------------------------|
| 1 | 暗褐色土 | 径1~3mm 黄スコリア多量含。 |
| 2 | 暗褐色土 | 径0.5~1mm 黄スコリア少量含。 |
| 3 | 暗褐色土 | 径0.5~1mm 黄スコリア少量含。ロームにじむ。 |
| 4 | 褐色土 | ローム混。 |
| 5 | 褐色土 | ローム混。床。 |

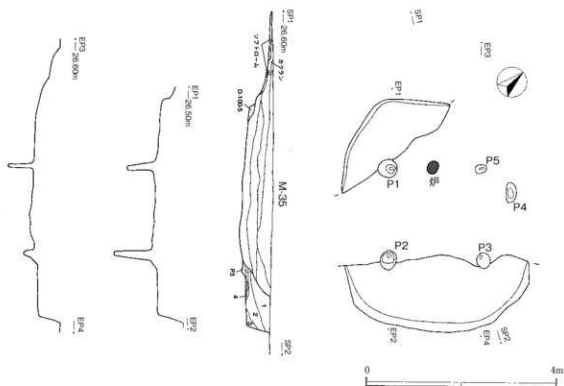


0 10cm

第68図 D97実測図

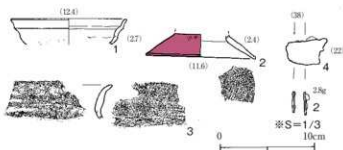


第69図 D99出土遺物



D100土層説明

- 1 暗褐色土 径1~2mm 黄スコリア多量含。
- 2 黒褐色土 径1~2mm 黄スコリア多量含。
- 3 暗褐色土 径0.5~1mm 黄スコリア、ローム混。
- 4 褐色土 ローム混。
- 5 褐色土 ローム混。



第70図 D100実測図

D100(第70図)

位置 G9-94Gで検出。重複関係 M35に破壊される。平面形 隅丸方形(かなり丸みのある)を呈する。規模 4.87m × (3.90m)、遺構確認面からの深さ0.54m。壁 検出部分では、ほぼ垂直に立ち上がる。床 貼床。検出部分では平坦で、よくしまっている。壁溝 廻らせていない。炉 中央部西壁寄り。地床炉で、炉底部分の残存であるが、赤化している。ピット 5本検出。うちP1~P3・P5が支柱穴である。P4はその他のピット。覆土 5層に分層できた。遺物出土状態 中央部分の大半をM35に破壊されているが、平面分布的には住居の東側を中心にややまとまりが見られた。垂直分布的には上層~下層まで万遍なく出土している。建て替え 認められなかった。

出土遺物(第70図)

出土総数は116点で、うち62点をトータル・ステーションで取り上げた。

1~3は土師器。1は鉢、2は高坏、3は甕口縁部。内外面ハケナデ。4は鉄製品で、鎌の類か。

D103(第71図)

位置 G9-95Gで検出。重複関係 D101に破壊される。平面形 長方形を呈する。規模 4.33m × 5.34m。遺構確認面からの深さ0.33 m。壁 垂直気味に立ち上がる。床 カマド部分と北東・南東コーナー部分が貼床。カマド前面一帯及び南壁側が硬化している。壁溝 廻らせていない。カマド 北壁の

北東コーナー寄り。袖部が残存し、火床部は平坦で、焼けている。煙道はあまり壁外へ張り出さない。ピット 1本検出。P1は深さが0.45mを測り、底面は平坦。貯蔵穴になるか。覆土 6層に分層でき、暗褐色土系。遺物出土状態 覆土中層と下層の計二回の廃棄行為が認められる。坏は中層と下層のものが接合する例が多く、平面的に広範囲に散乱するものも多い。11の壺は平面的には約2m離れた二つの廃棄ブロックで、垂直的には中層と下層のものが接合する。建て替え 認められなかった。

出土遺物(第72図)

出土総数は358点で、うち316点をトータル・ステーションで取り上げた。

1~14は土師器。1~9は坏。体部外面~内面はヘラケズリ後ヘラミガキを基本とする。器形的には口縁が直上する1、内傾気味の2~5、直上かつ内縁を有する6・7、外反する8、外反かつ内縁を有する9となる。6は内面に「暗紋」的な放射状のヘラミガキを施す。10は短頸の小形壺。11は壺で、頸部から上を欠く。12~14は甕。15は土師器甕を転用の砥石。溝状の使用面が見られる。16は土玉。

(2)ピット(第73図)

P62(第73図)

位置 G9-2G。重複関係 単独。長軸 ほぼ北西-南東。平面形 上部不整な円形、底部不整な楕円形。壁・底面 記録なし。規模 0.92×0.76mを測る。覆土 記録なし。遺物 土師器6点・石2点が出土。

P112(第73図)

位置 G9-41G。重複関係 単独。長軸 ほぼ北西-南東。平面形 上部不整楕円形、底部はテラスを有し、最低2基から最大4基の集合体。壁・底面 記録なし。規模 1.22m×1.07mを測る。覆土 記録なし。遺物 縄文式土器2点・土師器3点が出土。

P595(第73図)

位置 G9-74・75Gにまたがる。重複関係 D93を破壊する。長軸 ほぼ西-東。平面形 不整な隅丸長方形か。壁・底面 壁は比較的ゆるやかに立ち上がり、底面は凹凸目立つ。規模 1.84m×(0.44)m。検出面からの深さは0.32mを測る。覆土 3層に分層でき、黒褐色土系で、壁際は暗褐色土系。埋め戻し。遺物 縄文式土器9点・弥生式土器1点・土師器154点・石製品3点が出土。

P610(第73図)

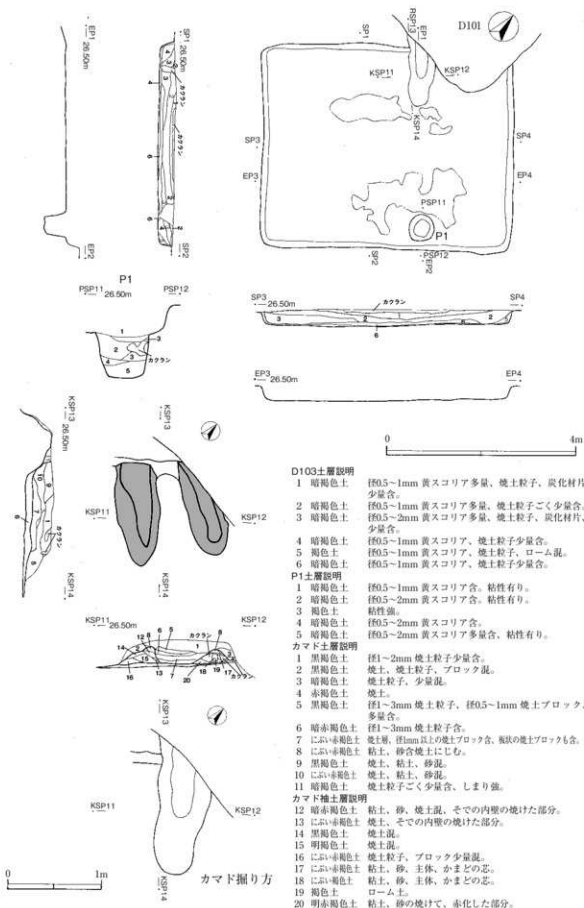
位置 G9-84G。重複関係 単独。長軸 円形なので、なし。平面形 不整な円形。壁・底面 壁は垂直気味で、底面は平坦。規模 0.52m×0.46m。検出面からの深さは0.52mを測る。覆土 4層に分層でき、中層以下は粘性あり。遺物 縄文式土器1点・土師器3点が出土。

(3)ピット出土遺物(第73図)

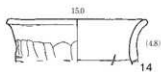
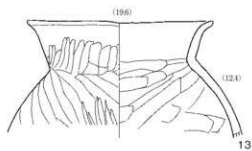
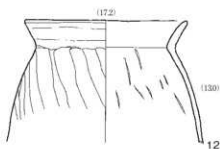
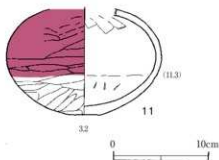
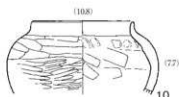
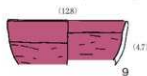
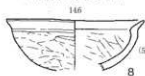
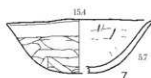
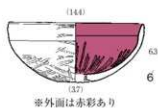
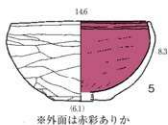
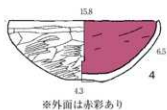
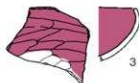
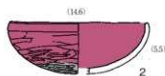
1~6はP595出土。1~3は坏。4は鉢。5は壺。器面の剥落が目立ち、特に器外面に顕著である。6は甕。7は瓶。二次焼成が目立つ。

(4)遺構外出土遺物(第74図)

7次3・8・22は甕。3は東海系の「S字状口縁甕」で、口縁端部を欠き、小片であるが唯一の出土例。9は台付甕の台部付近で、台部は剥落している。7次4・5・21は壺。21は有段口縁壺で、外面にはいいいなヘラミガキを施す。7次7は小形壺で、7次1は埴である。ともに内外面に赤彩。1次1・7次23~25は高坏。24の脚部は柱状で、内面は中実部分が目立つ。7次2は小形器台の脚部で、唯一の出土例。7次26・27はミニチュア土器。7次15は坏で、古墳後期の所産。7次28は砥石で、17は石製模造品の剣形品。1次2は「土製三輪玉」と呼称するべきか。三段状にくびれた形状で、貫通孔を有する。3は土玉で、4は「土彈」か。整った球状である。7次13は土製円板で、14は焼成粘土塊。



第71図 D103実測図



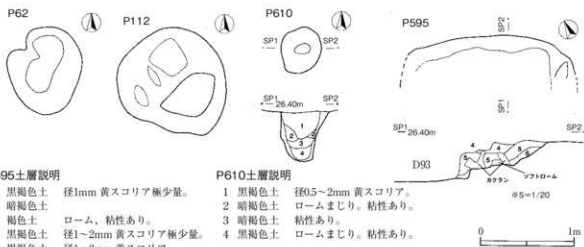
長さ 53 幅 41 厚さ 15 重さ 28.0g



長さ 38 幅 36 厚さ 32 重さ 28.4g



第72図 D103出土遺物

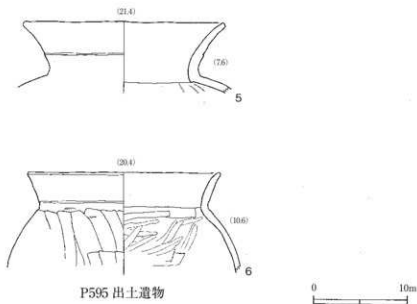
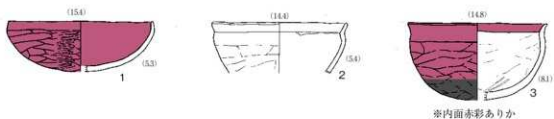


P595土層説明

- 1 黒褐色土 径1mm 黄スコリア極少量。
- 2 暗褐色土
- 3 褐色土 ローム、粘性あり。
- 4 黒褐色土 径1~2mm 黄スコリア極少量。
- 5 黒褐色土 径1~2mm 黄スコリア。
- 6 暗褐色土 径1~2mm 黄スコリア、ローム。

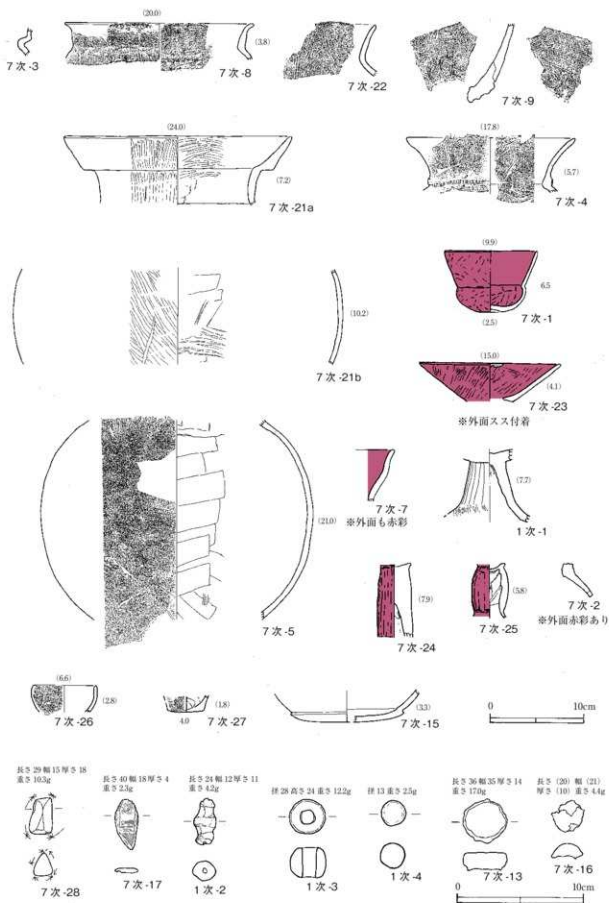
P610土層説明

- 1 黒褐色土 径0.5~2mm 黄スコリア。
- 2 暗褐色土 ロームまじり。粘性あり。
- 3 暗褐色土 粘性あり。
- 4 黒褐色土 ロームまじり。粘性あり。

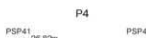
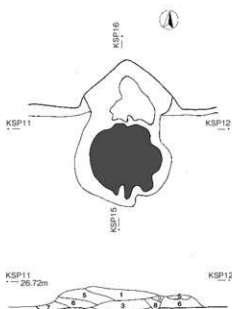
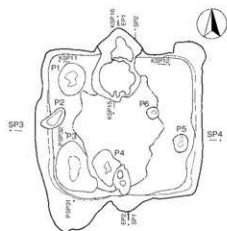


P595 出土遺物

第73図 ビット及び出土遺物実測図



第74図 遺構外出土遺物



D1土層説明

- | | |
|-------------------------|-----------------------|
| 1 褐色土 | しまり弱、黄色土粒子含む |
| 2 褐色土 | しまり弱、焼土ブロック炭化物を含む |
| 3 暗褐色土 | しまり弱、焼土粒子、炭化物ごく少量 |
| 4 暗褐色土 | しまり良い、黄色粒子、焼土粒子を均一に含む |
| 5 暗褐色土 | しまり良い、黄色粒子、ロームブロック |
| 6 暗褐色土 | 主として粘土(灰白色) |
| 7 黄褐色土を主として、褐色土混じる(崩落層) | |
| 8 暗褐色土 | しまり良い、ロームまじる |
| 9 暗褐色土 | しまり弱くもろい |

D1カマド土層説明

- | | |
|---------|------------------------|
| 1 暗褐色土 | 粘土、焼土粒、炭化物、しまり良い |
| 2 褐色土 | しまり弱、焼土粒子、粘土、炭化物 |
| 3 淡赤褐色土 | しまり弱、粘土を多量に含む |
| 4 褐色土 | しまり弱い、ロームまじり焼土粒子少量含まれる |
| 5 灰褐色土 | しまり良い、粒土を主とする |
| 6 褐色土 | しまりやや弱、粘土多量、焼土粒子含む |
| 7 褐色土 | しまり良い、粘土まじり |
| 8 淡赤褐色土 | しまり弱、焼土のため赤色 |

- | | |
|---------|------------------------|
| 9 灰褐色土 | しまり弱、粘土、褐色土、焼土粒子少量を含む |
| 10 灰褐色土 | ほとんど粘土、しまり良い |
| 11 灰褐色土 | 粘土を主、暗褐色土が混じる。焼土粒子少量含む |
| 16 黄褐色土 | しまり良い |

P3土層説明

- | | |
|-------|------------------------|
| 1 褐色土 | 黄色粒子多量含む |
| 2 褐色土 | 径1~3cm大のロームブロック、焼土粒子少量 |
| 3 褐色土 | 1,2よりしまり良い黄色粒子多量含む |

P4土層説明

- | | |
|--------|-----------------------------|
| 1 暗褐色土 | 炭化物多量含む、しまりよい |
| 2 褐色土 | 焼土粒子含む、黄褐色粒子ロームブロック含む、しまり良い |
| 3 褐色土 | 2に似るが焼土含まず |

第75図 D1実測図

6. 奈良・平安時代

本節を「奈良・平安時代」とした理由の一つは、遺構内の出土遺物群を見て、単一の時期を示す例が比較的少ないからである。竪穴住居跡は、土器類を中心とした出土遺物は多いが、時期的に見て、出土遺物の上限と下限に年代幅がある例も多く、実質84年間（長岡京遷都までならば74年間）の奈良時代に納まりきらないこともある。また、ピットの場合は、遺物の出土自体が僅少で、より一層時期の比定が困難である。従って、本文中の同じ節で両者を扱うには、時代的に大枠で括らざるをえなかった。

奈良・平安時代の遺構は、本調査を行った地点では、第4次調査区を除き、各次調査区で検出されている。浅間内遺跡における台地利用度が最大になった時代である。

(1) 竪穴住居跡 (第75図～第151図)

D1 (第75図)

位置 F11～10Gで検出。重複関係 M5に破壊される。平面形 やや不整気味な隅丸方形を呈する。規模 3.12m×3.42m。遺構確認面からの深さ0.40m。壁 北壁一帯と南東コーナー付近ではほぼ垂直であるが、他はゆるやかに立ち上がる。床 貼床で、やや凹凸に富み、カマド前面から中央一帯が硬化している。壁溝 カマド部分を除いて全周する。カマド 北壁の中央部。火床部と煙道部のみが残存。火床部は焼けている。袖部を含む本体は、廃屋直後に破壊されている。ピット 6本検出。うちP2は本跡に伴わない。P4は梯子穴と思われる。その他4本は何らかのピットではあるが、いずれも主柱穴とは見せせない。覆土 8層に分層できた。埋め戻しと思われる。6層はカマドの破壊が成因と思われ、粘土を多量に含む。遺物出土状態 土師器環は覆土中層を中心に、一部は上層及び床面付近に廃棄されている。個体によっては、中層と上層のもの、床面付近と中層のものが接合する。土師器皿は覆土中層に廃棄されている。須恵器甕・土師器甕・甕・小形甕は、覆土中層から一部上層にも廃棄されており、土師器小形甕はかなり散乱した状態のものが接合した。須恵器甕は覆土上層に廃棄されている例が目立つ。土製品・鉄製品は床面付近と覆土上層の二者に分かれ、1点のみ覆土下層が見られる。これらから、本跡は三回の遺物廃棄行為が認められた。建て替え 認められなかった。

出土遺物 (第76図・77図)

出土総数は766点で、うち646点をトータル・ステーションで取り上げた。

1は須恵器環。ロクロ整形で、体部下端はヘラケズリ。下総産。

2～7は土師器環。このうち2～4はロクロ整形で、体部下端は回転ヘラケズリ、底部は回転糸切り後、周縁に回転ヘラケズリを施す。5～7は同様の整形・調整を施すが、内面は最終調整にいいいなヘラミガキを施すもので、現状では確認できないが、黒色処理を行っていた可能性がある。

8は灰釉陶器皿。内面にハケ塗りによる軸掛けを施し、角高台である。黒笹14号産。

9・10は土師器皿。9は底部を欠くが、10は有高台で、低い高台を有するものである

11～14は須恵器甕。タタキ整形で、胴部外面に平行タタキ目、内面に当て具痕がつく。このうち、11～13は酸化炎焼成に近いもので、下総産。14は胎土に雲母を含み、常陸産。

15は土師器甕で、常総型甕。16はロクロ甕で、底部外面は回転糸切り。17は小形甕である。

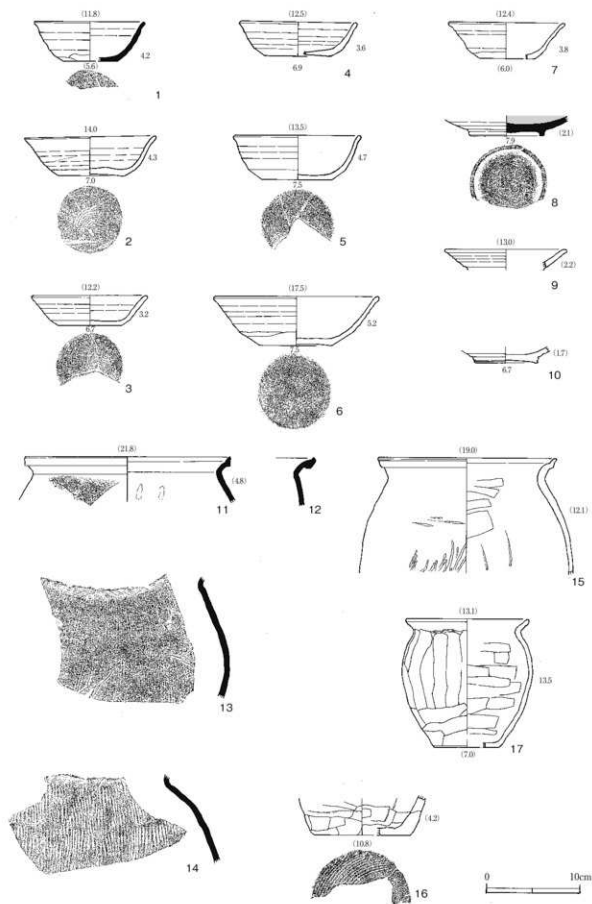
18・19は甕。18は須恵器で、五孔式のもの。19は土師器で、口縁下に突起を付す。

20～24は土師器環で、墨書土器。小片のため判読不能のものが多く。20・21は「吉」か。

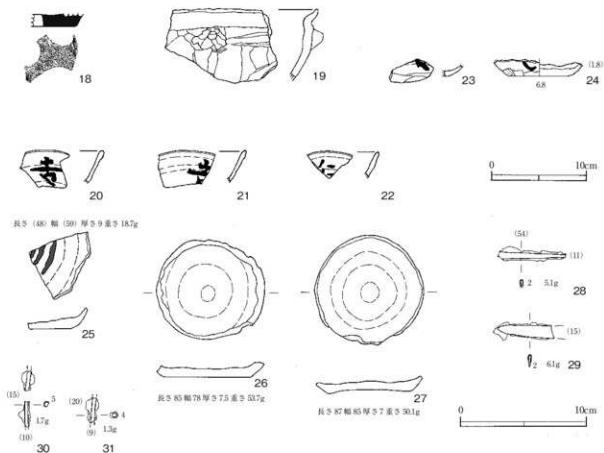
25は転用硯。須恵器環底部を再利用するもので、内面に使用面が見られる。

26・27は土製円盤(大形)。土師器環底部を再利用し、打ち欠き整形で円形にしたものである。

28～31は鉄製品。28・29は刀子で、各々茎部分と刃部の一部が残存する。30・31は棒状で、断面は方形を呈する。釘・鎌・紡錘車の紡軸などが該当すると思われるが、現状では不明鉄製品としておく。



第76図 D1出土遺物(1)



第77図 D1出土遺物(2)

D2(第78図)

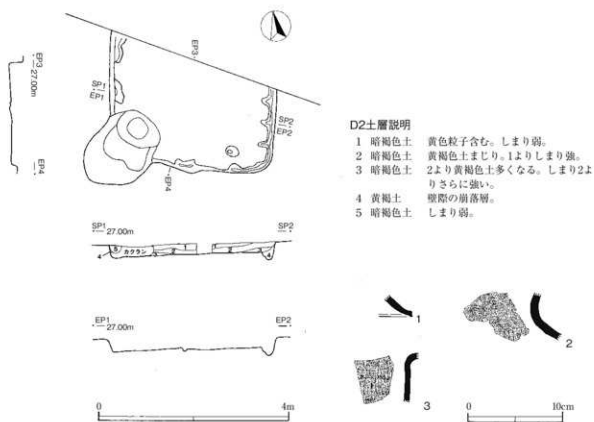
位置 F11-18Gで検出。重複関係 単独。平面形 方形を基調とする(一部調査区域外)。規模 3.58m×(2.40m)。遺構確認面からの深さ0.22m。壁 ほぼ垂直に立ち上がる。床 ロームを床面とした直床。ほぼ平坦で、壁際以外は硬くしまっている。壁溝 検出された部分では一応全周するが、東壁以外では断続的である。東壁のものは3個所程「間仕切状」の突出部を有する。カマド 調査部分からは検出されなかった。ピット 調査部分からは検出されなかった。覆土 4層に分層でき、自然堆積である。4層は壁の崩落土で、それ以外は暗褐色土系の土。遺物出土状態 89点の遺物は、特に廃棄ブロックを形成することはなく、全体から出土した。壁溝に相当するエリアからも出土しており、廃棄行為を認めるのであれば、廃屋後に上屋を解体してからであって、壁崩落土(4層)が堆積してからということになろう。建て替え 認められなかった。

出土遺物(第78図)

出土総数は128点で、うち89点をトータル・ステーションで取り上げた。

1は須恵器。脚部から裾部の一部が残存する。角度や端部の形状などから、高盤あたりが妥当かとも思われるが、類例がないため、脚部ないし台部を有する他の器種も考慮する意味で、不明としておく。

2・3は須恵器甕。2は頸部~胴上部片。口縁部が最大径となり、底部に向かって直線状に至るバケツ形の器形で、甕の可能性も否定できない。3も頸部~胴上部片。これは胴上半に最大径を持つ器形である。2・3ともタタキ整形で、胴部外面に平行タタキ目、内面に当て具痕がつく。そして、焼成は酸化炎焼成に近いもので、下総国内の窯で焼かれた製品である。



第78図 D2実測図

D5 (第79図)

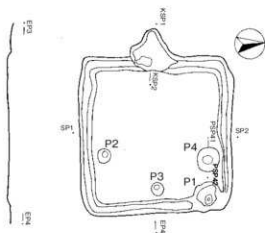
位置 H10-53Gで検出。重複関係 単独。平面形 方形を呈し、コーナーは角ばっており、規格的な形状。規模 3.28m×3.36m。遺構確認面からの深さ0.28m。壁 ほぼ垂直に立ち上がり、全体的にきっちりと掘られている。床 ロームを床とした直床。全体的に平坦で、硬くしまっており、特にカマド前面が顕著である。壁溝 カマド部分を除いて全周する。カマド 西壁の中央部。両袖部及び煙道部が残存するが、全体的に残存状態は良好ではない。火床部は焼けており、煙道部は壁を外側へ比較的大きく掘り込む。ピット 4本検出。うちP2及びP4が支柱穴である。北東コーナーのP1は貯蔵穴の可能性がある。P3は出入口の梯子穴で、壁に向かって傾斜がつけられている。覆土 6層に分層でき、全て埋め戻しと思われる。3層中に黄褐色土が主となり、しまりの良い部分が認められた。遺物出土状態 平面分布的には、床面中央付近・カマド内・南壁際の3個所にやや集中が見られた。建て替え 認められなかった。

出土遺物 (第79図)

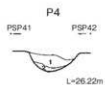
出土総数は37点で、うち22点をトータル・ステーションで取り上げた。

1~6は土師器。1は坏。非ロクロ整形で、体部外面~底部はハラケズリ、内面はハラミガキ。内外面とも焼成後赤彩。内面にウルシ状の付着物。2は埴か。非ロクロ整形で、体部外面はハラケズリ後ハラミガキ、内面はハラミガキ。3・5は甕。3は口縁片。口縁端部をつまみ上げる。5は胴上部。外面はハラケズリ後ナデ、内面はハラナデ。3・5とも胎土に雲母・長石含み、常総型甕。4・6は瓶。4はつまみ部が付けられた胴部片。ハラで面取りを行う。6は胴中位~底部。外面はハラケズリ後、ハラミガキで、底部付近はハラケズリのままである。内面はハラナデ。常総型甕と同じ胎土・器面調整を施す。

7は須恵器甕。タタキ整形で、外面に平行タタキ目が見られる。



L=26.32m



D5土層説明

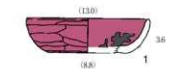
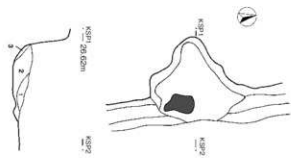
- 1 褐色土
 - 2 暗褐色土
 - 3 褐色土
 - 4 褐色土
 - 5 褐色土
- 黄褐色土がまだらにまじる。
黄褐色土まじりあう。部分的に黄褐色が主となりしまりよい。
径5cm 大以下のロームブロック含む。
ローム少量まじる。

D5-P4土層説明

- 1 褐色土
 - 2 黄褐色土
- ロームまじり。しまり弱い。
ローム土が主。しまり弱い。

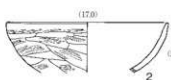
D5カマド土層説明

- 1 淡赤褐色土
 - 2 褐色土
 - 3 黄褐色土
- 焼土と粘土がまじりあう。
ロームブロック含む。焼土は見えない。
ローム主。



36

1



2



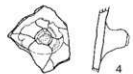
7



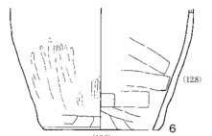
5



3



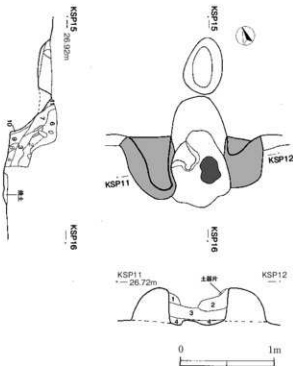
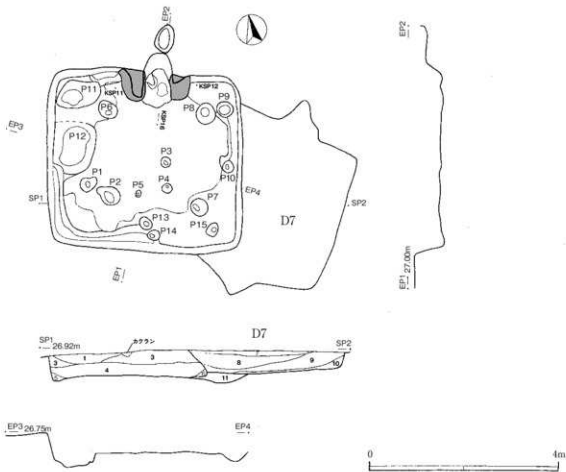
4



6



第79図 D5実測図



D6土層説明

- | | | |
|---|-------|--------------------|
| 1 | 褐色土 | 暗褐色土まじり。 |
| 3 | 褐色土 | |
| 4 | 褐色土 | ロームブロック、焼土ブロックまじり。 |
| 5 | 暗黄褐色土 | |
| 6 | 暗黄褐色土 | しまりよい。 |

D6カマド土層説明

- | | | |
|----|-------|------------------------|
| 1 | 灰褐色土 | 粘土主。 |
| 2 | 赤褐色土 | 焼土ブロック主。褐色土粘土まじり。 |
| 3 | 灰褐色土 | 粘土焼土まじり。炭化物多量。 |
| 4 | 灰褐色土 | |
| 6 | 灰褐色土 | 粘土を主として焼土ブロックを含む。 |
| 7 | 赤灰褐色土 | 焼土、粘土まじり。 |
| 8 | 黄褐色土 | ローム。 |
| 9 | 灰褐色土 | 粘土、褐色土まじり。粘土極少量。 |
| 10 | 黄褐色土 | 8に似る。 |
| 11 | 灰褐色土 | 粘土まじり。黄褐色土にじむ。焼土粒子極微量。 |

第80図 D6実測図

D6 (第80図)

位置 H10-64Gで検出。重複関係 D8を破壊し、D7に破壊される。平面形 隅丸方形(やや長方形気味)を呈する。規模 3.77m×4.16m。遺構確認面からの深さ0.53m。壁 ほぼ垂直に立ち上がる。床 貼床。カマド前面から柱穴穴を含む中央一帯が極めて硬化している。壁溝 カマド袖西脇、東壁の一部及び南西コーナー付近で部分的に検出。カマド 北壁の中央部やや東寄り。両袖部が残存し、火床部は浅く掘りくぼめられ、焼けている。ピット 15本検出。うちP2・P6～P8が柱穴穴である。P11・P12は貼床下から検出。覆土 6層に分層でき、壁際の5層を除いて、他は埋め戻しと思われる。遺物出土状態 土師器等は4層を中心に、覆土上層にも廃棄されており、個体によっては4層と上層のものが接合する。土師器等はカマド及び北東コーナー付近に廃棄が目立ち、4層・上層のいずれにも廃棄が認められた。須恵器等は南壁付近にややまとまって廃棄されており、覆土上層を中心とする。建て替え反復拡張の形跡が認められた。

出土遺物 (第81図・82図)

出土総数は、D7との重複関係から若干の混乱が生じたため、今回は一括遺物をカウントしないものとする。496点をトータル・ステーションで取り上げた。

1～13は土師器。1～6は坏。1はロクロ整形で、体部下端はヘラケズリ。2はロクロ整形で、体部下端は回転ヘラケズリ。体部に墨書文字あり。3はロクロ整形で、体部下端は回転ヘラケズリ。灯明皿として使用されており、口縁内面にスガが付着する。4はロクロ整形で、巻き上げ成形痕が見られる。体部下端は回転ヘラケズリ。5はロクロ整形で、体部下端は回転ヘラケズリ、この後部分的にヘラミガキを施す。内面はていねいなヘラミガキで、焼成に際して炭素吸着による黒色処理を施している。6は口縁～体部片。外面に墨書「△」状の記号が認められる。

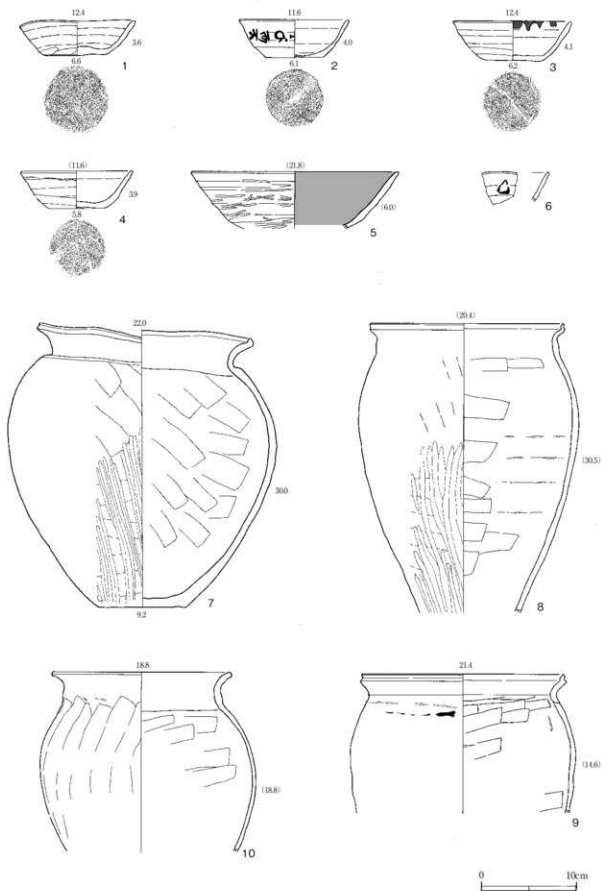
7～12は甕。7はやや歪みがあるが、最大径を胴中位に持つ。口縁端部はつまみ上げ、口縁内外面ともナデ、胴部はヘラケズリ後、中位～下半はヘラミガキ。内面はヘラナデ。本例は器面調整に常総型甕の影響が見られるが、胎土・焼成その他は在地のものとは変わらない。8は最大径を胴上部に持つ。口縁端部はつまみ上げ、口縁内外面ともナデ、胴部はヘラケズリ後、上半はナデ、中位～下半はヘラミガキ。内面はヘラナデ。常総型甕である。9は口縁端部つまみ上げ、口縁内外面ともナデ、胴部はヘラケズリ後、ナデ。内面はヘラナデ。外面の胴上部にスガが付着する。10は最大径を胴中位に持つ。口縁内外面ともナデ、胴部はヘラケズリ。内面はヘラナデ。11は最大径を胴中位に持ち、器壁は薄手。口縁内外面ともナデ、輪積み痕が見られる。胴部はヘラケズリで、中位まではタテ、下半はナメ方向を主とする。内面はヘラナデ。12は最大径を胴上部に持つ。プロポーシオンは異なるが、器面調整は11とほぼ同様で、本例も器壁は薄手である。ともにネガティブながら武蔵型甕の影響が見られるが、胎土・焼成その他は在地のものとは変わらない。13は小形甕。口縁端部はつまみ上げ、胴部はヘラケズリ、内面ヘラナデ。

14～17は須恵器。14は坏で、底部を欠く。ロクロ整形で、体部下端はヘラケズリ。下総産。

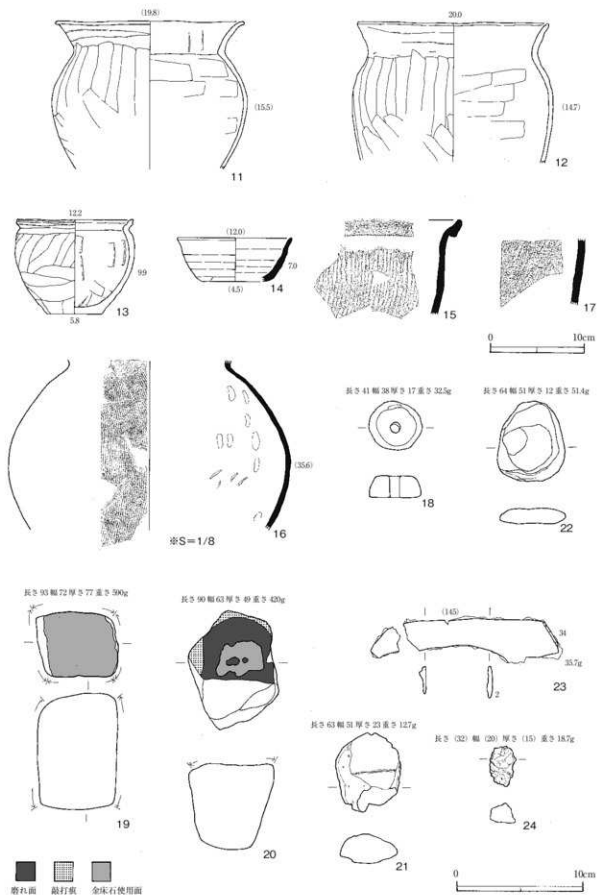
15～17は甕。15は最大径を口縁に持つ。タタキ整形で、外面に平行タタキ目が残る。下総産。16は頸部以上と胴下半以下を欠く。タタキ整形で、外面に平行タタキ目、内面に当て具痕が見られる。下総産。17は胴部片。タタキ整形で、外面に平行タタキ目。下総産。

18～21は石製品。18は石製紡錘車で、ほぼ完存品。19・20は金床石。19は柱状の石材を用い、側面は四面とも砥石として使用している。使用面は敲打痕と鉄錯の付着が見られる。20は不整角柱状の石材を用い、使用面は敲打整形後、上面を磨っており、平坦面を形成している。鉄錯の付着が見られる。21は砥石で、軽石製。23は片麻岩系の石材で、扁平なもの。節理面で薄く割られる。不明石製品。

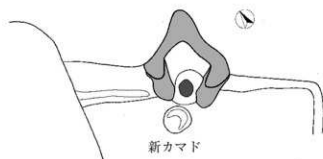
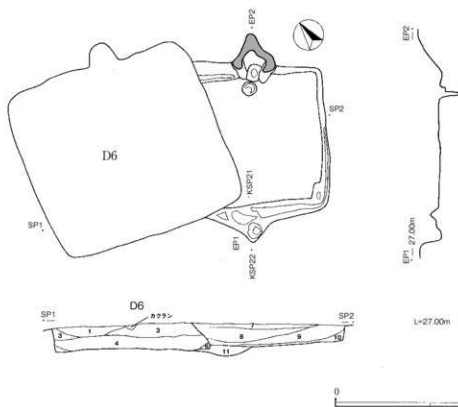
23は鉄製品で、鎌。右利き用である。24はスラグで、鉄の含有が多く、重い。



第81図 D6出土遺物(1)



第82図 D6出土遺物(2)

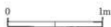
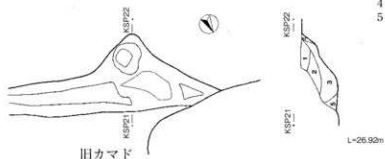


D7土層説明

- 7 暗褐色土 しまり弱い。
- 8 黒褐色土 黒い。
- 9 暗褐色土 黒褐色土、黄褐色土まじり。
- 10 暗黄褐色土 ロームまじり
- 11 暗黄褐色土 ロームまじり。床を形成する土。

D7カマド土層説明

- 1 暗褐色土 焼土ブロックまばら。
- 2 暗褐色土 焼土粒子含む。
- 3 褐色土 黄褐色土まじり。焼土含まず。
- 4 黄褐色土
- 5 黄褐色土 ローム



第83図 D7実測図

D7 (第83図)

位置 H10-64G で検出。重複関係 D6・D8 を破壊する。平面形 方形を呈する。規模 (3.20m) × 3.26m。遺構確認面からの深さ0.43m。壁 ほぼ垂直に立ち上がる。床 ロームの直床。平坦で、特に硬化した部分はない。壁溝 南壁の旧カマドから南東コーナー及び東壁中央までは廻らす。カマド 新旧2基。旧カマドは南壁中央部。煙道部と掘り方のみ残存する。新カマドは北壁の中央部。両袖部が残存し、煙道部は壁外を大きく掘り込んでおり、火床部は焼けている。ピット 1本検出。三日月形のテラスを有し、深い。その他、南東コーナーに浅い掘り込みあり。覆土 5層に分層できた。遺物出土状態 遺物の大半がカマド及びカマド周辺に廃棄されている。土師器等は覆土中層を中心に、一部床面付近と上層にも廃棄が認められる。須恵器類・甕はカマドを中心に廃棄が行われ、垂直分布的には覆土中層がほとんどである。建て替え 認められなかった。

出土遺物 (第84図・85図)

出土総数は350点で、うち234点をトータル・ステーションで取り上げた。

1～8は土師器環。1はロクロ整形で、体部下端は回転ヘラケズリ。底部は回転糸切り後、周縁は回転ヘラケズリ。全体に粗雑で、歪みが目立ち、口縁は波打っている。

2はロクロ整形で、体部下端は回転ヘラケズリ。底部は回転糸切り後、周縁は回転ヘラケズリ。外面に巻き上げ成形痕が見られる。全体に粗雑で、歪みが目立ち、口縁は波打っている。

3はロクロ整形で、体部下端は回転ヘラケズリ。底部は回転糸切り後、周縁は回転ヘラケズリ。全体に粗雑で、歪みが目立ち、口縁は波打っている。

4はロクロ整形で、体部下端は回転ヘラケズリ。底部は回転糸切り後、周縁は回転ヘラケズリ。外面に巻き上げ成形痕が見られる。本例は体部下端のヘラケズリが雑である。

5はロクロ整形で、体部下端は回転ヘラケズリ。底部は回転糸切り後、周縁は回転ヘラケズリ。

6はロクロ整形で、体部下端は回転ヘラケズリ。底部は回転糸切り後、周縁は回転ヘラケズリ。全体に比較的ていねいな作りである。図化した8点中、突出した観がある。

7はロクロ整形で、体部下端は回転ヘラケズリ。底部は回転糸切り後、周縁は回転ヘラケズリ。

8はロクロ整形で、体部下端は回転ヘラケズリ。底部は回転糸切り後、周縁は回転ヘラケズリ。

9は須恵器環で、大形品。ロクロ整形で、体部下端は回転ヘラケズリ。底部は回転糸切り後、周縁を回転ヘラケズリ。本例は酸化炎焼成に近いもので、土師器との峻別が困難である。下総産。

10は土師器環で、大形品。一見すると、9に近似している。ロクロ整形で、体部の下半はヘラケズリ後、部分的にヘラミガキを施す。底部は回転糸切り後、周縁は回転ヘラケズリ。

11は高台付環で、底部～高台部の残存。付け高台で、断面形は「三日月高台」風である。底部内面はヘラミガキを施す。本例は高台の形状に灰軸陶器の影響が認められる。

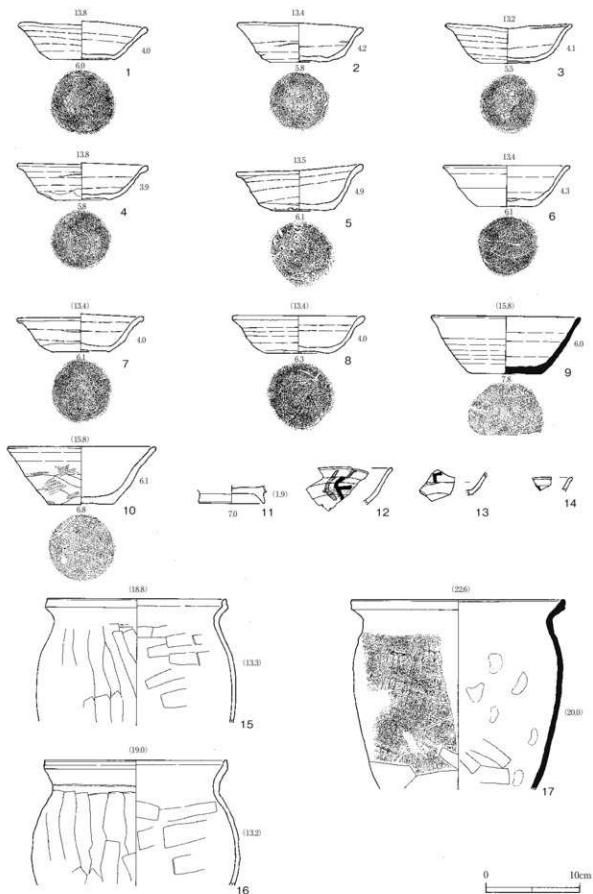
12～14は土師器環で、口縁部及び体部外面に墨書が見られるものを集めた。いずれも判読不能。

15・16は土師器甕。15は胴下半以下を欠く。口縁端部はつまみ上げ、さらに内側に屈曲気味となる。口縁内外面ともナデ、胴部外面ヘラケズリ、内面はヘラナデ。16は最大径を胴中位に持つ。口縁端部はつまみ上げ、口縁内外面ともナデ、胴部外面ヘラケズリ、内面はヘラナデ調整。

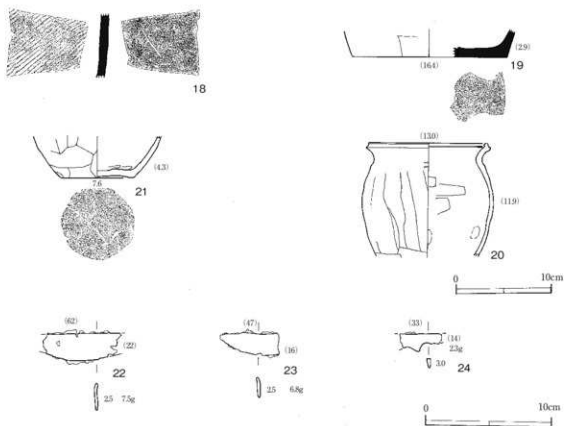
17～19は須恵器。17は甕で、胴下半以下を欠く。タタキ整形で、胴部外面に格子状タタキ目、胴下半付近ではヘラケズリを施し、内面はあて具痕が見られ、下半ではヘラナデを施している。18は胴部片。外面は平行タタキ目。19は甕で、底部片。五孔式である。

20は土師器小形甕。15を小形にしたもので、器形・器面調整もほぼ同様である。

21～24は鉄製品。21・22は手鎌で、24は刀子である。いずれも欠損部位が多く、錆も目立つ。



第84図 D7出土遺物(1)



第85図 D7出土遺物(2)

D11(第86図)

位置 G10-94Gで検出。重複関係 単独か。平面形 攪乱による破壊が著しく、不明。規模 同左。壁 攪乱により、ほぼ完全に消失。床 約2.4m×4.8mの範囲が土間状に硬化している。壁溝 調査部分からは検出されず。カマド・炉 火床部が2箇所検出され、極めて確証に乏しいが、現状では北側をカマド、南側を炉と捉えておきたい。北側のものは火床部が焼けて硬化している。南側のものは地床炉と思われる。ピット 10本検出されたが、支柱穴の決め手を欠く。覆土 褐色土が、最大層厚0.1m程残存。遺物出土状態 全て一括扱いなので不明。建て替え 認められなかった。

出土遺物(第86図)

出土総数は240点で、その全てを一括扱いとし、トータル・ステーションで取り上げた遺物はない。

1~4は須恵器。1は蓋で口縁片。ロクロ整形で、口縁端部はほぼ垂直に屈曲する。

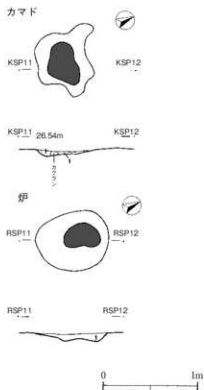
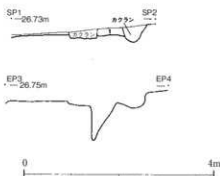
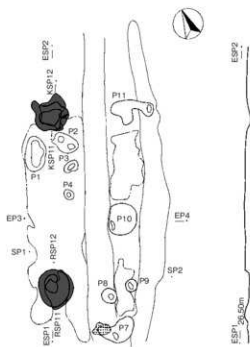
2は坏で、体部~底部が残存。ロクロ整形で、底部切り離しは静止ヘラ切りによる。胎土に雲母・石英などを含み、常陸産である。

3・4は甕。3は胴上部(肩部)片。タタキ整形で、外面には平行タタキ目がみられる。胎土に雲母・石英などを含み、常陸産である。4は胴部片。タタキ整形で、外面には平行タタキ目、内面には当て具痕が見られる。産地及び窯跡は不明である。

5・6は土師器坏。5は底部を欠く。非ロクロ整形で、半球形の器形となる。体部はヘラケズリ、内面はヘラミガキで、黒色処理を施す。6は底部を欠く。ロクロ整形で、体部下端はヘラケズリ。

7は土製品で、転用硯。約半分が残存する。須恵器高台付坏を再利用し、高台部分は磨っており、すわりを良くした上で、内面を使用面としている。ロクロ目が磨れる程よく使い込んでいる。

8は不明鉄製品。棒状で、断面は略円形。図の配置は便宜的なもので、いかなる製品かは不明である。



D11土層説明

1 褐色土

D11カマド

1 暗褐色土

ローム焼土粒子まじり、ロームブロックも所々に含む。しまりやや弱。

D11炉

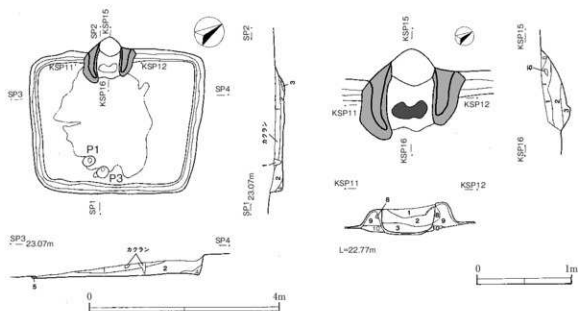
1 暗褐色土

焼土粒子含む。黄褐色粒子多く含む。しまりやや弱



長さ101幅53厚さ14重さ72.4g

第86図 D11実測図

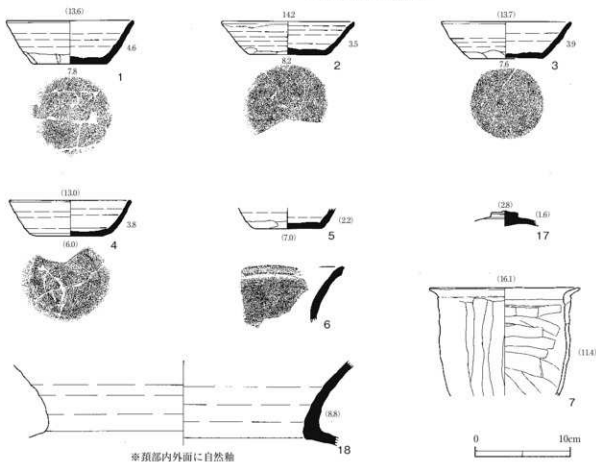


D12土層説明

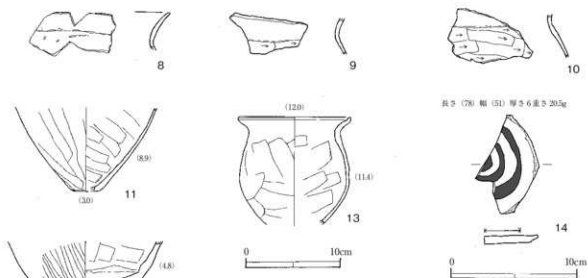
- 1 暗褐色土 黄色粒子を多量含む。カマドの近くでは粘土がまじる。
- 2 暗褐色土 黄色粒子少量まじる。
- 3 暗褐色土 カマドの影響で焼土粒子や粘土がまじる。
- 4 暗褐色土 黄褐色土（ローム）まじりあう。
- 5 暗褐色土 2よりやや茶色味強い。しまり弱。

D12カマド土層説明

- 1 暗褐色土 焼土粒子少量含む。
 - 2 暗赤褐色土 焼土と暗褐色土とがまじりあう。
 - 3 黒褐色土 炭、灰を含むため、黒色味強い。焼土粒子少量含む。
 - 6 暗褐色土 焼土粒子の量がきわめて少なくなる。粘土の量も少ない。
- 8, 9, 10, はカマド構築上。



第87図 D12実測図



第88図 D12出土遺物(2)

D12(第87図)

位置 G9-24Gで検出。重複関係 単独。平面形 隅丸長方形(やや台形気味)を呈する。規模 3.05m×3.69m。遺構確認面からの深さ0.28m。壁 ほぼ垂直に立ち上がる。床 貼床で、カマド前面から入口部分にかけての中央付近一帯が硬化している。壁溝 カマド部分を除いて全周する。カマド 北壁の中央部。両袖部が残存し、火床部は焼けている。ピット 2本検出。南東壁の中央壁際で検出し、いずれも主柱穴ではない。出入口施設に係るものと思われる。覆土 4層に分層できた。遺物出土状態 カマドを中心とするまとまりと、床面中央付近の2個所に廃棄されており、これ以外ではごく少量であって、混入や流入の可能性がある。建て替え 認められなかった。

出土遺物(第87図・88図)

出土総数は261点で、うち2点をトータル・ステーションで取り上げた。

1～6・17・18は須恵器。1～5は坏。1はロクロ整形で、体部下端はヘラケズリ、底部は静止ヘラ切りか。胎土に雲母・石英含み、常陸産。2はロクロ整形で、体部下端はヘラケズリ、底部は切り離した後、ヘラケズリ。胎土に雲母・石英などを含み、常陸産。3はロクロ整形で、体部下端はヘラケズリ、底部は静止ヘラ切りか。胎土に雲母・石英などを含み、常陸産。4はロクロ整形で、体部下端は回転ヘラケズリ、底部は回転糸切り後、周縁は回転ヘラケズリ。5は体部～底部。ロクロ整形で、体部下端はヘラケズリを施している。胎土に雲母などを含み、常陸産。

17は蓋で、つまみ部～天井部が残存。ロクロ整形で、天井部は回転ヘラケズリ。

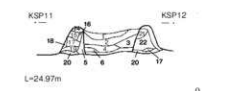
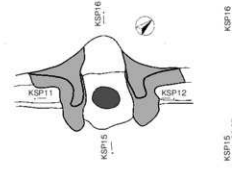
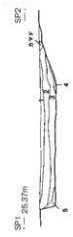
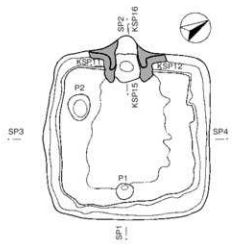
6・18は甕。6は口縁～頸部片。複合口縁で、胎土に雲母・石英などを含む。常陸産。18は頸部～胴上部(肩部)の一部。タタキ整形後、回転台などで仕上げている。

7～13は土師器。7・13は小形甕。ともに底部付近を欠く。器面調整は、基本的に口縁内外面ともナデ、胴部外面ヘラケズリ、内面はヘラナデである。7は乾燥時の収縮による器面の凹凸が目立つ。

8～11は器壁が薄手で、胎土に黒色粒子と赤色粒子を含み、乾燥が進んだ段階での、刀子などによるケズリを特徴とする、武蔵型甕である。胴部は倒卵形を呈し、口縁は段を有さずにそのまま外反する。

12は甕。外面はヘラケズリ後ヘラミガキ、内面はヘラナデを施す。常総型甕である。

14は土製品で、転用碗。須恵器坏の底部内面を再利用したもの。

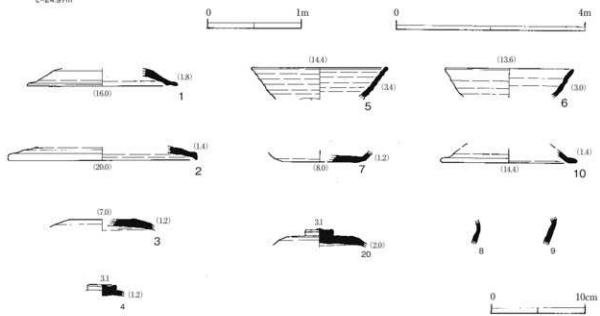


D13土層説明

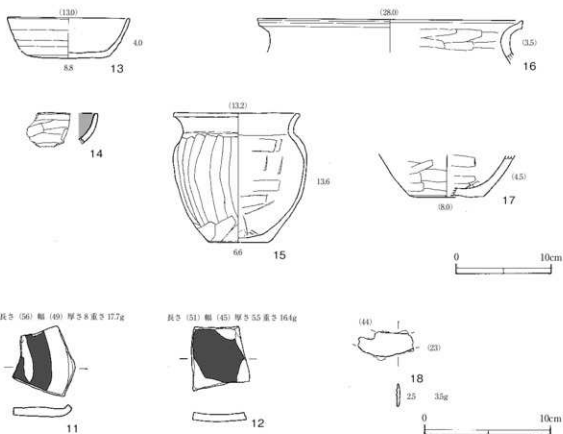
- | | | |
|---|------|------------------------------|
| 1 | 暗褐色土 | 黒色味あり。しまり弱い |
| 2 | 暗褐色土 | 焼土粒子、炭化材、径1cm ロームブロック黄色粒子含む。 |
| 3 | 暗褐色土 | 黄色粒子含む。 |
| 4 | 暗褐色土 | 粘土、焼土多量。 |
| 5 | 暗褐色土 | 黄褐色土混。崩落層。 |
| 6 | 黄褐色土 | 暗褐色土混。 |

D13カマド土層説明

- | | | |
|----|--------|-------------------------|
| 1 | 暗褐色土 | 焼土粒子、粘土混 |
| 2 | 暗褐色土 | 1に似るか焼土量多く赤色味帯びる |
| 3 | 暗褐色土 | 黄褐色土、焼土粒子、粘土混 |
| 4 | 暗赤褐色土 | 焼土主体、暗黄褐色土混 |
| 5 | 黒灰色土 | 焼土粒子含む、灰層であろう |
| 6 | 黄褐色土 | 焼けて赤色化した床面。しまり弱い。 |
| 7 | 暗褐色土 | 焼土粒子、焼土ブロック多量。カマド下外 |
| 10 | 灰褐色土 | 褐色土、粘土、焼土混。 |
| 12 | 灰褐色土 | 粘土全体、焼土粒子、暗褐色土混。 |
| 13 | 暗褐色土 | 焼土わずか |
| 14 | にぶい褐色土 | 砂質粘土。黒褐色土混。しまりよい |
| 15 | 暗赤褐色土 | 砂質粘土が焼けている。しまりややよい。 |
| 16 | 暗赤褐色土 | 15に似るがしまりなく、崩れやすい |
| 17 | にぶい褐色土 | 砂質粘土。カマドの芯になるところ。しまりよい。 |
| 18 | 褐色土 | 砂質粘土混。しまり弱い。 |
| 19 | 褐色土 | しまりやや弱い |
| 20 | 褐色土 | しまりやや弱い |
| 21 | 暗褐色土 | 焼土粒子、砂質粘土混。しまりよい |
| 22 | 褐色土 | 21より砂質粘土の量より多い。 |



第89図 D13実測図



第90図 D13出土遺物(2)

D13(第89図)

位置 G9-32Gを中心に、22G・33Gにまたがる。重複関係 M13と重複する。平面形 隅丸方形を呈する。規模 3.54m×3.56m、遺構確認面からの深さ0.49m。壁 ほぼ垂直に立ち上がる。床 貼床で、カマド前面から入口部分にかけての中央一帯が硬化している。壁溝 カマド部分を除いて全周する。全体に幅広で、かつ幅も一定ではない。カマド 北西壁の中央部。両袖部が残存し、火床部は焼けている。ピット 2本検出。南西及び南東壁際で検出し、いずれも主柱穴ではない。このうち、南東壁際のもの は出入口に関係するものと思われる。覆土 6層に分層できた。遺物出土状態 64点の遺物は、カマドを中心とするまとまりと、床面中央付近の2個所に廃棄されたものがほとんどで、他はごく散漫である。周溝部分の上からも遺物が出土することから、遺物の廃棄は、上屋を解体して壁土を壊してから行為と思われる。建て替え 認められなかった。

出土遺物(第89図・90図)

出土総数は1351点で、うち64点をトータル・ステーションで取り上げた。

1～10・20は須恵器。1～4・20は蓋で、胎土に雲母などを含み、常陸産。1は天井部が一部残存するものの、それより上を欠く。ロクロ整形で、口縁内面にかえりを有する、「かえり蓋」である。2は口縁部、3は天井部、4はつまみ部の残存。20のつまみは扁平な擬宝珠状を呈する。

5～7は坏。胎土に雲母含み、常陸産。5・6とも底部を欠く。ロクロ整形で、体部下端はヘラケズリ。8は壺か。外面に自然軸。9は長頸壺の胴部で、湖西産。10は脚及び台を有する器種の裾部。常陸産。

13～17は土師器。13は坏。ロクロ整形で、いわゆる箱型坏。14は坏で、非ロクロ整形。内面は黒色処理。15は小形甕で、完存品。16は口縁端部をつまみ上げる。常陸製甕。17は甕の胴下半～底部。

11・12は土製品。11は転用甕で、12は転用砥石である。18は鉄製品で、刀子ないしは手鎌。

D17(第91図)

位置 G9-11Gを中心に、21Gにまたがる。重複関係 単独。平面形 隅丸長方形(ほとんど方形に近い)を呈する。規模 4.92m×5.62m。遺構確認面からの深さ0.36m。壁 ほぼ垂直に立ち上がる。床 貼床で、カマド前面から入口にかけての帯が硬化している。壁溝 南西及び南東コーナー、カマド部分を除いて、他は廻らす。カマド 西壁の中央部。両袖部が残存する。煙道部は壁外へやや大きく掘り込まれる。両袖部はロームを掘り残して基底部する。火床部は掘り方を有し、これを埋めて構築されており、焼けている。ピット 5本検出。うちP1～P4が主柱穴である。P5は出入口に伴うものであって、周溝に連結する形で掘り込まれており、壁に向かって傾斜がつく。覆土 8層に分層できた。遺物出土状態 Na 遺物で取り上げたものの大半はカマドに廃棄されていた。この他は比較的散漫な分布であるが、下から周溝及びピットを検出した例があり、一連の廃棄行為は、廃屋後に上屋を解体した後と捉えられる。建て替え 認められなかった。

出土遺物(第92図)

出土総数は816点で、うち145点をトータル・ステーションで取り上げた。

1～7は須恵器。1～3は蓋で、常陸産。1・2はロクロ整形で、天井部外面はヘラケズリ、口縁内面にかえりを有する「かえり蓋」である。3はつまみ部で、擬宝珠状を呈する。

4～6は坏で、4・6は常陸産。4はロクロ整形で、体部下端～底部は回転ヘラケズリ。底部外面及び見込み面に線刻「×」あり。5は体部～底部の残存。ロクロ整形で、体部下端は回転ヘラケズリ。内面はよく磨れている。6の整形・調整は4と同様。7は甕の胴部片。

8～14は土師器。8～10は坏で、非ロクロ整形。8・9は内外面に赤彩を施す。10は内面に暗紋を施している。11～14は甕。11は在地のもので、12～14は武蔵型甕。15は手捏ね土器で、底部に木葉痕。

16は土製品で、転用硯。須恵器甕の胴部片を再利用し、内面を使用面とする。

17・18は鉄製品。17は手鎌。18は棒状で、断面は略角状の不明鉄製品。

D18(第93図)

位置 G9-11Gを中心に、21Gにまたがる。重複関係 M27に破壊される。平面形 隅丸方形を呈する。規模 2.69×2.74m。遺構確認面からの深さ0.39m。壁 ほぼ垂直に立ち上がる。床 貼床で、入口部から中央帯が硬化している。壁溝 カマド左袖脇を除いて全周する。カマド 南西コーナー。両袖部が残存する。住居の掘り方の状態のまま、粘土を主とした構築土で築いている。火床部は袖部などを構築してから、掘り方を埋めて築いたもので、焼けている。ピット 3本検出。床面中央のP1が主柱穴である。南東壁際のは壁側に傾斜がつけられており、出入口に伴う。覆土 5層に分層できた。遺物出土状態 平面分布的には、溝の破壊部分を除き、全体から万遍無く出土した。しかし、数の割には小片が多く、かつ復元回収率は極めて低かった。このため、全体がうかがえる個体は一つもない。建て替え 認められなかった。

出土遺物(第93図)

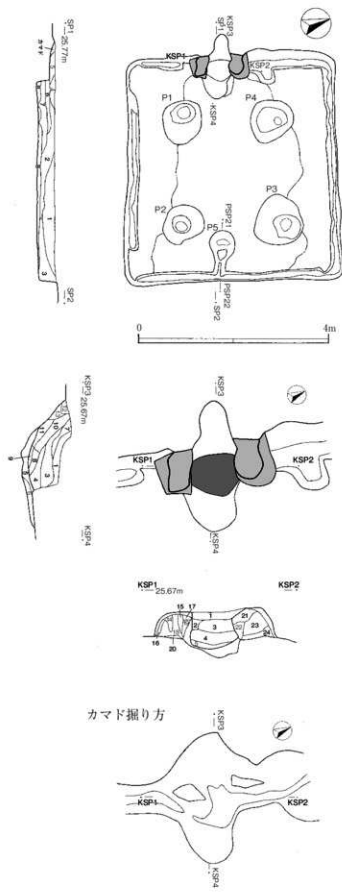
出土総数は533点で、うち154点をトータル・ステーションで取り上げた。

1～4は須恵器。1・2は坏。1は口縁～体部の残存。ロクロ整形で、口唇部に段を有する。2は体部～底部の残存。ロクロ整形で、体部下端ヘラケズリ。常陸産。3・4は甕。3は口縁片で、胎土に雲母などを含み、常陸産。4は胴上部(肩部)片で、外面は平行タタキ目が見られる。

5～10は土師器。5は蓋で、ロクロ整形。6～10は甕。8は武蔵型甕の底部で、9・10は小形甕。

11・12は土製品。11は転用硯で、須恵器坏の底部を再利用する。12は支脚で、精製品である。

13は鉄製品で、鋸が目立つが、刀子になる可能性がある。棒状部分の断面は方形を呈する。



D17土層説明

- 1 暗黄褐色土 径3cm以下のロームブロック多量。
- 2 褐色土 径1～2cm以下のロームブロックまばら。
- 3 暗褐色土 径1cm以下のロームブロック、黒色土混。
- 4 カクランか。白色粘土多量。
- 5 暗褐色土 焼土と粘土極微量。
- 6 褐色土 径3cmロームブロック、白色粘土
- 7 褐色土 径3cm以下ロームブロックまばら、黒色土
- 8 暗黄褐色土 床の一部。しまりよい。

D17カマド土層説明

- 1 暗褐色土 黄灰色の砂質粘土少量。
- 2 淡赤褐色土 カマド内壁の崩落した部分。焼けて赤色化した粘土。
- 3 灰褐色土 粘土と焼土を含む。しまり弱
- 4 赤褐色土 焼土多量。下部に焼土ブロック。しまり弱。
- 5 暗褐色土 焼土少量、黄褐色土含む。しまり弱。
- 6 暗褐色土 黄褐色土含む。しまりよい
- 7 灰褐色土 粘土主体。
- 8 淡赤褐色土 焼土まじり。しまり弱。
- 9 赤褐色土 焼土ブロックの層(火床)
- 10 暗褐色土 焼土少量。しまり弱い
- 11 暗褐色土 焼土微量。しまり弱い
- 12 黒色土 粘土まじり。
- 13 灰褐色土 粘土主体層。煙道をつくっている
- 14 灰褐色土 粘土まじり。しまりよい
- 15 赤褐色土 焼けた粘土。カマド内壁。
- 16 灰褐色土 粘土まじり。しまり弱。
- 17 暗褐色土 焼土少量
- 18 灰褐色土 砂質粘土主体。そでの中心部位。やや黄色味あり、土も少量まじる。しまりよい。
- 19 暗褐色土 焼土多量。赤色味帯びる。しまり弱くボロボロ。
- 20 暗褐色土 粘土、黄褐色土混。カマドの基盤。
- 21 暗褐色土 粘土、焼土みだら。
- 22 灰褐色土 炭化物、焼土混。ピンク～紫色帯びる。しまりよい。
- 23 灰褐色土 粘土。18と同質。しまりよい。
- 24 灰褐色土 粘土混。しまりよい。

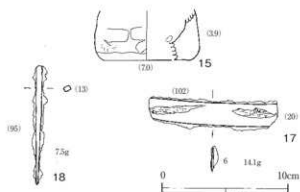
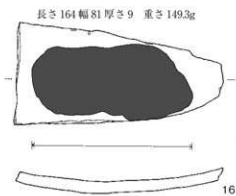
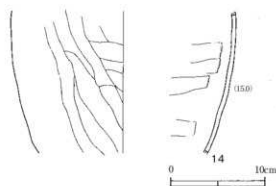
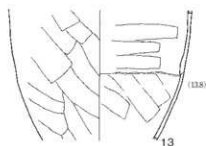
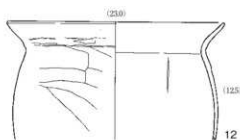
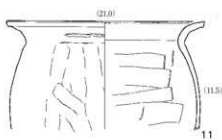
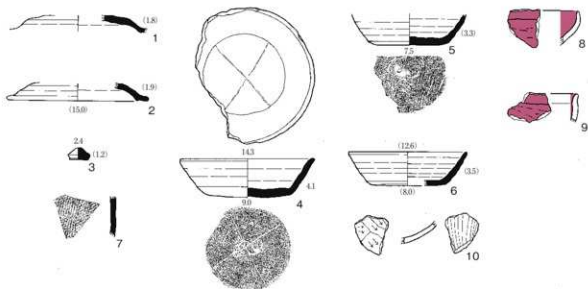
D17-P5土層説明

- 1 暗褐色土 径1cm以下ロームブロック
- 2 暗褐色土 径5cm以下ロームブロック
- 3 褐色土 カクランの様な土。しまり弱。

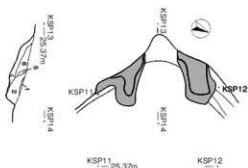
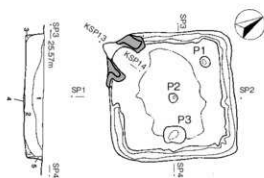
P5



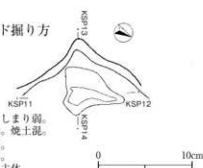
第91図 D17実測図



第92図 D17出土遺物



カマド掘り方

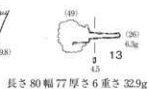
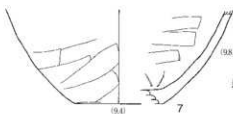
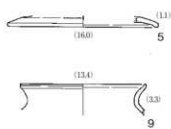
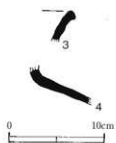
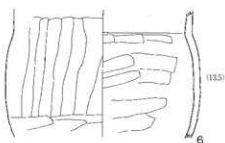
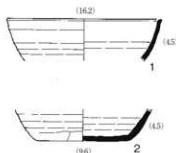


D18土層説明

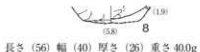
- | | |
|------------------------------------|-----------------------|
| 1 暗褐色土 黒色土、黄色粒子 | 2 暗赤褐色土 焼土まじり。しまり弱。 |
| 2 暗褐色土 径1~2cm ロームブロック 少量黄色粒子1より多量。 | 3 にぶい赤褐色土 砂質粘土主体。焼土混。 |
| 3 暗褐色土 黄褐色土まじり。 | 4 褐色土 しまりやや強。 |
| 4 暗褐色土 粘土、焼土まじり。しまり強。 | 5 赤褐色土 焼土ブロック主体。 |
| 5 暗褐色土 黄褐色土まじり。 | 6 暗赤褐色土 焼土にじむ。しまりよい。 |
| | 7 暗赤褐色土 粘土まじり。しまり弱。 |
| | 8 灰褐色土 粘土主体。焼土粒子微量 |
| | 9 褐色土 そでの中心部。しまりよい。 |
| | 10 褐色土 しまりよい。 |

D18カマド土層説明

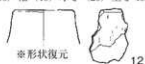
- 1 黒褐色土 焼土粒子混。しまり弱。



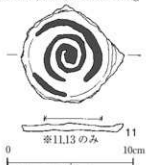
長さ80幅77厚さ6重さ32.9g



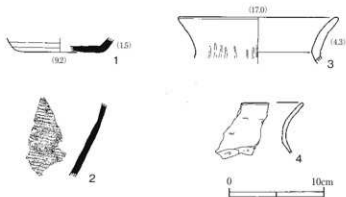
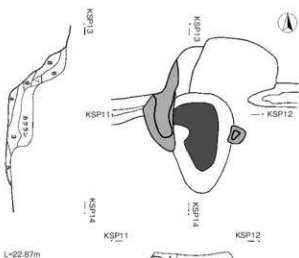
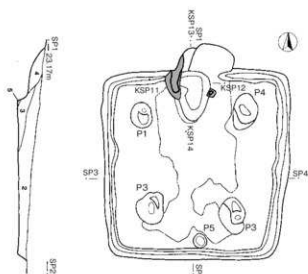
長さ(56)幅(40)厚さ(26)重さ40.0g



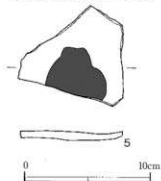
※形状復元



第93図 D18実測図



長さ83幅73厚さ7重さ41.5g



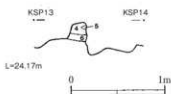
D28土層説明

- 1 褐色土 ロームブロック径3cm大以下まじり。
- 2 褐色土 1より明るい色調。
- 3 褐色土 1,2層よりロームブロックの量が少ない。
- 4 褐色土 1,2層よりロームブロック多く含む。焼土粒子, 粘土を少量含む。
- 5 褐色土 焼土を多量含む。
- 6 褐色土 やや暗い色調。1よりロームブロックが少ない。
- 7 暗黄褐色土

D28カマド土層説明

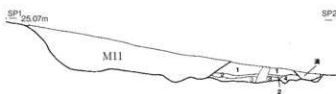
- 1 暗褐色土 75YR3/4しまりよい。砂質粘土まじり。
- 2 褐色土 75YR4/3しまり弱。焼土粒子1% 砂質粘土まじり
- 3 暗褐色土 5YR35/4しまり弱。焼土が全体に含まれる。炭化物1~3%
- 4 褐色土 75YR4/4しまり2,3よりつよい。粘土粒子1~3%
- 5 暗褐色土 75YR3/4しまりよい。粘土粒子1%。ローム土まじり。
- 6 暗赤褐色土 5YR3/3しまりやや弱。砂質焼土粒子を全体に含む
- 7 褐色土 75YR4/4しまりややあり。粘性あり。
- 8 暗赤褐色土 5YR3/2しまり弱。炭化物を含み黒色味あり。崩れやすい。煙道部の土。
- 9 褐色土 75YR4/3しまり弱。焼土ごく微量含む。
- 10 褐色土 75YR4/3しまりよい。砂質粘土をわずかに含む。
- 11 褐色土 75YR4.5/3しまりよい。砂質粘土を主とする。
- 12 赤褐色土 25YR4/4~4/6しまり弱。砂質粘土が焼けたもの。
- 13 褐色土 75YR4.5/4しまりよい。砂質粘土を主とする。粘性強。
- 14 褐色土 75YR4/4。しまりやや弱。粘性強。ローム

第94図 D28実測図



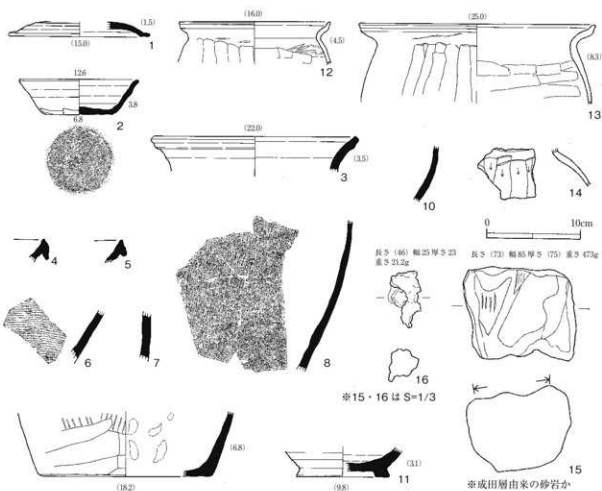
D29土層説明

- 1 暗褐色土 黄色粒子一様に含む。灰色味あり
- 2 暗褐色土 しまりよい。白色粘土、焼土粒子炭化物を含む
- 3 暗褐色土 黄褐色土がにじむ。焼土粒子、炭化物を含む
- 4 褐色土 しまり弱。焼土粒子含む



D29カマド土層説明

- 4 白色粘土
- 5 焼土まじり
- 6 暗褐色土 しまりよい。



※15・16はS=1/3

※成田層由来の砂岩か

第95図 D29実測図

D28 (第94図)

位置 G9-3G・13Gにまたがる。重複関係 単独。平面形 隅丸方形(やや台形気味)を呈する。規模 4.00m×4.00m。遺構確認面からの深さ0.38m。壁 ほぼ垂直に立ち上がる。床 貼床で、カマド前面から入口にかけての支柱穴の内側一帯が硬化している。壁溝 カマド部分を除いて全周する。カマド 北壁の中央部。左袖部が残存し、右袖部は攪乱により基底部を残して消失。住居の掘り方を埋めて火床部を築き、袖部他のカマド本体は、ローム掘り残しの基底部に砂質粘土を構築土として構築される。火床部は焼けている。ピット 5本検出。うちP1～P4が支柱穴で、いずれも主軸に沿う形で建て替えの形跡がある。P5は南壁中央の壁際の小ピットで、出入口に伴うもの。覆土 7層に分層できた。遺物出土状態 遺物の平面分布はやや散漫で、カマド付近にややまとまって廃棄されていた程度。本跡も復元回収率は低く、形がうかがえるものは認められなかった。建て替え 拡張が認められた。

出土遺物 (第94図)

出土総数は130点で、うち37点をトータル・ステーションで取り上げた。

1・2は須恵器。1は坏で、体部～底部が残存する。ロクロ整形で、体部下端～底部周縁は回転ヘラケズリ。胎土に雲母を含み、常陸産である。

2は甕の胴部片。タタキ整形で、外面に平行タタキ目が見られる。胎土に雲母を含み、常陸産。

3・4は土師器甕。3は口縁部～頸部の残存。内外面ともナデ、外面の頸部にタテ方向のヘラミガキを施す。古墳時代の所産か。4は口縁～胴上部片。薄手で、口縁内外面ともナデ、胴部外面は乾燥が進んだ段階でのヘラケズリを施す。武蔵型甕である。

5は土製品で、転用硯。須恵器甕の胴部片を再利用し、内面を使用面としている。

D29 (第95図)

位置 G9-12Gで検出。重複関係 M22に大半を破壊される。平面形 不明(方形を基調としたもの)。規模 (3.53m)×(4.28m)。遺構確認面からの深さ0.40m。壁 西壁の一部から北西コーナーを経て、南壁が残存。この残存部分を見る限り、比較的ゆるやかに立ち上がる。床 貼床。壁溝 残存部分からは検出されず。カマド 東壁とおぼしきあたりに、袖部のみ残存する。ピット 残存部分からは検出されず。覆土 4層に分層できた。遺物出土状態 遺構全体の残存状態の割には遺物が多かった。平面的には、カマドの前面から床面中央にかけて分布し、須恵器坏1点を除いて復元回収率は低かった。建て替え 認められなかった。

出土遺物 (第95図)

出土総数は957点で、うち93点をトータル・ステーションで取り上げた。

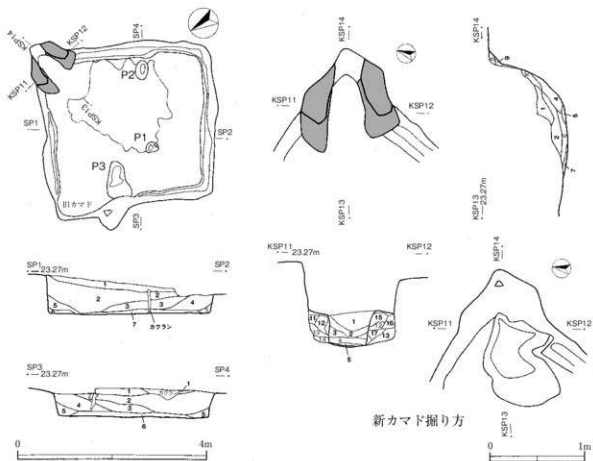
1～11は須恵器。1は蓋で、天井部～口縁部の残存。ロクロ整形で、天井部は回転ヘラケズリ、口縁内面にかえりを有する「かえり蓋」である。胎土に雲母を含み、常陸産。2は坏で、ほぼ完存品。ロクロ整形で、体部下端はヘラケズリを施す。

3～9は甕。3は口縁～頸部が残存。胎土に雲母を含み、常陸産。全体に磨れが目立つ。4・5は口縁片。いずれも口縁が緑帯状を呈するもので、4の外面には自然軸がかかる。6～8は胴部片。タタキ整形で、外面に平行タタキ目が見られる。7は胎土に雲母を含み、常陸産。8は酸化炎焼成に近く、下総産。9は胴下半～底部が残存。タタキ整形後、底部付近はヘラケズリを施し、内面は当て具裏。下総産。

10・11は長頸甕。10は胴部小片で、11の底部内面に自然軸がかかっている。

12～14は土師器甕。12は小形甕の口縁～胴上部。口縁端部をつまみ上げる。口縁内外面ともナデ、胴部外面ヘラケズリ、内面ヘラナデ。13の器面調整は、基本的には12とほぼ同様である。

15は土製支脚で、六面ないし七面の面取りを施す。本例は転用砥石でもある。16はスラグか。



新カマド掘り方

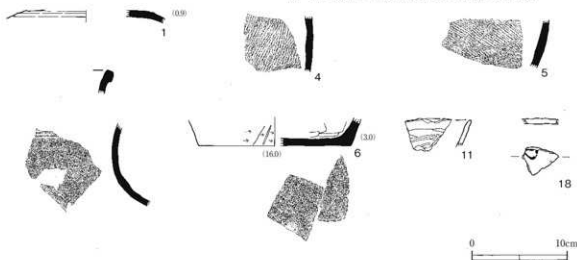
D30土層説明

- 1 褐色土
- 2 褐色土 径2cm以下ロームブロックまばら。
- 3 暗褐色土 径1cm以下ロームブロック
- 4 褐色土 径5cmロームブロックまばら
- 5 褐色土 径2~3cmロームブロック、しまりやや弱
- 6 暗褐色土 径3~4cmロームブロック、しまりよい
- 7 褐色土 径2~3cmロームブロック。

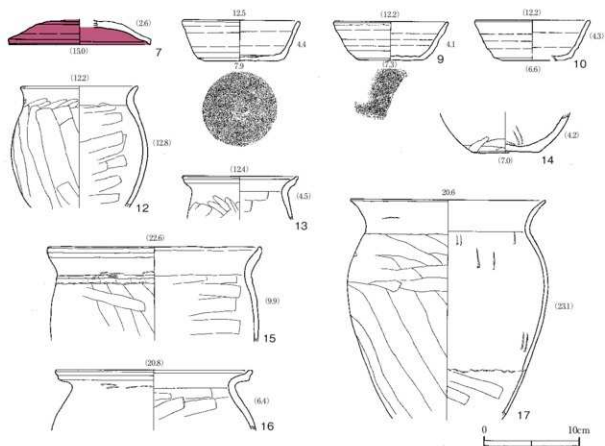
D30カマド土層説明

- 1 暗褐色土 径2~3mmローム粒子、焼土粒子微量。
- 2 暗褐色土 焼土、砂質粘土にじむ。しまり弱。
- 3 暗褐色土 2より焼土多い。しまり弱。

- 4 暗褐色土 炭化物粒子を含み黒色味あり。焼土にじむ。しまり弱。
- 5 褐色土 しまりやや弱
- 6 褐色土 焼土にじむ。しまり弱。粘性強
- 7 暗褐色土 焼土、黄色粒子微量。しまりあり。
- 8 カクラン
- 9 褐色土 ロームまじり。しまり弱。
- 10 暗赤褐色土 砂質、焼土まじり。しまり弱。
- 11 褐色土 しまり弱。粘性あり。
- 12 褐色土 11層の土が焼けている状態。
- 13 褐色土 ローム粒子少量。しまりよい。
- 14 褐色土 13よりしまりよい。
- 15 暗褐色土 白色粘土と少量の焼土を含む。しまりやや強。
- 16 褐色土 砂少量まじり。しまり弱、粘性強
- 17 濃い赤褐色土 16の土が焼けている状態。しまり弱。



第96図 D30実測図



第97図 D30出土遺物(2)

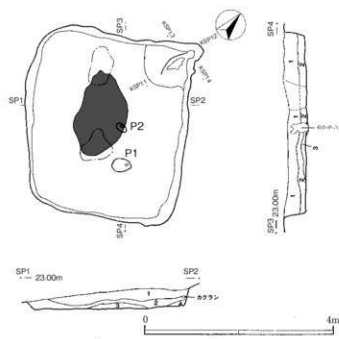
D30(第96図)

位置 G9-3Gで検出。重複関係 単独。平面形 やや不整な隅丸方形を呈する。規模 3.58m × 3.73m。遺構確認面からの深さ0.82m。壁 垂直気味に立ち上がる。床 貼床で、新カマド前面から、出入口なる南東壁にかけての帯が硬化している。壁溝 北西壁の中央から北西コーナー付近及び新カマド部以外では廻らす。カマド 新旧2基。旧カマドは北西コーナー部。煙道部の掘り込みと火床部のみが残存である。新カマドは北東コーナー部。煙道部と両袖部が残存する。煙道部は急な角度で立ち上がり、この両側面から構築土を貼り付けるかたちで積んで行き、最終的に火床部を覆うように築いたものと思われる。この煙道部両側面の構築土貼り付けが特徴的で、一つの属性として把握したい。火床部は焼けている。ピット 2本検出。床面中央の南西寄りに1本、これが主柱穴になるかは難しいものがある。南壁中央壁際のもは出入口に伴う梯子穴と思われる。覆土 6層に分層できた。遺物出土状態 平面分布的には、新カマド内・カマド南脇・P3周辺・南西コーナー付近の4箇所にとままりがある。その他は比較的散漫な分布を示すが、周溝を検出した部分からも遺物が出土しており、これらの廃棄行為が、廃屋後に上屋を解体してからであることを意味している。本跡は掘り込みが深く、残存状態が良好で、比較的遺物が多く出土した割には、須臾器坏類を除いて全体の復元回収率は高くない。建て替え カマドの作り替えが認められるものの、柱穴その他には明瞭な建て替えの形跡は見られない。建て替えは改築そのものであるから、本跡は行っていないと思われる。

出土遺物(第96図・97図)

出土総数は311点で、うち175点をトータル・ステーションで取り上げた。

1~6は須臾器。1は蓋で、天井部の残存。ロクロ整形で、天井部外面は回転ヘラケズリ。胎土に雲母を含み、常陸産。2~6は甕。2は口縁片で、縁帯はあまり顕著ではない。常陸産。3は頸部片で、回

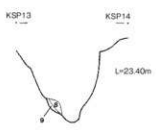
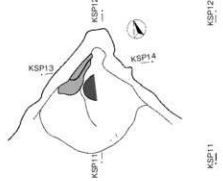


D74土層説明

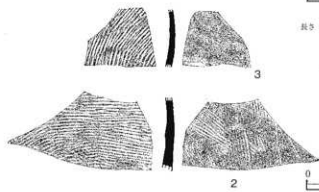
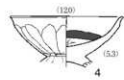
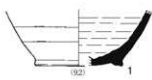
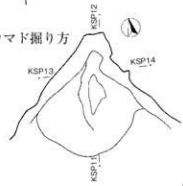
- | | |
|--------|---|
| 1 褐色土 | 炭化材片極少量 |
| 2 暗褐色土 | 炭化材小片少量。しまり、粘性あり。 |
| 3 暗褐色土 | 炭化材小片多量。焼土粒子極少量、しまり、粘性あり。崩落したローム。しまり弱い。粘性強。 |
| 4 褐色土 | |

D74カマド土層説明

- | | |
|-----------|---------------------|
| 1 褐色土 | しまりあり。粘性あり。 |
| 2 褐色土 | 砂質 |
| 3 褐色土 | 粘性あり |
| 4 暗褐色土 | 焼土多量、炭化材小片。粘性あり。 |
| 5 暗赤褐色土 | 焼土多量。炭化材小片。粘性あり。 |
| 6 にぶい赤褐色土 | 焼土とロームまじりあう。粘性あり。 |
| 7 褐色土 | ローム主体。焼土粒子極少量、粘性あり。 |
| 8 暗赤褐色土 | 砂、粘土混合。小焼土ブロック含む。 |
| 9 暗褐色土 | 砂、粘土、ローム混合。焼土粒子極少量。 |



カマド掘り方



長さ (45) 幅 43厚さ 28 重さ 162g



第98図 D74実測図

転台などによる調整を施す。4・5は胴部片。タタキ整形で、外面は平行タタキ目が見られる。6は胴下半～底部。タタキ整形後、ヘラケズリ、内面はヘラナデを施す。

7～18は土師器。7は蓋で、口縁～天井部の残存。ロクロ整形で、天井部外面は回転ヘラケズリ。

8～11・18は坏。8・9はロクロ整形で、体部下端は回転ヘラケズリ、底部は回転ヘラ切り。10もほぼ同様で、これら3点とも「箱形坏」である。11はロクロ整形で、体部外面にヘラミガキを施す。18は底部片で、外面に墨書が見られるが、判読不能である。

12～17は甕で、12・13は小形甕。15は口縁端部を軽くつまみ上げる。口縁内外面ともナデ、胴部外面はヘラケズリ、内面はヘラナデ。在地の甕である。16は口縁端部をつまみ上げる。口縁内外面ともナデ、胴部外面はヘラケズリ後ナデ、内面はヘラナデを施す。常総型甕。17は薄手で、口縁は「くの字」状に外反する。胴部外面は乾燥の進んだ段階でのヘラケズリ。武蔵型甕。

D74(第98図)

位置 H9-61Gを中心に、71G・G9-70Gにまたがる。重複関係 単独。平面形 やや不整な隅丸長方形を呈する。規模 3.48m×3.95m。遺構確認面からの深さ0.05～0.70m。壁 ほぼ垂直に立ち上がる。床 古期は直床で、新时期は貼床。硬化面は二面あり、北西部のものが新しく、この面を剥がすと中央部分から古期の硬化面が現れた。壁溝 廻らせていない。カマド 北西コーナー煙道部・火床部及び袖の基底部が残存。煙道部は壁外を掘り込むが、南西コーナーを結ぶ対角線よりも東にふれており、比較的急傾斜で立ち上がる。火床部は2～3cm程土が貼られていて、焼けている。ピット 2本検出。プランの長袖中央に位置するが、いずれも小規模で、かつ浅いもので、主柱穴とは見なせない。覆土 4層に分層できた。住居中央部の床面直上に、炭化財を多量、焼土粒子をまばらに含む褐色土がマウンド状に堆積する。これは廃屋後、中央部に廃材などを集めて焼却処理し、まだ燻ぶっているうちに土を被せて消火したものと思われる。遺物出土状態 全ては廃材類の焼却処理後に廃棄されたものであるが、特に集中することもなく、散漫な分布を示し、復元回収率も低かった。建て替え 床面を貼床によりかさ上げしている。これは部分的な作り替えの範疇で捉えられるものであって、建て替え＝改築は行っていないと考えられる。

出土遺物(第99図)

出土総数は74点で、うち21点をトータル・ステーションで取り上げた。

1～3は須恵器。1は長頸甕で、胴下半～底部の残存。ロクロ整形で、胴下半は回転ヘラケズリ。

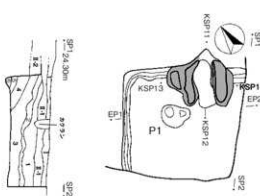
2・3は甕の胴部片。タタキ整形で、外面に平行タタキ目が見られ、内面は2がケズリを施し、3は青海波紋(重圓状の装飾を施した当て具帳の重複)が見られる。

4は土師器高坏か。坏部～脚部の一部が残存。口縁外面はナデ、体部～脚部外面はヘラケズリ、内面はヘラミガキ。内面にはススが付着している。

5は砥石か。上面にのみ使用面が見られる。軽石製。

D75(第99図)

位置 H9-81・91Gにまたがる。重複関係 単独。平面形 方形を基調とする(3/4未調査)。規模(2.34m)×(2.62m)、遺構確認面からの深さ0.66m。壁 垂直に立ち上がる。床 貼床で、全体にしっかりとっている。壁溝 カマド部分を除いて全周する。カマド 北壁の中央部。両袖部と煙道部が残存する。両袖部はローム掘り残しで基底部とする。火床部は三段状に掘り込んでから土を貼っている。煙道部は急傾斜で立ち上がる。火床部及び左袖の内壁は焼けて赤化している。ピット 1本検出。主柱穴である。テラス状部分は、掘り抜きに際してのもので、ローム混じりの褐色土で一気に埋め戻している。覆土 6層に分層できた。遺物出土状態 カマドとその周辺への廃棄行為が目立つ。須恵器坏及び

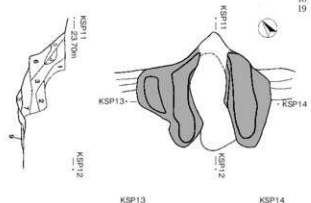


D75土層説明

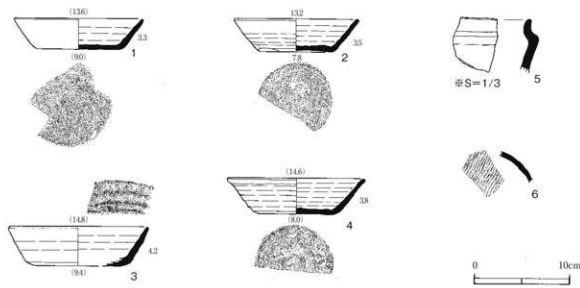
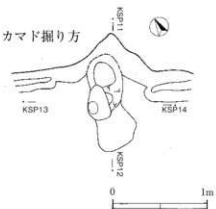
- | | | |
|-----|------|----------------------|
| Ⅰ-1 | 暗褐色土 | 砂 |
| Ⅲ-1 | 暗褐色土 | 粘性強。 |
| Ⅲ-2 | 褐色土 | 焼土粒子、焼土ブロック、炭化材片極少量。 |
| Ⅰ | 暗褐色土 | 粘性強。 |
| 2 | 暗褐色土 | 焼土ブロック、炭化材、粘性強。 |
| 3 | 褐色土 | 焼土粒子極少量、粘性強。 |
| 4 | 暗褐色土 | 焼土粒子極少量、粘性強。 |
| 5 | 暗褐色土 | ローム、粘性強。 |
| 6 | 褐色土 | ローム、粘性強。 |

D75カマド土層説明

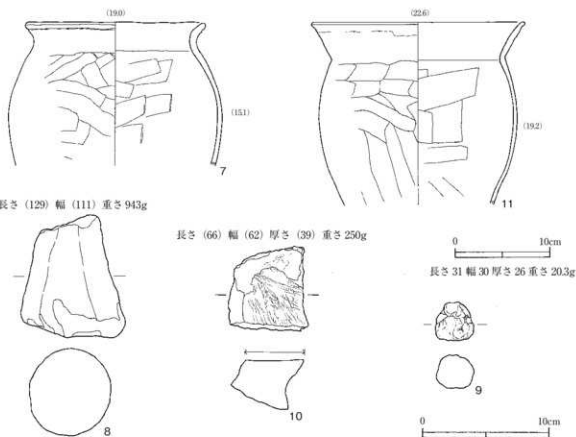
- | | | |
|----|---------|----------------------------|
| 1 | 褐色土 | 焼土粒子まばら、白土粘土、粘性あり。 |
| 2 | 褐色土 | 焼土粒子、焼土ブロック極少量、白土粘土。 |
| 3 | 褐色土 | 粘土、山砂主体、焼土にじむ。 |
| 4 | 暗赤褐色土 | 焼土全体。 |
| 5 | にぶい赤褐色土 | 焼土、炭化材小片、砂、粘性あり。 |
| 6 | 暗赤褐色土 | 焼土粒子、焼土ブロック多量、しまり弱。 |
| 7 | にぶい赤褐色土 | 焼土粒子、焼土ブロック多量、しまり弱。 |
| 8 | 赤褐色土 | 焼土粒子多量、ロームが焼けた層、しまり弱。 |
| 9 | 暗褐色土 | 焼土粒子、焼土ブロック多量、炭化材小片、しまりよい。 |
| 10 | 暗赤褐色土 | 焼土多量、炭化材片、砂、焼土、褐色土が混合。 |
| 11 | 暗褐色土 | 焼土、炭化材片、砂多い。 |
| 12 | 暗赤褐色土 | 焼土多量。 |
| 13 | にぶい褐色土 | 焼土粒子極少量、粘土と砂が混合、しまりあり。 |
| 14 | にぶい褐色土 | 焼土粒子極少量、粘土と砂が混合、粘性あり。 |
| 15 | 暗赤褐色土 | 焼土主体。 |
| 16 | にぶい褐色土 | 焼土多量。 |
| 17 | 暗赤褐色土 | 焼土多量、焼土、粘土、砂が混合。 |
| 18 | 暗赤褐色土 | 焼土全体。 |
| 19 | 褐色土 | ローム主体、そでの基礎となる土、しまりやや弱、粘性。 |



カマド掘り方



第99図 D75実測図



第100図 D75出土物(2)

土師器甕は、比較的復元回収率が高い。建て替え 認められなかった。

出土遺物(第99・100図)

出土総数は156点で、うち42点をトータル・ステーションで取り上げた。

1～6は須恵器。1～4は坏。

1はロクロ整形で、底部は静止ヘラ切り。器外面は荒れている。胎土に雲母を含み、常陸産。

2はロクロ整形で、底部は静止ヘラ切り。胎土に雲母含み、常陸産。

3はロクロ整形で、体部下端は回転ヘラケズリか。内面に線刻が見られる。

4はロクロ整形で、底部は回転ヘラ切り後、ヘラケズリを施す。胎土に雲母含み、常陸産。

5は短頸壺で、口縁～胴部片。ロクロ整形である。胎土に雲母を含み、常陸産。

6は甕の胴上部片。タタキ整形で、外面に平行タタキ目、内面には青海波紋が見られる。東海産。

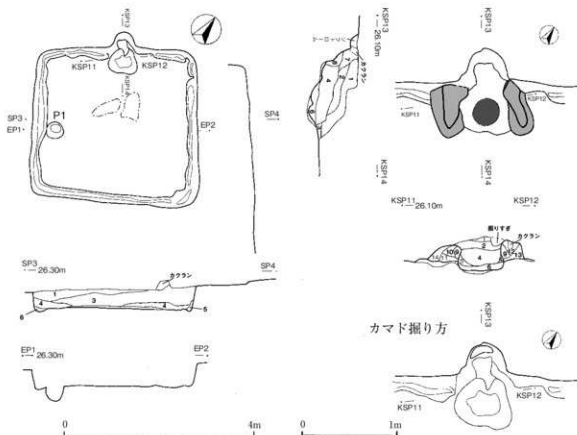
7・11は土師器で、ともに甕。

7は口縁～胴下半が残存する。最大径を胴中位に持ち、口縁は外反する。口縁内外面ともナデ、胴部外面はヘラケズリ、内面はヘラナデを施す。

11は口縁～胴下半が残存する。口縁は「くの字」状に外反して立ち上がり、胴部は倒卵形を呈する。口縁部に成形時の輪積み痕が見られる。口縁内外面ともナデ、胴部外面は乾燥が進んだ段階でのケズリ(刀子などの金属工具による)を施す。これは胴上部がヨコ、胴中位ではナナメ、胴下半はタテ方向となる。内面はヘラナデ。胎土に黒色粒子・赤色粒子を含み、赤褐色に焼かれている。武蔵型甕である。

8・9は土製品。8は土製支脚で、断面は略円形を呈する。9は焼成粘土塊。

10は石製品で、砥石。表側の一面のみ使用面とする。これは、比較的平滑な面と、溝状ないし線状の面との集合体となっており、研ぐ対象物や工程により使い分けたものと思われる。



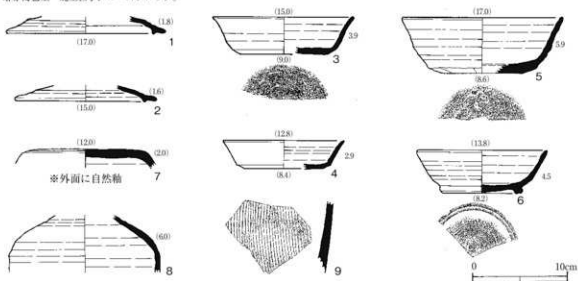
D81土層説明

- 1 暗褐色土 径1~2mm黄スコリア、焼土粒子、炭化物極少量。
- 3 暗褐色土 径1~2mm黄スコリア、径1~2mmロームブロック、焼土粒子炭化材料。粘性あり。
- 4 暗褐色土 径1~5mm黄スコリア、径1~5cmロームブロック多量。焼土粒子、焼土ブロック、炭化材料少量。粘性強。
- 5 褐色土 ローム内埋積。粘性あり。
- 6 褐色土 壁溝覆土、粘性強。

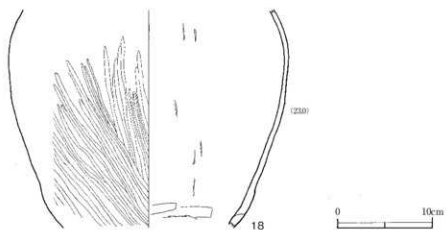
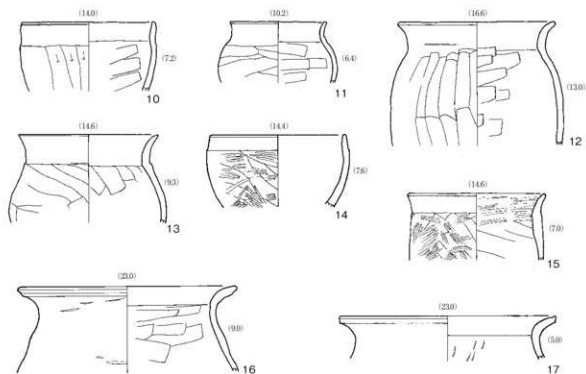
- 4 に深い赤褐色土 焼土粒子、焼土ブロック多量。
- 5 赤褐色土 焼土粒子。
- 6 暗褐色土 径10cm焼土ブロック、大床を成す。
- 7 暗赤褐色土 焼土粒子。粘土、砂少量。
- 8 褐色土 焼土粒子。ソフトロームが崩落し、カマド内の土とまじりあう。
- 9 暗赤褐色土 焼土粒子、径1cm焼土ブロック多量。
- 10 灰褐色土 粘土、砂主体。焼土粒子、しまり強。
- 11 灰褐色土 径1~2mm黄スコリア。
- 12 暗赤褐色土 砂、粘土主体。焼土まじり。
- 13 灰褐色土 砂、粘土、径1~3cmロームブロック。しまり強。
- 14 暗赤褐色土 径1~2mm焼土粒子、黄スコリア、砂、粘土少量。

D81カマド土層説明

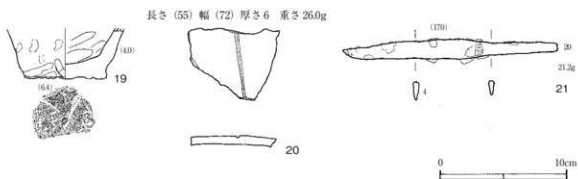
- 1 灰褐色土 焼土粒子、粘土。
- 2 灰褐色土 焼土粒子、焼土ブロック、粘土、ロームブロック、炭化材料極少量。
- 3 暗赤褐色土 焼土粒子、ロームブロック。



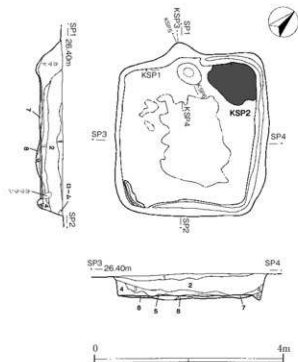
第101図 D81実測図



※外面にスス付着



第102図 DB1出土遺物(2)

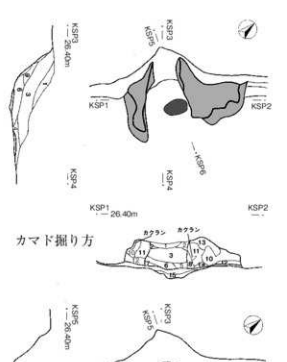
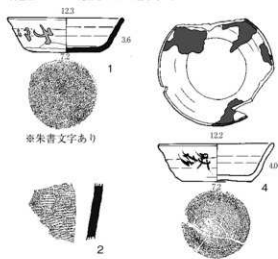


D83土層説明

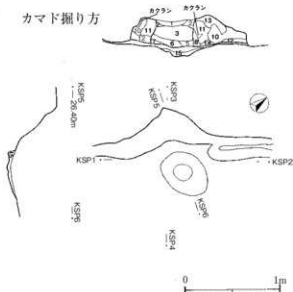
- 1 灰褐色土 径1~2mm黄スコリア、径2mm焼土粒子、径5mm炭化材片含
- 2 暗褐色土 径1~5mm黄スコリア少量、径2~3mm焼土粒子、径5mm炭化材片極少量含
- 3 暗褐色土 径1~2mm黄スコリア径2~5mm黒褐色スコリア少量含。粘土にじむ。粘性有り
- 4 暗褐色土 粘性有り
- 5 灰褐色土 粘性弱。粘性強
- 6 褐色土 粘性あり。単層。覆土
- 7 暗褐色土 散装状にたたいている。しまり有り。粘床
- 8 暗褐色土 ソフトローム主体。粘性有り。粘床
- 9 暗褐色土 径0.5~2mm黄スコリア、粘性有り。縄文土柱の覆土

D83カマド

- 1 灰褐色土 粘土、焼土粒子含む
- 2 にぶい灰褐色土 粘土主体、焼土粒子、ブロック含
- 3 暗褐色土 他、粘土、焼土粒子、ブロック、炭化材片混
- 4 暗褐色土 焼土粒子含
- 5 暗褐色土 他、粘土、多層含。火床
- 6 褐色土 焼土をほとんど含まない

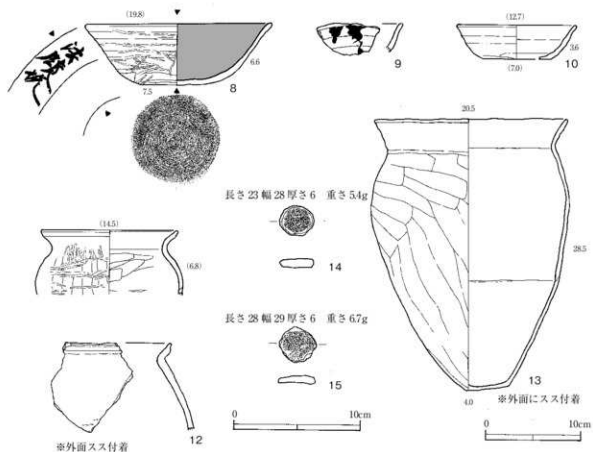


カマド掘り方



- | | | | |
|-----|----|---------|----------------------------|
| カマド | 7 | 暗褐色土 | 焼土粒子、ブロック含 |
| | 8 | 灰褐色土 | 焼土粒子、粘土混 |
| | 9 | 褐色土 | 焼土粒子、炭化材片極少量含 |
| | 10 | にぶい褐色土 | 粘土、砂土柱、焼土粒子、ブロック、土器片、炭化材片含 |
| | 11 | 灰褐色土 | 粘土、砂、焼土粒子少量含、しまり強 |
| | 13 | 暗褐色土 | 粘土、砂、焼土粒子、少量含 |
| | 14 | 灰褐色土 | 粘土、砂、焼土炭化材片含 |
| | 15 | にぶい非褐色土 | 崩れやすい、火床 |

第103図 D83実測図



第104図 D83出土遺物(2)

D81(第101図)

位置 G9-64Gを中心に、54Gにまたがる。重複関係 D82を破壊する。平面形 隅丸方形を呈する。規模 3.33m×3.62m。遺構確認面からの深さ0.56m。壁 ほぼ垂直に立ち上がる。床 部分的に貼床で、カマド前面一帯が硬化している。壁溝 カマド部分を除いて全周するが、途切れる部分がある。カマド 北壁の中央部。両袖部と煙道部が残存し、火床部は焼けている。ピット 1本検出。西壁中央壁際に位置し、出入口に伴うものか。覆土 6層に分層できた。遺物出土状態 平面分布的には、ほぼ万遍なく出土しており、特に廃棄ブロックとおぼしきものは認定できない。垂直分布的には、覆土中層に集中が認められる。建て替え 認められなかった。

出土遺物(第101・102図)

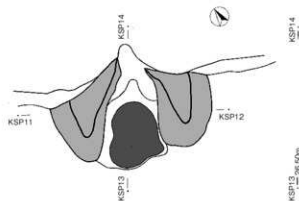
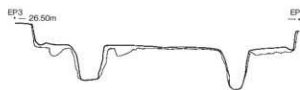
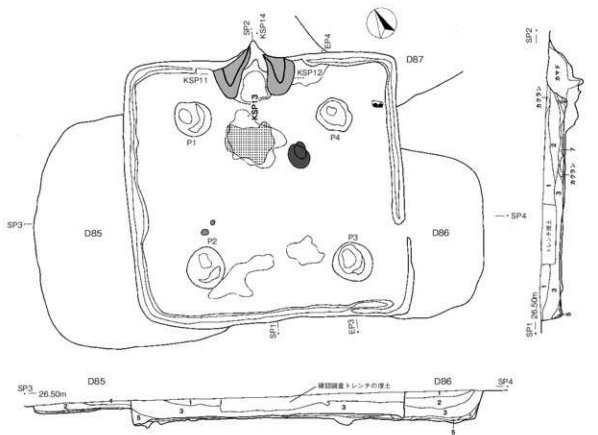
出土総数は643点で、うち488点をトータル・ステーションで取り上げた。

1~9は須臾器。1・2は蓋。ともにロクロ整形で、天井外面は回転ヘラケズリ、口縁内面にかえりを有する「かえり蓋」である。胎土に雲母を含み、常陸産。3~5は坏。ロクロ整形で、3は体部下端~底部は回転ヘラケズリ。4・5の体部下端は回転ヘラケズリ。3・5は胎土に雲母を含み、常陸産。6は高台付坏で、7は平瓶と思われ、外面に自然釉が付着。8は壺で、頸部~胴部の残存。東海産。9は甕。

10~18は土師器。10は鉢で、胴下半以下を欠く。口縁内外面ナデ、胴部はヘラケズリ、内面はヘラナデ。11~18は甕。11・15は小形甕で、14は鉢か。11は外面、15は口縁内面にヘラミガキが入る。12・13は在り地甕で、以上は古墳時代後期の遺制が見られる。16~18は常陸型甕。16・17の口縁端部はわずかにつまみ上げる。18の最大径は胴上部に持つが、胴部はよく膨らみ、ヘラケズリ後ヘラミガキ。

19は手捏ね土器。鉢形で、口縁部を欠く。底部は木葉痕が見られる。

20は土師器甕の胴部片再利用した転用砥石で、溝状の使用面が1条認められる。21は刀子。



D84土層説明

- | | |
|-----------|--|
| 1 灰褐色土、地 | 径1-2mm 黄白色砂子、焼土粒子、径1-2cm ロームブロック少量混。粘土、砂、焼土粒子、ブロック径1-2cm ロームブロック混。 |
| 2 灰褐色土堆 | 径1-2mm 黄スコリア、焼土粒子、ブロック多量混、径0.5-2cm ロームブロック、炭化材片少量含む。粘性有り。 |
| 3 暗褐色土 | 焼土粒子、粘土含、粘性強。 |
| 4 暗赤褐色土 | 焼土、砂、多量含、しまり強。 |
| 5 褐色、暗褐色土 | 焼土多量混、径1cm 焼土ブロック、炭化材片混、粘性有り。 |
| 6 暗褐色土 | 焼土多量混、径1-5cm の焼土ブロック含。 |
| 7 暗褐色土 | 焼土粒子、ブロック少量混、粘土、砂混。 |

D84カマド土層説明

- | | |
|------------|---|
| 1 暗褐色土 | 径1-5mm 焼土粒子、炭化材片、粘土、砂含、しまり強。 |
| 2 暗褐色土堆 | 粘土、砂、多量含、しまり強。 |
| 3 暗赤褐色土 | 焼土多量混、径1cm 焼土ブロック含。 |
| 4 暗赤褐色土 | 焼土多量混、径1-5cm の焼土ブロック含。 |
| 5 におい赤褐色土 | 焼土粒子、ブロック少量混、粘土、砂主体、焼けて赤化している。 |
| 6 赤褐色土、地 | 粘土、砂、泥、焼土粒子少量混、しまり有り。 |
| 7 褐色土 | 焼土粒子、ブロック少量混、粘土、砂混。 |
| 8 灰褐色土 | 径1-2cm 焼土ブロック、径1-2mm 焼土粒子多量混。粘土、砂混。 |
| 9 暗赤褐色土 | 径1-2cm 焼土ブロック、径1-2mm 焼土粒子多量混。粘土、砂混。 |
| 10 におい褐色土 | 径5cm 以下の焼土ブロック、焼土粒子多量混。灰床を形成する土。 |
| 11 褐色土 | 径1cm ロームブロック、焼土粒子多量混、粘土にじむ。 |
| 12 暗赤褐色土 | 径5cm 以下の焼土ブロック、焼土粒子多量混。灰床を形成する土。上部しまり強。 |
| 13 におい赤褐色土 | 焼土混、粘土含、粘性強。 |
| 14 暗赤褐色土 | 焼土混、粘土含、粘性強。 |
| 15 黒色黒褐色土 | 焼土、焼土粒子含。 |
| 16 におい褐色土 | 粘土、砂混、焼土含、粘性強。 |
| 17 におい赤褐色土 | 径1cm ロームブロック、焼土粒子含。 |

第105図 D84実測図

D83(第103図)

位置 G9-63・64・73・74Gにまたがる。重複関係 単独。平面形 隅丸方形を呈する。規模 3.43m×3.88m。遺構確認面からの深さ0.47m。壁 ほぼ垂直に立ち上がる。床 貼床で、床面中央一帯が硬化している。壁溝 東半のみ廻らせている。貼床下より南西コーナーを検出した。カマド 北壁の中央部。両軸部と煙道部が残存し、火床部は良く焼けている。ピット 検出されなかった。覆土 8層に分層できた。遺物出土状態 平面分布的には、ほぼ万遍なく出土しているが、カマド前面にややまとまりが見られる。垂直分布的には、やはり万遍なく出土しているが、覆土下層～床面付近にややまとまりがある。建て替え 周溝の作り替えが認められるため、建て替えを行っていたと判断した。

出土遺物(第103図・104図)

出土総数は778点で、うち640点をトータル・ステーションで取り上げた。

1・2は須恵器。1は坏の完存品。ロクロ整形で、体部下端～底部ヘラケズリ。体部外面には朱書文字「□□」が確認できる。下総産。2は甕で胴部片。タタキ整形で、外面に平行タタキ目が見られる。

3～13は土師器。3～10は坏。3・4はロクロ整形で、体部下端～底部周縁回転ヘラケズリ。3は外面・4は内面にスガが付着し、灯明皿としても使用した。3の見込み面には墨書「財在」が赤外線を確認できた、とラベルにあったが、肉眼では視認できないため、図化しなかった。墨書文字「財在」は、4の体部外面にも見られた。5～7はロクロ整形で、体部下端は回転ヘラケズリ、底部は回転糸切り。8はロクロ整形で、体部下端は回転ヘラケズリ、底部は回転糸切り後、周縁ヘラケズリ、外面は部分的にヘラミガキ。内面は全面をヘラミガキ後、黒色処理を施す。体部外面に墨書文字「法□□」がある。9は坏の口縁～体部片で、外面に墨書が見られる。10はロクロ整形で、硬質に焼かれ、須恵器か。11～13は甕。11は小形甕、12は常総型甕で、13は倒卵形の器形で、口縁は「く」の字に外反する。武蔵型甕。

14・15は土製品で、土製円盤(小形)。土師器甕の胴部片を再利用するものである。

D84(第105図)

位置 G9-74Gを中心に、73Gにまたがる。重複関係 D85・86・D87を破壊する。平面形 隅丸方形を呈する。規模 5.56m×5.90m。遺構確認面からの深さ0.45m。壁 ほぼ垂直に立ち上がる。床 貼床で、カマド前面とP2～P3間が硬化している。壁溝 カマド部分を除いて全周するが、南東隅はD86との重複部分で、やや不明瞭となっている。カマド 北壁の中央部。両軸部と煙道部が残存し、火床部は良く焼けている。ピット 4本検出。うちP1～P4が主柱穴である。覆土 7層に分層できた。遺物出土状態 平面分布的には、万遍なく出土していると見なせなくてもないが、空白域も少なからず存在する。廃棄ブロックと認められるものはない。垂直分布的には、ほぼ万遍なく出土している。建て替え 認められなかった。

出土遺物(第106・107図)

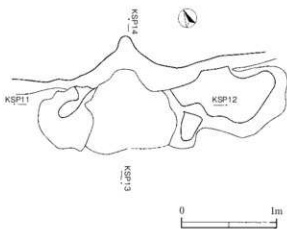
出土総数は1912点で、うち979点をトータル・ステーションで取り上げた。

1～14は須恵器。1～6は坏。1は内外面に火押が見られる。2～6はロクロ整形で、体部下端はヘラケズリ。底部は2が回転ヘラケズリ、3は静止ヘラケズリ、5は回転ヘラ切り。いずれも常陸産。7は高台付坏で、常陸産。8・9は蓋で、9はD89(第114図27)と接合した。10～13は甕。12の内面には青海波紋が見られる。10は常陸産で、12は東海産。14は高盤の脚部。胎土に雲母を含み、常陸産。

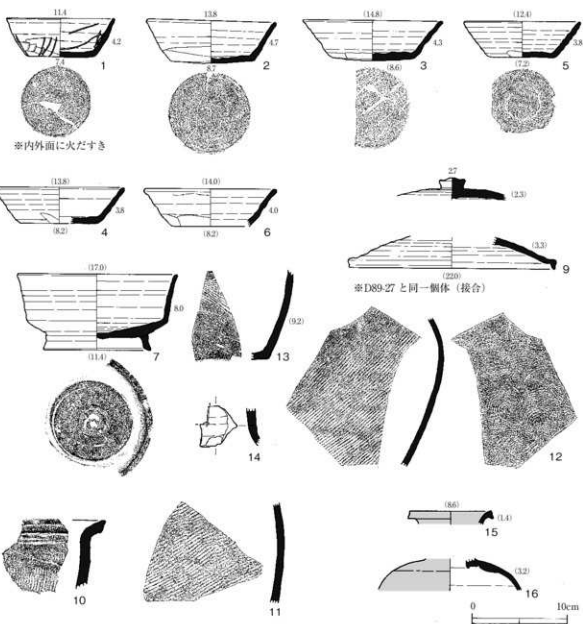
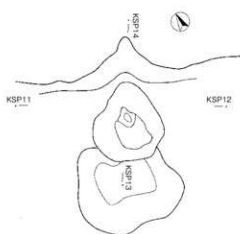
15・16は灰釉陶器で、水甕か。15は内外面、16は外面のみ施釉する。16はD89と接合する。

17～26は土師器。17～20は坏。17・18はロクロ整形で、内外面焼成後赤彩を施す。19・20は非ロクロ整形であるが、19は丸底ではない。21～24は甕。21は在地の甕であり、22・24は常総型甕で、23は武蔵型甕である。25・26は瓶で、同一個体か。胴部外面はヘラケズリで、単孔式。

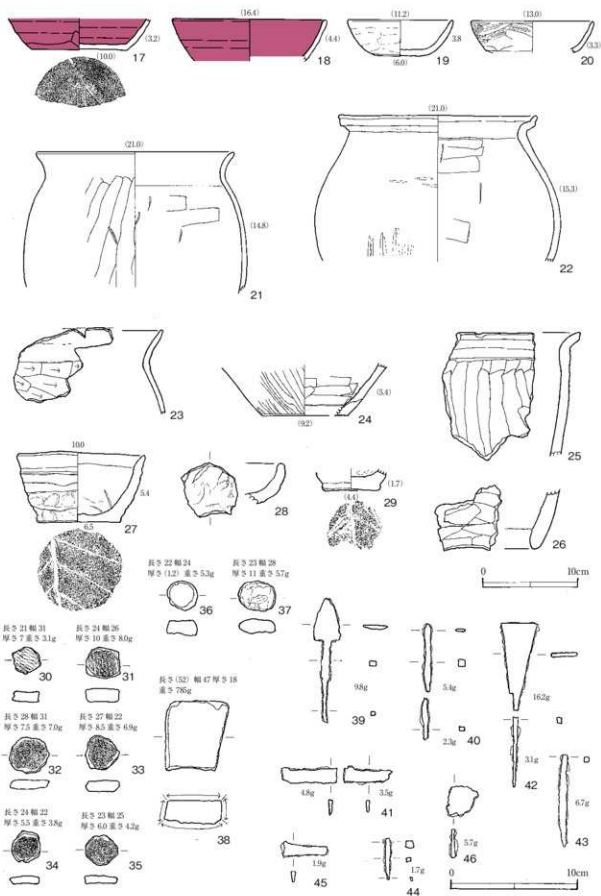
そで除去状態



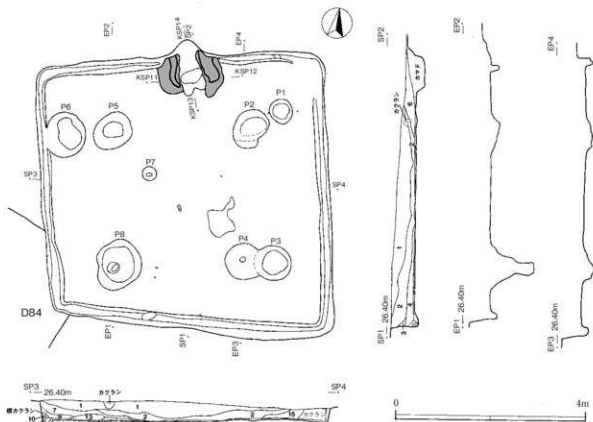
カマド掘り方



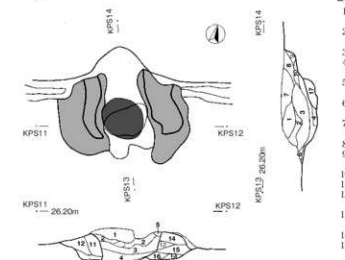
第106図 D84実測図(2)



第107図 D84出土遺物(2)

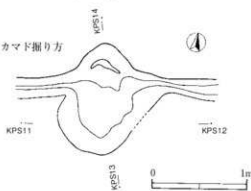


D87土層説明



- 1 暗褐色土 径0.5~5mm黄スコリア多量含、径2cmロームブロック、焼土粒子、炭化材片少量含。
- 2 黒褐色土 焼土粒子、炭化材片少量含、径0.5~2mm黄スコリア少量含。
- 3 暗褐色土 ローム混。
- 4 暗褐色土 径0.5~3mm黄スコリア少量混、径1cmロームブロック、焼土粒子、炭化材片少量混。
- 5 暗褐色土 径0.5~2mm黄スコリア、焼土粒子、炭化材片少量混。
- 6 灰褐色土 粘土、砂混、径5mm黄スコリア、焼土粒子、ブロック炭化材片含。
- 7 暗褐色土 径0.5~2mm黄スコリア、焼土粒子、炭化材片少量混。
- 8 褐色土 粘性有り。
- 9 黒褐色土 径0.5~2mm黄スコリア、焼土粒子極少量、粘性有り。
- 10 暗褐色土 粘性有り。
- 11 黒褐色土 径0.5~1mm黄スコリア
- 12 褐色土 径0.5~1mm黄スコリア多、径1~2mmロームブロック含。
- 13 暗褐色土 径0.5~2mm黄スコリア多量混、ローム混、粘性有り。
- 14 褐色土 ローム混、粘性有り。
- 15 暗褐色土 径0.5~2mm黄スコリア径1cmロームブロック含、焼土粒子、炭化材片少量混。

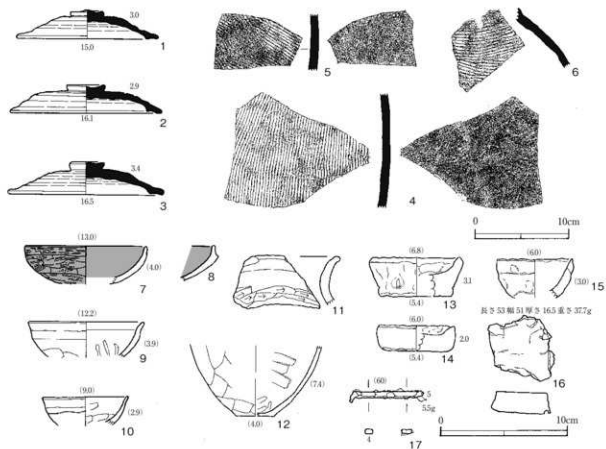
カマド掘り方



D87カマド土層説明

- 1 灰褐色土 径0.5~2mm焼土粒子、粘土、砂少量含。
- 2 暗赤褐色土 径0.5~2mm焼土粒子少量含。
- 3 にい・赤褐色土 焼土含。
- 4 赤褐色土 焼土主体、ロームブロック含、火床を形成する土。
- 5 灰褐色土 粘土、砂主体、しまり強。
- 6 褐色土 砂多量含、焼土粒子少量含。
- 7 暗褐色土 径0.5~5mm黄スコリア多、径1~3mm焼土粒子少量混、粘土、砂ごく少量混。
- 8 暗赤褐色土 焼土にじむ。
- 9 褐色土 焼土粒子ごく少量含。
- 10 褐色土 焼土粒子ごく少量含。
- 11 暗褐色土 粘土、粘土。
- 12 灰褐色土 粘土、砂主体、径0.5~2mm焼土粒子含、しまり強。
- 13 黒褐色土 ローム混、黒盤の上。
- 14 暗褐色土 径1~3mm黄スコリア、焼土粒子含、しまり強。
- 15 灰褐色土 粘土、砂主体、焼土にじむ、しまり強。
- 16 灰褐色土 焼土、砂混。
- 17 にい・赤褐色土 ローム混、焼土混。

第108図 D87実測図



第109図 D87出土遺物(2)

27～29は手捏ね土器。27は大形で、むしろ「粗製の坏」という解釈が可能なのである。

30～35は土製円盤(小形)で、36は不明土製品。37は焼成粘土塊。38は砥石。39～45は鉄製品。

39・40・42・43は鉄族で、42は「方頭鎌」。41・45は刀子。44は不明鉄製品である。

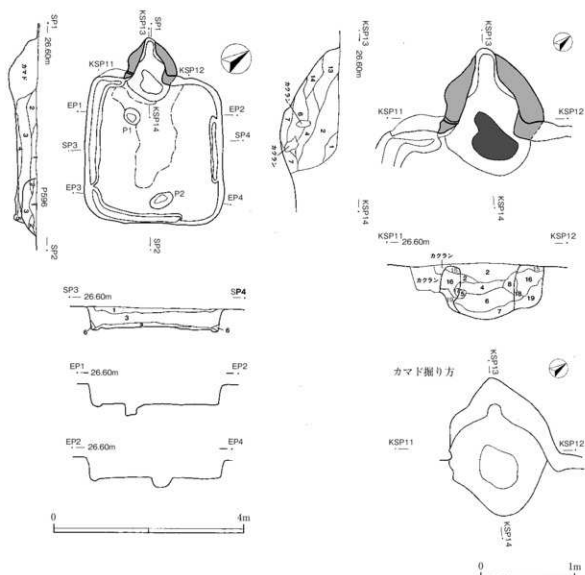
D87(第108図)

位置 G9-83Gを中心に、82Gにまたがる。重複関係 D84に破壊される。平面形 方形を基調とするが、台形に近い。規模 6.13m×6.13m。遺構確認面からの深さ0.45m。壁 ほは垂直に立ち上がる。床 貼床で、床面中央が硬化している。壁溝 カマド部分を除いて全周する。カマド 北壁の中央部。両袖部と煙道部が残存するが、右袖部は一部 D84の破壊を受ける。火床部は焼けている。ビット 8本検出。うち P7を除いて、他は主柱穴である。建て替えに伴い、P2→P1、P5→P6、P4→P3と柱穴を掘り替えており、P8のみ新田同一の掘り方となっている。覆土 15層に分層でき、埋め戻しと思われる。遺物出土状態 垂直分布的には、床面と覆土中層に多い。全般的に2～3m離れたものが接合する傾向があり、須恵器蓋では最大で約5mを測り、かつ床面と覆土中層のものが接合した例がある。建て替え 柱穴の掘り替えから、建て替えが認められ、反復拡張を行ったと思われる。この際、P8のみ拡張後も同一の掘り方を使用しており、その一角の住居掘り方は掘り抜けていないため、最終的な平面形が台形状を呈するものになった蓋然性が高い。ちなみに、旧住居掘り方の形状は、隅丸方形を呈していたと解釈される。

出土遺物(第109図)

出土総数は1665点で、うち1094点をトータル・ステーションで取り上げた。

1～6は須恵器。1～3は蓋で、ロクロ整形、天井部外面は回転ヘラケズリ、口縁内面にかえりを有する「かえり蓋」である。ともに常陸産。4～6は甕。6は胎土に雲母を含み、常陸産。



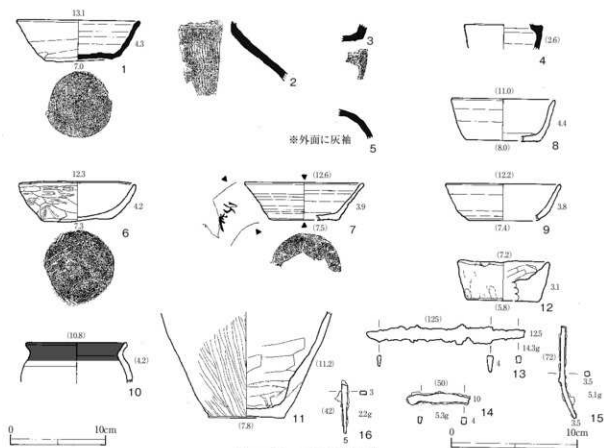
D88土層説明

- 1 暗褐色土 径0.5～2mm 黄スコリア含、径1～2mm 焼土粒子少量含。
- 2 暗褐色土 径1cm ロームブロック少量含。粘土、砂多量含む。径1～2mm 焼土粒子含。
- 3 暗褐色土 0.5～5mm 黄スコリア含径1～2mm 焼土粒子少量混。
- 4 暗褐色土 ローム、径1～2mm 焼土粒子混。
- 5 褐色土 ローム混。径1～2mm 焼土粒子少量混、粘性有り。
- 6 褐色土 ローム混、粘性有り。

D88 カマド土層説明

- 1 灰褐色土 粘土、砂混、焼土粒子少量混。しまり強。
- 2 暗褐色土 径1～3mm 黄スコリア、焼土粒子、砂混しまり強
- 3 にぶい褐色土 粘土、砂全体。焼土。焼土粒子多量混しまり強
- 4 暗褐色土 焼土、粘土、砂混。
- 5 暗褐色土 焼土ブロック主体。砂、粘土含。
- 6 暗褐色土 焼土粒子、ブロック、粘度、砂含。
- 7 暗褐色土 径0.5～2mm 焼土粒子含。ロームにじむ。
- 8 にぶい褐色土 粘土、砂全体。焼土少量含。しまりやや強。
- 9 暗褐色土 径0.5～1mm 焼土粒子径0.5～1mm 黄スコリア少量含。しまり強。
- 13 にぶい褐色土 焼土、焼けた粘土、砂含、しまりやや強。
- 14 褐色土 焼土多量含。炭化材片、ローム含。
- 15 黒褐色土 粘土、砂、黒褐色土混。
- 16 にぶい褐色土 粘土、砂主体、カマド軸の芯、しまり強。
- 17 赤褐色土 粘土、砂が焼けて赤化した部分。
- 18 灰褐色土 砂、焼土含、粘土少量含。
- 19 暗褐色土 径3～5mm 黄スコリア、粘土、砂、焼土粒子、炭化材片含。基礎になる土。しまり強。

第110図 D88実測図



第111図 D88出土遺物

7～12は土師器。7～10は坏で、非ロクロ整形。7は内外面ウルシ仕上げ。10は手捏ね土器的な粗製品。11・12の器壁はやや厚いが、調整などが武蔵型甕に近似する。範疇に含めるかは検討を要する。

13～15は手捏ね土器。16は土製品で、焼成粘土塊。17は不明鉄製品。棒状で、かつ断面は長方形。

D88(第110図)

位置 G9-83Gを中心に、84Gにまたがる。重複関係 P596を破壊する。平面形 隅丸方形を呈する。規模 3.00m×3.07m、遺構確認面からの深さ0.45m。壁 ほぼ垂直に立ち上がる。床 貼床で、ほぼ平坦。カマド前面から床面中央部一帯が硬化している。壁溝 幅広で、カマド部分と北・東コーナーでは廻らせる。カマド 北壁の中央部。両袖部と煙道部が残存する。煙道部は壁外を大きく掘り込み、両側面に構築土を貼り付けている。火床部は良く焼けている。ピット 2本検出。うちP1が主柱穴である。P2は楕円形で底面は平坦。出入口に伴うものと思われる。覆土 6層に分層でき、暗褐色土系。遺物出土状態 平面分布的には、万遍なく出土していると見せなくてもないが、カマド前面にやや集中が認められる。垂直分布的には、やはり万遍なく出土していると見せなくてもないが、覆土下層～床面付近にまとまりが見られ、カマド前面の遺物群も、床面付近が多い。建て替え 認められなかった。

出土遺物(第111図)

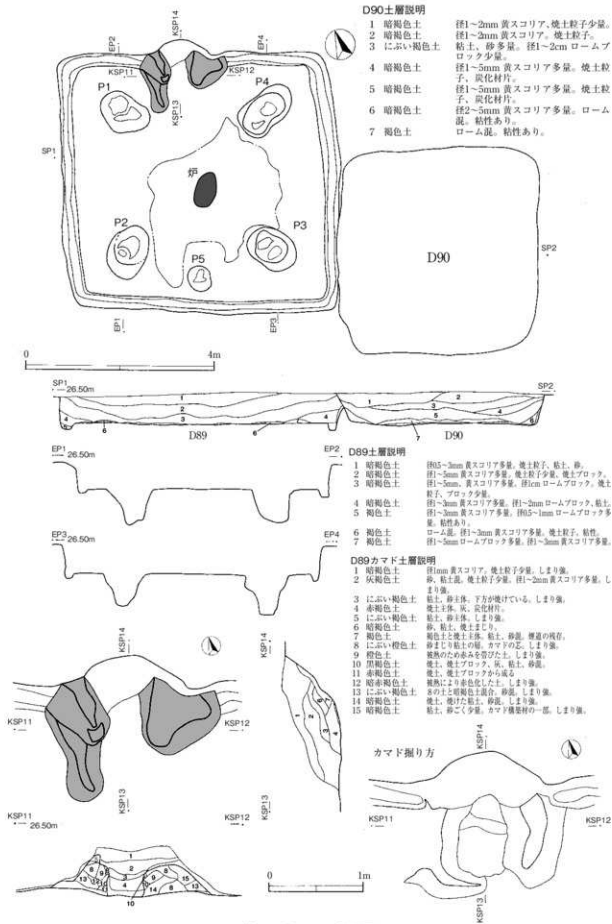
出土総数は735点で、うち415点をトータル・ステーションで取り上げた。

1～4須恵器。1は坏で、2の甕、3の甎ともに下総国内の窯産。4は小形の短頸壺である。

5は灰袖陶器の水甎の肩部片で、ロクロ整形で、外面に施釉が見られる。

6～11は土師器。6～9は坏。6は非ロクロ整形で、平底。7は体部外面に墨書文字「子□」が認められる。8・9はロクロ整形で、「箱型坏」。10は小形甕で、ロクロ甕か。外面にスス。11は常総型甕。

12は手捏ね土器。13～16は鉄製品。13は錆が目立つが刀子である。他は不明鉄製品としておく。



第112図 D89実測図

D89(第112図)

位置 G9-74Gを中心に、73Gにまたがる。重複関係 D90の破壊を受ける。平面形 方形を呈する。規模 5.58m×5.90m。遺構確認面からの深さ0.67m。壁 ほぼ垂直に立ち上がる。床 貼床で、P2-P3-P4を結んだ内側が硬化している。壁溝 カマド部分を除いて全周する。カマド 北壁の中央部。両軸部と煙道部が残存し、火床部は焼けている。(炉) 床面中央に焼けた部分がある。楕円形を呈し、周辺にも若干焼けた部分がある。これらは、火災や廃材などの焼却行為によるものではないため、()をつけて炉跡とした。ピット 5本検出。うちP1~P4が主柱穴で、建て替えの形跡を示す。P5は出入口に伴うものである。覆土 7層に分層でき、埋め戻しである。遺物出土状態 平面分布的には、万遍なくと言えるが、特にカマド前面から床面中央一帯に集中する。土師器環の中には、北東コーナー付近と西壁の特に壁際(掘り方の際)に廃棄されている例がある。垂直分布的には、床面と覆土上層に集中する。ただし、11の須恵器環は覆土中層にブロックとして廃棄されていた。接合関係は、上下で接合する例が少なからずあり、間接的に住居の埋め戻しと遺物の廃棄行為そのものが、短時日のうちに行われたことを示唆している。そして、住居掘り方を意識した廃棄も見られるので、廃屋と上屋の解体直後である蓋然性が高い。建て替え 主柱穴の知見から、建て替えが認められた。反復拡張を行っている。出土遺物(第113図~117図)

出土総数は3493点で、うち1951点をトータル・ステーションで取り上げた。

1~28・30~32は須恵器。1~20は坏。ロクロ整形で、体部下端にヘラケズリを施す。底部は切り離し後、静止状態でヘラケズリ(1・2・5)、静止ヘラ切り(3・4)、回転ヘラ切り後、ヘラケズリ(6~13・15・17・18・20)、切り離し後、ヘラケズリ(14)、切り離し後、回転ヘラケズリ(16)。胎土から見て、15~17を除いて常陸産。21~25は高台付坏。付け高台で、21~23は常陸産。26~28は蓋。ロクロ整形で、天井部は回転ヘラケズリ。26・28は常陸産。27はD84・D101との遺構間接合である。口縁部の特徴などから、永田・不入窯産と捉えられるが、上名土ヶ谷窯の可能性もある。30~32は甕。タキ整形で、胎土から30・32は常陸産。31は内面に青海波紋が見られ、濁西産と捉えられる。

29は灰軸陶器。水瓶の頸部片。ロクロ整形で、外面に灰軸が施軸される。D84と接合する。

33~46・48~51・76~78は土師器。33~43は坏。このうち、33~39はロクロ整形で、体部下端はヘラケズリ、底部は切り離し後、ヘラケズリ。焼成後内外面に赤彩を施す。34は底部外面に墨書文字「前」が見られる。36は内外面にススが付着し、灯明皿としても使用。39の底部外面には線刻が認められる。40~43は非ロクロ整形で、体部はヘラケズリ後、ヘラミガキ、内面はヘラミガキを施す。このうち、40~42は平底を意識しつつある。44は蓋。ロクロ整形で、内外面赤彩を施す。45・46は坏で、墨書が見られる。46は「冨」か。48~50・76~78は甕。48は武蔵型甕の台付甕で、49・78も武蔵型甕。47は小形甕で、76は在地系の甕。50は常陸型甕。51は瓶で、常陸型甕と同様の胎土・技法を持つ。

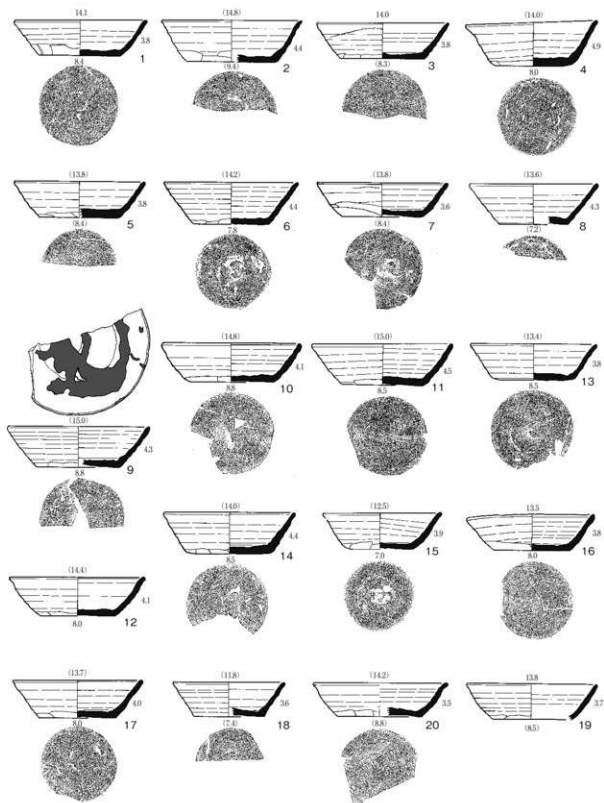
58~61は手捏ね土器である。59は大形で、他のものとは異なっており、範疇から逸脱するか。

52~57・62~66は土製品。52・53は転用硯。54~57は土製円盤(大形)。62は紡錘車。63~65は土製円盤(小形)。66は焼成粘土塊。写真は「サイコロ状の土器片」で、須恵器器片を2~3cm大に打ち欠いたものである。規格的なので、ただの小片とは区別した。67は石製品で、砥石。鉄錆が付着する。

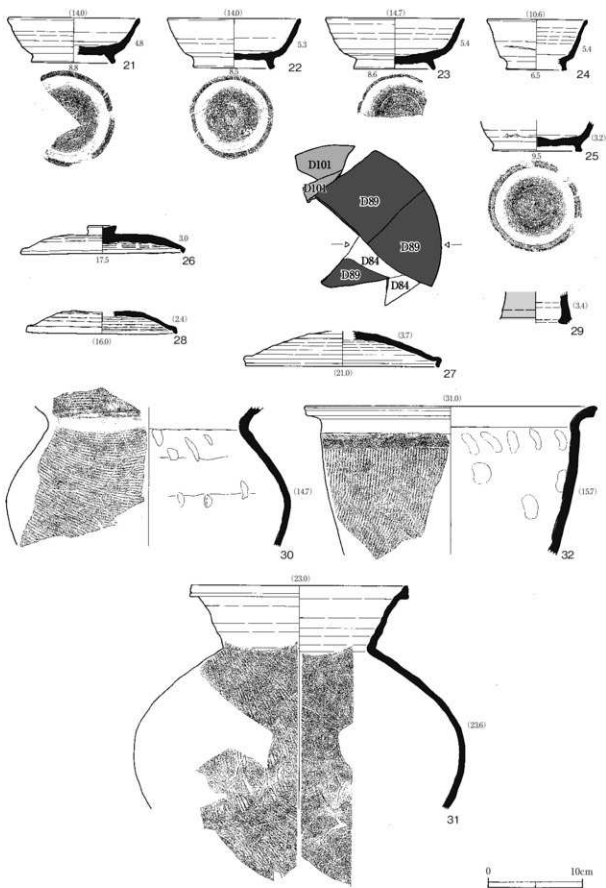
68~74は鉄製品。68・72は刀子。その他の機種は不明。75は銅製品で、帯金具の丸柄の裏金具。

D90(第118図)

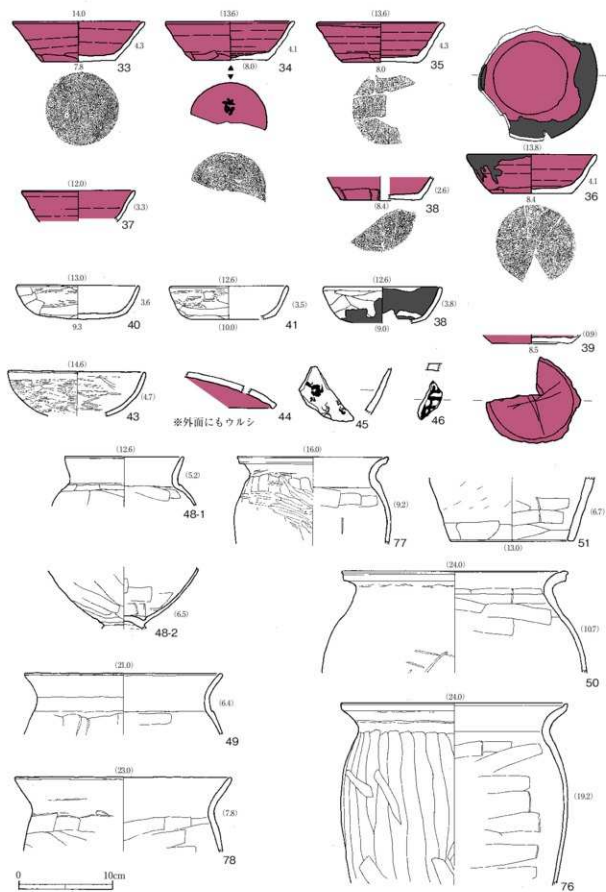
位置 G9-74Gを中心に、84Gにまたがる。重複関係 D89を破壊する。平面形 隅丸方形を呈する。規模 4.17m×4.38m。遺構確認面からの深さ0.68m。壁 ほぼ垂直に立ち上がる。床 中央部分はローム掘り残し、それ以外は貼床。南東部に硬化範囲が認められた。壁溝 北壁一帯及び南壁の一部



第113図 D89出土遺物(1)



第114図 D89出土遺物(2)



第115図 D89出土遺物(3)



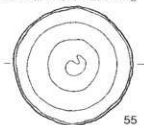
長さ 88 幅 94 厚さ 10 重さ 90.1g



52



長さ 94 幅 94 厚さ 8 重さ 70.5g



55



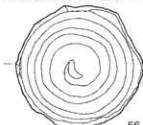
長さ (54) 幅 (72) 厚さ 9 重さ 38.1g



53



長さ 96 幅 100 厚さ 13 重さ 111.8g



56



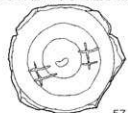
長さ 81 幅 85 厚さ 8 重さ 54.9g



54



長さ 86 幅 92 厚さ 10 重さ 58.2g

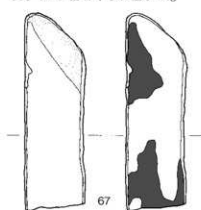


57



※12と接合する

長さ (161) 幅 48 厚さ 34 重さ 490g



※鉄錆付着状態



長さ (31) 幅 (20) 厚さ (20) 重さ 161.1g



62



長さ 31 幅 32 厚さ 6 重さ 8.2g



63



長さ 22 幅 21 厚さ 10 重さ 4.7g



64



長さ 20 幅 22 厚さ 10 重さ 4.2g



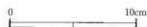
65



長さ 23 幅 35 厚さ 15 重さ 7.8g

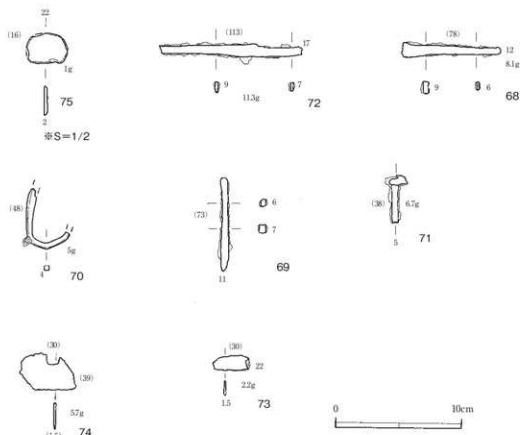


66



サイコロ状の土器片 (縮尺不同)

第116図 D89出土遺物(4)



第117図 D89出土遺物(5)

のみ廻らす。カマド 西壁の中央部。両袖部と煙道部が残存し、火床部は焼けている。ピット 10本検出。P1・P2が完掘時、その他は貼床除去後の検出である。住居構築当初は、P4・P5・P8・P9の4本を支柱穴とし、壁際のP3・P6・P7・P10を補助柱穴とした構造であったと捉えられる。P2は出入口に伴うものと思われる。覆土 8層に分層できた。遺物出土状態 平面分布的には、万遍なくと言える。垂直分布的には、床面・覆土中層・上層に集中する。接合関係は、上下で接合する例が少なからずある。建て替え 柱穴の知見から、建て替えが認められた。

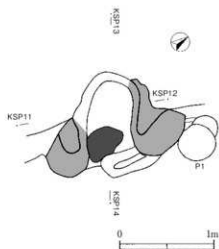
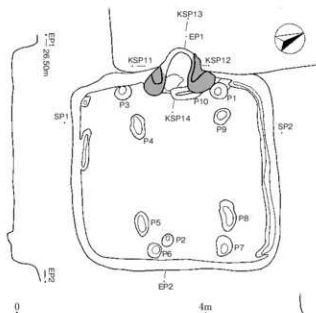
出土遺物(第118図～120図)

出土総数は950点で、うち836点をトータル・ステーションで取り上げた。

1・2・22・23は須恵器。1は坏で、箱型の器形。2は高台付坏。22・23は甕。22は下総産。

3～21は土師器。3～14は坏で、「箱型坏」。ロクロ整形で、体部下端は回転ヘラケズリ。底部は3が回転糸切り後、周縁を回転ヘラケズリで、4～12は切り離し後、回転ヘラケズリを施す。3は体部外面にスガが付着する。9・10は口縁内外面にスガが付着し、灯明皿としても使用。11・12の体部外面には墨書文字「郡」が正位で書かれている13は内外面に焼成後赤彩を施し、体部外面に線刻文字「門」？が見られる。14は底部外面に墨書文字「子券」？が見られ、さらに本例はD89との遺構間接合である。15は蓋。ロクロ整形で、内外面に焼成後赤彩を施す。16～21は甕。16は小形甕。17は「ロクロ甕」である。18は最大径を口縁に持つ長胴気味の器形で、外面頸部～口縁内面にハケナデを施す。胎土には小礫・雲母を含み、明らかに非在地系の土器である。古墳時代前期ではないことだけは確実、と付記しておきたい。19～21は常総型甕で、法量に見られる三者(大・中・小)を図化することができた。

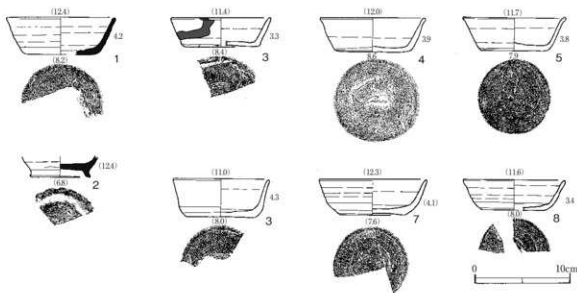
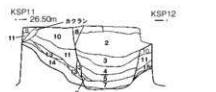
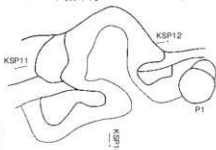
24は手捏ね土器としたが、あるいは甕の底部か。25～29は土製品で、全て転用甕。25のみ須恵器甕を用い、他は坏を用いる。30は台石か。31～35は鉄製品。31は鉄鎌で、32は刀子。他は不明である。



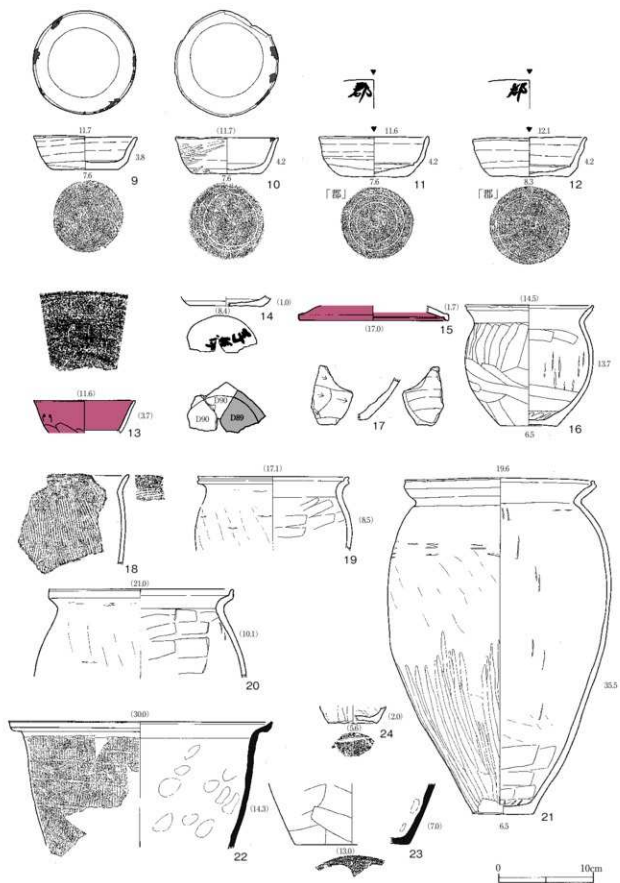
D90カマド土層説明

- | | |
|------------|---------------------------------|
| 1 黒褐色土 | 径0.5~1mm 黄スコリア少量、砂混。 |
| 2 黒褐色土 | 径1~2mm 黄色砂質のブロック、焼土粒子少量混。 |
| 3 暗褐色土 | 砂、粘土少量混。径1cm 黄色砂質のブロック少量混。 |
| 4 にぶい褐色土 | 砂、粘土主体、径1cm 焼土ブロック少量混。 |
| 5 暗赤褐色土 | 砂、粘土、焼土からなる。 |
| 6 暗赤褐色土 | ブロック状、焼土ブロックが集中。 |
| 7 暗赤褐色土 | 砂質、焼土粒子多量混。 |
| 8 黒褐色土 | 径0.5~3mm 黄スコリア多量混、焼土粒子少量混。 |
| 9 にぶい褐色土 | 砂、粘土主体。 |
| 10 灰褐色土 | 砂、粘土、焼土粒子含。 |
| 11 にぶい褐色土 | 砂、粘土主体、焼土ブロック少量混。しまり強。 |
| 12 にぶい赤褐色土 | 砂、粘土が焼けて赤化した部分。 |
| 13 暗褐色土 | 砂、粘土混、基盤の上。 |
| 14 暗褐色土 | 径1cm ロームブロック、径0.5~2mm 黄スコリア多量混。 |
| 15 褐色土 | ローム混、砂含、基盤の土。 |

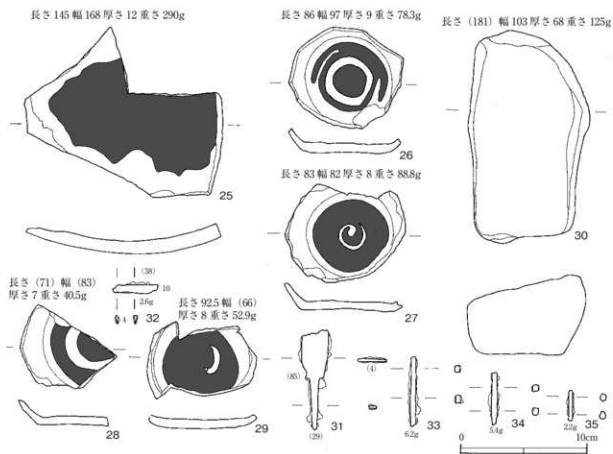
カマド掘り方



第118図 D90実測図



第119図 D90出土遺物



第120図 D90出土遺物(2)

D91(第121図)

位置 G9-65Gで検出。重複関係 M33に破壊される。平面形 隅丸方形(平行四辺形に近い)を呈する。規模 2.68m×2.98m。遺構確認面からの深さ0.34m。壁 ほぼ垂直に立ち上がる。床 貼床で、P1とP2を結んだ一帯が硬化している。壁溝 カマド部分を除いて全周するが、途切れる部分がある。カマド 北壁の中央部。両袖部と煙道部が残存し、火床部は焼けている。ピット 2本検出。うちP1が支柱穴で、P2は出入口に伴う可能性がある。覆土 10層に分層でき、暗褐色土系で埋め戻しと思われる。遺物出土状態 平面分布的には、カマド前面及び住居中央部分にやままとまりが見られる。垂直分布的には、覆土下層～床面付近にまとまりが見られる。建て替え 認められなかった。

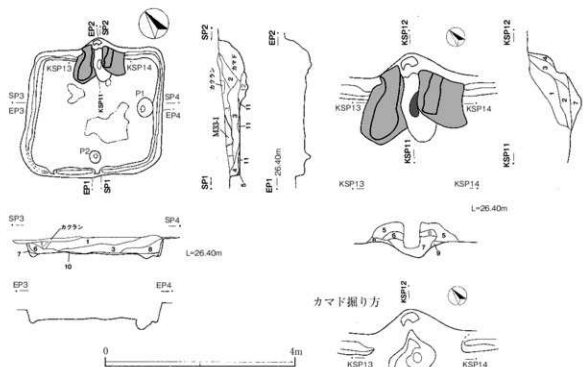
出土遺物(第121図)

出土総数は202点で、うち109点をトータル・ステーションで取り上げた。

1～3は土師器。1は坏。非ロクロ整形で、体部外面ヘラケズリ、内面はヘラミガキ。2は小形甕の口縁～胴上部。3は胴下半～底部。器壁が薄く、外面は乾燥が進んだ段階でのヘラケズリ。武蔵型甕。

D92(第122図)

位置 G9-75Gで検出。重複関係 D93を破壊し、D94の破壊を受ける。平面形 隅丸長方形を呈する。規模 3.96m×4.62m。遺構確認面からの深さ0.34m。壁 ほぼ垂直に立ち上がる。床 貼床で、カマド前面から中央一帯が硬化している。壁溝 カマド部分を除いて全周する。カマド 北壁の中央部。両袖部と煙道部が残存する。本例は比較的、煙道が長い。火床部は焼けている。ピット 4本検出。うちP1～P4が支柱穴である。覆土 7層に分層できた。遺物出土状態 平面分布的には、いたって散漫である。垂直分布的にも、疎らに見られる程度であるが、強いて言えば、覆土中層～上層に目立つ。建て替え 認められなかった。

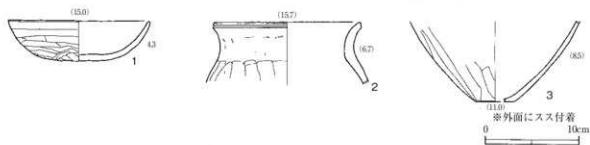


D91土層説明

- 1 暗褐色土 径0.5~1mm 黄スコリア。
- 2 暗褐色土 径0.5~1mm 焼土粒子少量
- 3 暗褐色土 粘土、焼土ブロック、焼土粒子まじり。
- 4 暗褐色土 径1mm 黄スコリア少量。焼土粒子極少量。
- 5 暗褐色土 ローム土まじり。
- 6 褐色土
- 7 暗褐色土 径0.5~1mm 黄スコリア少量。
- 8 褐色土 ローム土まじり。
- 9 暗褐色土 径0.5~1mm 黄スコリア。
- 10 暗褐色土 ローム土、ロームブロックまじり。粘性あり。
- 11 褐色土 ローム主体。粘性あり。貼床
- 12 暗褐色土 ロームまじり。焼土粒子極少量。粘性あり。

D91カマド土層説明

- 1 にぶい褐色土 粘土、砂主体。焼土少量。しまり強。
- 2 にぶい赤褐色土 焼土主体。径1cm 焼土ブロック少量。
- 3 暗褐色土 径1mm 焼土粒子極少量。しまりやや強。
- 4 褐色土
- 5 にぶい褐色土 粘土、砂主体。焼土にじむ。しまり強。
- 6 にぶい赤褐色土 粘土、砂、焼土まじり。径1~3mm 焼土ブロック。しまりやや強。
- 7 暗赤褐色土 焼土主体。砂多量。焼土粒子、ブロック。火床を成す土。
- 8 褐色土 粘土、ロームまじり。しまり強。基盤の土。
- 9 褐色土 しまりやや強。

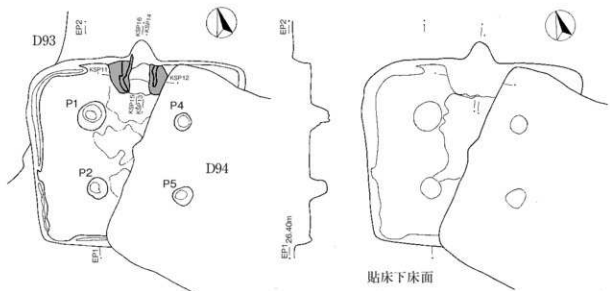


第121図 D91実測図

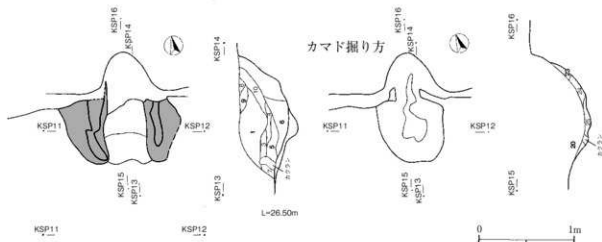
出土遺物 (第122図)

出土総数は181点で、うち120点をトータル・ステーションで取り上げた。

- 1・2は土師器。1は小形甕。外面ヘラケズリ、内面はヘラナデ。2は外面にススが付着。武蔵型甕。
- 3は須恵器甕の胴部片。タタキ整形で、外面は平行タタキ目が見られる。
- 4は手捏ね土器で、略完形。5は不明土製品で、略角柱状に面取り整形した上で焼成している。



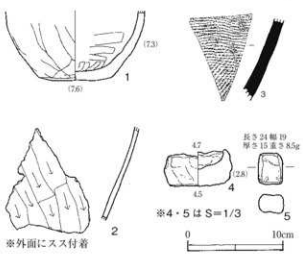
貼床下床面



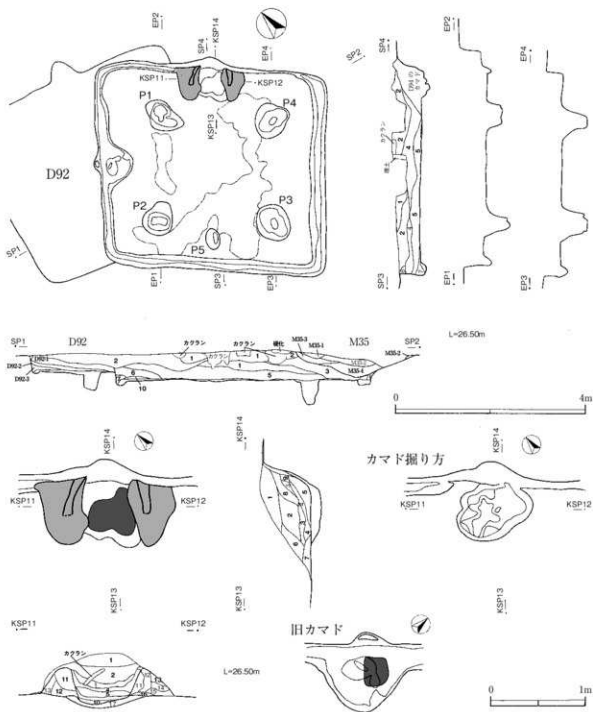
カマド掘り方

D92カマド土層説明

- | | | |
|-------|---------|-----------------------------|
| 1 | 暗褐色土 | 径2~3mm 焼土粒子少量。粘土まじり。 |
| 2 | 暗褐色土 | 径0.5~1mm 焼土ブロック、炭化材片、粘土まじり。 |
| 3 | 暗褐色土 | 白色粘土多量 |
| 4 | 灰褐色土 | 径1~3mm 焼土粒子均一に含む。 |
| 5 | にぶい赤褐色土 | 焼土主体。径0.5~1mm 焼土ブロック。 |
| 6 | 暗赤褐色土 | 砂、粘土少量。 |
| 7 | 褐色土 | 砂多量。焼土粒子少量。 |
| 8 | 灰褐色土 | 砂、焼土粒子極少量。しまりやや強。 |
| 9 | 暗褐色土 | 粘土多量。砂、粘土。しまりやや強。 |
| 10 | 暗赤褐色土 | 径3~4mm 焼土粒子、砂、少量の粘土。 |
| 11~19 | そで構築土 | |
| 14 | 褐色土 | 径1~5mm 焼土粒子、粘土、砂極少量。しまり強。 |
| 18 | 暗褐色土 | 基盤の土。 |
| 20 | 暗褐色土 | 粘土、砂混。焼土粒子少量。しまり強。基盤の土。 |
| 21 | にぶい赤褐色土 | 径1~2cm。ロームブロック。火床の下の土。 |
| 22 | 暗褐色土 | 焼土、粘土。砂混。蒸熱した部分。しまり強。 |
| 23 | 褐色土 | 粘土少量混。 |
| 24 | 褐色土 | 粘土少量。 |
| 25 | 褐色土 | ローム混。焼土極少量。 |
| 25 | 褐色土 | ロームブロック混。 |



第122図 D92実測図



D94土層説明

- 1 褐色土 径1~3mm 黄スコリア多量含、焼土粒子極少量含
- 2 黒褐色土 径0.5~5mm 黄スコリア多量含、焼土粒子、径1~2cm ロームブロック極少量含
- 3 褐色土 径1~5mm 黄スコリア多量含、炭化材片少量含
- 4 暗褐色土 径1~5mm 黄スコリア多量、白色粘土混。
- 5 暗褐色土 径1~5mm 黄スコリア多量、白色粘土混。
- 6 黒褐色土 径1~5mm 黄スコリア、径2~3cm ロームブロック。
- 7 暗褐色土 ローム混。径1~2mm 黄スコリア、粘性あり。
- 10 暗褐色土 径1~2mm 黄スコリア多量、ローム混。粘性やや強。

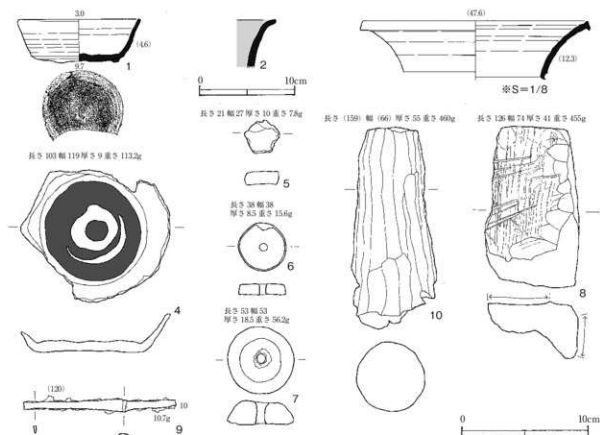
- 4 灰褐色土 粘土、砂、焼土主体、粘性強。
- 5 赤褐色土 焼土主体、燃焼部の痕跡。
- 6 暗褐色土 ローム混。
- 7 暗褐色土 径0.5mm 焼土粒子、径1~5mm 黄スコリア少量、しまりやや強。
- 8 灰褐色土 焼土粒子、焼土混。
- 9 褐色土 焼土粒子、ブロック、径1cm、ロームブロック
- 10 暗赤褐色土 焼土粒子、ブロック、径1cm、ロームブロック
- 11 にぶい赤褐色土 粘土、砂焼土からなる。カマド構成材、しまり強。
- 12 にぶい褐色土 粘土、砂主体、カマド構築材、しまり強。
- 13 黒褐色土 粘土、砂少量、カマド外側に張り付けた土、しまりやや強。

D94カマド土層説明

- 1 暗褐色土 径0.5~5mm 黄スコリア、砂。
- 2 灰褐色土 径1~2mm 黄スコリア、径1~2mm 焼土粒子少量、粘土にじむ。
- 3 にぶい褐色土 粘土主体、砂混、ブリッジ状に堆積。カマド天井部が落ちこんだもの。

- 14 黄褐色土 粘土、そでの芯、しまり強。
- 15 灰褐色土 粘土、砂、ローム混、しまり強、そでの基盤。
- 16 にぶい褐色土 粘土、砂主体、黄スコリア混、そでの基盤
- 17 暗褐色土 径1cm ロームブロック、径1~3mm 黄スコリア、径1~2mm、焼土粒子

第123図 D94実測図



第123図 D94出土遺物

D94(第123図)

位置 G9-75Gを中心に、76Gにまたがる。重複関係 D92・96・97を破壊し、M35の破壊を受ける。平面形 隅丸方形を呈する。規模 4.37m×4.73m。遺構確認面からの深さ0.56m。壁 ほぼ垂直に立ち上がり、オーバーハング気味の箇所がある。床 北コーナー付近は貼床で、その他は直床。カマド前面からP3-P4の内側及び南壁にかけてが硬化している。壁溝 カマド部分とカマド北東隅を除いて全周する。カマド 新旧2基。旧カマドは西壁の中央部で、煙道部と火床部のみ残存する。新カマドは北壁の中央部。両袖部と煙道部が残存し、火床部は焼けている。ピット 5本検出。うちP1~P4が支柱穴で、P5は出入口に伴うものである。覆土 11層に分層できた。遺物出土状態 平面分布的には、比較的散漫で、空白域が目立つ。垂直分布的には、床面付近~覆土中層にややまとまりが見られ、ほぼ無遺物層を介在し、覆土上層に若干認められる。建て替え カマドの造り替えが認められるもの、柱穴その他には明瞭な建て替えの形跡は見られない。備考 本跡のP1~P2間に片面が焼けた痕跡がある。炉になるか。

出土遺物(第124図)

出土総数は244点で、うち97点をトータル・ステーションで取り上げた。

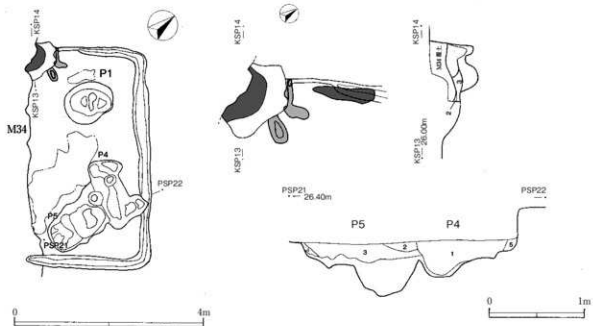
1~3は須臾器。1は坏。当初は高台付坏であったが高台を欠き、欠損部分を研磨して使用し続けたものである。2は単口縁の長頸壺で、内面に自然軸がかかる。3は大甕で、D102と遺構間接合する。

4・5・10は土製品。4は転用硯で、5は土製円盤(小形)。10は支脚。ヘラケズリの面取りを行う。

6~8は石製品。6・7は紡錘車で、8は砥石。9は鉄製品で、刀子。柄の木質部がわずかに残存する。

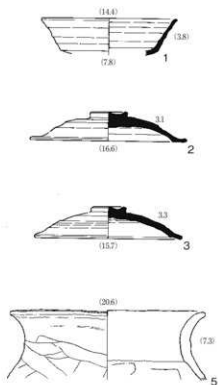
D95(第125図)

位置 G9-76Gで検出。重複関係 M34に破壊される。平面形 方形を基調とする。規模 4.68m



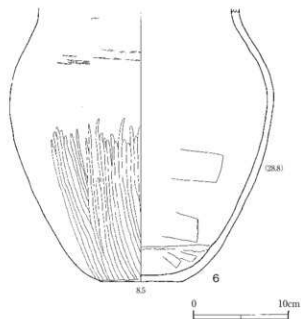
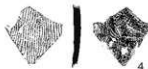
D95カマド土層説明

- 2 暗赤褐色土 焼土主体。粘土、砂、径1cm 焼土ブロック
 穴床の下の土。
 3 にぶい赤褐色土 穴床の土。

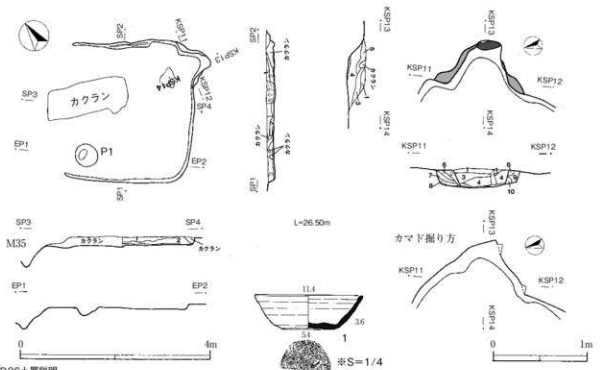


D95-P4・P5土層説明

- 1 暗褐色土 径1~4cm ロームブロック、径1~10mm 黄
 スコリア多量。覆土。
 2 暗褐色土 径0.5~5mm 黄スコリア多量。炭化材片少
 量。覆土。
 3 暗褐色土 径1~3mm 黄スコリア少量。覆土。
 4 褐色土 ロームまじり。
 5 暗褐色土 径1~2mm 黄スコリア多量。D95焼溝覆土。



第125図 D95実測図



D96土層説明

- 1 暗褐色土 径1~2mm 黄スコリア、粘土極少量、粘性あり。
- 2 暗褐色土 砂、粘土、焼土粒子少量、粘性あり。
- 3 暗褐色土 径1~2mm 黄スコリア。

D96カマド土層説明

- 1 褐色土 砂、焼土、炭化材料、しまり強。
- 2 灰褐色土 粘土、砂主体、しまり強。
- 3 暗褐色土 粘土、砂、焼土粒子、炭化材料、しまり強。
- 4 灰褐色土 粘土、砂、焼土粒子、ブロック、径1~2mm、炭化材料、しまり強。
- 5 灰褐色土 粘土、砂主体、焼けて赤化した粘土含む、しまりやや強。
- 6 暗褐色土 粘土、砂少量。
- 7 にぶい暗褐色土 粘土、砂まじり、しまり強。
- 8 暗褐色土 ロームまじり、基盤となる土、しまり強。
- 9 にぶい暗褐色土 粘土、砂主体、しまり強。
- 10 暗褐色土 粘土、砂少量、炭化材料。

第126図 D96実測図

×(2.64m)、遺構確認面からの深さ0.29m。壁 ほぼ垂直に立ち上がる。床 部分的に貼床。P4・P5の周囲が硬化。壁溝 残存部分では廻らせている。カマド 西壁の中央部。右袖部と煙道部の一部及び火床部の末端が残存する。ピット 4本検出。P1・P3~P5が本跡に伴う。覆土 6層に分層でき、暗褐色土系。遺物出土状態 平面分布的には、カマド前面にややまとまりが見られ、垂直分布的には、覆土中層にまとまりがある他、覆土下層~床面付近にも若干分布する。建て替え 認められなかった。

出土遺物(第125図)

出土総数は189点で、うち100点をトータル・ステーションで取り上げた。

1~4は須恵器。1は坏で、常陸産。2・3は蓋。「かえり蓋」で、常陸産。4は甕。内面に青海波紋。

5・6は土師器甕。5は在地の甕で、前代の遺制が見られる。6は常総型甕で、頸部以上を欠損する。

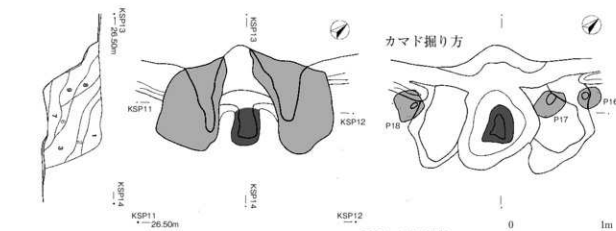
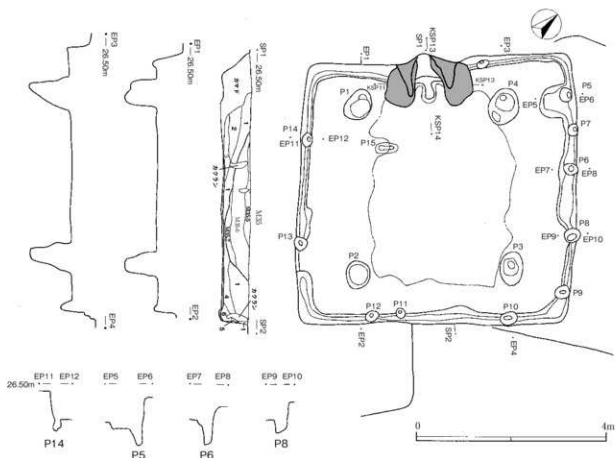
D96(第126図)

位置 G9-76・86Gにまたがる。重複関係 D94及びM35に破壊される。平面形 方形を基調とする。規模 (2.67m)×3.05m。遺構確認面からの深さ0.14m。壁 攪乱が多く、やや不明瞭な部分が多い。床 部分的に貼床で、ほぼ平坦である。カマド前面が硬化している。壁溝 北東壁に一部見られるのみ。カマド 東コーナー。両袖部と煙道部が残存する。煙道部は壁外に比較的大きく掘り込まれ、両側面に粘土が少な目の構築土を貼り付ける。火床部は焼けている。ピット 1本検出。主柱穴ではないと思われる。覆土 3層に分層でき、暗褐色土系。遺物出土状態 平面分布的には、いたって散漫である。垂直分布的には、覆土上層に多少まとまりが見られる。建て替え 認められなかった。

出土遺物(第126図)

出土総数は46点で、うち19点をトータル・ステーションで取り上げた。

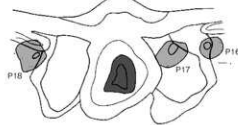
1は須恵器坏。ロク口整形で、底部は回転糸切りのまま無調整である。胎土は小礫がやや目立つ。



D98土層説明

- 1 暗褐色土 径1~2mm 黄スコリア多量。
径1~3mm 焼土粒子。
- 2 暗褐色土 粘土、砂多量。焼土粒子、ブロック、径1~2mm 黄スコリア。
- 3 暗褐色土 粘土、砂、焼土粒子、径1~5mm 黄スコリア。
- 4 黒褐色土 径0.5~5mm 黄スコリア。
- 5 黒褐色土 ロームまじり。
- 6 暗褐色土 径0.5~1mm 黄スコリア多量。焼土粒子、炭化材片、径1cm、ロームブロック、粘土泥。粘性や々あり。

カマド掘り方



D98カマド土層説明

- 1 暗褐色土 径1mm 黄スコリア。径1~5mm 焼土粒子、炭化材片、粘土、砂少量。しまり強。
- 2 暗褐色土 粘土、砂多量。焼土粒子、炭化材片少量。しまり強。
- 3 暗褐色土 径1~5mm 黄スコリア多量。焼土粒子、炭化材片、粘土、砂。
- 4 にぶい褐色土 粘土、砂主体。
- 5 にぶい褐色土 粘土、砂、焼土まじり。
- 6 褐色土 焼土、粘土、砂多量。
- 7 にぶい褐色土 粘土主体。粘土、砂多量。
- 8 にぶい褐色土 粘土、砂まじり。焼土粒子少量。しまり強。
- 9 にぶい褐色土 粘土、砂主体。下方は焼土まじり。
- 10 暗褐色土 砂、粘土まじり。
- 11 にぶい褐色土 砂、粘土主体。しまり強。
- 12 にぶい褐色土 砂、粘土主体。カマドそのでの芯。しまり強。
- 13 赤褐色土 12層の焼けて赤色化した部分。
- 14 灰褐色土 砂、粘土、ロームまじり。しまり極めて強。
- 15 にぶい褐色土 純粋な粘土。しまり強。

第127図 D98実測図

D98(第127図)

位置 G9-85Gを中心に、74Gにまたがる。重複関係 D97・99を破壊し、M35による破壊を受ける。平面形 方形を呈する。規模 5.72m×5.90m。遺構確認面からの深さ0.53m。壁 垂直で、しっかりと掘られている。床 貼床で、カマド前面から主柱穴を結んだ内側が硬化している。壁溝 カマド部分及び南西コーナー付近の一角を除いて全周する。部分的に幅広となる。カマド 北壁の中央部。両袖部と煙道部が残存し、火床部は床面より一段高くなる。ピット 18本検出。うちP1～P4が主柱穴である。P5～P14は壁柱穴ないし周溝内柱穴に該当する。覆土 8層に分層でき、暗褐色土が主体。遺物出土状態 平面分布的には、万遍なくとも見せなくもないが、強いて言えば、カマド前面及び南コーナーにまとまりが認められる。垂直分布的には、覆土上層・中層・下層・床面付近にまとまりが見られ、上層は北西方向からの廃棄行為を示しており、中層は東コーナーの方向からの廃棄行為を示している。即ち、各々のまとまりは廃棄行為に裏打ちされたもので、少なくとも三回以上の廃棄が行われたことを示唆する。建て替え 認められなかった。備考 カマド脇の掘り方からピット3本を検出。

出土遺物(第128図～130図)

出土総数は2183点で、うち1421点をトータル・ステーションで取り上げた。

1～18は須恵器。1～7は坏。ロクロ整形で、体部下端はヘラケズリ。底部は回転ヘラ切り後、ヘラケズリ(1～3・5)、切り離した後、静止状態でのヘラケズリ(4・7)、切り離した後、回転ヘラケズリ(6)。このうち、1～6は胎土に雲母・石英などを含み、常陸産。8は器面の色調が灰色であるが、土師器か。

9・10は高台付盤。ロクロ整形で、9は破損面が磨れている。胎土に雲母を含み、常陸産。

11・12は蓋。ロクロ整形で、天井部は回転ヘラケズリ。11は短頸壺の蓋で、常陸産。12は坏蓋。

13～17は甕。13は口縁～頸部。口縁端部の縁帯が発達しないもの。14～17はタタキ整形で、14・16は外面に平行タタキ目が見られる。15は格子状に交差する。17は外面に「同心円タタキ目」を有する。14・17は胎土に雲母を含み、常陸産。15は器壁が薄手である。18は瓶。五孔式で、常陸産。

19～21は灰袖陶器。いずれも水瓶か。20は頸部で、内外面に施軸あり。21は口縁～頸部片。単口縁で、内外面に軸がつかかる。須恵器になるか。3点とも胎土に黒色粒子を含み、19を除き白色粒子も含む。

22～36は土師器。22～24・26は坏。22・23は非ロクロ整形で、体部外面はヘラケズリ後、ヘラミガキ、内面はナデ後ヘラミガキ。平底気味。24はロクロ整形で、体部下端は回転ヘラケズリ。底部は回転糸切り。一応は「箱形坏」の範疇。26はロクロ整形で、内外面とも赤彩ないし朱ウシ塗り。

25は高台付坏。ロクロ整形で、回転糸切り後周縁は回転ヘラケズリ、付け高台。口縁外面～内面にかけてヘラミガキ。赤彩ありか。体部外面及び底部外面に線刻(判読不能)が見られる。

27は盤か。ロクロ整形で、26と同様に内外面とも赤彩ないし朱ウシ塗り。

28は蓋。ロクロ整形で、天井部は回転ヘラケズリ。焼成後、内外面とも赤彩を施す。

29は高盤。ロクロ整形で、体部下端回転ヘラケズリ。焼成後、内外面とも赤彩を施す。

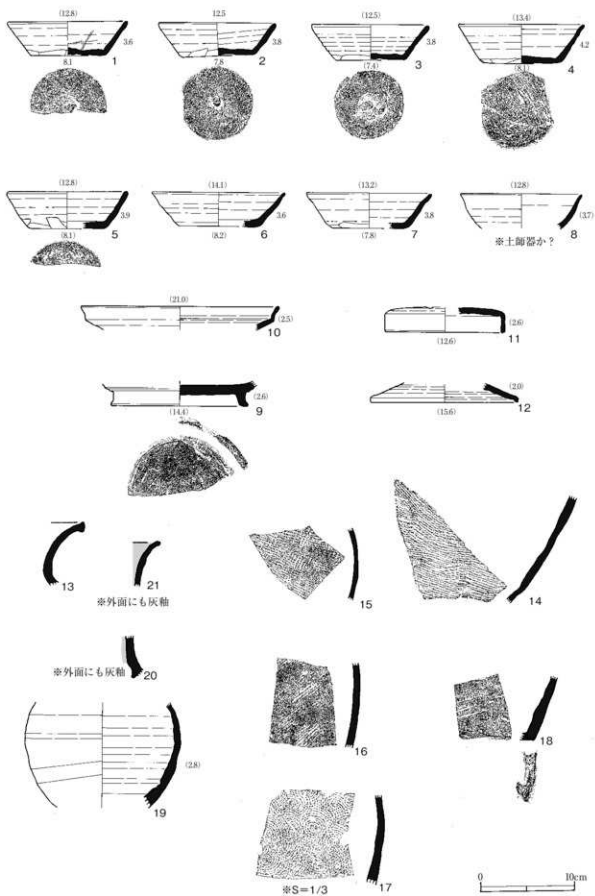
30・31は小形甕。31は「ロクロ甕」で、内面にロクロナデが見られる。底部は回転糸切りで無調整。

32～35は甕。32・33は常総型甕。32は外面の胴中位に、ナデ消していないヘラケズリの下地が見える。33は胴部外面のヘラミガキのエリアが、胴下半以下と、かなり狭くなるもの。34・35は武蔵型甕。口縁は多少段を意識しつつあるとはいえ、いまだ「くの字状」に外反して立ち上がる。

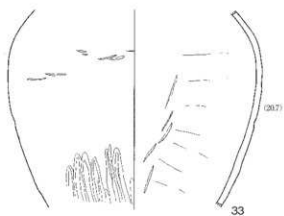
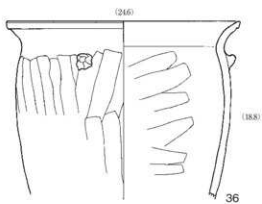
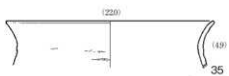
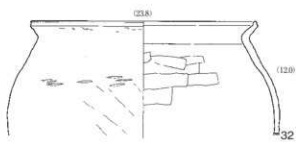
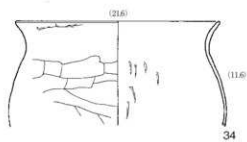
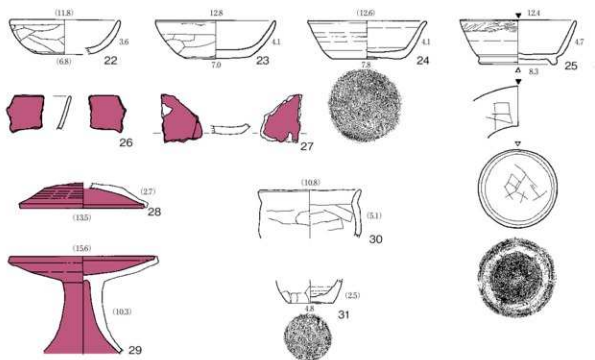
36は瓶。口縁端部はつまみ上げる。口縁内外面ナデ、胴部外面ヘラケズリ、内面はヘラナデ。

37～43は土製品。全て土製円盤。37・38は大形、39～43は小形。44は「サイコロ状の土器片」。

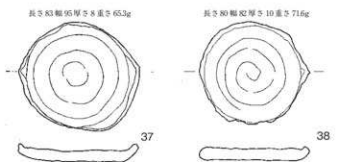
45～55は鉄製品。45は火打金。46は鉄鎌。47～49・53は刀子。50・51は不明の金具。54は手鎌。52・55は不明鉄製品。57は金床石で、上下に使用面があり、上面は磨れ面と敲打痕。56は手捏ね土器。



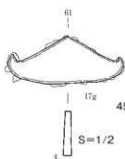
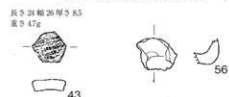
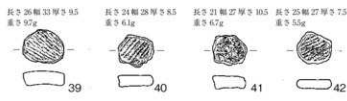
第128図 D98出土遺物(1)



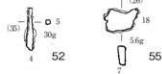
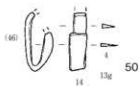
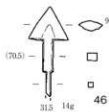
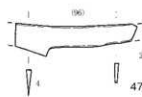
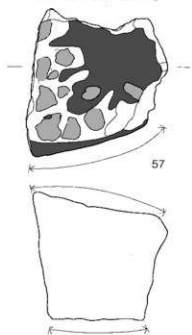
第129図 D98出土遺物(2)



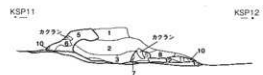
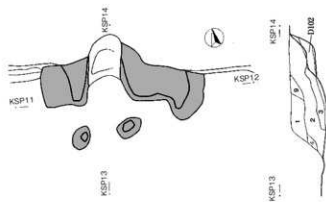
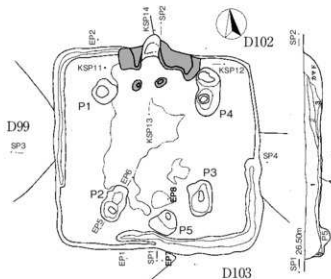
サイコロ状の土器片 (輪尺不同) 44



長さ126幅107厚さ100重さ1700g



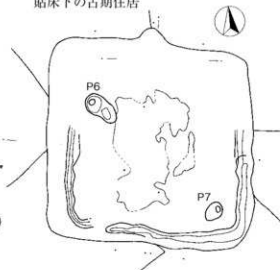
第130図 D98出土遺物(3)



カマド掘り方



貼床下の古期住居



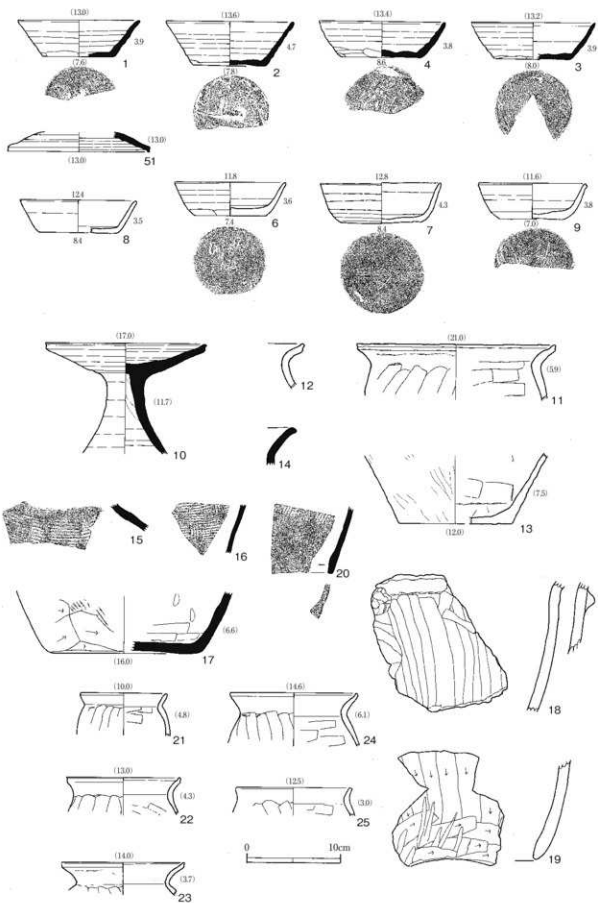
D101土層説明

- | | |
|----------|-------------------------------|
| 1 暗褐色土 | 径2mm 焼土粒子, 炭化材片少量。 |
| 2 にぶい褐色土 | 粘土, 砂多量。焼土粒子。 |
| 3 暗褐色土 | 粘土, 砂, 焼土粒子。 |
| 4 暗褐色土 | 径1~5mm ロームブロック, 径1~3mm 黄スコリア。 |
| 5 暗褐色土 | ロームまじり。 |
| 6 褐色土 | ローム焼土粒子, 炭化材片。粘性やや有り。床の一部。 |

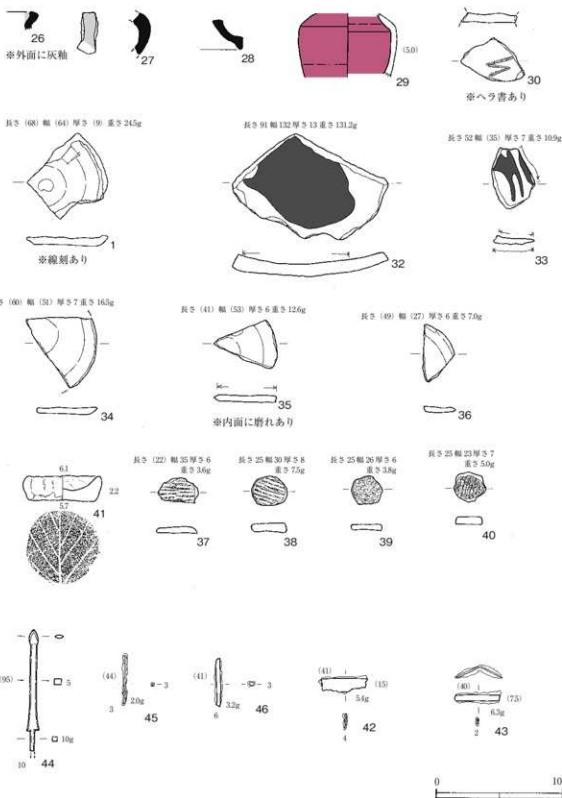
D101カマド土層説明

- | | |
|-----------|-------------------|
| 1 灰褐色土 | 砂, 粘土, 焼土粒子, 炭化材片 |
| 2 暗褐色土 | 焼土粒子, 砂, 粘土, 炭化材片 |
| 3 赤褐色土 | 焼土主体, 砂, 粘土。 |
| 4 にぶい褐色土 | 砂, 粘土主体。 |
| 5 にぶい褐色土 | 砂, 粘土主体。そでの主体を成す土 |
| 6 暗褐色土 | 焼土, 砂, 粘土少量。 |
| 7 赤褐色土 | そでの赤く焼けた部分 |
| 8 黒褐色土 | 砂, 粘土, 焼土。カマド外 |
| 9 にぶい褐色土 | 砂, 粘土主体, 焼土粒子極少量。 |
| 10 赤褐色土 | 粘土, 砂の赤く焼けた部分。 |
| 11 にぶい褐色土 | 粘土, 砂主体。 |
| 12 暗褐色土 | 粘土, 砂, 焼土。しまり強。 |
| 13 暗褐色土 | 粘土, 砂, 焼土少量。 |

第131図 D101実測図



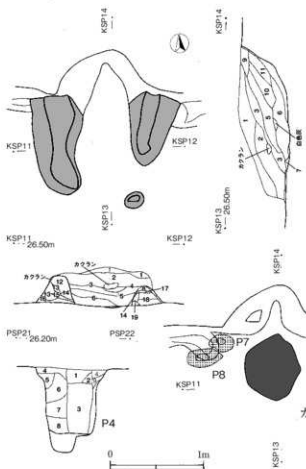
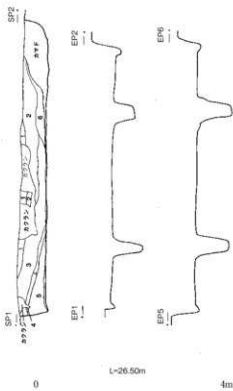
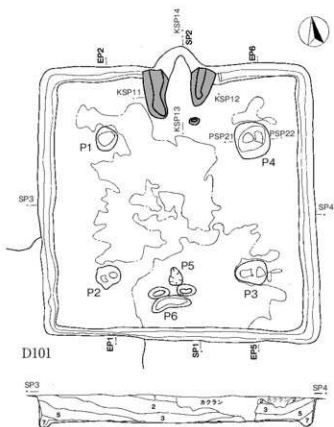
第132図 D101出土遺物



第133図 D101出土遺物(2)

D101 (第131図)

位置 G9-95Gで検出。重複関係 D99・102・103を破壊する。平面形 隅丸方形を呈する。規模 4.28m × 4.39m。遺構確認面からの深さ0.43m。壁 ほぼ垂直に立ち上がる。床 貼床で、カマド前から床面中央西寄りが硬化している。貼床下より古期住居を検出した。壁溝 カマド部分と北東・南西コーナーを除いて全周する。カマド 北壁の中央部。両袖部及び煙道部が残存し、火床部は焼けている。



カマド掘り方

D102土層説明

- 1 灰褐色土 径0.5-2mm 黄スコリア含
- 2 黒褐色土 径1-3mm 黄スコリア多量含 焼土粒子含
- 3 暗褐色土 径1-5mm 黄スコリア多量含 焼土粒子、砂、粘土含、粘性有り
- 4 暗褐色土 径0.5-3mm 黄スコリア含、粘性有り
- 5 暗褐色土 径1-5mm 黄スコリア、焼土粒子含、粘性有り
- 6 暗褐色土 径1-5mm 黄スコリア、粘土、砂、焼土多量含、粘性有り
- 7 褐色土 径1-5mm 黄スコリア、ローム混

D102カマド土層説明

- 1 暗褐色土 粘土混、焼土粒子ごく少量混、カマド構築材
- 2 暗褐色土 粘土、砂、焼土粒子少量含
- 3 暗褐色土 粘土やや多量含、焼土少量含、カマド構築材
- 4 にぶい暗褐色土 焼土、粘土混
- 5 にぶい暗褐色土 粘土混ユダ区、焼土混、煙道部は赤く焼けて硬化、カマド構築材
- 6 にぶい暗褐色土 焼土、焼けた粘土、灰混
- 7 黒褐色土
- 8 暗褐色土 粘土少量混、焼土混、そでの一部
- 9 暗褐色土 焼土、砂、粘土がにじむ
- 10 暗褐色土 焼土、焼土ブロック多量含、しまり有り
- 11 暗赤褐色土 焼土、粘土、砂がにじむ
- 12 暗褐色土 粘土、砂、焼土少量混
- 13 にぶい暗褐色土 粘土、砂主体、中央付近焼土にじむ、しまり強
- 14 赤褐色土 焼土主体、カマドのそで内で焼けて硬化した部分
- 15 暗褐色土 焼土粒子含、カマドの基礎の土、しまり強
- 16 暗褐色土 粘土、砂混、焼土粒子ごく少量含、しまり強
- 17 暗赤褐色土 焼土粒子、粘土、砂含、しまり強
- 18 暗赤褐色土 焼土主体、中央付近焼土にじむ
- 19 暗赤褐色土 炭化材片含、焼土にじむ

P4土層説明

- 1 暗褐色土 径1-3mm 黄スコリア、焼土粒子混、柱根
- 2 褐色土 ローム主体、径1cm ロームブロック混、粘性有り
- 3 褐色土 ローム主体、径1cm ロームブロック混、粘性有り
- 4 暗褐色土 ローム混、径1-3mm 黄スコリア混、しまり有り
- 5 褐色土 ローム混、粘性有り
- 6 褐色土 ローム主体、粘性強
- 7 褐色土 径3-4cm ロームブロック混、粘性強
- 8 褐色土 ローム主体、粘性強
- 9 褐色土 ローム主体、径1cm ロームブロック混

第134図 D102実測図

ピット 7本検出。うちP1～P4が支柱穴である。P5は出入口に伴うもので、住居の壁に向かって内傾する。P6・P7は古期住居の支柱穴であり、P6には建て替えの形跡が認められる。覆土 6層に分層できた。遺物出土状態 平面分布的には、ほぼ万遍なく出土し、垂直分布的にも万遍なく見なすことができるが、強いて言えば、覆土中層～上層にやや目立つ。建て替え 少なくとも2回の建て替えが認められた。古期住居は、東・南・西の壁溝と2本の支柱穴及び床面を検出した。床面は直床で、中央部分が硬化している。そして、2本の支柱穴のうち、P6には建て替えの形跡が認められる。従って、古期住居の時点で既に1回建て替えが行われた訳である。新期住居は壁を掘り抜けるだけでなく、貼床により床面のかさ上げを行っている。事象的には、反復拡張ということになる。

出土遺物(第132図・133図)

出土総数は1009点で、うち940点をトータル・ステーションで取り上げた。

1～5・10・14～17・20は須恵器。1～4は坏。ロクロ整形で、体部下端はヘラケズリ。底部は回転ヘラ切り後、静止状態でのヘラケズリ(1・2)、切り離し後、静止状態でのヘラケズリ(2・3)。全て常陸産。

5は蓋。口縁～天井部が残存。ロクロ整形で、天井部外面は回転ヘラケズリを施すものである。

10は高盤。ロクロ整形で、盤部の体部下端は回転ヘラケズリ。脚部内面に絞込み痕あり。

14～17は甕。16は平行タタキ目が交差し、格子状になるもの。15・17は常陸産。20は甕。

6～9・11・13・18・19・21～25・29は土師器。6～9は坏。ロクロ整形で、体部下端は回転ヘラケズリ(7・9)、ヘラケズリ(6)、無調整(8)。底部は切り離し後、回転ヘラケズリ(6・7)、ヘラケズリ(9)、回転ヘラ切り後、ヘラケズリ(8)。これら4点は「箱形坏」である。

11・13は甕。13は常総型甕。11は口縁端部をつまみ上げるもので、常総型甕の影響があるか。

21～25は小形甕。25を除き、口縁端部をつまみ上げるもの。18・19は甕で、単孔式。

29は小形短頸甕。頸部～胴下半の残存。ロクロ整形で、内外面焼成後赤彩を施す。41は手捏ね土器。

26・27は灰釉陶器。水瓶と思われるが、27は手付瓶の把手か。28は須恵器か。脚台部の裾部分。

31～40は土製品。32・33は転用硯。31・34～36は土製円盤(大形)。37～40は土製円盤(小形)。

42～46は鉄製品。42は刀子。43も刀子か。44は鉄鏝。45・46は棒状かつ断面形は方形。不用品。

D102(第134図)

位置 G9-94Gを中心に、95Gにまたがる。重複関係 D101に破壊される。平面形 方形を呈する。

規模 5.88m×5.90m。遺構確認面からの深さ0.60m。壁 ほぼ垂直に立ち上がる。床 貼床で、カマ

ド前面から南壁にかけての帯が硬化している。壁溝 カマド部分を除いて全周する。カマド 北壁の

中央部。両袖部及び煙道部が残存し、火床部平坦な構造となっており、焼けている。ピット 6本検出。

うちP1～P4が支柱穴で、P1を除いて建て替えの形跡が認められる。P5・P6は出入口に伴うもので、

これらに接して床面の高まりが見られる。覆土 7層に分層できた。遺物出土状態 平面分布的には、

ほぼ万遍なく出土している。垂直分布的には、万遍なく見なせなくもないが、強いて言えば、覆土下

層～床面付近にまとまりが見られる。建て替え 支柱穴の知見から、建て替えが認められた。

出土遺物(第135図)

出土総数は1288点で、うち690点をトータル・ステーションで取り上げた。

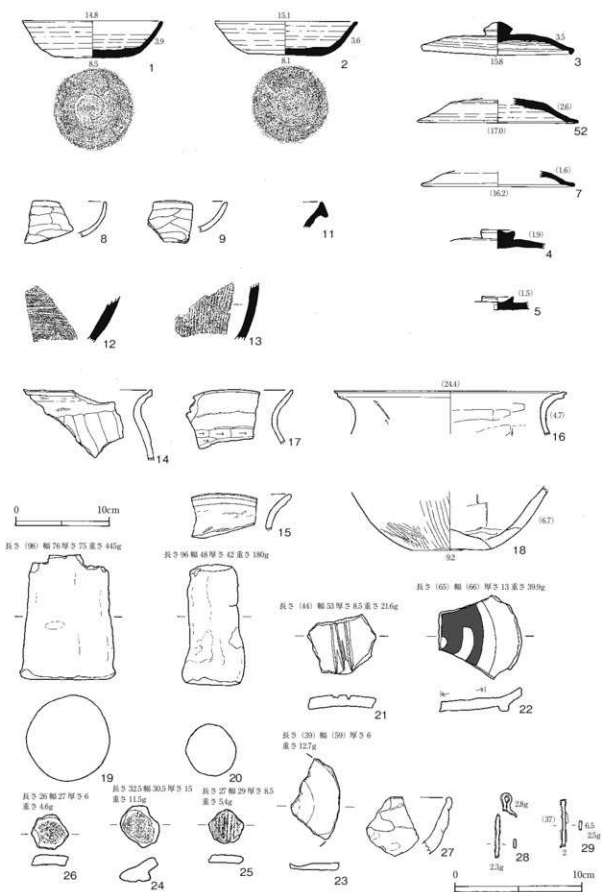
1～7・11～13は須恵器。1・2は坏。底部は回転ヘラ切り後、回転ヘラケズリで、常陸産。3～7は蓋。

3は擬宝珠状のつまみ付。6・7は「かえり蓋」で、3以外は常陸産。11～13は甕。12・13は常陸産。

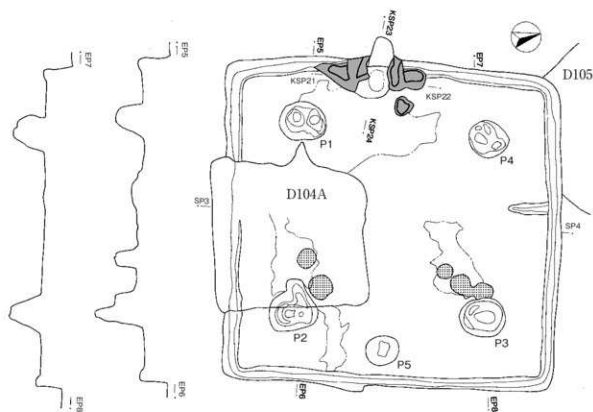
8・9・14～18は土師器。8・9は非ロクロ整形の坏。16・18は常総型甕。17は武蔵型甕である。

19～26は土製品。19・20は支脚。21は転用砥石。22は転用硯。23～26は土製円盤(大形・小形)。

28・29は鉄製品。28は太刀の「足金具」か。29同様のものである。27は手捏ね土器。



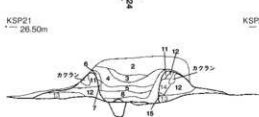
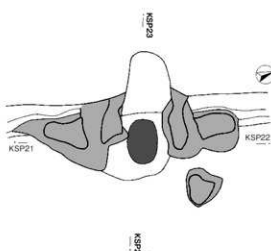
第135図 D102出土遺物



L=26.50m



0 4m



D104B 土層説明

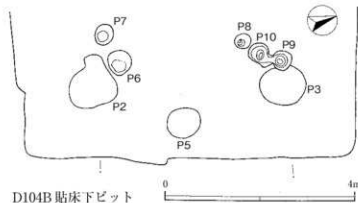
- 6 褐色土 径1~2mm 黄スコリア多量含
- 7 暗褐色土 径0.5~3mm 黄スコリア含、焼土粒子ごく少量混
- 8 暗褐色土 径0.5~3mm 黄スコリア含径1cm ロームブロック混
- 9 黒褐色土 径0.5~3mm 黄スコリア多量含、焼土粒子、粘土、砂ごく少量混、しまりあり
- 10 暗褐色土 粘土、砂、焼土粒子、ブロック含
- 11 暗褐色土 径1~3mm 黄スコリア多量含、径1~2cm ロームブロック含、しまりあり
- 12 暗褐色土 径0.5~3mm 黄スコリア、焼土粒子、炭化材料、多量含
- 13 暗褐色土 径1~2mm ロームブロック、ローム混、粘性有り

D104B カマド土層説明

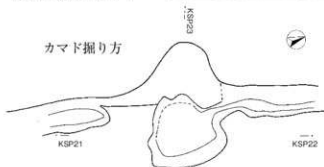
- 1 暗褐色土 粘土、砂、焼土粒子、黄スコリア混しまり強
- 2 にぶい暗褐色土 粘土、砂、焼土粒子、多量含しまり強
- 3 暗褐色土 粘土、砂含、焼土粒子少量混
- 4 明褐色土 粘土、砂主体、焼けて非化した部分あり
- 5 にぶい赤褐色土 焼土主体、砂、粘土が焼けて非化した土
- 6 明褐色土 粘土、砂主体、そでの焼けて非化した部分
- 7 明赤褐色土 そでの焼けて非化した部分
- 8 にぶい赤褐色土 焼土主体、黄白色土含
- 9 にぶい赤褐色土 焼土、焼土ブロック主体
- 10 にぶい赤褐色土 焼土、砂主体
- 11 明褐色土 粘土、砂主体、黄色味あり、しまり強
- 12 にぶい暗褐色土 粘土、砂、焼土混、白っぽい粘土、焼土混
- 13 褐色土 粘土、砂、焼土混、基底の上、しまり強
- 14 にぶい赤褐色土 焼土主体、砂、粘土含
- 15 暗赤褐色土 黒色の物質がブロック状にある

0 1m

第136図 D104B 実測図



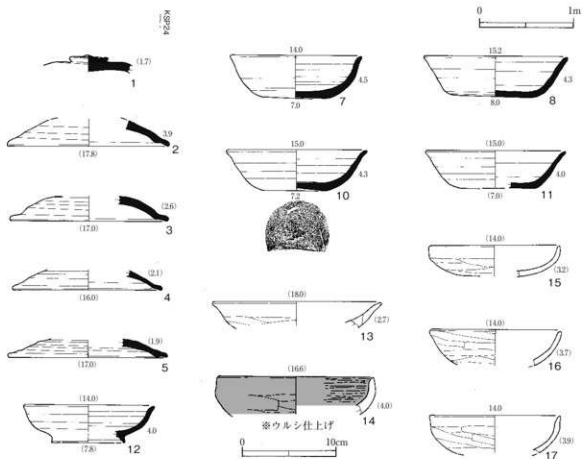
D104B 貼床下ビット



カマド掘り方

D104A 土層説明

- 1 黒褐色土 径0.5~3mm 黄スコリア多量含、径1cm ロームブロック 少量混しまりあり
- 2 黒褐色土 径0.5~3mm 黄スコリア多量含、径1~2mm ロームブロック少量混、焼土粒子、粘土、砂ごく少量混。しまりあり
- 3 にぶい 褐色土 カマド起源の粘土、砂主体、焼土粒子、炭化材片少量含、しまりあり。
- 4 黒褐色土 径0.5~3mm 黄スコリア多量含、径1cm ロームブロック少量混、焼土粒子、炭化材片、粘土、砂少量混、粘性やや強
- 5 暗褐色土 径0.5~5mm 黄スコリア多量含、径1cm ロームブロック少量混



第137図 D104B 実測図 (2)

D104B (第136図・137図)

位置 G10-5Gで検出。重複関係 D104Aに破壊される。平面形 方形を呈する。規模 6.92m × 7.02m。遺構確認面からの深さ0.62m。壁 ほぼ垂直に立ち上がる。床 中央部分はローム掘り残しの直床で、コーナー部分は貼床である。カマド前面からP1-P2間が硬化している。壁溝 カマド部分を除いて全周する。北壁中央に長さ0.9mの間仕切りを有する。カマド 西壁の中央部。両袖部と煙道部が残存する。煙道部は壁外へやや大きく掘り込んでいる。火床部は焼けている。ピット 10本検出。うちP1~P4が主柱穴で、ともに2回ないし3回の建て替えの形跡が認められた。P5は出入口に伴う蓋然性が高い。P6~P10は貼床下で検出したもので、古期住居の柱穴である。覆土 8層に分層できた。遺物出土状態 平面的には、104A号の破壊部分を除いて、カマド前面及び北東コーナー付近にややまとまりが見られる。垂直分布的には、ほぼ万遍なく分布するが、強いて言えば、覆土下層~床面付近にまとまりが見られる。建て替え 古期住居を含め、3回以上の建て替えが認められた。新期住居の各主柱穴はコーナーへ向かって対角線上に掘り替えており、これに伴って壁を掘り広げたものと解釈される。これは、反復拡張と見なすことができる。

出土遺物 (第137図・138図)

出土総数は1738点で、うち1411点をトータル・ステーションで取り上げた。調査時点では、A・Bの区別で遺物の取り上げは行っていないため、代表して本跡にて総数を記すことにする。抽出遺物台帳は、両方を含めて通し番号を付して記入した。

1~5・7・8・10~12・22~24は須臾器である。

1~5は蓋。1は扁平な擬宝珠状のつまみが付く。2~5はロクロ整形で、天井部は回転ヘラケズリ、口縁の内面にかえりを有する「かえり蓋」。いずれも胎土に雲母・石英などを含み、常陸産。

7・8・10・11は坏。ロクロ整形で、体部下端は回転ヘラケズリ。うち、11のみが体部下端無調整。底部は、回転ヘラケズリ後、ヘラケズリ(7)、切り離し後、周縁ヘラケズリ(8)、切り離し後、ヘラケズリ(10)、切り離し後、回転ヘラケズリ(11)。いずれも胎土に雲母を含み、常陸産。11は花崗岩も含む。

12は高台付坏。付け高台で、胎土に白色粒子・黒色粒子を含み、東海地方の産物である。

22~24は甕。22はタタキ整形で、細かな格子目タタキがつく。常陸産。23は口縁片。胎土に白色粒子・黒色粒子を含み、東海産。24は外面平行タタキ目が交差して格子目状、内面は青海波紋がつく。

13~21・25~28は土師器である。

13~18は坏。全て非ロクロ整形で、体部外面ヘラケズリ後、ヘラミガキ、内面はヘラミガキを基本とするもの。13は弱い外縁を有し、口縁は外反気味。口縁外面はナデ。14は内外面ウルシ仕上げである。13~17は前代の遺制が強く、単独では古墳後期と区別し難い。18は外面に手擦れが見られる。

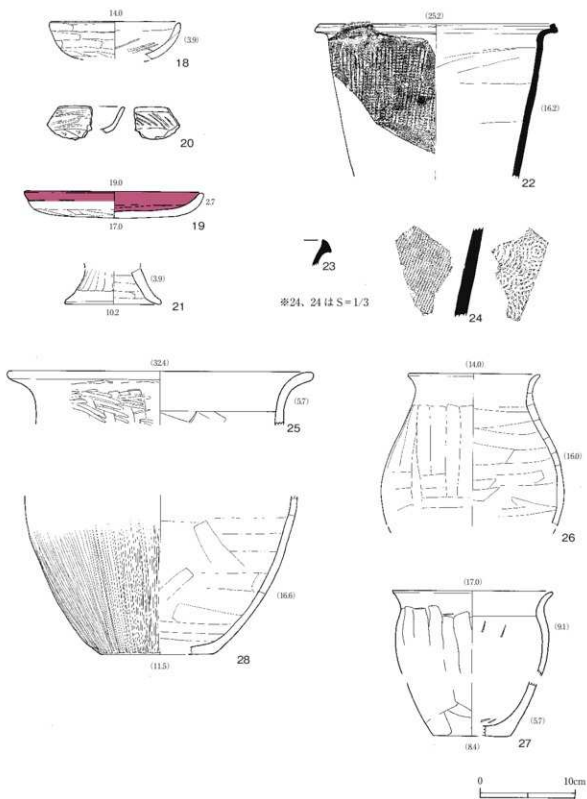
19・20は盤。非ロクロ整形で、19は口縁外面ナデ、体部~底部はヘラケズリ、内面はナデ後、ヘラミガキで、内外面赤彩。20の器面調整はほぼ19と同様で、内面のミガキが暗紋状に施すもの。

21は台付甕の台部ないしは高坏の脚部と思われる。裾部はナデ、外面ヘラケズリ、内面はヘラナデ。

25~28は甕。25は長胴甕ないしは瓶か。26は最大径を胴中位に持つ。口縁内外面ナデ、胴部外面はヘラケズリ、内面ヘラナデ。25ともども、前代の遺制が強い。28は常陸型甕である。

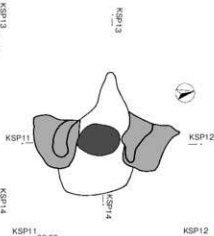
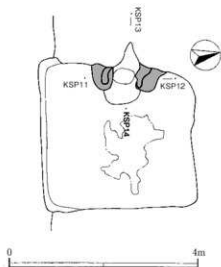
D104A (第139図)

位置 G10-5Gで検出。重複関係 D104Bを破壊する。平面形 方形を呈する。規模 3.25m × 3.30m。遺構確認面からの深さ0.83m(掘り方までの深度)。壁 検出できた南西壁は、垂直に立ち上がる。床 ほぼ全面に貼床で、カマド前面から中央一帯が硬化している。壁溝 廻らせていない。カマド 西壁の中央部。両袖部と煙道部が残存し、火床部は焼けている。ピット 検出されなかった。覆土 5層に分



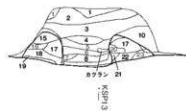
第138図 D104B 出土遺物

層できた。遺物出土状態 平面分布的には、カマド前面にまとまりが認められる。垂直分布的には、ほぼ万遍なく見せなくもないが、強いて言えば、覆土下層～床面付近に集中している。建て替え 認められなかった。本跡とB号住居は、新旧関係の明白な重複であって、見かけ上「入れ子状態」になっているが、拡張・縮小によるものではない。なぜならば、本跡を掘削する時点で、B号は既に完全埋没しているからである。

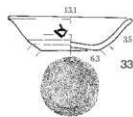
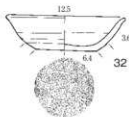
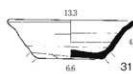
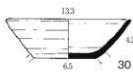
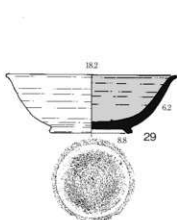
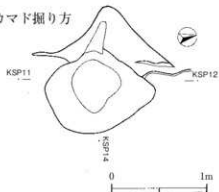


D104A カマド土層説明

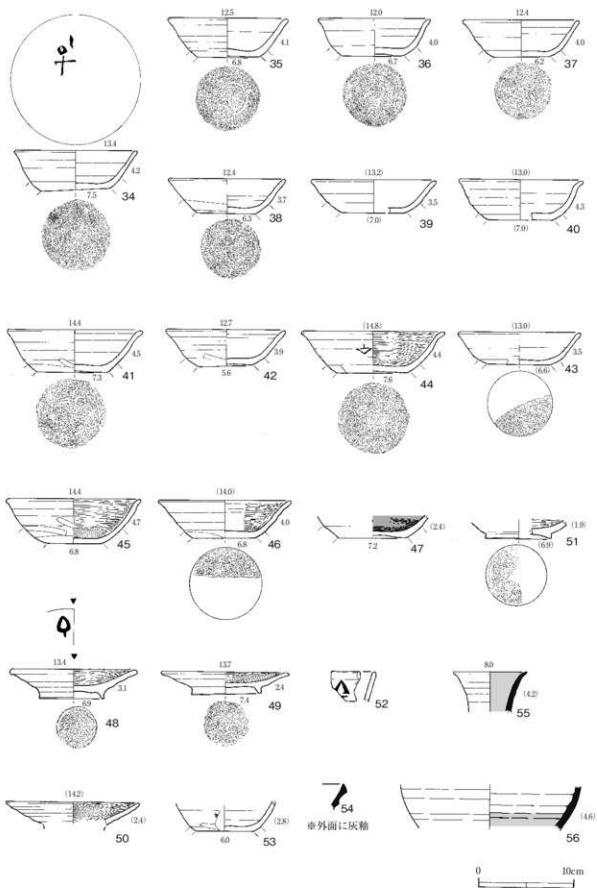
- | | | |
|----|---------|-----------------------------|
| 1 | 暗褐色土 | 粘土多く含。 |
| 2 | 暗褐色土 | 粘土混。 |
| 3 | 暗褐色土 | 粘土混。 |
| 4 | 暗褐色土 | 粘土少量混。 |
| 5 | 暗褐色土 | 粘土、砂主体。 |
| 6 | 明褐色土 | 5が焼けて赤色化。 |
| 7 | 暗褐色土 | 焼土、粘土、砂、ごく少量混。 |
| 8 | にぶい赤褐色土 | 焼土、焼土ブロック混。 |
| 9 | 黒褐色土 | 焼土、粘土、ごく少量混、しまり強。 |
| 10 | 暗褐色土 | 粘土含、しまり強。 |
| 11 | 暗褐色土 | 粘土、砂、少量含。 |
| 12 | 暗褐色土 | 粘土、砂、少量含。 |
| 13 | 黒褐色土 | 粘土少量含。 |
| 14 | 暗赤褐色土 | 粘土、砂、焼土、炭化材片混。 |
| 15 | 暗褐色土 | 粘土、砂混、しまり強。 |
| 16 | 黒褐色土 | 粘土、ごく少量混。 |
| 17 | 明褐色土 | 粘土、砂主体、しまり強、そでの中心部。 |
| 18 | 暗褐色土 | ローム、粘土がにじむ、しまり強、そでの基盤の土。 |
| 19 | 褐色土 | ローム主体、しまり強、そでの基盤の土。 |
| 20 | 明赤褐色土 | 粘土、砂が焼けて赤化した部分。 |
| 21 | にぶい赤褐色土 | 焼土。 |
| 22 | 褐色土 | 粘土、砂まじり。焼土粒子含。しまり強、そでの基盤の土。 |
| 23 | 黒褐色土 | 粘土、極少量。しまり強。そでの基盤土。 |



カマド掘り方



第139図 D104A 実測図



第140図 D104A 出土遺物 (1)

出土遺物 (第139図～142図)

出土総数はB号を参照されたい。B号住居とは約100年程の年代差があるため、図示した抽出遺物は、本跡の範囲内で、かつ基本的に平安時代の所産と認定しえたものである。

29・54～56は灰軸陶器。

29はほぼ完存品の高台付碗。ロクロ整形で、体部下端は回転ヘラケズリ。付け高台で、その断面形状は「角高台」である。施軸はハケズリで、内面全体に施す。軸の発色は淡緑色である。見込み面の三箇所に「三角ピン痕」が見られる。胎土に白色粒子・黒色粒子を含む。黒笹14号窯産。

55は壺か。外面のみ施軸。55は平瓶か。内面のみ施軸。56は水瓶ないしは長頸壺。ロクロ整形で、胴下半は回転ヘラケズリ。内面に軸がかかる。3点とも胎土に白色粒子・黒色粒子を含む。東海産。

30・31・57～63は須恵器。

30・31は坏。ロクロ整形で、体部下端はヘラケズリ。底部は、30が静止ヘラ切り無調整で、31は回転ヘラ切り後、全面ヘラケズリ。31は下総産である。

57～59は甕。タタキ整形で、外面は平行タタキ目が見られ、胴下半～底部はヘラケズリ。60・61は瓶。タタキ整形で、外面は平行タタキ目、胴下半～底部はヘラケズリ。五孔式。いずれも下総産。

62・63はタタキ整形後、胴部外面はヘラケズリ、内面はヘラナデを施す。焼成は極めて堅緻である。言うなれば、整形が須恵器で、器面調整が土師器であって、苦慮したが、須恵器の範疇で扱いたい。

32～53・64～71は土師器。

32～47は坏。32～43はロクロ整形で、体部下端は回転ヘラケズリ、底部は回転糸切り後、周縁を回転ヘラケズリ(32・33・36・41・43)、切り離し後、回転ヘラケズリ(34・35・37・39・40・42)、回転糸切り後、底部全体ヘラケズリ(38)を施す。胎土は32を除いて、雲母細粒ないし微細粒を含む比較的緻密なもので、特徴的である。

33は体部外面に墨書記号「□」、34では見込み面に墨書記号「ㄨカ」が見られる。52・53も体部外面に墨書「□」が見られ、胎土は33～43のグループと同様である。

44～47はロクロ整形で、内面に密なヘラミガキを施すもの。47のみ黒色処理が見られるが、本来的には、他の3点も同様であった蓋然性が高い。

44の体部外面に墨書記号「□」が見られる。これは33と同じ記号である。

48～51は皿。ロクロ整形で、48・49・51は有高台である。いずれも内面には密なヘラミガキを施す。体部以下を欠損する50は、器内面の調整を見る限り、他の3点と同様であることを踏まえると、有高台であった可能性が高いと考えられる。

48の体部外面には、墨跡も鮮やかに墨書記号「□」が見られる。

64～71は甕。このうち64～68は常総型甕である。法量的には64～66が大形で、67・68は中形品であって、小形品は見られない。また、64では胴部上半のヘラケズリの跡が見られ、やや粗製品である。

69・70は小形甕。71は「ロクロ甕」で、内面にロクロナデが認められる。

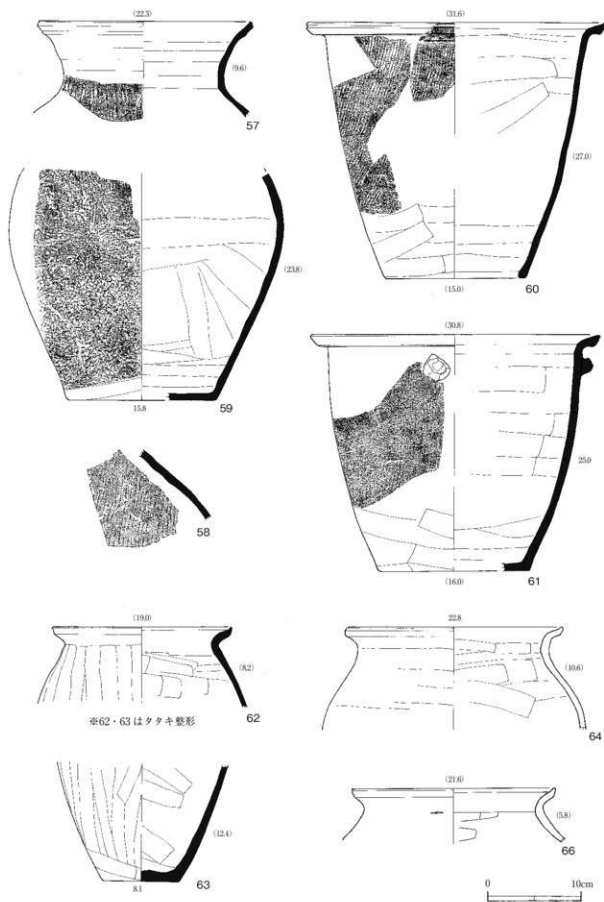
72～77は土製品。72・72は転用瓶。72は須恵器坏の見込み面を、73は須恵器高台付坏の見込み面を素材として、再利用する。図化していないが、両者ともよく使い込まれている。

74～77は土製円盤。77は小形品で、その他は大形品である。75が内面黒色処理の、76は内面ヘラミガキの土師器坏を素材とする。奈良時代～平安時代を通じて、形状に全く変化のない器具である。

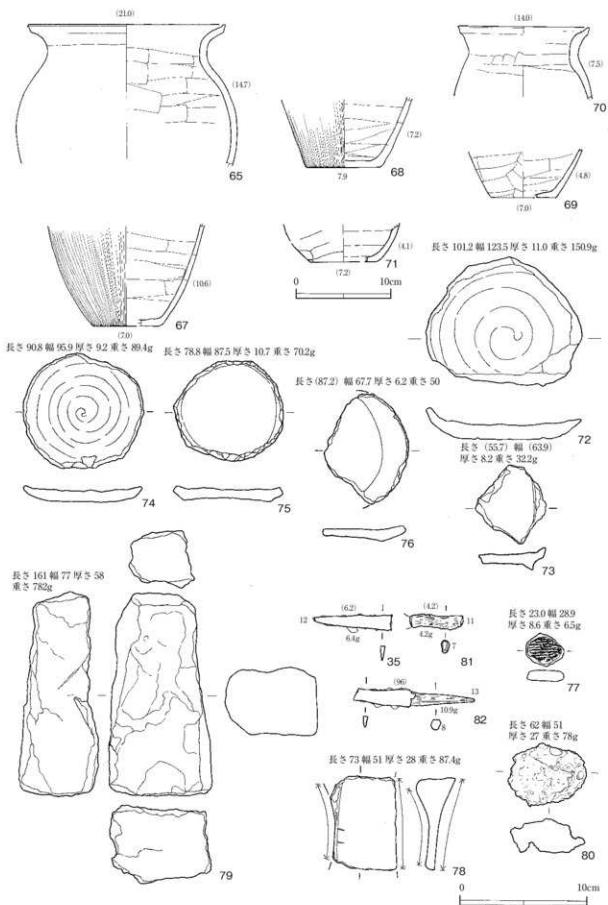
78は砥石。表裏と両側面に使用面。79は成田層群由来の砂岩を、截頭角錐形に面取りした支脚。

81・82は鉄製品で、刀子である。ともに木質部(柄部)が残存している。

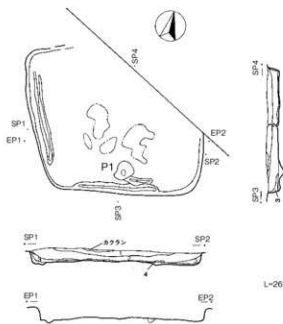
80はスラグ。小振りではあるが、いわゆる「塊形鉄滓」に相当すると思われる。



第141図 D104A出土遺物(2)

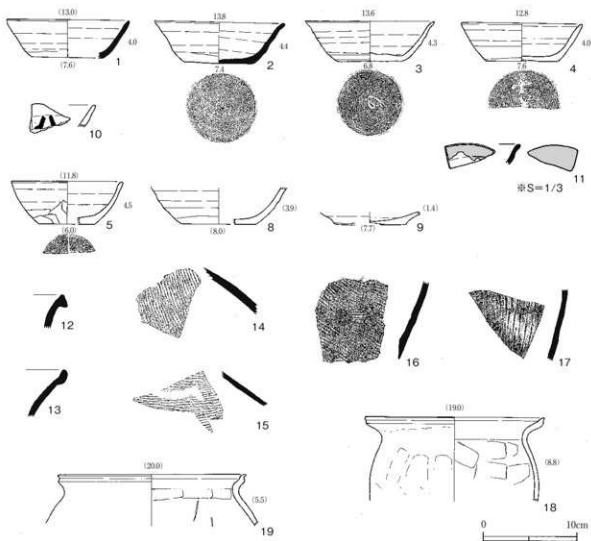


第142図 D104A 出土遺物 (3)

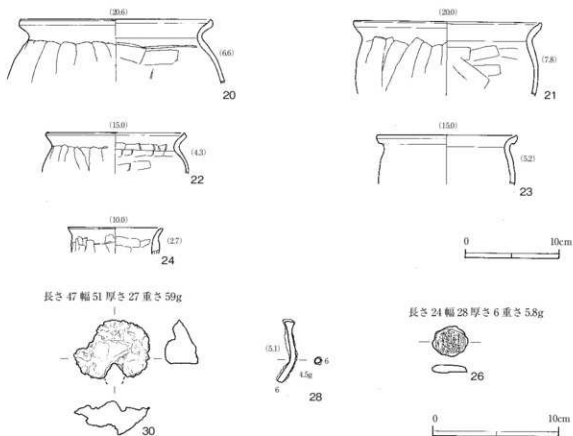


D109土層説明

- 1 暗褐色土 径0.5mm 黄スコリア、焼土粒子、炭化材片極少量。しまり、粘性あり。
- 2 暗褐色土 径0.5mm 黄スコリア、焼土粒子、径3mm 焼土ブロック、炭化材片極少量。しまり、粘性あり。
- 3 暗褐色土 ロームまじり。しまり、粘性あり。
- 4 褐色土 ロームまじり。しまり、粘性あり。



第143図 D109実測図



第144図 D109出土遺物

D109(第143図)

位置 G10-26Gで検出。重複関係 単独。平面形 やや不整な隅丸方形を呈する。規模 (302m) × 360m。遺構確認面からの深さ0.27m。壁 垂直気味に立ち上がる。床 壁際を中心にした部分が貼床で、その他は直床。中央部分が硬化している。壁溝 新期は南壁部分のみ、古期は西壁と南壁に廻らせている。カマド 攪乱などで検出できなかった。ピット 1本検出。P1は出入口に伴うものである。覆土 4層に分層でき、暗褐色土が主体。遺物出土状態 平面分布的には、主として北西コーナー・南西コーナー・南東コーナー付近の3個所に集中している。垂直分布的には、万遍なくと見せなくてもないが、強いて言えば、覆土中層～上層にややまとまりがある。建て替え 反復拡張が認められた。

出土遺物(第143図・144図)

出土総数は669点で、うち291点をトータル・ステーションで取り上げた。

1・2・12～17は須恵器。1・2は坏。1は体部下端がヘラケズリ、底部は周縁ヘラケズリ。2は体部下端が回転ヘラケズリ、底部は切り離した後、回転ヘラケズリ。下総産。内面及び底部外面に擦れあり。

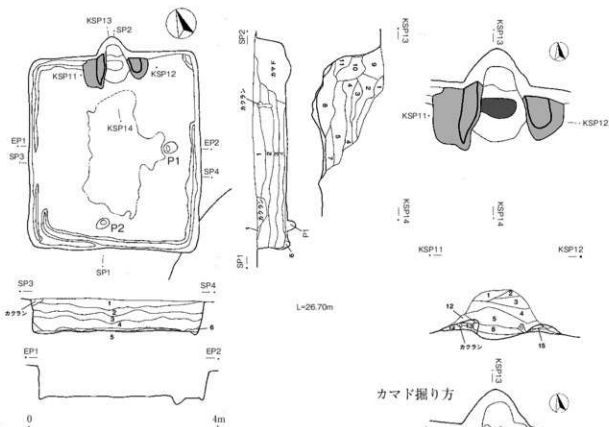
12～17は甕。12・13は口縁部～頸部。12は東海産で、13は下総産。14～17は胴部片で、外面に平行タタキ目。14・15は東海産で、16が常陸産、17は下総産。14～16は毀損した形跡が認められる。

11は灰釉陶器。塊か。施釉は内面がハケヌリで、口縁外面にも釉がかかっている。

3～5・8・9・18～24は土師器。3～5・8は坏。3・4・8は体部下端が回転ヘラケズリ、底部は3が切り離した後、回転ヘラケズリ、4は回転糸切り後、周縁回転ヘラケズリ、周縁回転ヘラケズリで、内面ヘラミガキ。5は体部下端ヘラケズリ、底部が切り離した後、ヘラケズリ。9は皿。無高台である。

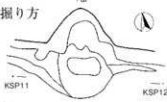
18～24は甕。18・19は常総型甕で、18はヘラケズリの痕跡のある粗製なもの。22～24は小形甕。

26は土製円盤(小形)。28は鉄釘。近現代のものが攪乱混入したか。30はスラグ(「塊形鉄滓」か)。



L=26.70m

カマド掘り方



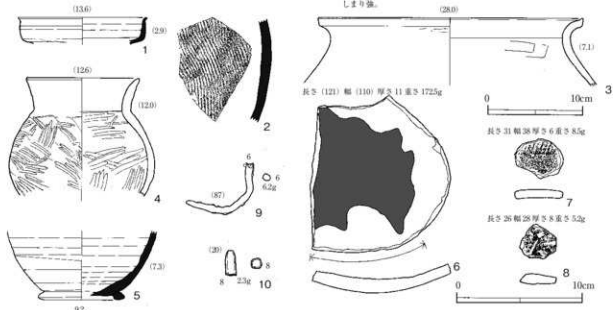
D111土層説明

- 1 黒褐色土 径0.5-2mm 黄スコリア含し まりややあり
- 2 暗褐色土 径0.5-5mm 黄スコリア 径1cm ロームブ
ロック少量混
- 3 暗褐色土 径0.5-5mm 黄スコリア 径1cm ロームブ
ロック少量混
- 4 暗褐色土 径0.5-5mm 黄スコリア 径1-2cm ロームブ
ロック少量混
- 5 暗褐色土 径1-2cm ロームブロック、ローム混。粘
性あり。
- 6 暗褐色土 ローム、ロームブロック混。粘性あり

D111カマド土層説明

- 1 暗褐色土 粘土、砂混。焼土粒子ごく少量混。
- 2 に近い褐色土 粘土、砂主体
- 3 暗褐色土 粘土、砂混。径1cm ロームブロック少量混

- 4 暗褐色土 粘土、砂混。
径1-5mm 黄スコリア
焼土粒子少量混
- 5 に近い褐色土 粘土、砂のほほ純粋な土
- 6 に近い褐色土 5の未く使った部分
- 7 暗褐色土 粘土、砂、焼土粒子、極少量含
- 8 暗褐色土 粘土、砂、焼土、焼土アワック、
炭化物混カマド火床部
- 9 灰褐色褐色土 粘土、砂、焼土混
- 10 に近い褐色土 粘土、砂、焼土混。9より焼土多い
- 11 に近い褐色土 粘土、砂、焼土混。10より焼土多い
- 12 に近い褐色土 粘土、砂、主体、焼土粒子少量含、
しまり強
- 13 に近い褐色土 粘土、砂焼土炭化物混、
しまり強
- 14 に近い褐色土 粘土、砂、焼土多含、しまり強、
粘土、砂、少量混、焼土ごく少量混、
しまり強。
- 15 灰褐色土



第145図 D111実測図

D111(第145図)

位置 G10-17Gで検出。重複関係 D112を破壊する。平面形 長方形を呈する。規模 3.68m × 4.25m。遺構確認面からの深さ0.72m。壁 ほぼ垂直に立ち上がる。床 コーナー部分周辺は貼床で、中央一帯は直床。カマド前面から中央一帯が硬化している。壁溝 カマド部分とカマド東脇、北東壁の一部を除いて廻らせる。カマド 北壁の中央部。両袖部と煙道部が残存する。煙道部にフラットなテラスを有する。火床部は焼けている。ピット 2本検出。うちP2は出入口に伴うものである。P1もまた出入口に伴う可能性がある。その場合は、古期のものとなろう。覆土 6層に分層でき、埋め戻しと思われる。遺物出土状態 平面分布的には、いたって散漫である。垂直分布的には、覆土中層～下層にややまとまりが見られる。建て替え 周溝の知見から、拡張が認められた。

出土遺物(第145図)

出土総数は316点で、うち128点をトータル・ステーションで取り上げた。

1・2・5は須恵器。1は高台付坏か。2は甕で、外面に平行タタキ目。5は長頸甕。ロクロ整形で、胴下半は回転ヘラケズリを施し、付け高台。胎土に黒色粒子やや目立ち、白色粒子含む。東海産。

3・4は土師器。3は常総型甕。4は甕(あるいは壺か)。前代の遺制が強く残るものである。

6～8は土製品。6は転用甕。須恵器大甕胴部片の内面を使用面とする。7・8は土製円盤(小形)。

9は鉄釘(近現代のものが攪乱混入したか)。10は不明銅製品。筒状で、一端がすばまるもの。

D115(第146図)

位置 G10-7Gで検出。重複関係 D117を破壊する。平面形 方形を呈する。規模 3.15m × 3.45m。遺構確認面からの深さ0.30m。壁 北西壁を除いて垂直に立ち上がる。床 部分的な貼床で、カマド前面から南東壁にかけて硬化している。壁溝 カマド部分とカマド西脇を除いて廻らせる。カマド 北西壁の中央部。両袖部と煙道部が残存する。煙道部は、壁外をやや張り出し気味に掘り込むが、いわゆる「F類カマド」には該当しない。火床部は焼けている。炉 北東壁寄りに位置する。地床炉で、火床部は焼けている。ピット 1本検出。P1は主柱穴である。覆土 5層に分層でき、暗褐色土が主体。遺物出土状態 平面分布的には、カマド前面・住居の四隅に加え、床面中央に小規模な廃棄ブロックが見られた。垂直分布的には、覆土下層～床面付近に集中している他、覆土上層にもややまとまりが見られる。建て替え 認められなかった。

出土遺物(第146図・147図)

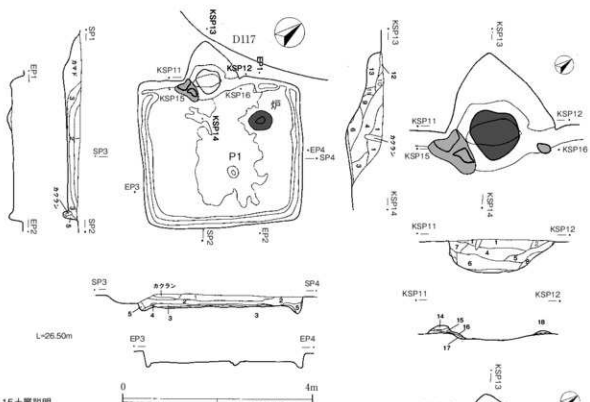
出土総数は740点で、うち323点をトータル・ステーションで取り上げた。

1～20・26は土師器。1～6・13～17は坏。1・4・5は体部下端ヘラケズリ、底部は全面ヘラケズリ。2・3・6は体部下端回転ヘラケズリ、底部は回転糸切り後、周縁に回転ヘラケズリ。17は体部下端回転ヘラケズリ、底部は回転糸切り後、周縁にヘラケズリ。器内面に黒色処理を施す。13～16は墨書土器片。13は記号「□」。9～12は皿。7・8を除き、有高台。8・12の器内面はヘラミガキを施す。7・8は体部外面に墨書あり。7は記号「□」か。8は四文字分書かれているが、判読不能。「□□□□」。

26は小形甕。口縁内外面ナデ、胴部外面ヘラケズリ、内面はヘラナデ。外面全体にススが附着。

18～20・21～25・27は須恵器。27は坏。ロクロ整形で、底部は回転糸切り無調整。胎土に長石・石英含み、青灰色で焼成は堅緻。21～23は甕。これらは、いずれも最大径を胴上部に持つ、大甕の頸部～胴上部。タタキ整形で、外面は平行タタキ目、内面に当て具痕が見られる。下総国内の窯で焼かれたものである。24は片口付鉢。タタキ整形で、外面には平行タタキ目が見られる。片口部分は、縁帯状の口縁の一端を曲げて外側に張り出し、整形したもの。下総産。25は甕の底部。三孔式で、唯一の出土。

18～20はタタキ整形後、胴部外面ヘラケズリ、内面ヘラナデ。整形は須恵器で、器面調整は土師器。



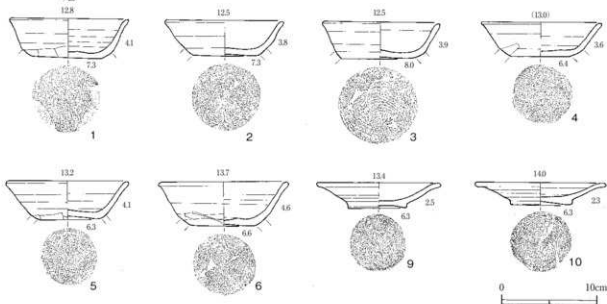
D115土層説明

- 1 暗褐色土 (約0.5-1mm黄スコリア焼土粒子ごく少量しまりややあり)
- 2 暗褐色土 (約0.5-1mm黄スコリア、焼土主体材料、ごく少量混)
- 3 暗褐色土 ローム混、粘性あり
- 4 暗褐色土 焼土主体、粘性あり
- 5 褐色土 ローム混、粘性あり
- 6 暗赤褐色土 焼土粒子、粘土、砂含、しまり強
- 7 暗褐色土 焼土粒子、粘土、砂含、しまり強
- 8 暗赤褐色土 焼土粒子、粘土、砂含、しまり強
- 9 暗褐色土 焼土粒子含
- 10 におい褐色 粘土主体、焼土含
- 11 暗赤褐色土 焼土ブロック主体、10と一体で硬なしている。
- 12 暗褐色土 約0.5-1mm焼土粒子含、しまり強い。
- 13 暗褐色土 (固りすぎ湿りしまり強い褐色土)
- 14 におい褐色 粘土、砂主体、しまり強
- 15 暗褐色土 カマド基盤の土しまり強
- 16 暗褐色土
- 17 褐色土 粘土混
- 18 暗褐色土 粘土、砂混しまり強

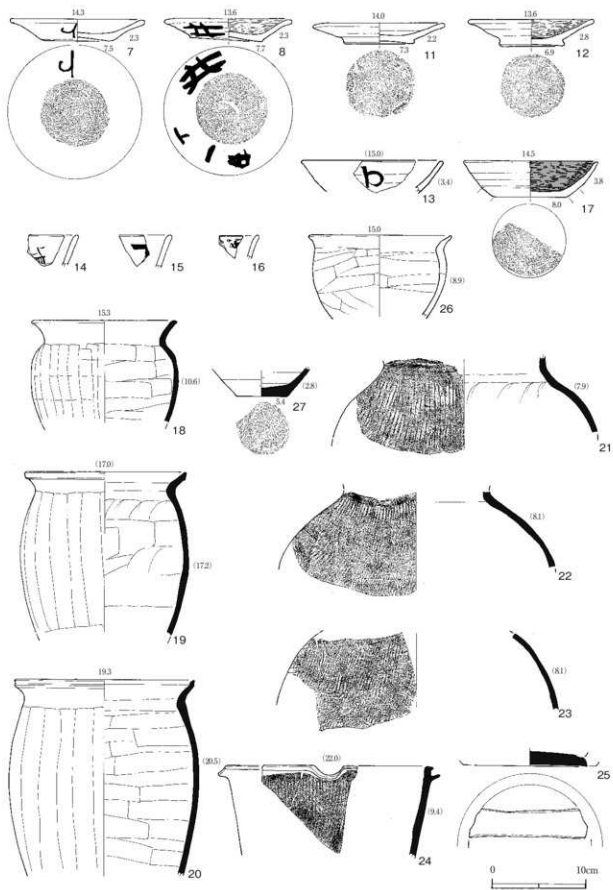
D115カマド土層説明

- 1 暗褐色土 粘土、砂、多く焼土粒子含
- 2 暗褐色土 粘土、砂ごく少量含
- 3 暗褐色土 粘土、砂ごく少量含
- 4 暗褐色土 焼土にじむ、粘土、砂少量含
- 5 暗赤褐色土 焼土まじり土主体、粘土、砂ごく少量含
- 6 におい褐色 焼土主体土
- 7 褐色土 焼土粒子、粘土、砂含、しまり強
- 8 暗褐色土 粘土、砂混しまり強
- 9 暗褐色土 粘土、砂混しまり強
- 10 暗褐色土 粘土、砂混しまり強

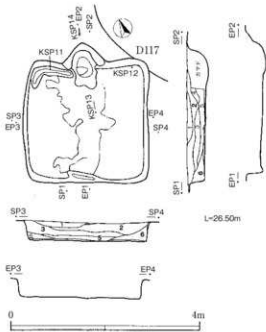
カマド掘り方



第146図 D115実測図



第147図 D115出土遺物

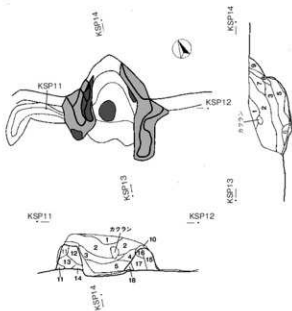


D116土層説明

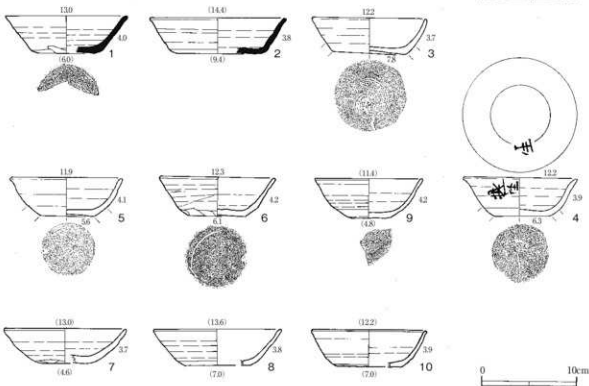
- | | |
|--------|------------------------------|
| 1 黒褐色土 | 砂1-3mm 黄スクリア含、粘性あり |
| 2 暗褐色土 | 砂1-2mm 黄スクリア含、粘性あり |
| 3 暗褐色土 | 砂1-2mm 黄スクリア多量、径1cm ロームブロック含 |
| 4 暗褐色土 | 砂1-2mm 黄スクリア粘上、砂多量含 |
| 5 暗褐色土 | 砂1-3mm 黄スクリア径1cm ロームブロック含 |
| 6 暗褐色土 | 砂1-3mm 黄スクリア多量含、粘性あり |

D116カマド

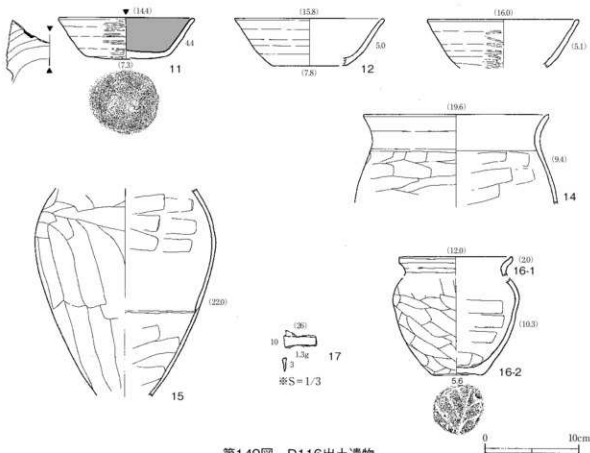
- | | |
|-----------|---------------------|
| 1 灰褐色土 | 粘土、砂、多量含 |
| 2 暗褐色土 | 粘土、砂、炭化材片、少量含 |
| 3 暗赤褐色土 | 黄土、焼土ブロック含、粘土、砂、少量含 |
| 4 灰褐色土 | 粘土、砂多量含、焼土粒、炭化材片少量含 |
| 5 暗赤褐色土 | 黄土、焼土ブロック体、粘土、砂含 |
| 6 暗褐色土 | 粘土、砂含、焼土ごく少量含 |
| 7 にくい赤褐色土 | 粘土、砂、炭化材含、焼土にこむ |
| 8 暗赤褐色土 | 黄土と混ぜ、黒色化した土層、砂含 |
| 9 褐色土 | 黄土、粘土、砂含 |
| 10 褐色土 | フタローム |
| 11-18 | カマド、その他 |



カマド振り方



第148図 D116実測図



第149図 D116出土遺物

D116(第148図)

位置 G9-96G を中心に、97G にまたがる。重複関係 D117 を破壊する。平面形 方形を呈する。規模 2.60m × 2.66m、遺構確認面からの深さ0.40m。壁 ほぼ垂直に立ち上がる。床 北西壁を中心とした一帯が貼床で、その他は直床。カマド前面から南西壁にかけて硬化している。壁溝 北西コーナー及び南西壁中央部のみ廻らす。カマド 北壁の中央部。両袖部と煙道部が残存する。袖の内壁及び火床部は焼けている。ピット 検出されなかった。覆土 6層に分層でき、最上層の1層は自然堆積で、その他は埋め戻し。これは、廃屋後に埋め戻しを行ったものの、しっかりと埋め立てていなかったために窪地となり、そこへ自然営力で土砂が堆積して、完全埋没に至ったことを示す。遺物出土状態 平面分布的には、全体的に散漫であるが、強いと言えば、カマド前面にまとまりが見られた。その他住居の壁際に沿って分布する。垂直分布的には、覆土下層～床面付近にややまとまりが見られた。建て替え 認められなかった。

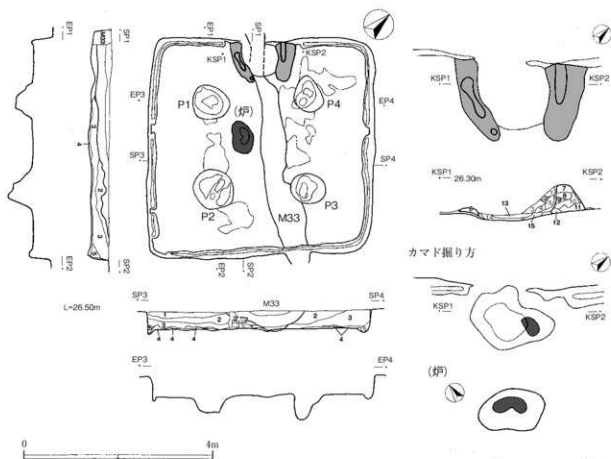
出土遺物(第148図・149図)

出土総数は211点で、うち110点をトータル・ステーションで取り上げた。

1・2は須恵器坏。ロクロ整形で、1は体部下端ヘラケズリ、底部は静止ヘラ切りか。2は体部下端回転ヘラケズリ、底部は回転糸切り後、周縁回転ヘラケズリ。器内外面とも黒褐色に焼かれ、下総産。

3～16は土師器。3～10は坏で、ロクロ整形。体部下端は回転ヘラケズリないしヘラケズリ。底部は回転糸切り後、周縁回転ヘラケズリ(3・6・7・9・10)、切り離し後、回転ヘラケズリ(4・5)。4は体部外面横位に「提生」、見込み面に「生」の墨書文字あり。11～13は大形の坏ないし碗。ロクロ整形で、内面は密なヘラミガキ。11は内面黒色処理で、外面に墨書あり。14・15は武蔵型甕。16は小形甕。

17は鉄製品。刀子の刃部片で、全体に錆が目立つ。

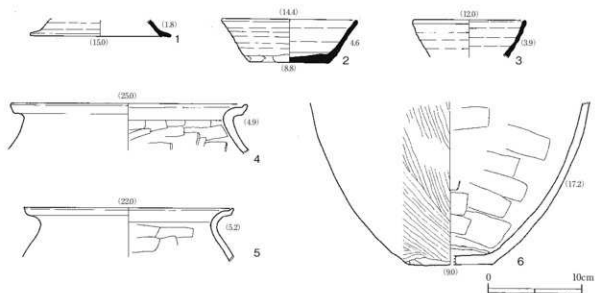


D118土層説明

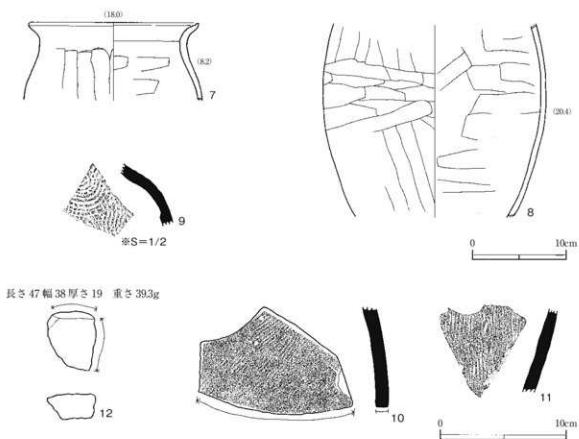
- | | |
|--------|-----------------------------------|
| 1 暗褐色土 | 径1~2mm 黄スクリア少量 |
| 2 暗褐色土 | 径1~5mm 黄スクリア少量 |
| 3 暗褐色土 | 径1~5mm 黄スクリア, 径1~2mm ロームブロック少量 |
| 4 暗褐色土 | ローム, 径1~3mm ロームブロック少量, しまり, 粘性あり。 |
| 5 褐色土 | ローム混, 粘性あり |

D118カマド土層説明

- | | | | |
|-----------|-------------------|------------|------------------------------|
| 1 にふい赤褐色土 | 砂, 粘土, 焼土混, しまり弱。 | 4 暗赤褐色土 | 焼土, 粘土, 砂混合 |
| 2 赤褐色土 | ブロック焼土, しまり弱。 | 5 にふい褐色土 | 焼土粒子含 |
| 3 暗褐色土 | 砂, 粘土, 焼土少量 | 6 褐色土 | 焼土粒子含, 粘土極少量, しまり強, 左縁の基盤の上。 |
| 4 暗赤褐色土 | 焼土, 粘土, 砂混合 | 7 暗褐色土 | 粘土, 砂, 焼土粒子含, しまり強。 |
| | | 8 にふい褐色土 | 粘土, 砂主体, 焼土にじむ, しまり弱。 |
| | | 9 灰褐色土 | 粘土, 砂, 焼土粒子, しまり弱 |
| | | 10 褐色土 | 砂混, 焼土粒子まばら, しまり弱。 |
| | | 11 にふい褐色土 | 粘土, 砂主体, しまり強。 |
| | | 12 暗赤褐色土 | 焼土にじむ, しまり弱。 |
| | | 13 灰褐色土 | 径1~5mm 黄スクリア, しまり強。 |
| | | 14 黒褐色土 | ローム混, しまり強。 |
| | | 15 にふい赤褐色土 | 焼土主体, ローム, 砂, 粘土混, しまり弱。 |



第150図 D118実測図



第151図 D118出土遺物

D118(第150図)

位置 G9-97G を中心に、98G・G10-7・8Gにまたがる。重複関係 M33に破壊される。平面形方形を呈する。規模 4.68m×4.70m。遺構確認面からの深さ0.42m。壁 ほぼ垂直に立ち上がる。床 ほぼ直床。カマド前面と支柱穴周辺が硬化している。壁溝 カマド両脇を除く、北東・南東・南西壁に廻らす、各々寸断する個所があり、全体として幅狭である。カマド 北壁の中央部。両袖部と煙道部が残存し、火床部は焼けている。(炉) P1-P2間に床面が焼けている部分がある。炉跡になる可能性も考慮したい。ピット 4本検出。うちP1-P4が支柱穴である。覆土 5層に分層でき、暗褐色土系。遺物出土状態 平面分布的には、全体的に散漫であるが、強いて言えば、カマド前面にまとまりが見られた。垂直分布的には、カマド前面のものは床面直上ないし密着で、その他のものも床面付近にややまとまりがある。これ以外ではいたって散漫で、廃棄行為と解釈するよりは、むしろ流入・混入として捉えるべきであると思われる。建て替え 認められなかった。

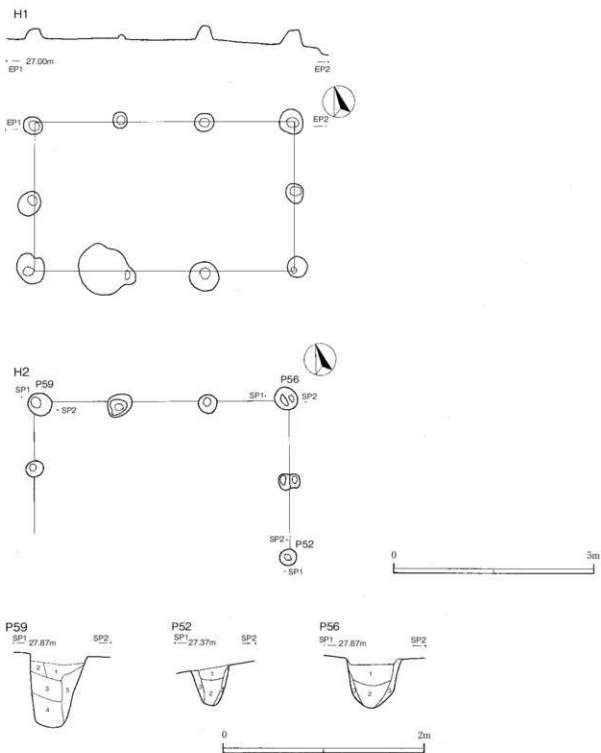
出土遺物(第150図・151図)

出土総数は367点で、うち203点をトータル・ステーションで取り上げた。陶磁器類も出土したが、これはM33の混入で、本来の帰属は同遺構である。

1-3・9-11は須恵器。1は蓋。口縁内面にかえりを有する「かえり蓋」。常陸産。2・3は坏。2は体部下端がヘラケズリ、底部は静止ヘラ切り後、全面ヘラケズリ。常陸産である。9-11は甕。9は外面に「同心円状のタタキ目」を有する。10・11は外面平行タタキ目。10は断面に磨れ面あり。転用品か。

4-8は土師器。いずれも甕。4-6は常総型甕。口縁のつまみ上げが幅が狭く、胴部は下膨れ気味で、底径も大振りである。全体的に前代の遺制がいまだ残っている。7・8は在地の甕。

12は石製品。砥石で、流紋岩製。破損面にも使用面が見られるものである。



P59土層説明

- 1 褐色土 しまり弱い。
- 2 暗黄褐色土 しまり弱い。
- 3 褐色土 黄褐色土まじり。しまり弱い。
- 4 褐色土 黄褐色土が3より多くまじる。しまり弱い。
- 5 暗黄褐色土 しまりあり。

P52土層説明

- 1 暗褐色土 黒色味強い。しまり弱い。
- 2 暗褐色土 褐色味強い。しまり弱い。
- 3 黄褐色土 暗褐色土まじり。

P56土層説明

- 1 暗褐色土
- 2 暗褐色土 黄褐色土まじり。
- 3 暗黄褐色土。

第152図 H1・H2実測図

(2) 掘立柱建物跡(第152図～第154図)

H1(第152図)

位置 F11-20G を中心にして、9・10・19G にまたがる。重複関係 M4に破壊される。構造 桁行3間×梁間2間の東西棟で、側柱構造の建物とみられる。規模 桁行7.10m、梁間4.30mを測る。柱間距離 桁行2.20～2.40m、梁間1.80～2.00mを測る。桁行・梁間とも、比較的等間隔である。掘り方 いずれも略円形を呈するもので、径0.40～0.75mにおさまる。柱穴深度は、ややばらつきがある。出土遺物 出土しなかった。

H2(第152図)

位置 G9-13G を中心にして、14G にまたがる。重複関係 P54を破壊する。構造 桁行が3間×梁間2間の東西棟で、側柱構造の建物とみられる(一部調査区域外)。規模 桁行7.30m、梁間4.50mを測る。柱間距離 桁行2.00～2.20m、梁間1.80～2.00mを測る。桁行・梁間とも、比較的等間隔である。掘り方 いずれも略円形を呈するもので、径0.40～0.60mにおさまる。柱穴深度は、比較的ばらつきが少ない。出土遺物 出土しなかった。

H3(第153図)

位置 G9-22G を中心にして、21G にまたがる。重複関係 単独。構造 桁行3間×梁間2間の南北棟で、側柱構造の建物とみられる。規模 桁行5.70m、梁間5.30mを測る。柱間距離 桁行1.50～1.80m、梁間2.30～2.40mを測る。桁行の柱間距離が極端に短い。掘り方 いずれも略円形を呈するもので、径0.45～0.70mにおさまる。柱穴深度は、かなりばらつきがある。出土遺物 1・2は須恵器。1は坏の体部～底部。ロクロ整形で、体部下端は回転ヘラケズリ。底部は切り離した後、回転ヘラケズリ。胎土に雲母・石英含み、常陸産。2は甕の胴部片。タタキ整形で、外面に平行タタキ目あり。

H4(第153図)

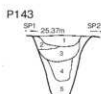
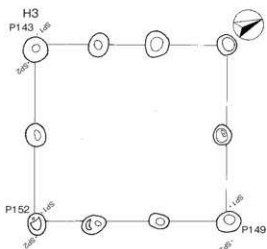
位置 G9-32・42G にまたがる。重複関係 前代のピットとエリアは重なる。構造 桁行が4間×梁間2間の南北棟で、側柱構造の建物とみられる。規模 桁行7.10m、梁間4.30mを測る。柱間距離 桁行1.50～1.90m、梁間1.90～2.40mを測る。桁行・梁間とも、ばらつきがある。掘り方 略円形及び不整形を呈するものであるが、それでも径0.30～0.80mにおさまる。柱穴深度は、ややばらつきがある。出土遺物 1・2・4は須恵器。1は蓋。ロクロ整形で、口縁内面にかえりを有する「かえり蓋」。常陸産。2は高台付坏。4は表側に同心円タタキ目を持つ甕の胴部片。3は土師器。常陸型甕の口縁片である。

H9(第154図)

位置 G9-86G に位置する。重複関係 単独。構造 桁行3間×梁間2間の東西棟で、側柱構造の建物とみられる。規模 桁行6.64m、梁間4.56mを測る。柱間距離 桁行1.76～1.84m、梁間1.84～2.00mを測る。桁行・梁間とも、比較的等間隔である。掘り方 いずれも略円形を呈するもので、側柱は径0.80～0.96mに、東柱は0.30～0.40mにおさまる。北側の桁に建て替えが認められる。柱穴深度は、側柱ではややばらつきがある。東柱は極めて浅い。出土遺物 1～3は須恵器。1・2は坏。ロクロ整形で、1は体部下端回転ヘラケズリ、2は無調整。3は瓶で、五孔式。3点とも常陸産である。

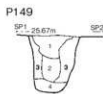
H10(第154図)

位置 G9-86G を中心にして、96G にまたがる。重複関係 単独。構造 桁行2間×梁間1間の南北棟で、側柱構造の建物とみられる。規模 桁行3.28m、梁間3.36mを測る。柱間距離 桁行1.40～1.44m、梁間2.48～2.56mを測る。桁行・梁間とも、各々では比較的等間隔であるが、規格は異なる。掘り方 いずれも略円形を呈するもので、径0.64～0.88mにおさまる。柱穴深度は、ややばらつきがある。出土遺物 1は須恵器坏で、口縁～体部の残存。ロクロ整形で、体部下端はヘラケズリ。



P143土層説明

- 1 黒色土 径1mm ローム粒子少量。しまり、粘性あり。
- 2 にぶい黄褐色土 径1mm ローム粒子少量。しまりあり。
- 3 黒色土 径1mm ローム粒子少量。しまりあり。粘性強い。
- 4 黒褐色土 径1~3mm ローム粒子少量。しまりあり。粘性強い。
- 4 灰褐色土 径1~5mm ローム粒子多量。しまりあり。粒子細かい。

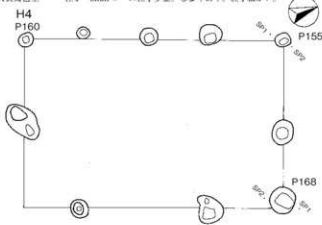


P152土層説明

- 1 黒色土 径1~2mm ローム粒子少量。しまり、粘性強い。
- 2 黒色土 径1~2mm ローム粒子極少量。しまり、粘性強い。
- 3 黒褐色土 径1~5mm ローム粒子多量。しまり。
- 4 暗褐色土 径1~2mm ローム粒子少量。しまり。
- 5 明黄褐色土 径1mm ローム粒子少量。しまり。

P149土層説明

- 1 黒色土 径1~2mm ローム粒子少量。しまり、粘性強い。
- 2 黒色土 径1~2mm ローム粒子少量。しまり、粘性強い。柱状。
- 3 陶灰色土 径1~2mm ローム粒子少量。しまり。
- 4 黒褐色土 径1~2mm ローム粒子多量。しまり、埋め戻し土。



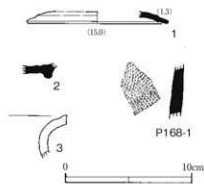
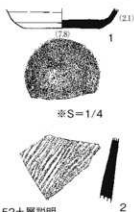
P155土層説明

- 1 黒色土 径1~2mm ローム粒子少量。しまり、粘性強い。柱状。
- 2 黄褐色土 径1~5mm ローム粒子多量。しまり。
- 3 黒褐色土 径1~5mm ローム粒子多量。しまり。粘性強い。
- 4 陶灰色土 径1~2mm ローム粒子多量。しまり。

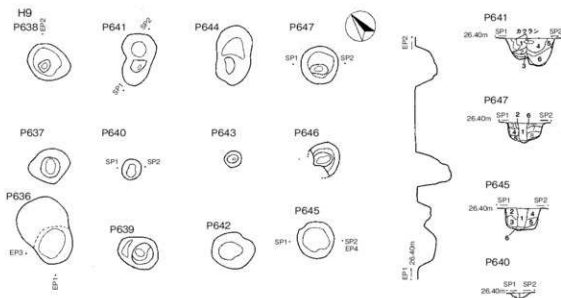


P168土層説明

- 1 黒色土 径1~2mm ローム粒子少量。しまり、粘性強い。
- 2 陶灰色土 径1~2mm ローム粒子少量。しまり。
- 3 黄褐色土 径1~5mm ローム粒子多量。しまり。
- 4 黒褐色土 径1~5mm ローム粒子多量。しまり。
- 5 黄褐色土 径1~3mm ローム粒子多量。



第153図 H3・H4実測図



P641土層説明

- 1 暗褐色土 径1mm黄スコリア
- 2 黒褐色土 ロームまじり、焼土粒子極少量、粘性あり。
- 3 黒褐色土 ロームまじり、しまり、粘性あり。
- 4 褐色土 ローム主体、粘性あり。
- 5 暗褐色土 径1~2mm黄スコリア、ロームあり
- 6 暗褐色土 径1~2mm黄スコリア。しまりあり

P647土層説明

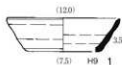
- 1 暗褐色土 径1~2mm黄スコリア。粘性あり。柱状。
- 2 暗褐色土 ローム多量。しまり、粘性あり
- 3 褐色土 ロームまじり。しまり、粘性あり
- 4 褐色土 ロームまじり。しまり、粘性あり
- 5 褐色土 ロームまじり。しまり、粘性あり
- 6,7 土表面に掘ってしまった。
- 8 褐色土 ロームまじり。しまり、粘性あり

P645土層説明

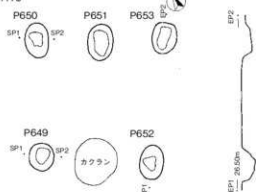
- 1 暗褐色土 径1~2mm黄スコリア 少量。粘性あり。柱状
- 2 暗褐色土 径1~2mm黄スコリア。しまり。粘性あり。
- 3 暗褐色土 ロームまじり。しまり、粘性あり。
- 4 暗褐色土 径1~2mm黄スコリア、ローム、しまり、粘性あり。
- 5 暗褐色土 ロームまじり。しまり、粘性あり。
- 6 暗褐色土 ロームまじり。しまり、粘性あり。

P640

- 1 暗褐色土 径1~3mm黄スコリア、焼土粒子少量、しまりあり。



H10



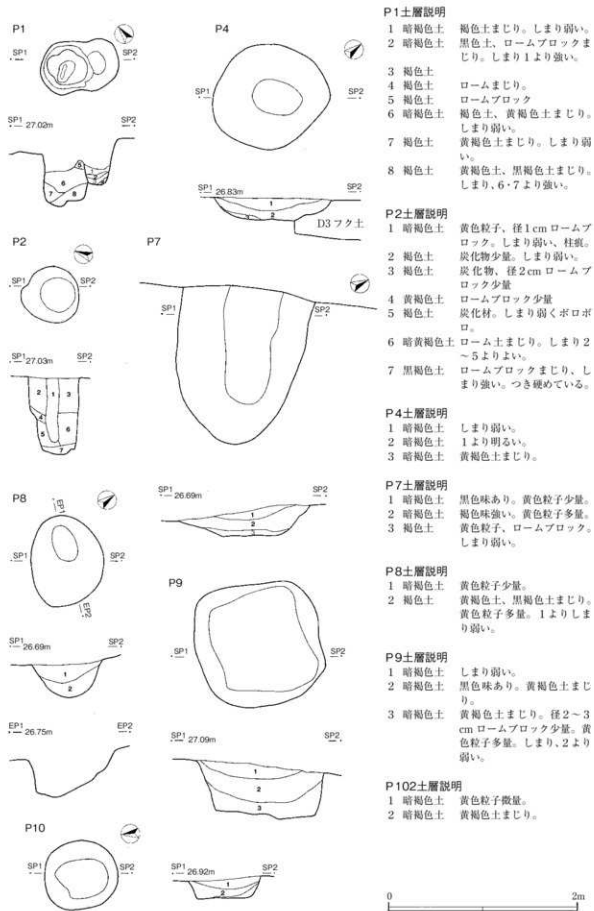
P650土層説明

- 1 黒褐色土 径0.5mm~1mm黄スコリア少量
- 2 黒褐色土 径0.5mm~2mm黄スコリア、炭化材料、しまり。粘性あり。
- 3 暗褐色土 ロームまじり。粘性あり

P649土層説明

- 1 暗褐色土 径1~3mm黄スコリア。しまりあり。
- 2 暗褐色土 径1~3mm黄スコリア。しまりあり。
- 3 褐色土 ローム主体。しまり、粘性あり。
- 4 暗褐色土 径1~3mm黄スコリア。ローム、粘性あり。

第154図 H9・H10実測図



第155図 ビット実測図(1)

(3)ピット (第155図～第159図)

P1 (第155図)

位置 F11-20G。重複関係 本跡が2基の重複。長軸 ほぼ北西-南東。平面形 上部楕円形(重複のため)。壁・底面 壁はほぼ垂直。底面は古期が三日月状で、新期は楕円形を呈する。規模 0.85m×0.53m。検出面からの深さは0.73mを測る。覆土 8層に分層でき、新田とも埋め戻し。遺物 弥生式土器・須恵器各1点が出土。

P2 (第155図)

位置 F11-20G。重複関係 単独。長軸 円形なのでなし。平面形 上部略円形、底部円形。壁・底面 壁は垂直気味。規模 0.63m×0.60m。検出面からの深さは0.79mを測る。覆土 7層に分層でき、1層は柱痕。遺物 なし。備考 平面形・覆土・柱痕など、掘立柱建物跡の掘り方に近似。

P4 (第155図)

位置 F11-9G。重複関係 D3を破壊する。長軸 ほぼ北東-南西。平面形 上部円形、底部楕円形。壁・底面 壁は垂直気味。規模 1.16m×1.12m。検出面からの深さは0.82mを測る。覆土 3層に分層でき、暗褐色土系。遺物 なし。

P7 (第155図)

位置 F10-98G。重複関係 単独。長軸 ほぼ西北西-東南東。平面形 上部、底部ともやや不整な楕円形。壁・底面 壁は垂直気味で、底面はやや凹凸あり。規模 (1.68)m×1.43m。検出面からの深さは0.33mを測る。覆土 3層に分層でき、埋め戻しか。遺物 弥生式土器1点・土師器32点・須恵器5点が出土。

P8 (第155図)

位置 F11-8G。重複関係 単独。長軸 ほぼ西北西-東南東。平面形 上部、底部とも楕円形。壁・底面 壁は垂直気味で、底面は凹凸に富む。規模 0.98m×0.78m。検出面からの深さは0.38mを測る。覆土 2層に分層でき、埋め戻しか。遺物 須恵器2点が出土。

P9 (第155図)

位置 F11-8G。重複関係 単独。長軸 ほぼ北北西-南南東。平面形 上部、底部とも不整な方形。壁・底面 壁は垂直気味で、底面は凹凸に富む。規模 1.34m×1.31m。検出面からの深さは0.53mを測る。覆土 3層に分層でき、埋め戻し。遺物 なし。

P10(第155図)

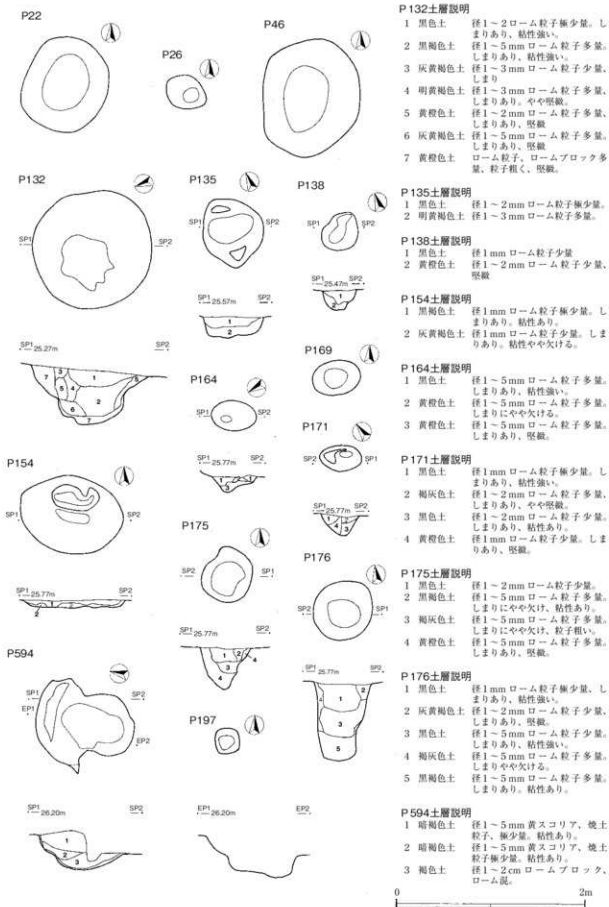
位置 H10-73G。重複関係 単独。長軸 ほぼ北-南。平面形 上部円形、底部は不整な円形。壁・底面 壁は垂直気味で、底面はやや凹凸あり。規模 0.77m×0.73m。検出面からの深さは0.22mを測る。覆土 2層に分層でき、暗褐色土系。遺物 土師器4点・須恵器1点が出土。

P13(図面掲載不可能)

位置 記録なし。重複関係 記録なし。長軸 記録なし。平面形 記録なし。壁・底面 記録なし。規模 記録なし。覆土 記録なし。遺物 弥生式土器・土師器各1点が出土。備考 本跡は、図面類などの記録が一切残されていないものの、出土遺物は残されているため、欠番扱いにはしなかった。

P22(第156図)

位置 F11-8G。重複関係 単独。長軸 ほぼ北北東-南南西。平面形 上部はやや楕円気味の円形、底部は円形。壁・底面 壁は垂直気味で、底面は概ね平坦。規模 1.02m×0.87mを測る。覆土 記録なし。遺物 なし。



第156図 ビット実測図(2)

P26(第156図)

位置 F11-9G。重複関係 単独。長軸 ほぼ北西北-東南東。平面形 上部楕円形、底部円形。壁・底面 記録なし。規模 0.47m×0.34mを測る。覆土 記録なし。遺物 覆土中から須恵器1点が出土。

P46(第156図)

位置 F11-9G。重複関係 単独。長軸 ほぼ北北東-南南西。平面形 上部やや不整な円形、底部楕円形。壁・底面 記録なし。規模 1.26m×1.13mを測る。覆土 記録なし。遺物 須恵器2点・石1点が出土。

P53(第156図)

位置 G9-32・42Gにまたがる。重複関係 D14を破壊する。長軸 円形なのでなし。平面形 上部、底部とも円形。壁・底面 壁はほぼ垂直。規模 1.48m×1.48m、検出面からの深さは1.04mを測る。覆土 7層に分層できた。遺物 縄文式土器15点・土師器14点・石器類1点・須恵器2点。

P132(第156図)

位置 G9-11G。重複関係 単独。長軸 円形なのでなし。平面形 上部円形、底部かなり不整な円形。壁・底面 壁は垂直気味。規模 1.24m×1.26m、検出面からの深さは0.57mを測る。覆土 7層に分層できた。全体にしまりに富み、埋め戻しか。遺物 縄文式土器8点・土師器3点・石器類1点(黒曜石)が出土。

P135(第156図)

位置 G9-21G。重複関係 単独。長軸 ほぼ北-南。平面形 やや不整形。壁・底面 底面は両端にテラスが有り、真中にくぼむ。規模 0.74m×0.74m、検出面からの深さは0.24mを測る。覆土 2層に分層できた。全体にしまりを欠く。遺物 縄文式土器2点・土師器4点が出土。

P138(第156図)

位置 G9-23G。重複関係 単独。長軸 ほぼ東北東-西南西。平面形 上部、底部ともやや不整な楕円形。壁・底面 壁は垂直気味。規模 0.46m×0.36m、検出面からの深さは0.21mを測る。覆土 2層に分層できた。遺物 須恵器1点が出土。

P154(第156図)

位置 G9-31G。重複関係 単独。長軸 ほぼ北西北-東南東。平面形 楕円形。壁・底面 底面は二段のテラス状となる。規模 1.12m×0.83m、検出面からの深さは0.08mを測る。覆土 2層に分層できた。遺物 縄文式土器14点・土師器・須恵器各1点が出土。

P164(第156図)

位置 G9-32G。重複関係 単独。長軸 ほぼ北東-南西。平面形 上部、底部とも楕円形。壁・底面 壁は垂直気味。規模 0.49m×0.33m、検出面からの深さは0.18mを測る。覆土 3層に分層できた。2層を除き、各層ともしまりに富み、最下層は堅緻。遺物 土師器3点が出土。

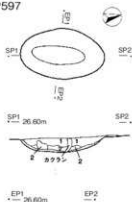
P169(第156図)

位置 G9-42G。重複関係 H4の側柱の内側であるが、重複はしていない。長軸 ほぼ東北東-西南西。平面形 上部、底部とも楕円形。壁・底面 記録なし。規模 0.53m×0.39mを測る。覆土 記録なし。遺物 土師器2点・須恵器1点が出土。

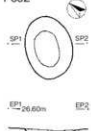
P171(第156図)

位置 G9-32・42Gにまたがる。重複関係 単独。長軸 ほぼ北西-南東。平面形 上部、底部とも楕円形。壁・底面 底面は三日月状のテラスを有する。規模 0.44m×0.28m、検出面からの深さは0.20mを測る。覆土 4層に分層でき、しまりに富む。遺物 縄文式土器1点・土師器1点出土。

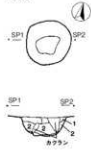
P597



P602



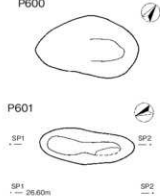
P605



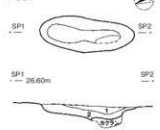
P608



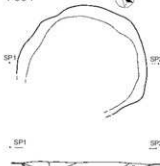
P600



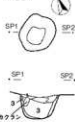
P601



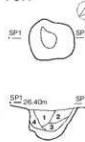
P604



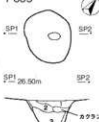
P607



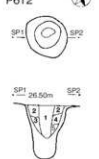
P611



P609



P612



P597土層説明

- 1 黒褐色土 径1mm 黄スコリア少量
- 2 暗褐色土 ロームまじり。

P601土層説明

- 1 暗褐色土 径0.5~1mm 黄スコリア少量。
- 2 暗褐色土 径0.5~1mm 黄スコリア少量。ロームまじり。

P602土層説明

- 1 暗褐色土 径0.5mm 黄スコリア少量
- 2 暗褐色土 径0.5mm 黄スコリア少量

P604土層説明

- 1 暗褐色土 径0.5~1mm 焼土粒子、径0.5~1mm 黄スコリア多量。炭化粒子少量
- 2 暗褐色土 径1mm 黄スコリア、焼土粒子少量
- 3 褐色土 径1mm 黄スコリア

P605土層説明

- 1 暗褐色土
- 2 暗褐色土 径3~5mm 黄スコリア少量。ロームまじり。

P607土層説明

- 1 褐色土 径0.5mm 黄スコリア少量
- 2 暗褐色土 径0.5mm 黄スコリア少量
- 3 暗褐色土 ロームまじり。

P608土層説明

- 1 暗褐色土 ロームまじり。
- 2 暗褐色土 ロームまじり。

P609土層説明

- 1 暗褐色土 径0.5~1mm 黄スコリア少量
- 2 暗褐色土 径0.5~1mm 黄スコリア少量
- 3 暗褐色土 径0.5~1mm 黄スコリア少量

P611土層説明

- 1 黒褐色土 粘性あり
- 2 黒褐色土 径0.5~2mm 黄スコリア、粘性あり
- 3 暗褐色土 径0.5~2mm 黄スコリア
- 4 暗褐色土 粘性あり

P612土層説明

- 1 黒褐色土 径1mm 黄スコリア少量、柱状
- 2 暗褐色土
- 3 黒褐色土
- 4 暗褐色土
- 5 褐色土



第157図 ビット実測図(3)

P175(第156図)

位置 G9-43G。重複関係 単独。長軸 ほぼ北東-南西。平面形 上部やや不整な円形、底部かなり不整な円形。壁・底面 壁は垂直気味。規模 0.55m×0.51m。検出面からの深さは0.46mを測る。覆土 4層に分層できた。最下層の4層のみしまりがあり、堅緻。遺物 縄文式土器・土師器各1点が出土した。

P176(第156図)

位置 G9-34G。重複関係 単独。長軸 ほぼ北東-南西。平面形 上部円形、底部概ね円形。壁・底面 壁はほぼ垂直。規模 0.68m×0.63m。検出面からの深さは0.82mを測る。覆土 5層に分層できた。遺物 縄文式土器4点・石器類1点(打製石斧)・土師器・須恵器各1点出土。

P197(第156図)

位置 G9-31G。重複関係 単独。長軸 ほぼ東北東-西南西。平面形 上部円形、底部やや不整な円形。壁・底面 記録なし。規模 0.28m×0.35mを測る。覆土 記録なし。遺物 土師器1点が出土した。

P594(第156図)

位置 G9-82G。重複関係 D87に破壊される。長軸 ほぼ北-南。平面形 不整な楕円形。壁・底面 テラスを一段有し、底面は丸みを帯びる。規模 1.04m×0.91m。検出面からの深さは0.40mを測る。覆土 3層に分層でき、下層は褐色土、上層は暗褐色土系。遺物 縄文式土器6点・土師器3点・須恵器1点が出土。

P597(第157図)

位置 G9-84G。重複関係 D90を破壊する。長軸 ほぼ北北東-南南西。平面形 上部、底部とも楕円形。壁・底面 壁はゆるやかに立ち上がり、底面は丸みを帯びる。規模 0.90m×0.53m。検出面からの深さは0.16mを測る。覆土 上層は黒褐色土、下層は暗褐色土。遺物 縄文式土器1点が出土した(本跡に伴わない)。

P600(第157図)

位置 G9-95G。重複関係 D103を破壊する。長軸 ほぼ北東-南西。平面形 上部、底部とも楕円形。壁・底面 皿状に掘り込まれる。規模 1.02m×0.64m。検出面からの深さは0.12mを測る。覆土 2層に分層でき、暗褐色土系。遺物 縄文式土器2点・土師器3点が出土。

P601(第157図)

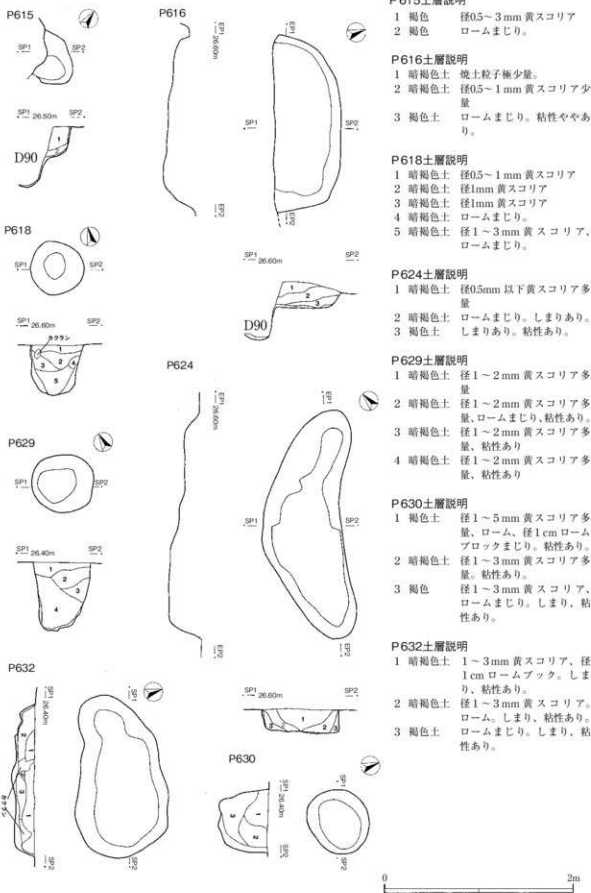
位置 G9-95G。重複関係 D103を破壊する。長軸 ほぼ北北東-南南西。平面形 上部楕円形、底部やや不整な楕円形。壁・底面 皿状に掘り込まれる。規模 1.02m×0.37m。検出面からの深さは(0.15m)を測る。覆土 2層に分層でき、暗褐色土系。遺物 なし。

P602(第157図)

位置 G9-95G。重複関係 D103を破壊する。長軸 ほぼ北東-南西。平面形 上部、底部とも楕円形。壁・底面 鍋底状に掘り込まれる。規模 0.68m×0.50m。検出面からの深さは0.09mを測る。覆土 2層に分層でき、暗褐色土系。遺物 縄文式土器1点・褐鉄鉋1点が出土。

P604(第157図)

位置 G9-75G。重複関係 単独。長軸 円形なのでなし。平面形 上部、底部ともやや不整な円形。壁・底面 クライ状に掘り込まれる。規模 1.39m×(1.11)m。検出面からの深さは0.15mを測る。覆土 3層に分層でき、埋め戻し。遺物 弥生式土器1点・土師器8点・須恵器1点が出土。



P615土層説明

- 1 褐色 径0.5~3mm黄スコリア
- 2 褐色 ロームまじり。

P616土層説明

- 1 暗褐色土 焼土粒子極少量。
- 2 暗褐色土 径0.5~1mm黄スコリア少量
- 3 褐色土 ロームまじり。粘性ややあり。

P618土層説明

- 1 暗褐色土 径0.5~1mm黄スコリア
- 2 暗褐色土 径1mm黄スコリア
- 3 暗褐色土 径1mm黄スコリア
- 4 暗褐色土 ロームまじり。
- 5 暗褐色土 径1~3mm黄スコリア、ロームまじり。

P624土層説明

- 1 暗褐色土 径0.5mm以下黄スコリア多量
- 2 暗褐色土 ロームまじり。しまりあり。
- 3 褐色土 しまりあり。粘性あり。

P629土層説明

- 1 暗褐色土 径1~2mm黄スコリア多量
- 2 暗褐色土 径1~2mm黄スコリア多量、ロームまじり、粘性あり。
- 3 暗褐色土 径1~2mm黄スコリア多量、粘性あり
- 4 暗褐色土 径1~2mm黄スコリア多量、粘性あり

P630土層説明

- 1 褐色土 径1~5mm黄スコリア多量、ローム、径1cmロームブロックまじり。粘性あり。
- 2 暗褐色土 径1~3mm黄スコリア多量。粘性あり。
- 3 褐色土 径1~3mm黄スコリア、ロームまじり。しまり、粘性あり。

P632土層説明

- 1 暗褐色土 1~3mm黄スコリア、径1cmロームブロック。しまり、粘性あり。
- 2 暗褐色土 径1~3mm黄スコリア。ローム。しまり、粘性あり。
- 3 褐色土 ロームまじり。しまり、粘性あり。

第158図 ビット実測図(4)

P605(第157図)

位置 G9-74G。重複関係 単独。長軸 円形なのでなし。平面形 上部、底部ともやや不整な円形。壁・底面 鍋底状に掘り込まれる。規模 0.48×0.47m、検出面からの深さは0.20mを測る。覆土 2層に分層でき、暗褐色土系。遺物 縄文式土器5点・土師器2点が出土。

P607(第157図)

位置 G9-85G。重複関係 単独。長軸 ほぼ北東-南西。平面形 やや不整な楕円形。壁・底面 壁は垂直気味で、底面は平坦。規模 0.40m×0.35m、検出面からの深さは0.36mを測る。覆土 3層に分層できた。遺物 土師器3点・須恵器1点が出土。

P608(第157図)

位置 G9-84G。重複関係 単独。長軸 ほぼ北北東-南南西。平面形 やや不整な円形。壁・底面 壁は垂直気味、底面は一端に向かって傾斜する。規模 0.31×0.37m、検出面からの深さは0.35mを測る。覆土 2層に分層できた。遺物 土師器2点が出土。

P609(第157図)

位置 G9-84G。重複関係 単独。長軸 ほぼ北西-南東。平面形 上部、底部とも楕円形。壁・底面 先ずはまり状。規模 0.58m×0.50m、検出面からの深さは0.34mを測る。覆土 3層に分層でき、基本は暗褐色土系。遺物 縄文式土器・須恵器・石各1点・土師器2点が出土。

P611(第157図)

位置 G9-84G。重複関係 単独。長軸 ほぼ東北東-西北西。平面形 上部、底部とも不整な楕円形。壁・底面 鍋底状。規模 0.49m×0.44m、検出面からの深さは0.24mを測る。覆土 4層に分層でき、上層は黒褐色土系、下層は暗褐色土系。遺物 縄文式土器2点・土師器4点が出土。

P612(第157図)

位置 G9-84G。重複関係 単独。長軸 円形なのでなし。平面形 上部、底部ともやや不整な円形。壁・底面 壁は垂直気味に立ち上がり、底面中央が若干くぼむ。規模 0.44m×0.43m、検出面からの深さは0.56mを測る。覆土 5層に分層できた。1層は柱痕で、他は裏込め。遺物 縄文式土器1点・土師器1点が出土。性格 柱穴状のピット。

P615(第158図)

位置 G9-84G。重複関係 D90に破壊される。長軸 (ほぼ西-東)。平面形 やや不整な楕円形。壁・底面 壁は垂直気味で、底面は概ね平坦。規模 (0.48m)×0.53m、検出面からの深さは0.27mを測る。覆土 2層に分層でき、褐色土系。遺物 なし。

P616(第158図)

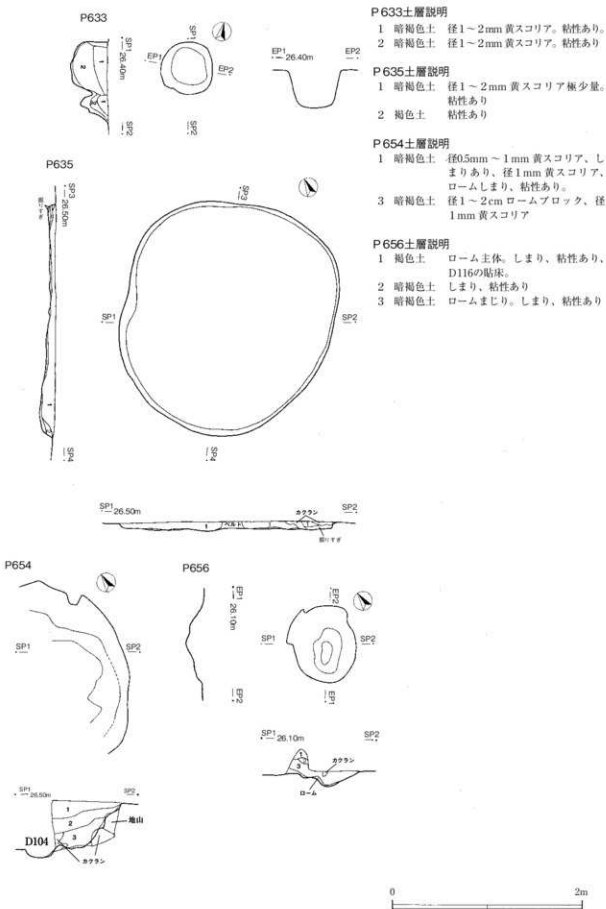
位置 G9-84G。重複関係 D90に破壊される。長軸 ほぼ西北西-東南東。平面形 隅丸長方形。壁・底面 壁は垂直気味、底面は概ね平坦。規模 1.90m×(0.71m)、検出面からの深さは0.35mを測る。覆土 3層に分層できた。遺物 縄文式土器4点・土師器4点が出土。

P618(第158図)

位置 G9-84G。重複関係 単独。長軸 (ほぼ西北西-東南東)。平面形 略円形。壁・底面 壁は垂直気味、底面はやや丸みを帯びる。規模 0.57m×0.56m、検出面からの深さは0.54mを測る。覆土 5層に分層でき、暗褐色土系。遺物 縄文式土器7点・土師器1点・石1点が出土。

P624(第158図)

位置 G10-17G。重複関係 単独。長軸 ほぼ北東-南西。平面形 上部、底部とも三日月形。壁・底面 壁は比較的ゆるやかに立ち上がり、底面は凹凸目立つ。規模 2.43m×0.86m、検出面



第159図 ビット実測図(5)

からの深さは0.37mを測る。覆土 3層に分層でき、下層はしまりあり。遺物 縄文式土器6点・石器類1点・土師器2点が出土。

P629(第158図)

位置 G9-94G。重複関係 単独。長軸 円形なのでなし。平面形 上部、底部とも円形。壁・底面 壁は垂直気味、底面は概ね平坦。規模 0.66m×0.63m、検出面からの深さは0.73mを測る。覆土 4層に分層でき、暗褐色土系。遺物 縄文式土器2点・土師器1点が出土。性格 柱穴状か。

P630(第158図)

位置 G9-94G。重複関係 単独。長軸 (ほぼ東北東-西南西)。平面形 円形(楕円気味)。壁・底面 壁は垂直で、底面はやや凹凸あり。規模 0.72m×0.63m、検出面からの深さは0.53mを測る。覆土 3層に分層できた。遺物 縄文式土器2点・弥生式土器・須恵器各1点・土師器3点が出土。

P632(第158図)

位置 G9-94G。重複関係 単独。長軸 ほぼ西-東。平面形 不整な楕円形。壁・底面 壁は全体にゆるやかに立ち上がり、底面は凹凸あり。規模 1.74m×1.02m、検出面からの深さは0.25mを測る。覆土 3層に分層でき、しまりあり。遺物 縄文式土器3点・土師器7点・須恵器2点が出土。

P633(第159図)

位置 G9-94G。重複関係 単独。長軸 円形なのでなし。平面形 円形。壁・底面 壁は垂直気味、底面は丸みをもつ。規模 0.55m×0.55m、検出面からの深さは0.41mを測る。覆土 2層に分層でき、暗褐色土系。遺物 縄文式土器1点・須恵器2点が出土。

P635(第159図)

位置 G9-96G。重複関係 単独。長軸 ほぼ北-南。平面形 略円形。壁・底面 壁は垂直。底面はやや凹凸あり。タライ状。規模 2.49m×2.20m、検出面からの深さは0.17mを測る。覆土 2層に分層でき、暗褐色土系で、しまりに富む。遺物 縄文式土器・石各1点・土師器4点が出土。

P654(第159図)

位置 G10-5G。重複関係 D104に破壊される。長軸 ほぼ北北東-南南西。平面形 不整な楕円形。壁・底面 壁はゆるやかに立ち上がる。壁・底面とも凹凸目立つ。規模 2.02m×(0.75m)、検出面からの深さは0.51mを測る。覆土 3層に分層できた。遺物 縄文式土器1点・石器類1点(黒曜石)・土師器3点が出土した。

P656(第159図)

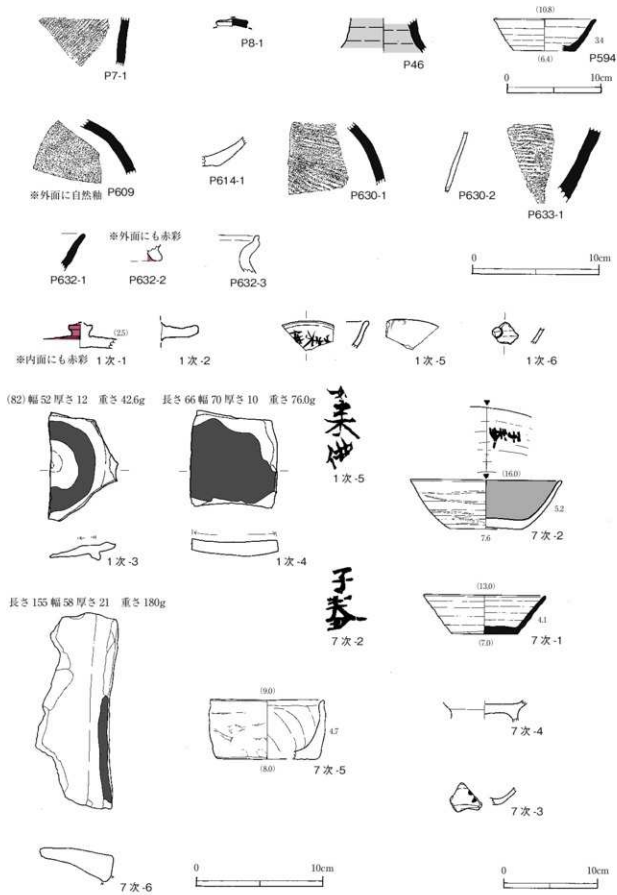
位置 G9-96・97Gにまたがる。重複関係 D116の床下。長軸 ほぼ北東-南西。平面形 楕円形(本来は円形か)。壁・底面 壁はゆるやかに立ち上がり、底面がビット状にくぼむ。規模 0.82m×0.75m、検出面からの深さは0.17mを測る。覆土 3層に分層できた。埋め戻しか。遺物 出土しなかった。備考 本跡はいわゆる「床下土坑」の可能性がある。

(4) ビット出土遺物(第160図)

P7-1は須恵器甕。P8-1は須恵器蓋。P46-1は灰釉陶器水瓶。P594-1は須恵器杯。P609-1は須恵器長頸壺。P614-1は土師器の常総型甕。P630-1は須恵器甕で、常陸産。2は土師器の武蔵型甕。P632-1は須恵器杯。2は土師器高台付杯。3は土師器の常総型甕。P633-1は須恵器甕で、常陸産。

(5) 遺構外出土遺物(第160図)

1次1は土師器蓋。1次2は土師器羽釜の鈔部。1次5・6は土師器杯で墨書土器。5「如来佛カ」、6は「□」。1次3・4は転用甕。7次1は須恵器杯。7次2・3は土師器杯で墨書土器。2「子券カ」、3「□」。7次4は土師器足高台付杯。7次5は手握ね土器。7次6は須恵器甕を再利用した転用砥石。



第160図 ビット及び遺構外出土遺物

7 中・近世

中・近世の遺構は、本調査を行った全ての地点から検出されており、そのほとんどが溝である。溝は比較的遺物が出土するものの、年代的な上限と下限に幅を有する例が多かった。ピットの場合は遺物の出土自体が僅少で、時期の比定には困難が伴う。本節を「中・近世」とした理由はそこにある。

今回は、確認調査時の出土遺物及び一部調査区域外採集の遺物も掲載する。

(1) ピット (第161図)

P5 (第161図)

位置 F11-9G。重複関係 単独。長軸 ほぼ北北東-南南西。平面形 隅丸長方形。壁・底面 底面は概ね平坦。底部施設 長軸中央に溝状の施設を有する。規模 2.13m×1.20m。検出面からの深さは0.45m。溝部で0.63mを測る。覆土 2層に分層できた。炭・焼土を含む。遺物 土師器13点・須恵器5点が出土したが、本跡に伴わず。性格 中世の火葬墓と思われる。

P12 (第161図)

位置 F11-9G。重複関係 M4と重複関係がある。長軸 ほぼ北北東-南南西。平面形 方形を基調とする。壁・底面 底面は概ね平坦。底部施設 長軸中央に溝状の施設を有する。規模 1.87m×1.86m。を測る。覆土 6層に分層できた。遺物 なし。性格 中世の火葬墓と思われる。

P16 (第161図)

位置 F11-7G。重複関係 単独。長軸 ほぼ北西-南東。平面形 上部隅丸方形、底部やや不整な隅丸長方形。壁・底面 壁は垂直気味。規模 1.27m×1.08m。覆土 記録なし。遺物 土師器・須恵器各1点が出土。性格 本跡は地下式坑の堅坑部である。

P17 (第161図)

位置 F11-8G。重複関係 単独。長軸 ほぼ北東-南西。平面形 隅丸長方形のコーナーに小規模な長方形ピットが重なった形状。壁・底面 壁はほぼ垂直で、大形の方は底面に浅いピットと段を有する。ある種の底部施設か。規模 大1.58m×1.95m、小0.77×1.20mを測る。覆土 記録なし。遺物 土師器6点・須恵器1点・中世在土器1点が出土。性格 不明。

P23 (第161図)

位置 F10-98G。重複関係 M7と重複する。長軸 ほぼ北東-南西。平面形 上部、底部とも方形を基調とする。壁・底面 壁は垂直気味。規模 1.95m×(0.50)mを測る。覆土 記録なし。遺物 出土せず。性格 炭・焼土を伴い、近世またはそれ以降の炭窯である。

P49 (第161図)

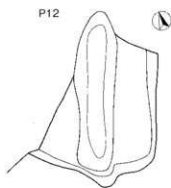
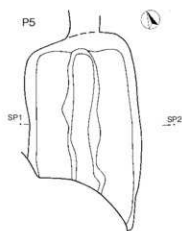
位置 F11-8G。重複関係 単独。長軸 ほぼ北-南。平面形 上部不整な円形、底部三日月気味の半月形。壁・底面 壁は垂直気味で、底面の北部はステップを有してさらに下がる。規模 1.18m×1.43mを測る。覆土 記録なし。遺物 土師器・須恵器とも2点・陶器1点・スラグ1点が出土した。性格 本跡は地下式坑の堅坑部である。

P596 (第161図)

位置 G9-83・84Gにまたがる。重複関係 D88を破壊する。長軸 円形なのでなし。平面形 上部、底部とも円形。壁・底面 壁はゆるやかに立ち上がり、底面は平坦。規模 0.62m×0.63mを測る。覆土 焼土粒を含み、下層では炭化材が見られた。遺物 縄文式土器11点・土師器30点・須恵器7点・灰軸陶器・石各1点が出土したが、本跡には伴わない。性格 炭窯か。

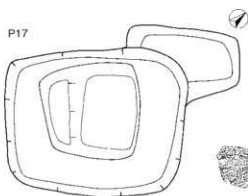
P598 (第161図)

位置 G9-94G。重複関係 単独。長軸 ほぼ北西-南東。平面形 「T」字形。壁・底面 壁は手前

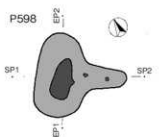
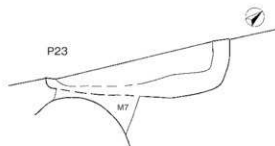


P5土層説明

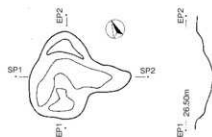
- 1 暗褐色土 ロームブロック、炭化材、焼土ブロック、焼土粒子を含む。黄色粒子多量。
- 2 赤褐色土 焼土を主とし、暗褐色土まじり。



P17 出土遺物 S=1/3

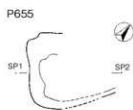


焼土・炭粉の分布状況



P598土層説明

- 1 灰褐色土 焼土粒子、炭化材片
- 2 褐色土 炭化材粉
- 3 赤褐色土 焼土、炭化材粉
- 4 褐色土 焼土粒子
- 5 黒色土 焼土粒子
- 6 褐色土 ローム、炭
- 7 黒褐色土 炭化材粉、焼土粒子少量。粘性ややあり。
- 8 褐色土
- 9 暗褐色土 焼土粒子、炭化材片。



P655土層説明

- 1 黒色土 径1~3mm黄スコリア、炭化材片多量。焼土粒子少量。しまり、粘性あり。



第161図 ビット実測図

がゆるやかで、奥壁は垂直気味。底面は奥壁に向かって深さを増す。規模 0.92m×0.95m。検出面からの深さは0.23mを測る。覆土 9層に分層でき、炭化物・焼土・骨片含む。遺物 縄文式土器1点・土師器9点・須恵器3点・石1点が出土したが、本跡には伴わない。性格 中世火葬墓。

P655(第161図)

位置 G9-88G。重複関係 M33と重複。長軸 ほぼ北東-南西。平面形 やや不整な長方形か。壁・底面 壁は南西部がゆるやかで、南東一帯は垂直気味。規模 (0.91)m×0.81m。検出面からの深さは0.08mを測る。覆土 黒色土の単一層で、炭化材多量、焼土含む。遺物 土師器2点が出土したが、本跡には伴わない。性格 近世またはそれ以降の炭窯。

(2) ビット出土遺物(第161図)

P17出土の中世在地土器。内耳土器の口縁片で、胎土に雲母粒子を含む。外面はススを被っている。

(3) 溝(第162図～第165図)

M1(第162図)

位置 F10-20G・G10-11Gにまたがる。重複関係 M2・M3の破壊を受ける。形状 調査した部分では、北西-南東の方向で略直線状に伸び、南方向へ「逆L字状」に曲折する。壁・底面 南西部にテラスを有するが、それ以外の壁は垂直気味に立ち上がり、底面は比較的凹凸は少ない。規模 総延長14.20m。幅2.80m。深さ0.43m。覆土 7層に分層できた。遺物 弥生式土器2点・土師器1点・須恵器5点・石3点が出土。本跡に伴うものではない。

M2(第162図)

位置 F10-99G・F11-10・20Gにまたがる。重複関係 M1を破壊し、M8と重複関係がある。形状 底面を見る限り、ごくゆるやかに二度屈折しており、極めて間延びした「Z字状」を呈する。壁・底面 横断面形は「V字状」を呈する。壁面に小ビットが見られ、足場のなものか。規模 総延長18.30m。幅2.80m。深さ1.27m。覆土 8層に分層できた。遺物 縄文式土器1点・弥生式土器10点・土師器116点・須恵器29点・陶器2点・石製品2点・石60点が出土。性格 空堀的な区画溝か。

M3(第162図)

位置 F11-20G。重複関係 M1を破壊し、M4と重複関係がある。形状 弧状を呈する。壁・底面 横断面形は浅い「U字状」を呈する。規模 総延長は約10.00m。幅1.20m。深さ0.10～0.15m。覆土 記録なし。遺物 土師器・須恵器各1点が出土。本跡に伴うものではない。

M4(第162図)

位置 F11-9・19・20Gにまたがる。重複関係 H1を破壊し、M3・P12と重複関係がある。形状 北西-南東の方向で略直線状に伸びる。壁・底面 壁が垂直気味の箇所と、ゆるやかな箇所があり、一定しない。底面は凹凸が目立つ。規模 総延長21.10m。幅4.80m。深さ0.10m。覆土 5層に分層できた。遺物 縄文式土器1点・弥生式土器10点・土師器258点・須恵器75点・灰釉陶器2点・陶器2点・陶磁器2点・内耳土器4点・石製品1点・スラグ1点が出土。

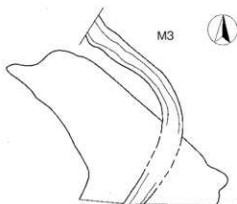
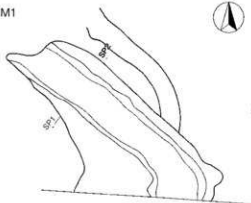
M5(第163図)

位置 F11-8・18・19Gにまたがる。重複関係 D3を破壊し、M6と重複関係がある。形状 北西-南西の方向で略直線状に伸びる。壁・底面 横断面形は略「U字状」か。規模 総延長20.07m。幅2.40m。深さ0.50m。覆土 3層に分層できた(野帳の記載)。遺物 弥生式土器10点・土師器60点・須恵器17点・石器類1点・陶器2点・陶磁器3点・内耳土器1点・石11点が出土。

M6(第163図)

位置 F11-8・18Gにまたがる。重複関係 M5と重複関係がある。形状 北西-南東の方向で略直

M1



0 (1/100) 5m

SP1 27.02m

M1

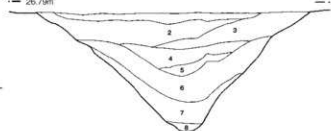
SP2



SP1 26.79m

M2

SP2



0 (1/40) 1m

SP1 26.79m

M4

SP2



M1土層説明

- 1 暗褐色土。しまり弱い。
- 2 暗褐色土。1よりしまり強い。
- 3 暗褐色土。黄褐色土まじり。
- 4 黒褐色土。褐色土まじり。
- 5 暗褐色土。黄褐色土まじり。
- 6 暗褐色土。黄褐色土まじり。
- 7 暗褐色土。黄褐色土。ロームブロックまじり。

M4土層説明

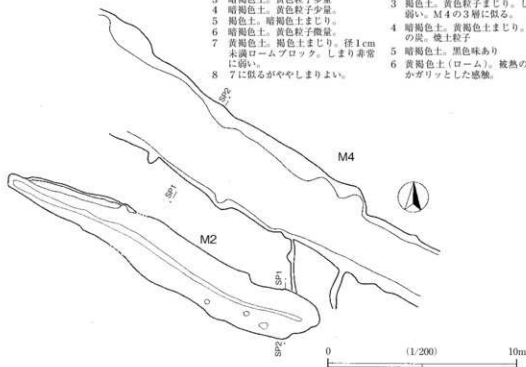
- 1 暗褐色土。黄色粒子。しまりやや弱い。
- 2 褐色土。黄褐色土まじり。
- 3 褐色土。しまり弱い。
- 4 褐色土。黄褐色土まじり。しまり弱い。

M2土層説明

- 1 暗褐色土。黄色粒子多量。
- 2 暗褐色土。径1~2cmロームブロック。黄色粒子多量。しまり弱い。
- 3 暗褐色土。黄色粒子多量。
- 4 暗褐色土。黄色粒子少量。
- 5 褐色土。暗褐色土まじり。
- 6 暗褐色土。黄色粒子微量。
- 7 黄褐色土。褐色土まじり。径1cm未満ロームブロック。しまり非常に弱い。
- 8 7に似るがややしまりよい。

P12土層説明

- 1 暗褐色土。径3cmロームブロックまばら。しまり弱い。
- 2 暗褐色土。灰多量。
- 3 褐色土。黄色粒子まじり。しまり弱い。M4の3層に似る。
- 4 暗褐色土。黄褐色土まじり。微量の灰。焼土粒子。
- 5 暗褐色土。黒色味あり。
- 6 黄褐色土(ローム)。被熱のためかガリツとした感触。



0 (1/200) 10m

第162図 M1~M4実測図

線状に延びる。壁・底面 横断面形は浅い「U字状」を呈する。規模 総延長25.70m、幅2.90m、深さ0.12m。覆土 3層に分層できた。遺物 弥生式土器1点・土師器6点・須恵器2点・石1点出土。

M7(第163図)

位置 F10-98・99Gにまたがる。重複関係 M4～M6と重複するか。形状 南北方向で略直線状に延びる。壁・底面 横断面形は「V字状」に近い。規模 総延長18.70m、幅2.80m、深さは0.82m。覆土 5層に分層できた。遺物 弥生式土器4点・土師器51点・須恵器17点・かわらけ1点・陶器3点・陶磁器1点・石製品1点が出土。性格 M2と形状が近似しており、同様な機能を持つか。

M8(第163図)

位置 F10-99G。重複関係 M2と重複関係がある。形状 略直線状か。壁・底面 丸みを帯びる。規模 総延長1.40m、幅0.45m、深さは記録なし。覆土 記録なし。遺物 出土しなかった。

M11・12・27(全測図)

本溝群は、第2次調査区-第3次調査区間を貫く形で所在するため、今回は第3次調査分の報告書において一括報告するものとし、本書では全測図のみ掲載することに止めたい。

M26(第163図)

位置 G9-80G。重複関係 なし。形状 略直線状か。壁・底面 横断面形は不整な「U字状」を呈するか。規模 総延長1.28m、幅1.36m、深さ0.56m。覆土 最下層が残存する。遺物 出土せず。

M33(第165図)

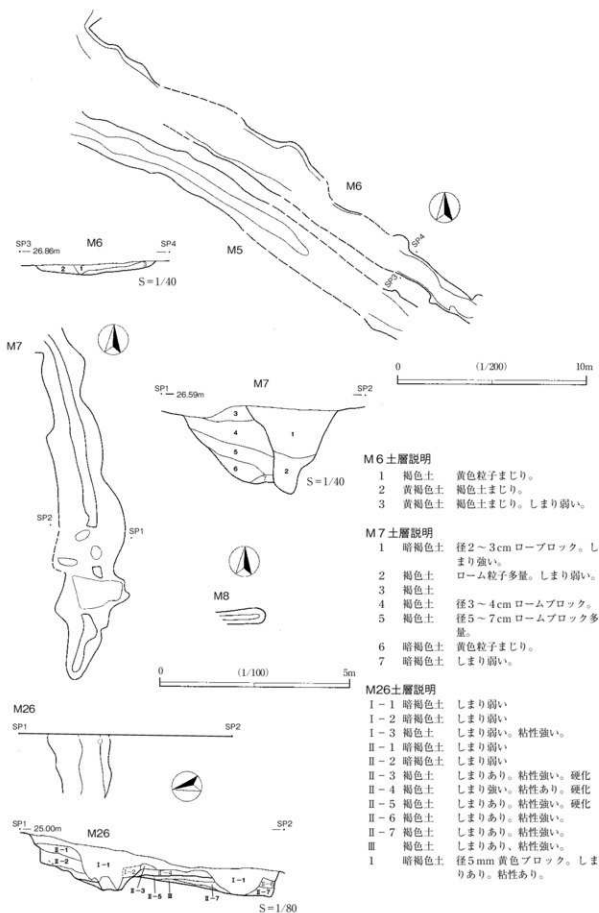
位置 G9-76・86・87・97・G10-7・8・18Gにまたがる。他に鳥状の残存部が見られる。重複関係 D118・D114などを破壊する。形状 北西-南東の方向で略直線状に延びる。壁・底面 横断面形は略「U字状」を呈する。区間が長いので、底面は凹凸を有する。規模 総延長40.60m、幅1.80m、深さ0.44m。覆土 3層に分層できた。遺物 縄文式土器28点・弥生式土器4点・土師器207点・須恵器61点・陶器1点・土製品・石器類各1点・石9点が出土。備考 本跡は第2次・第3次調査区で検出の、M12と同一の溝である可能性がある。

M34(第164図)

位置 G9-65・76・87・98Gにまたがる。重複関係 D95・D107を破壊する。形状 北西-南東の方向で略直線状に延びる。壁・底面 壁は比較的ゆるやかに立ち上がる。底面は極めて凹凸に富み、ピット状の掘り込みから馬骨が出土した。規模 総延長23.10m、幅(2.40m)、深さ1.55m。覆土 24層に分層できた。12～14層はよくしまっており、道路状の硬化面を形成している。21～24層は埋め戻しの可能性が高い。遺物 旧石器4点・縄文式土器85点・石器類3点・弥生式土器3点・土師器356点・須恵器164点・灰釉陶器1点・土製品5点・古瓦3点・陶器6点・陶磁器1点・内耳土器1点・中世在地土器2点・石30点・スラグ4点・不明(成田層由来の褐鉄鉱)133点。性格 道路として使用された時期が存在したことは確実である。馬骨出土の意味は慎重に検討してゆきたい。備考 本跡は第2次・第3次調査区で検出の、M11と同一の溝である蓋然性が高い。

M35(第165図)

位置 G9-76・85・84・92Gにまたがる。重複関係 D94・96～D100を破壊する。形状 北東-南西の方向で略直線状に延びる。壁・底面 比較的浅く、横断面形は「U字状」を呈する。本跡は数多くの堅穴住居跡を破壊するため、形状が一定しておらず、地山掘削部分と埋没遺構掘削部分とは異なっている。規模 総延長28.30m、幅5.20m、深さ0.60m。覆土 5層に分層できた。遺物 縄文式土器302点・石器類12点・弥生式土器26点・土師器1472点・須恵器417点・灰釉陶器5点・土製品8点・鉄製品4点・銭貨1点・陶器2点・陶磁器4点・石37点・スラグ4点・不明5点が出土。



第163図 M5・M6・M7・M8・M26実測図

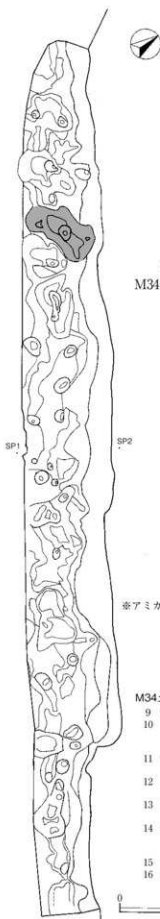


写真1~3
M34馬骨出土状況



写真1

全景
(北から)



写真2

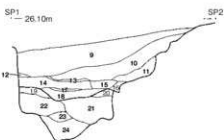
上あご歯
(拡大)



写真3

下あご
(拡大)

△アマミカケは馬骨出土の掘り込み



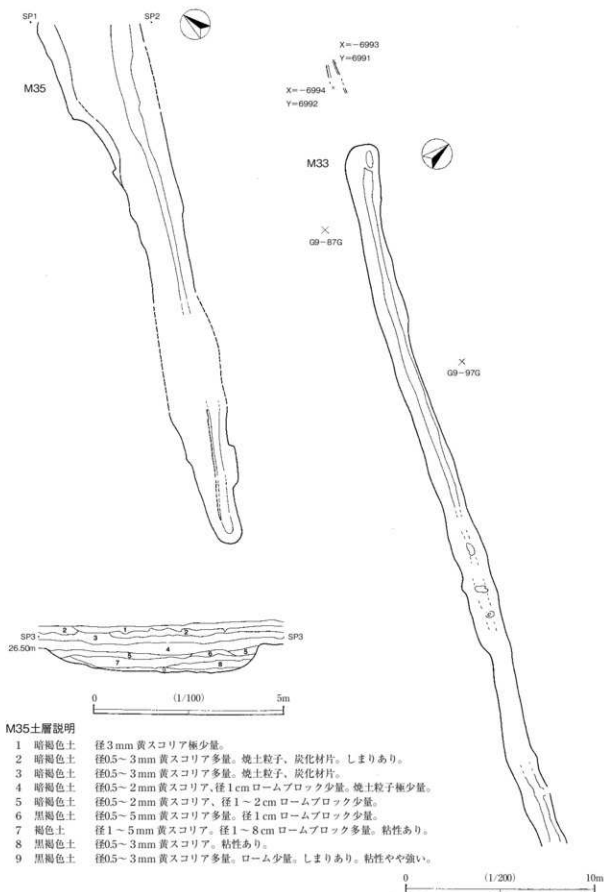
M34土層説明

- | | | | | | |
|----|------|--|----|------|-------------------------------------|
| 9 | 暗褐色土 | 径1~3mm 黄スコリア少量 | 17 | 灰褐色土 | 径1mm 黄スコリア |
| 10 | 暗褐色土 | 径0.5~2mm 黄スコリア多量、
径1cm ロームブロック少量。
焼土粒子極少量。 | 18 | 褐色土 | 径1~5mm 黄スコリア多量。 |
| 11 | 暗褐色土 | 径0.5~2mm 黄スコリア、径
2cm ロームブロック多量。 | 19 | 褐色土 | 径1cm ロームブロック |
| 12 | 褐色土 | 径1~3mm 黄スコリア、ローム
まじり。しまりあり。 | 20 | 褐色土 | 径1~2mm 黄スコリア多量。
径0.5~1cm ロームブロック |
| 13 | 灰褐色土 | 径1~2mm 黄スコリア。しま
りあり。 | 21 | 褐色土 | 径1~3mm 黄スコリア多量。
径1~3cm ロームブロック |
| 14 | 褐色土 | 径0.5~3mm 黄スコリア多量。
径1cm ロームブロック。しま
りあり。 | 22 | 褐色土 | 径1~3mm 黄スコリア、径1
cm ロームブロック多量。 |
| 15 | 褐色土 | 径1~8mm 黄スコリア | 23 | 暗褐色土 | 径1~5mm 黄スコリア多量。 |
| 16 | 褐色土 | 径1~3mm 黄スコリア | 24 | 褐色土 | 径1~3mm 黄スコリア、径1
~2cm ロームブロック多量。 |

0 (1/100) 5m

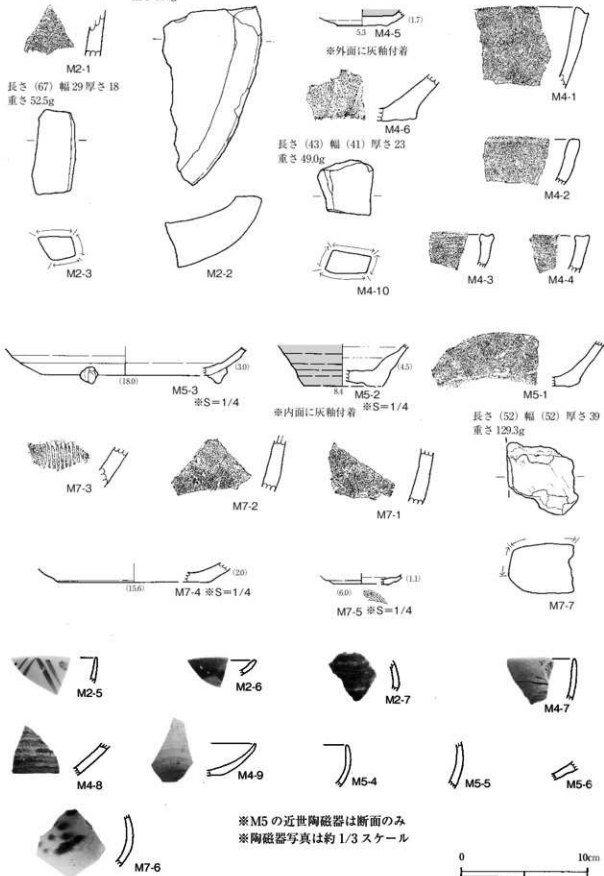
0 (1/50) 2m

第164図 M34実測図



第165図 M33・M35実測図

長さ(142) 幅(76) 厚さ(32)
重さ 351g



第166図 溝出土遺物(1)



M33-1



M34-1



M34-2



M34-3



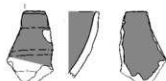
M34-4



M34-5



M35-1



M35-2



M35-3

線外径 (22) 器外径 (6)

厚 1 重 0.5g

※ S=1/2



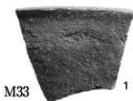
M35-7



M35-8



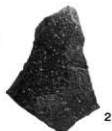
M35-9



M33



M34



2



3



4



5



M35



2



3



4



5



6



7



8

第167図 溝出土遺物(2)

(4) 溝出土遺物(第166図・第167図)

第166図

M2 1は常滑。甕の胴部片で、赤焼きである。5は磁器。6・7は陶器。7は瀬戸・美濃。茶碗の胴部片で、外面に鉄軸を施す。2は茶臼の下臼の受皿片。3は砥石。両側面には切り出し痕がそのまま残る。

M4 1~4は内耳土器で、器種的には土鍋か。1は口唇上が凹線状にくぼみ、外面にススが付着する。2は口唇部形態が角頭気味で、瓦質の焼成。3は口唇上がくぼみ、口縁は内外に肥厚する。胎土に雲母を含み、常陸産。4は口唇部形態が角頭気味で、口縁は内側に肥厚する。

5は瀬戸。小皿で、胎土はやや緻密で灰色。見込み面に灰軸がかかる。6は常滑。甕の底部片である。

7~9は陶器。7は茶碗で、外面に意匠を描く。9は皿で、外面の大半が露胎となる。8は灰軸がかかり、内外面とも下半が露胎となる。古瀬戸の大皿などの小片の可能性もある。10は砥石。

M5 1は在地土器の土鍋で、内耳鍋か。外面にスス付着。胎土に雲母を含み、常陸産。2は瀬戸。四耳壺で、胎土は比較的緻密で灰色。外面に灰軸、底部内面中央に灰軸付着。3は瀬戸。大皿で、胎土は比較的緻密だが、小礫を含み、灰色。三足を付す。内面に灰軸、外面体部下半は露胎とする。6は同一個体か。

4~6は陶器。4は茶碗で、外面に意匠を描く。5は露胎部をはさみ、鉄軸と灰軸をかけ分ける。

M7 1・2は常滑。甕の胴部片。3は瀬戸・美濃。挿鉢の胴部片。内外面とも鉄軸施軸、内面に掻目。

4は在地土器の土鍋。外面にススが付着する。5はかわらけ。ロクロ整形で、底部は回転糸切り。

6は陶器。外面に意匠を施す。7は砥石で、表及び側面に使用面が認められる。

第167図

M33 1は常滑。捏鉢の口縁~胴部片。胎土はやや粗く、小角礫を含む。内面には自然軸がかかる。

M34 1は瀬戸。瓶子の胴下半部。胎土はやや緻密で、灰白色。外面に筋線状の装飾を施し、灰軸を施軸するが、かなり剥落している。2・3は常滑。甕の胴部片。ともに胎土はやや粗く、小角礫を含む。

4・5は在地土器。4は挿鉢で、胴部片。掻目は6本1組か。5は土鍋で、胎土に雲母を含み、常陸産。

M35 1は渥美か。甕の胴部片で、無施軸の焼き締めである。2は瀬戸・美濃か。茶碗の口縁~体部片。胎土は緻密で、灰白色。内面から体部下半まで施軸する。下半以下は露胎とする。軸の発色は乳白色。

3~6は陶器。3は香炉で、体部外面に灰軸を施軸。4は火入れで、内外面に鉄軸を施軸。5は茶碗で、内外面に灰軸を施軸。6は甕か。外面に「柿軸」を施軸。これらはいずれも、瀬戸・美濃。

7は銭貨。中世の銅銭と思われるが、鎔と腐食により銭名は不明。

8・9は鉄製品。8は刃部を有するが、農具・工具・武器のいずれかは不明。9は棒状かつ断面は円形。

(5) 遺構外出土遺物(第169図~172図)

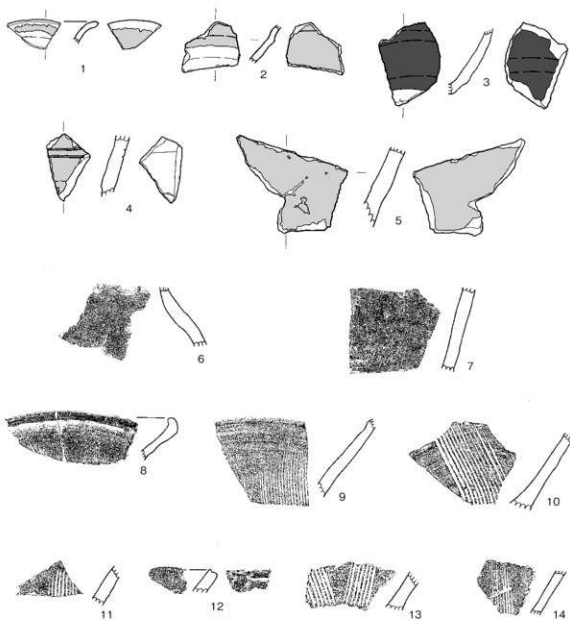
第168図(第1次調査出土中世遺物)

1~5は瀬戸・美濃。1は端反皿か。胎土は緻密で、暗灰色。内外面とも灰軸を施軸するが、剥落が目立つ。2は皿ないしは平碗。胎土は緻密で、灰白色。口縁外面から内面全体に灰軸を施軸。3は天目茶碗。胎土は緻密で、灰白色。内面から体部下半まで鉄軸を厚く施軸。4は瓶子。胎土は緻密で、灰色。外面には筋線を施し、灰軸を施軸。5は内外に灰軸が施されている。これのみ前代の所産か。

6は常滑。甕の胴上部片。胎土に砂・長石や目立つ。内外面ともナデ調整が入る。

7は渥美。甕の胴部片。胎土に砂・小礫を含み、灰褐色に焼かれている。内外面ともケズリ後ナデ。

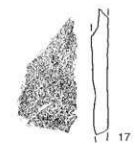
8~11は瀬戸・美濃。いずれも挿鉢で、内外面とも鉄軸(錯軸)を施軸。8の胎土はやや緻密で、灰白色。口縁端部は内側に屈曲する。古瀬戸後期Ⅳ期新に比定される。9の胎土はやや緻密で、灰褐色。破損面に擦れが認められ、磨耗陶片などの転用品にした形跡がある。10の胎土は緻密で、灰白色。外面は露胎部が目立つ。11の胎土はやや緻密で、灰褐色。9~11は大窯期の所産で、11は登窯期か。



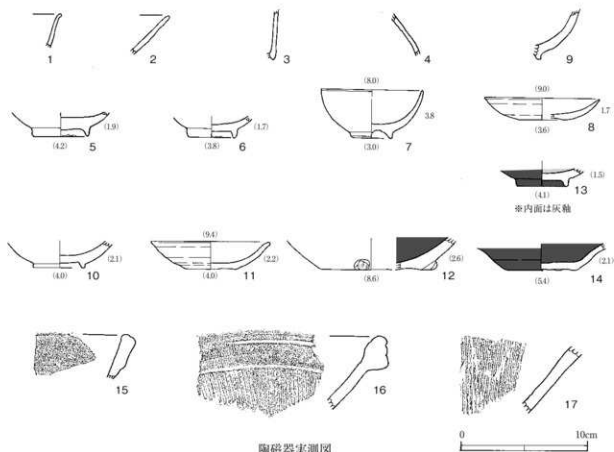
長さ63幅19厚さ8.5 重さ10.6g

長さ29幅27厚さ7 重さ5.0g

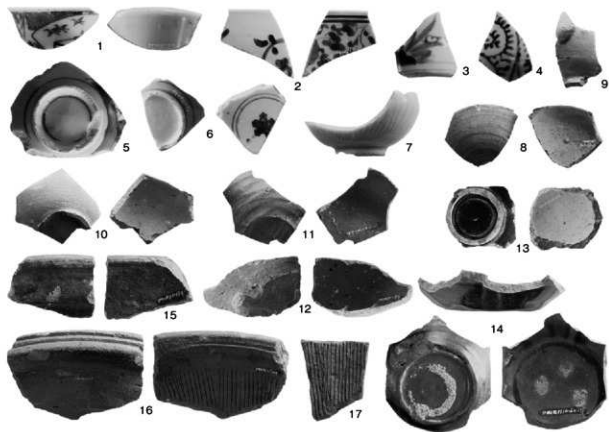
長さ100幅54厚さ13 重さ99.6g



第168図 第1次調査遺構外中世遺物

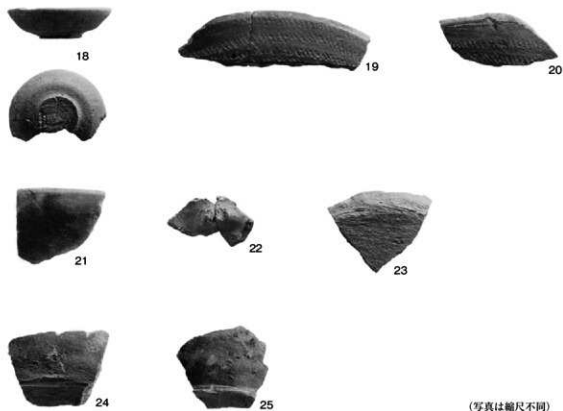
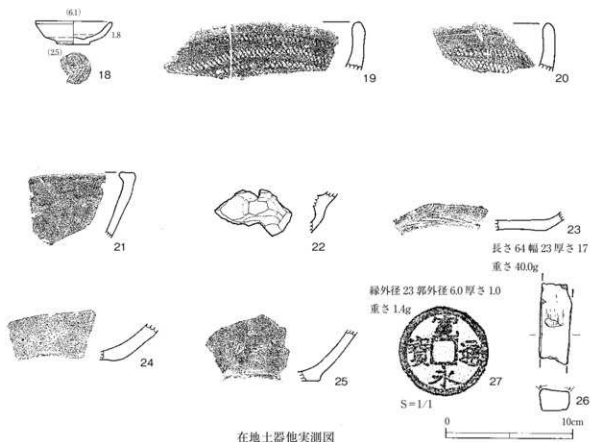


陶磁器実測図



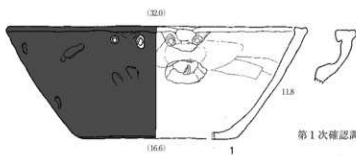
第169回 第1次調査遺構外近世陶磁器

(縮尺不同)

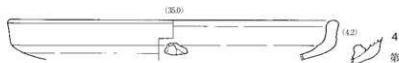
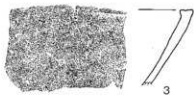
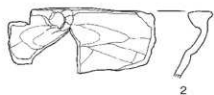


(写真は縮尺不同)

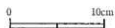
第170図 第1次調査遺構外近世遺物(在地土器他)



第1次確認調査



第6次 17トレンチ



1

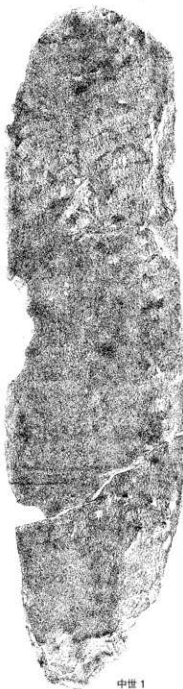


2



第171図 第1次、第6次確認調査中近世遺物

長さ726幅190厚さ34 重さ7510g



中世1

※本例は調査区外
※S=1/4

長さ34幅17
重さ4.6g



近世1

長さ20幅17
重さ1.7g



近世2

長さ21幅23
重さ2.3g



近世3

(写真は縮尺不同)

径411高さ20重さ820.9g



近世7

縁外径23郭外径6厚さ1
重さ4.2g



中世2

縁外径24郭外径6厚さ1
重さ3.5g



中世3

縁外径24郭外径6.5厚さ1
重さ2.8g



中世4

縁外径24郭外径6.5厚さ1
重さ2.5g



中世5



長さ70幅50厚さ10 重さ41.4g



近世8

長さ51幅50厚さ13 重さ32.3g



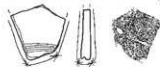
近世9

長さ98幅65厚さ9.5 重さ70.0g



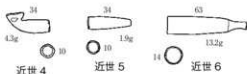
近世10

長さ41幅42厚さ8 重さ11.1g



近世11

※外面鉄軸痕跡



近世4

近世5

近世6



第172図 第7次調査遺構外中近世遺物

12～14は在地土器。いずれも播鉢である。12の口唇上は沈線状にくほみ、13の播目は7本1組。

15不明石製品。16は硯を転用したもの。側面は垂直に立ち上がる。17は板砕片。

第169回・170回（第1次調査出土近世遺物）

1～7は磁器で、肥前系。1は碗で、外面に「銅版型押し」による花鳥文様。2も碗。3は蕎麦猪口。4は徳利か。外面に「蛸唐草文」。5・6は碗で、砂高台を有する。6は底部外面に「五弁花文」。7も碗。

8～17は陶器。8は灯明皿で信楽。9・10は碗。11～14は瀬戸・美濃。11は灯明皿。12は行平鍋。足を付し、内面に鉄軸。13は碗で、外面に鉄軸、内面は灰軸。14は鉢か。内外面とも鉄軸。内面には「ピン痕」、底部外面には「輪トチン痕」。15～17は播鉢。15は瀬戸・美濃で、16・17は堺系。

18～25は在地土器。18はかわらけ。小皿である。19・20は火鉢で、格子文（回転印刻文）を施すもので、同一個体。21～25は内耳土器。21・22は胎土に雲母を含み、常陸産。

26は砥石。27は銭貨で、寛永通寶。「寶」字のハネが「ス」状なので、大枠で見て「古寛永」である。

第171回（第1次・6次確認調査出土中・近世遺物）

1～3は在地土器で、内耳鍋。別々に図化しているが、同一個体である。この土器の属性を伝えるべく、内外面実測図・内面実測図・外面拓影図・写真を添付した。器形は「ラーメン丼」状を呈し、口縁端部は内外に肥厚する。内耳は三個所に付けられたと思われるが、いずれも欠損し、欠損面を擦っている。手前側にくる、一番負担のかかる内耳には、一对の焼成前穿孔が施され、紐を通したのか。外面全体にスガが厚く付着し、黒褐色を呈する。胎土には雲母を含み、常陸産。第1次確認調査時の出土。

4も在地土器で、内耳焙烙。丸底で、口縁は短く直上気味に立ち上がり、器高は低い。内耳部は欠損している。江戸後期の所産である。第6次確認調査16トレンチより出土した。

第172回（第7次調査出土中・近世遺物）

中世1は「板碑転用の石製品」。ほぼ完存品。表側を観察すると、右上から左下に向かってたくさんの鑿痕が見られ、碑面を削り取っていることが判明した。板石塔婆という性格上、碑面に刻まれた銘文などを削除することは在りえない。それ故、形状こそ板碑のそれであるが、全く別の石製品に再生したものと解釈した。第7次調査区西側の墓地で、工事中に出土したものを、常松成人氏が回収した。

中世2～5は銭貨。2・3は「開元通寶」で、唐銭であるが、両者は大きさや字体も異なり、私鑄銭の可能性が高い。4は「皇宋通寶（真書）」で、北宋銭。5は「熙寧元寶（真書）」で、北宋銭。

近世8～11は磨耗陶片。瀬戸・美濃の播鉢片を素材としており、破損面そのものを使用面とする。9のみ表裏面にも使用面が見られ、別の使用法であった可能性がある。播鉢は登壇2期の所産。

近世1・2は泥面子。1は烏帽子を被った人物の頭部。2は火男のような男性の頭部。3は土人形の足。

近世4～7は銅製品。4は煙管雁首。5・6は煙管吸口で、6は長煙管の吸口で、径が大きいだけでなく、長い。「羅字竹」も当然太いものを使用したはずで、雁首もまた大きいものであった蓋然性が高い。

7は蓋で、天井部に花の飾りが付けられる。口縁の内側にかえりがつく形態である。相方は不明。

(6) 石造物（第173・174回）

これらは、第6次確認・本調査の際に、20トレンチから台座部分などが出土したものを含む。他地区より持ち込まれたものもあったようで、調査後は本来の場所に戻した。出土品としての「十九夜塔」は埋蔵文化財であるが、元々は「十九夜講」に裏打ちされたものであって、「講」自体はその土地に根ざした無形文化財である。元の場所に戻すことは、広義の解釈において、文化財保護になるものと思われる。

十九夜塔のうち、造立年月日が判読できたのを見ると、元文二年（1737年）と文化十三年（1816年）がある。両者は、石田年子氏の研究を参考にすると、造立数のグラフが上昇を示す時期に相当している。本遺跡周辺の、江戸時代における女人講の一端が明らかにされたことになる。

3. 十九夜塔

造立年月日 文化13年3月吉日(西暦1816年)
 寸法(高さ×幅×厚さ、単位:cm) 66×31×20
 造立者 十九夜講中四十七人

文化十三年三月吉日
 (如意輪観音)
 (十九) 夜講中 四十七人



備考 光背型。如意輪観音(左手に未開蓮を持つ)
 両足ひざより下部破損。
 面部左破損。
 20T出土。

4. 十九夜塔

造立年月日 不明
 寸法(高さ×幅×厚さ、単位:cm) 66×28×16

(安政?)
 (如意輪観音)
 十九夜



備考 光背型。如意輪観音
 面部・右腕・足ひざ破損。
 右足先破損。左面全体破損により銘文判読困難。安政か? 安政は、西暦1854~1859年。
 20T出土。

5. (十九夜塔)如意輪観音

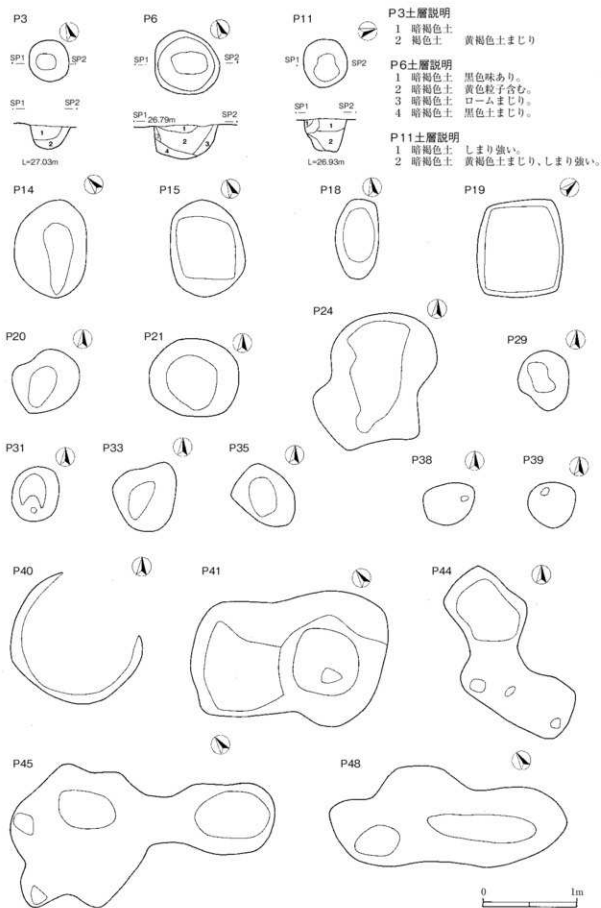
造立年月日 (年不明)2か3月吉日
 寸法(高さ×幅×厚さ、単位:cm) 38.5×25.5×16
 造立者 村上村□(阿?)辺田前

村上村
 □(阿?)
 □辺田前
 (如意輪観音)
 □月吉日



備考 20T出土。
 十九夜塔と思われる。
 肩部より上部欠損。

第174図 第6次確認本調査 石遺物(2)



第175図 時期不明遺構(1)

8 時期不明

ここで時期不明としたものは、出土遺物が皆無か、諸属性から鑑みても時期決定ができなかった遺構群の категорияである。今回は出土遺物の有無だけでなく、諸属性の検討を踏まえた上で、可能な限りは時期決定を行ってきた。そのいかなる「筋」をも潜り抜けてきただけあって、現状ではなす術がない。しかしながら、「ある時代」の「人(人々)」によって掘削・使用された訳であるから、紛れも無くそれは「遺構」なのである。ただし、調査によっては、断面図が存在しないものも少なからずあり、遺構に関する情報量が僅少なために時期不明とせざるをえなかった事例を含む。それらは、該当項目に「深さは不明」、「記録なし」などと記述した。以下に遺構の事実記載のみ行うことにする。

(1) ビット (第175図・176図)

P3 (第175図)

位置 F11-9G。重複関係 単独。長軸 ほぼ円形なのでなし。平面形 円形(楕円気味)。壁・底面 壁はゆるやかに立ち上がる。底面は丸みを帯びる。規模 0.43m×0.44m。検出面からの深さは0.23mを測る。覆土 2層に分層でき、ともにしまりに欠ける。遺物 なし。

P6 (第175図)

位置 F11-9G。重複関係 単独。長軸 ほぼ円形なのでなし。平面形 円形。壁・底面 底面の中央部が浅くくぼむ。規模 0.67m×0.69m。検出面からの深さは0.36mを測る。覆土 4層に分層でき、暗褐色土系。遺物 なし。

P11 (第175図)

位置 H10-64G。重複関係 単独。長軸 ほぼ西-東。平面形 略円形。壁・底面 壁はゆるやかに立ち上がる。底面は丸みを帯びる。規模 0.52m×0.47m。検出面からの深さは0.34mを測る。覆土 2層に分層でき、暗褐色土系。しまりよい。遺物 なし。

P14 (第175図)

位置 G11-6G。重複関係 単独。長軸 ほぼ北東-南西。平面形 上部、底部ともやや不整な楕円形。壁・底面 不明。規模 1.03m×0.77m、深さは不明。覆土 記録なし。遺物 なし。

P15 (第175図)

位置 G11-6G。重複関係 単独。長軸 ほぼ北北東-南南西。平面形 上部不整楕円形、底部隅丸方形。壁・底面 不明。規模 1.04m×0.79m、深さは不明。覆土 記録なし。遺物 なし。

P18 (第175図)

位置 F11-7G。重複関係 単独。長軸 ほぼ北北東-南南西。平面形 上部、底部とも楕円形。壁・底面 不明。規模 0.84m×0.46m、深さは不明。覆土 記録なし。遺物 なし。

P19 (第175図)

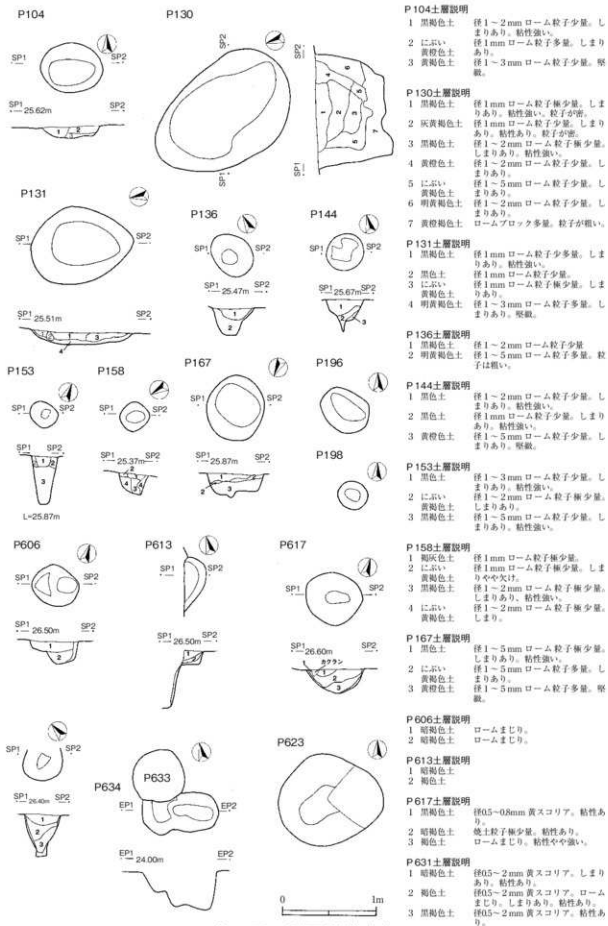
位置 F11-8G。重複関係 単独。長軸 ほぼ北西-南東。平面形 隅丸方形。壁・底面 壁は垂直に立ち上がる。規模 1.03m×0.93m、深さは不明。覆土 記録なし。遺物 なし。

P20 (第175図)

位置 F11-8G。重複関係 単独。長軸 ほぼ北東-南西。平面形 上部不整な楕円形、底部楕円形。壁・底面 不明。規模 0.73m×0.65m、深さは不明。覆土 記録なし。遺物 なし。

P21 (第175図)

位置 F11-8G。重複関係 単独。長軸 ほぼ西-東。平面形 上部、底部ともやや不整な円形。壁・底面 不明。底面は丸みを帯びる。規模 0.83m×0.95m、深さは不明。覆土 記録なし。遺物 出土しなかった。



第176図 時期不明遺構(2)

P104土層説明

- 1 黒褐色土 径1~2mm ローム粒子少量。しまりあり。粘性強い。
- 2 にぶい 径1mm ローム粒子多量。しまりあり
- 3 黄褐色土 径1~3mm ローム粒子少量。堅粒。

P130土層説明

- 1 黒褐色土 径1mm ローム粒子極少量。しまりあり。粘性強い。粒子が密。
- 2 灰黄褐色土 径1mm ローム粒子少量。しまりあり。粘性あり。粒子が密。
- 3 黒褐色土 径1~2mm ローム粒子極少量。しまりあり。粘性強い。
- 4 黄褐色土 径1~2mm ローム粒子少量。しまりあり。
- 5 にぶい 径1~5mm ローム粒子少量。しまりあり。
- 6 明黄褐色土 径1~2mm ローム粒子少量。しまりあり。
- 7 黄褐色土 ロームブロック多量。粒子が粗い。

P131土層説明

- 1 黒褐色土 径1mm ローム粒子少量。しまりあり。粘性強い。
- 2 黒色土 径1mm ローム粒子少量。
- 3 にぶい 径1mm ローム粒子極少量。しまりあり
- 4 明黄褐色土 径1~3mm ローム粒子多量。しまりあり。堅粒。

P136土層説明

- 1 黒褐色土 径1~2mm ローム粒子少量
- 2 明黄褐色土 径1~5mm ローム粒子多量。粒子は粗い。

P144土層説明

- 1 黒色土 径1~2mm ローム粒子少量。しまりあり。粘性強い。
- 2 黒色土 径1mm ローム粒子少量。しまりあり。粘性強い。
- 3 黄褐色土 径1~5mm ローム粒子少量。しまりあり。堅粒。

P153土層説明

- 1 黒色土 径1~3mm ローム粒子少量。しまりあり。粘性強い。
- 2 にぶい 径1~2mm ローム粒子極少量。黄褐色土
- 3 黒褐色土 径1~5mm ローム粒子少量。しまりあり。粘性強い。

P158土層説明

- 1 褐色土 径1mm ローム粒子極少量。
- 2 にぶい 径1mm ローム粒子極少量。しまりやや欠け。
- 3 黒褐色土 径1~2mm ローム粒子極少量。しまりあり。粘性強い。
- 4 にぶい 径1~2mm ローム粒子極少量。黄褐色土

P167土層説明

- 1 黒色土 径1~5mm ローム粒子少量。しまりあり。粘性強い。
- 2 にぶい 径1~5mm ローム粒子多量。黄褐色土
- 3 黄褐色土 径1~3mm ローム粒子多量。堅粒。

P606土層説明

- 1 暗褐色土 ロームまじり。
- 2 暗褐色土 ロームまじり。

P613土層説明

- 1 暗褐色土
- 2 褐色土

P617土層説明

- 1 黒褐色土 径0.5~0.8mm 黄スコリア。粘性あり。
- 2 暗褐色土 焼土粒子極少量。粘性あり。
- 3 褐色土 ロームまじり。粘性やや強い。

P631土層説明

- 1 暗褐色土 径0.5~2mm 黄スコリア。しまりあり。粘性あり。
- 2 褐色土 径0.5~2mm 黄スコリア。ロームまじり。しまりあり。粘性あり。
- 3 黒褐色土 径0.5~2mm 黄スコリア。粘性あり。

P24(第175図)

位置 F10-98G。重複関係 単独。長軸 ほぼ北-南。平面形 上部、底部とも極めて不整な楕円形。壁・底面 不明。規模 1.49m×1.18m。深さは不明。覆土 記録なし。遺物 なし。

P29(第175図)

位置 F11-10G。重複関係 単独。長軸 ほぼ北西-南東。平面形 上部不整な円形、底部不整な楕円形。壁・底面 不明。規模 0.63m×0.58m。深さは不明。覆土 記録なし。遺物 なし。

P31(第175図)

位置 F11-10G。重複関係 単独。長軸 ほぼ北北東-南南西。平面形 略円形。壁・底面 三日月形のテラスを有し、底面は先すばまりとなり、円形。規模 0.57m×0.51m。深さは不明。覆土 記録なし。遺物 なし。

P33(第175図)

位置 F11-10G。重複関係 単独。長軸 ほぼ北東-南西。平面形 上部、底部ともやや不整な楕円形。壁・底面 不明。規模 0.77m×0.67m。深さは不明。覆土 記録なし。遺物 なし。

P34

位置 F11-10G。重複関係 単独。長軸 ほぼ北西-南東。平面形 上部楕円形、底部不整な楕円形。壁・底面 不明。規模 0.53m×0.42m。深さは不明。覆土 記録なし。遺物 なし。

P35(第175図)

位置 F11-10G。重複関係 単独。長軸 ほぼ北西-南東。平面形 上部不整楕円形、底部楕円形。壁・底面 不明。規模 0.72m×0.54m。深さは不明。覆土 記録なし。遺物 なし。

P38(第175図)

位置 F11-10G。重複関係 単独。長軸 ほぼ東北東-西南西。平面形 上部やや不整楕円形、底部楕円形。壁・底面 不明。規模 0.57m×0.44m。深さは不明。覆土 記録なし。遺物 なし。

P39(第175図)

位置 F11-10G。重複関係 単独。長軸 ほぼ北東-南西。平面形 上部やや不整な円形、底部楕円形。壁・底面 不明。規模 0.53m×0.49m。深さは不明。覆土 記録なし。遺物 なし。

P40(第175図)

位置 F11-9G。重複関係 単独。長軸 ほぼ正円形なのでなし。平面形 上部、底部とも円形。壁・底面 不明。規模 1.39m×(1.13m)。深さは不明。覆土 記録なし。遺物 なし。備考 本跡は全体の約三割が削平を受けている。

P41(第175図)

位置 F11-9G。重複関係 単独。長軸 ほぼ北西-南東。平面形 不整な楕円形。壁・底面 テラスを有し、二段状となる。下段は先すばまりの円形。規模 2.06m×1.45m。深さは不明。覆土 記録なし。遺物 なし。

P44(第175図)

位置 F11-10G。重複関係 単独。長軸 ほぼ北西-南東。平面形 楕円の一端同士が相接したような不整形。壁・底面 不整楕円形の広いテラスと、3箇所ビット状の掘り込みを有する。規模 1.26m×0.64m、0.90m×0.67m。深さは不明。覆土 記録なし。遺物 なし。備考 本跡は複数のビットの重複を1基として捉えている可能性がある。

P45(第175図)

位置 F11-10G。重複関係 単独。長軸 ほぼ北西-南東。平面形 「アメーバ状」とでも例えるべ

き不整形。壁・底面 不明。規模 2.82m×1.56m、深さは不明。覆土 記録なし。遺物 なし。備考 本跡は大ピット2基、小ピット2基の重複か。

P48(第75図)

位置 F11-9G。重複関係 単独。長軸 ほぼ西北西-東南東。平面形 不整な楕円形。壁・底面 底面は大小2基の楕円形ピット状となる。規模 2.53m×1.03m、深さは不明。覆土 記録なし。遺物 なし。備考 本跡は2基のピットの重複の可能性がある。

P104(第176図)

位置 G9-11G。重複関係 単独。長軸 ほぼ東-西。平面形 上部・底部ともに楕円形。壁・底面 壁はゆるやかに立ち上がる。規模 0.68m×0.53m、検出面からの深さは0.13mを測る。覆土 3層に分層できた。遺物 縄文式土器が1点出土したが、時期決定にはならなかった。

P130(第176図)

位置 G9-21G。重複関係 単独。長軸 ほぼ北西-南東。平面形 上部楕円形・底部不整楕円形。壁・底面 壁は垂直気味に立ち上がる。底面はやや凹凸に富む。規模 1.61m×1.06m、検出面からの深さは0.81mを測る。覆土 7層に分層でき、全体にしまりあり。埋め戻しか。遺物 縄文式土器・土師器・江戸在土器各1点出土したが、時期決定にはならなかった。

P131(第176図)

位置 G9-11G。重複関係 単独。長軸 ほぼ南-北。平面形 上部・底部ともに楕円形。壁・底面 底面は皿状。規模 1.08m×0.82m、検出面からの深さは0.13mを測る。覆土 4層に分層できた。遺物 出土しなかった。

P136(第176図)

位置 G9-21G。重複関係 単独。長軸 ほぼ円形なのでなし。平面形 上部・底部ともに円形。壁・底面 壁は垂直気味に立ち上がる。規模 0.50m×0.41m、検出面からの深さは0.28mを測る。覆土 2層に分層でき、全体にしまりを欠く。遺物 なし。性格 柱穴状の小ピット。

P144(第176図)

位置 G9-23G。重複関係 単独。長軸 ほぼ東北東-西南西。平面形 上部円形・底部はかなり不整な楕円形。壁・底面 中央は先すばまりとなり、尖る。規模 0.41m×0.38m、検出面からの深さは0.36mを測る。覆土 3層に分層でき、全体にしまりに富む。遺物 なし。

P153(第176図)

位置 G9-31G。重複関係 単独。長軸 ほぼ西北西-東南東。平面形 上部・底部ともに円形。壁・底面 壁は垂直気味に立ち上がる。規模 0.31m×0.25m、検出面からの深さは0.53mを測る。覆土 3層に分層でき、1層は柱痕である。全体にしまりに富む。遺物 なし。性格 柱穴状。

P158(第176図)

位置 G9-32G。重複関係 単独。長軸 ほぼ北東-南西。平面形 上部円形・底部楕円形。壁・底面 壁は垂直気味に立ち上がる。規模 0.33m×0.32m、検出面からの深さは0.23mを測る。覆土 4層に分層できた。遺物 なし。

P167(第176図)

位置 G9-42G。重複関係 単独。長軸 ほぼ東-西。平面形 上部円形・底部楕円形。壁・底面 壁はゆるやかに立ち上がる。底面は丸みを帯びる。規模 0.68m×0.62m、検出面からの深さは0.26mを測る。覆土 3層に分層でき、しまりに富み、最下層の3層は堅緻で、最上層の1層は粘性に富む。遺物 出土しなかった。

P196(第176図)

位置 G9-31G。重複関係 単独。長軸 ほぼ北西-南東。平面形 上部・底部とも楕円形。壁・底面 不明。規模 0.53m×0.43m。深さは不明。覆土 記録なし。遺物 なし。

P198(第176図)

位置 G9-42G。重複関係 単独。長軸 ほぼ北西-南東。平面形 上部円形・底部楕円形。壁・底面 不明。規模 0.32m×0.29m。深さは不明。覆土 記録なし。遺物 なし。

P606(第176図)

位置 G9-74G。重複関係 単独。長軸 ほぼ東-西。平面形 やや不整な楕円形。壁・底面 一段テラスを有する下段は丸底気味。規模 0.52m×0.43m。検出面からの深さは0.24mを測る。覆土 2層に分層できた。遺物 なし。

P613(第176図)

位置 G9-84G。重複関係 D90に破壊される。長軸 (ほぼ北東-南西)。平面形 楕円形か。壁・底面 壁は垂直気味で、底面は平坦。規模 (0.54)m×(0.32)m。検出面からの深さは0.16mを測る。覆土 2層に分層できた。遺物 なし。備考 本跡はD90の破壊を受けているため、奈良時代以前であることは間違いない。ただし、いつの所産かは不明であり、本項で扱うことにした次第である。

P617(第176図)

位置 G9-84G。重複関係 単独。長軸 ほぼ東北東-西南西。平面形 やや不整な円形。壁・底面 壁はゆるやかに立ち上がり、底面は丸みを帯びる。規模 0.60m×0.55m。検出面からの深さは0.24mを測る。覆土 3層に分層でき、全体に粘性があり、最下層ではやや強い。遺物 なし。

P623(第176図)

位置 G10-7G。重複関係 D115を破壊する。長軸 ほぼ北北東-南南西。平面形 楕円形。壁・底面 壁はゆるやかに立ち上がり、底面は丸みを帯びる。規模 1.13m×0.98m。検出面からの深さは0.20mを測る。覆土 2層に分層でき、暗褐色土系。遺物 なし。備考 本跡はD115を破壊しているため、平安時代以降であることは間違いない。ただし、いつの所産かは不明である。

P631(第176図)

位置 G9-94G。重複関係 単独。長軸 不明。平面形 円形か。壁・底面 底面に向かって先ずはまり状となる。規模 0.43m×(0.29)m。検出面からの深さは0.45mを測る。覆土 3層に分層できた。遺物 縄文式土器1点出土。これで時期決定はせず。

P634(第176図)

位置 G9-94G。重複関係 P633に破壊される。長軸 不明。平面形 不整形。2基のピットの集合体である。壁・底面 壁は比較的ゆるやかに立ち上がり、底面は凹凸目立つ。規模 0.81m×0.42m。検出面からの深さは0.28mを測る。覆土 2層に分層できた。遺物 なし。備考 本跡はP633の破壊を受けているため、奈良・平安時代以前であることは間違いない。ただし、いつの所産かは不明。

第3章 白筋遺跡の調査

1 はじめに

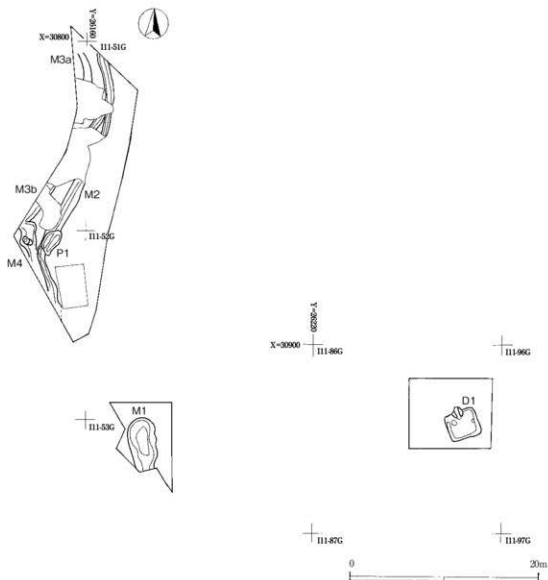
本遺跡の旧石器時代から弥生時代までの間は、人間の生活の痕跡が極めて希薄で、今回報告中に弥生時代の遺構・遺物は皆無であった。しかしながら、それはそれで発掘調査により判明したことなので、ごく簡明に列記したい。

2 旧石器時代

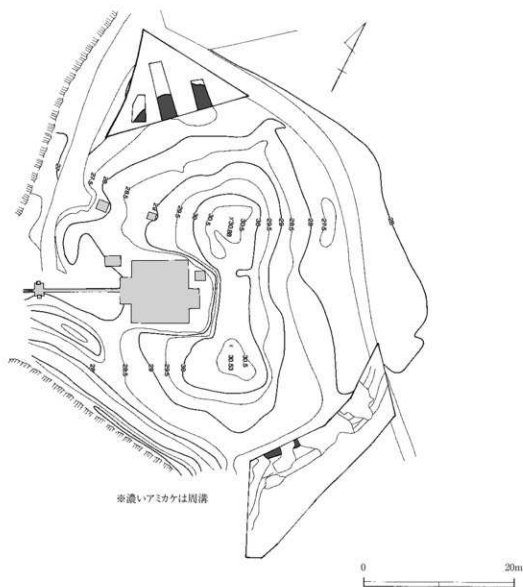
下層調査のテスト・ビットから、石片1点が出土した。産出層準はⅡ層である。残念ながら、その後の不始末により、本整理を行った現時点では、遺物は行き方知れずのままとなっている。

3 縄文時代

第1次確認調査で早期撚糸文系土器が1点出土しているので、写真図版に掲載した。口縁は大きく外側に肥厚し、口唇部・口縁部・頸部に縄文を施文する。井草式土器のJ型である。第1次本調査ではM3 a・M4覆土から前期後半浮島式土器が出土した。両方合わせて3点であるため、単独での挿図作成はせず、各々の遺構出土遺物と一緒に掲載し、事実記載を行うことにする。



第177図 白筋遺跡遺構配置図



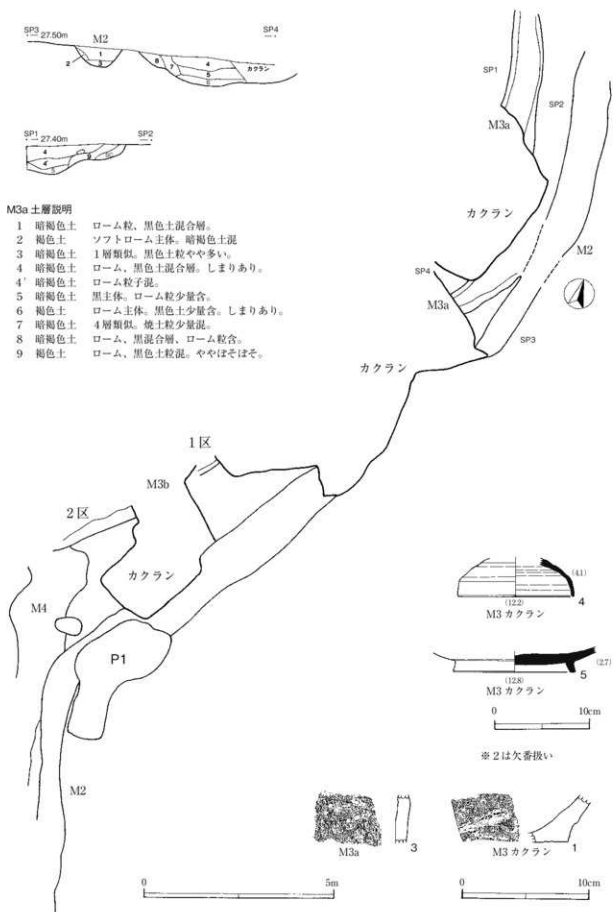
第178図 根上神社古墳墳丘測量図

4 古墳時代

(1) 根上神社古墳 (第178図)

本古墳は、辺田前・沖塚前低地に望む台地縁辺部に築造されている。「八千代市の歴史」には、全長50m、後円部直径35m、前方部幅32m、後円部高さ3.5m、前方部高さ2.5mで、墳丘の東側部分に周溝を有する市内最大の前方後円墳と記載されている。少々長くなるが、以下に「平成13年度市内遺跡発掘調査報告書」のまとめを引用させていただくことにする。そのかわり、第5章の成果と課題における、本古墳に関する記述は控え目にさせていただきたい。

「今回の調査で古墳北西部の、平成10年度の調査で南東部のそれぞれ周溝外側が検出され、古墳長軸方向の周溝外側間の長さが約50mとわかった。周溝の幅について考えると、北西部における内側の立ち上がりは調査範囲外であるが、それは地形観察により微妙な段差として認識できる。そこから推測して、3～4m規模になるものとする。北西部での周溝の深さは検出面から10～30cmと浅い。台地縁辺部に作り出された古墳なので、斜面側では相対的に浅くなるのであろう。 - (中略) - 主体部についても不明で、まだ謎の多い古墳であるが、今回2Tから周溝内主体部と考えられる土坑が検出されたことは意義深い。」



M3a 土層説明

- 1 暗褐色土 ローム粒、黒色土混合層。
- 2 褐色土 ソフトローム主体。暗褐色土混
- 3 暗褐色土 1層類似。黒色土粒やや多い。
- 4 暗褐色土 ローム、黒色土混合層。しまりあり。
- 4' 暗褐色土 ローム粒子混。
- 5 暗褐色土 黒主体。ローム粒少量含。
- 6 褐色土 ローム主体。黒色土少量含。しまりあり。
- 7 暗褐色土 4層類似。焼土粒少量混。
- 8 暗褐色土 ローム、黒混合層、ローム粒含。
- 9 褐色土 ローム、黒色土粒混。ややぼそぼそ。

第179図 M3a・M3b (根上神社古墳周溝実測図)

(2) M3(根上神社古墳周溝) (第179図)

本跡は根上神社古墳の前方部の周溝である。その遺存状態は決して良好ではなく、M2及びM4の破壊を受けており、さらには随所に擾乱を受けて分断され、2箇所という、極めて断片的な検出に留まった。また、周溝の南東コーナーと想定される部分にも擾乱があるため、形状を判断することができない。よって、今回はあえて想定線を入れずに報告する。

他方で、I12-51G・61Gにまたがる部分では、M2に沿うように細い溝が分岐している。調査の時点から両者を同一の遺構に扱ってきたが、今回は全く別の遺構として扱い、細い方をM3a、周溝をM3bと呼称する。細い溝は周溝としては幅狭なだけでなく、溝が描くラインが墳丘の形状にそぐわないことが判断基準の一つとなった。

M3bの報告にあたり、北側から仮に1区・2区と呼称することにしたい。1区～2区の検出分の総延長2.90m、最大幅(0.40)m(2区)、最深部0.29m(2区)を測る。このうち、最大幅は、あくまでも調査部分でのものである。第3次調査を含め、調査区域内で周溝の幅が判明した例はなく、今回も未調査区域によって阻まれ、内側(墳丘側)の立ち上がりは検出できなかった。

各区ともに壁は緩やかに立ち上がり、底面は比較的凹凸に富む。あくまでも推測の域を出ないが、壁及び底面ともきっちりとして掘られ、横断面が逆台形を呈するような形状ではないと思われる。今回検出分からは、周溝内主体部は検出されなかった。覆土は5層に分層でき、自然堆積である。擾乱部分からとはいえ、後述する8世紀代の須恵器高台付盤が出土しており、その頃には周溝はかなり埋没していたことを示唆するものである。

M3aはM3bを破壊し、一部はM2に沿うように掘られており、やや不規則な弧状に展開する溝である。検出部分での総延長約5.2m、幅0.9m、最深部で0.4mを測り、横断面での形状はU字形を呈する。覆土は5層に分層できた。覆土からの出土遺物は3の縄文式土器で、本跡には伴わない。擾乱部分からであるが、4の常滑甕が出土しており、本跡は中世の所産である可能性が高い。

出土遺物(第179図)

今回の調査では、周溝からは古墳の年代を決定できるような遺物は出土しなかった。ここでは、擾乱部分より出土した遺物及びM3aの出土遺物も、併せて報告する。

1・2は須恵器である。4は蓋坏の蓋。ロクロ整形で、天井部は回転ヘラケズリ。湖西産。本例は古墳時代の所産ではあるが、これを以って年代決定の基準資料とすることには躊躇せざるを得ない。5は高台付盤。体部下端から高台部。ロクロ整形で、付け高台。胎土に雲母・石英細粒含み、常陸産。

3はM3aの出土遺物。3は縄文式土器で前期後半浮島式。1は甕の底部付近。中世常滑焼。

5 奈良・平安時代

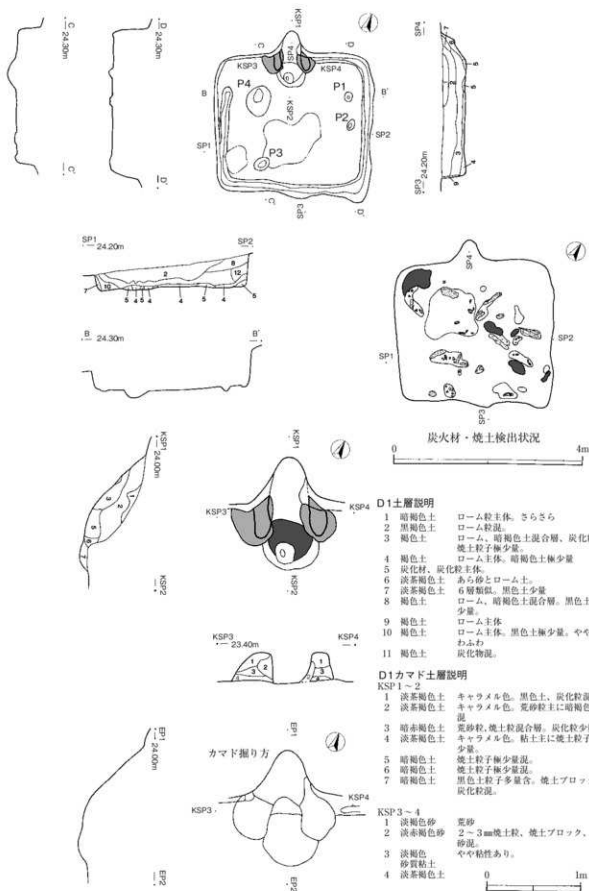
奈良・平安時代は、竪穴住居跡1軒で、周辺に同時代の遺構はなく、全く隔絶された観がある。

(1) 竪穴住居跡(第180図)

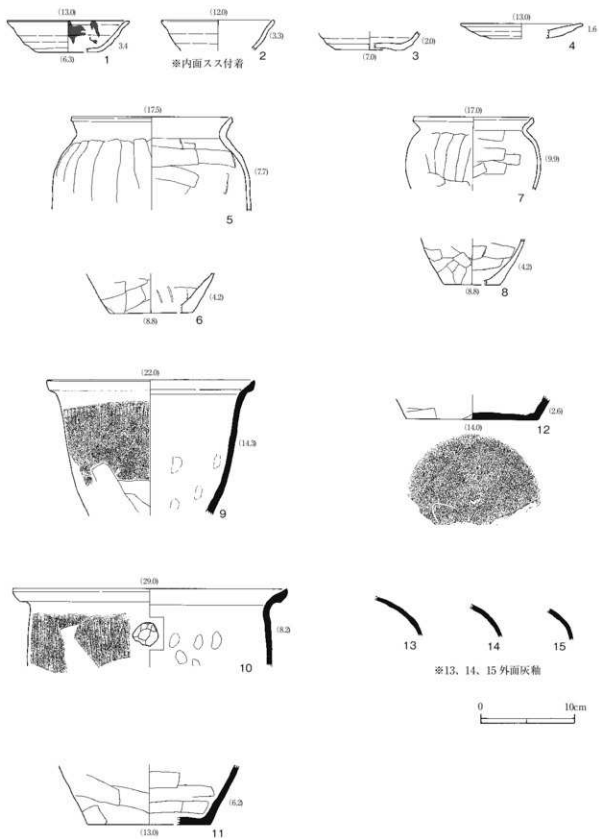
D1(第180図)

位置 J13-31Gで検出。重複関係 単独。平面形 隅丸方形を呈する。規模 3.3m×3.3m。遺構確認面からの深さ0.7m。壁 ほぼ垂直に立ち上がる。床 貼床で、カマド前面一帯が硬化している。壁溝 カマド部分を除いて全周する。カマド 北壁の中央部。両袖部が残存する。袖部の基底部は地山を掘り残し、その上に構築土を積み上げている。火床部は焼けていた。ピット 4本検出。位置的・規模的に見てP1及びP2が支柱穴である。P4の覆土には炭化材が目立った。覆土 5層に分層でき、埋め戻しと思われる。遺物出土状態 埋め戻し土中の4層を中心に、廃棄行為が認められる。

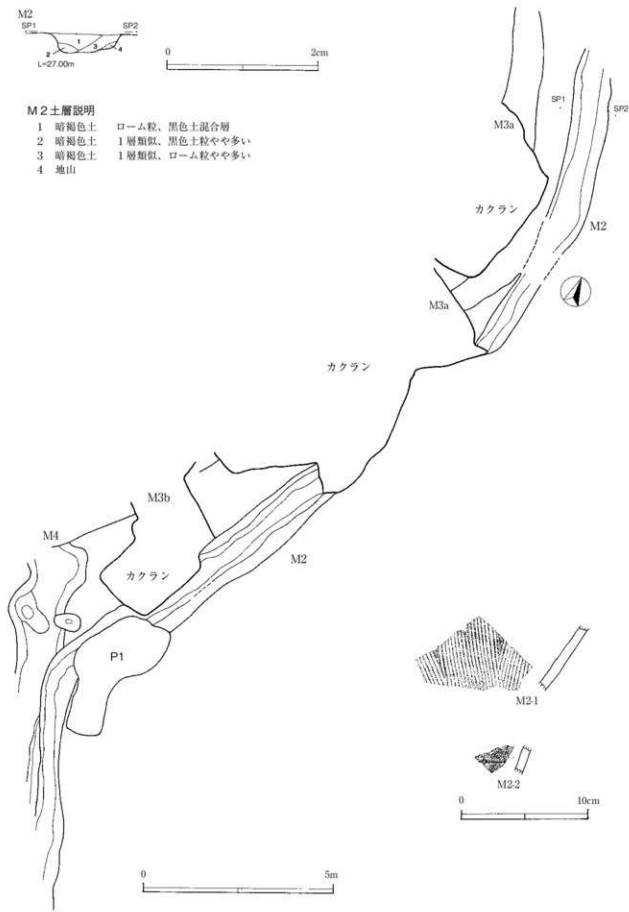
出土遺物(第181図)



第180図 D1実測図



第181図 D1 出土遺物



M2土層説明

- 1 暗褐色土 ローム粒、黒色土混合層
- 2 暗褐色土 1層類似、黒色土粒やや多い
- 3 暗褐色土 1層類似、ローム粒やや多い
- 4 地山

第182図 M2・M4実測図

出土総数は109点で、うち104点をトータル・ステーションで取り上げた。

1～3は土師器坏。ロクロ整形で、体部下端は回転ヘラケズリ、底部周縁は回転ヘラケズリ。内面にス・タール付着。胎土に雲母微細粒含む。2はロクロ整形で、底部は欠損。内面にス付着。胎土は1とはほぼ同様。3はロクロ整形で、体部下端は回転ヘラケズリ、底部は回転糸切り後、周縁ヘラケズリ。胎土に赤色スコリア細粒目立つ。4は土師器皿で、無高台。ロクロ整形で、体部下端は回転ヘラケズリ、内面は密なヘラミガキ。5・6は土師器甕。5は口縁端部を軽くつまみ上げ、内外面ともナデ、胴部外面ヘラケズリ、内面ヘラナデ。6は胴部外面ヘラケズリ、内面ヘラナデ。7・8は土師器小形甕。9～12は須恵器甕及び甌で、下総産。13～15は灰軸陶器短頸壺で、狼投産。

6 中・近世

(1) 溝 (第182図)

M2(第182図)

北側の調査区、I12-51～53・61グリッドにまたがる。P1と重複関係があり、M3a・M4と部分的に接する。総延長23.30m、幅1.25m、最深部で0.50mを測る。ほぼ根上神社古墳溝(M3b)に沿うような形で、弓なりに掘られているが、M4と接する部分からは同溝と平行するように調査区境へ延びる。横断面での形状は皿状を呈し、底面は凹凸を有する。覆土は3層に分層でき、自然堆積である。覆土中より、陶器1点・中世在土器1点が出土した。

出土遺物 (第182図)

1は播鉢の胴部片。胎土は灰白色で、比較的緻密。内外面鉄釉(錆釉)を施釉する。瀬戸・美濃産。2は中世在土器で、内耳土器の胴部片。胎土に雲母細粒含む。外面ケズリあり、内面ナデ。常陸産。

M4(第182図)

北側の調査区、I12-52・53グリッドにまたがる。M2と部分的に接しており、M3bを破壊する。総延長7.35m、幅1.50m、最深部で0.20mを測る。ほぼ直線に掘られているが、M3bと接する部分から西へ屈曲し、同溝を破壊している。横断面での形状は皿状を呈し、底面は凹凸を有する。小ピットが2基掘られている。I12-53グリッドでは、M2は本跡と平行して掘られているので、両溝の新旧関係は、M4(古)→M2(新)となろう。さらに、両溝の時間差は、比較的僅少であった可能性が高く、本跡が完全に埋没しないうちにM2は掘られたと思われる。なぜならば、本跡が完全に埋没した状態でM2が掘られたのであれば、平行するように屈曲させる必要性はないからである。覆土中からの出土遺物はない。

(2) 遺構外出土遺物 (第183図)

1・2は縄文式土器で、同一個体。いずれも前期後半浮島式に比定される。

7 時期不明

(1) ピット (第183図)

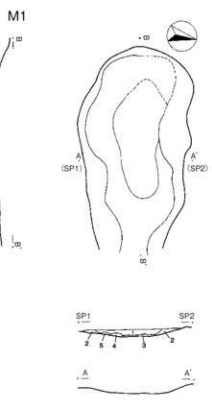
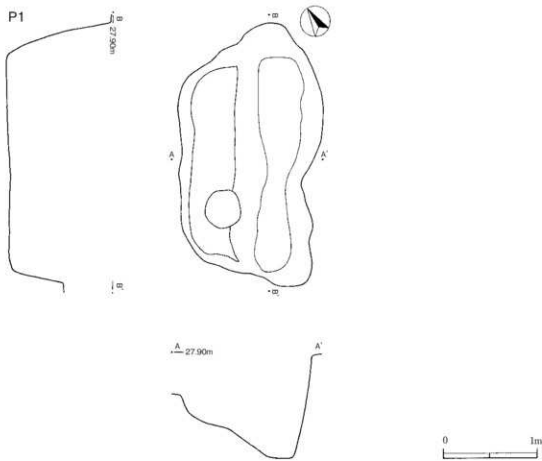
P1 (第183図)

位置 I11-42G。重複関係 M2と重複。長軸 北北東-南南西。平面形 不整楕円形。壁・底面西壁はゆるやか、東壁は垂直。底面は段を有する。規模 2.77m×1.54m、深さは1.08mを測る。覆土記録なし。遺物 なし。

(2) 溝 (第183図)

M1 (第183図)

I11-53G。単独で検出。末端の検出で、平面形は杓子状を呈する。総延長5.65m、幅2.90m、深さ0.20m。横断面形は皿状を呈し、底面は凹凸を有する。覆土は自然堆積。出土遺物は縄文式土器2点。



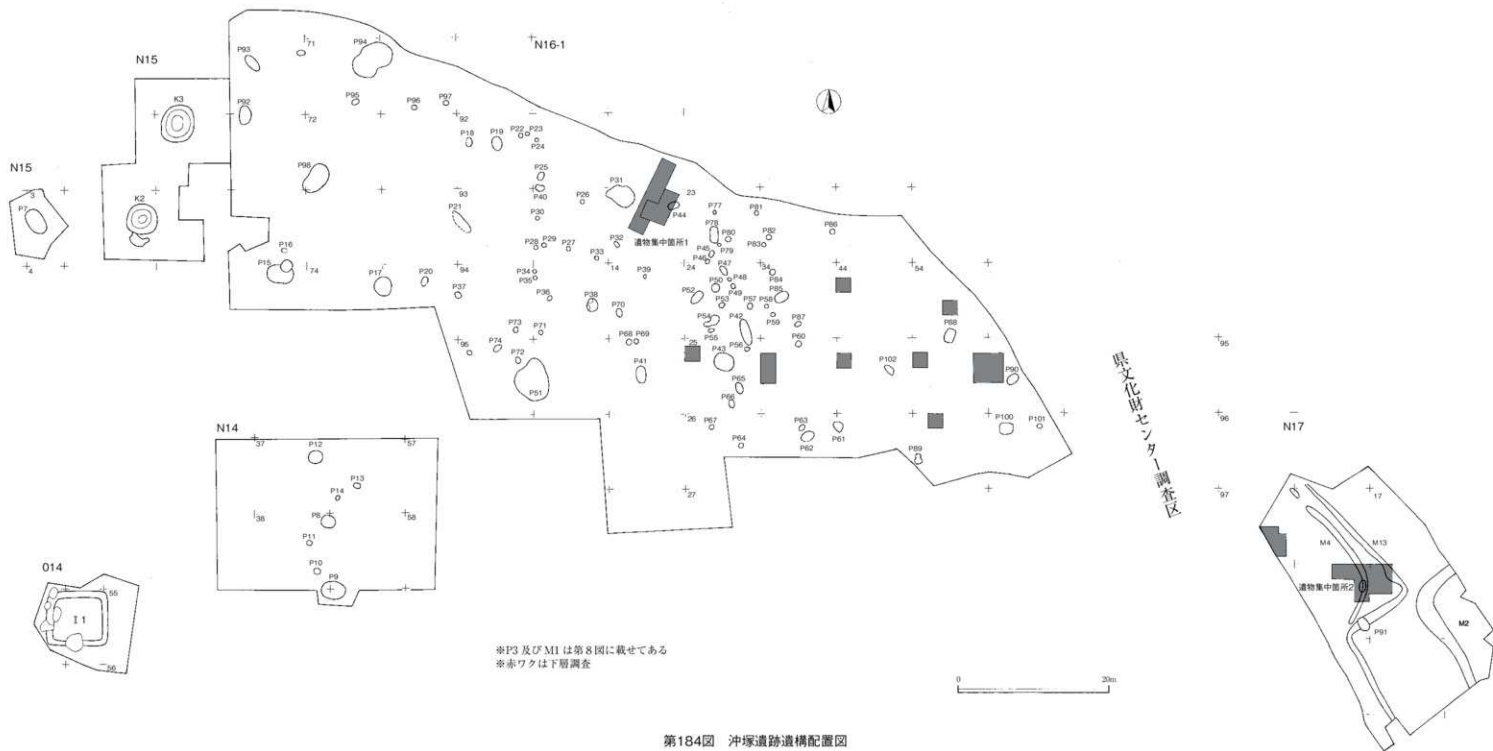
M1 土層説明

- | | | |
|---|------|-----------------|
| 1 | 黒褐色土 | ローム粒極少量含。粒子細かい。 |
| 2 | 暗褐色土 | ローム、暗褐色土混合層。 |
| 3 | 褐色土 | ローム主体。暗褐色土少量混。 |
| 4 | 暗褐色土 | 2層類似。ローム粒やや多い。 |
| 5 | 褐色土 | ロームブロック混。 |



※M1の遺物は遺構に伴わないもので、本文中では遺構外扱いとする。

第183図 時期不明遺構実測図



第184図 沖塚遺跡遺構配置図

第4章 沖塚遺跡（a地点）の調査

1 はじめに

本遺跡の立地・周辺の歴史環境及び調査履歴については、第1章を参照されたい。

以下、a地点の調査内容及びその結果に関して、時代を順に追って報告するが、予め断っておきたいことがある。本遺跡は、調査時点もしくはその後のトータルステーションデータ処理及び管理の不備により、平面図などの図面類が存在しない遺構が少なからずある。全測図には作図されているので、位置関係は記載し、形状その他の情報に関しては、野帳の記録を参考にし、「野帳によれば」、という表現で記述する。野帳の記録すらなく、遺構番号の削除ないし欠番の指定がないものは、単に「記録なし」という表現を用いる。数々の不備な点に対し、寛恕を乞いたい。

2 旧石器時代

調査区のうち、東葉高速鉄道に近い区域を対象に、大グリッド（10m×10m）につき1箇所、2m×2mのテスト・ピットを設定して掘り下げた。調査区内には擾乱が少なからず存在するため、必ずしも規則正しくは設定できなかった。遺物の出土状況によっては適宜拡張を行い、その結果遺物集中箇所2地点を検出したが、それ以外では石器類（定形石器・不定形石器・石核・剥片・砕片及び削片などを含めた総称の意味で用いる）・礫及び若干の炭化物が散漫に出土する程度であった。

結果のみを羅列する。

N16-44G（出土遺物なし）、N16-45G（石器類1点）、N16-54G（-72cmで炭化物が出土したが、石器類の出土はなし）、N16-55G（石器類3点・礫1点）、N16-56G（-85cmまで下げたが、石器類の出土はなし）、N16-65G（石器類3点出土）N16-66G（拡張したが、出土遺物なし。一括扱いの石器類1点有り）、N16-97G（拡張の結果、石器類1点と炭化物出土）

これらの出土遺物の掲載については、諸般の事情により、今回は割愛した。

（1）旧石器時代の遺構と遺物（第185図～第188図）

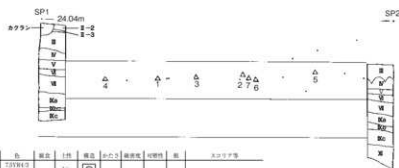
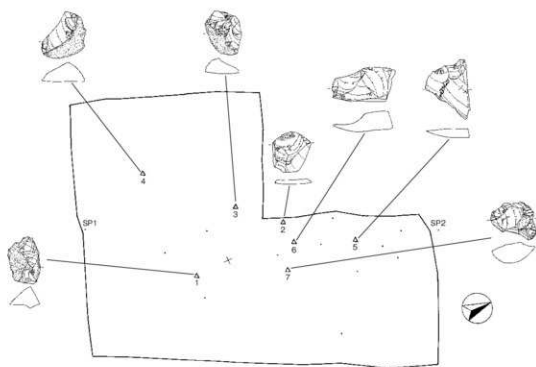
遺物集中箇所1（第185図）

土層観察のための深掘りトレンチで検出、拡張による調査結果によって遺物集中箇所として認定した。N16-13Gで検出された。台地上平坦面からやや斜面にかかる付近である。産出層準は立川ローム層Ⅵ層～Ⅶ層に相当する。平面分布的にはやや散漫で、垂直分布的にはややばらつきが認められる。第185図の土層断面図は東壁で作成したもので、北東側では斜面にかかっており、標高自体が下がっている。そのため、該当する層位は遺物が集中したグリッドの中央部分の標高とは異なり、垂直分布図では見かけ上、より上層から出土したように見えてしまっている。だが、実際は同じ産出層準であることを付記しておきたい。なお、基本層序は断面図を参照とする。

遺物は石器類17点が出土した。

出土遺物（第186図1～7）

- 1は石核。長さ50.24mm、幅32.25mm、厚さ22.92mm、重量32.00g。黒色安山岩。
- 2は剥片。長さ42.39mm、幅39.71mm、厚さ8.97mm、重量13.46g。黒色安山岩。
- 3は剥片。長さ50.00mm、幅35.44mm、厚さ16.59mm、重量22.52g。黒色安山岩。
- 4は剥片。長さ47.19mm、幅45.58mm、厚さ20.60mm、重量44.98g。黒色安山岩。
- 5は剥片。長さ64.41mm、幅45.91mm、厚さ10.81mm、重量24.28g。黒色安山岩。
- 6は剥片。長さ39.52mm、幅62.18mm、厚さ22.89mm、重量62.00g。黒色安山岩。
- 7は剥片。長さ33.05mm、幅52.31mm、厚さ21.12mm、重量41.42g。黒色安山岩。



層位	層号	色	硬さ	土性	構造	中の石	磁器片	切替性	厚	説明等
I-2	自然	73YR4/3 灰 褐色	±	Lo CL	⊙ +	+	+	+	2.5	
I-3	自然	73YR4/5.5 褐色 土質土層	+	Lo CL	⊙ +	+	+	+	2.5	
II		73YR4/4 褐色	±	Lo	⊙ +	+	+	+	2.5 約1	褐色赤褐色スクリニア
III	埋没	73YR5/5 に赤褐色 〜褐色		CL	⊙ +	+	+	+	2.5 2.5	褐色赤褐色スクリニア 褐色褐色スクリニア
V	自然	73YR5/5 灰 褐色	±	Lo	⊙ +	+	+	+	2.5	褐色褐色スクリニア 褐色褐色スクリニア 褐色褐色スクリニア 灰土層
VI		73YR4/6 褐色		CL	⊙ +	+	+	+	2.5	褐色赤褐色スクリニア 褐色赤褐色スクリニア 褐色褐色スクリニア
VII	埋没	73YR4/4 73YR5/6 褐色〜赤		Lo	⊙ +	+	+	+	2.5 2.5	褐色赤褐色スクリニア 褐色赤褐色スクリニア 褐色赤褐色スクリニア 褐色赤褐色スクリニア 赤土層に赤褐色スクリニア
IXa	埋没	73YR4/5 褐色	±	Lo	⊙ +	+	+	+	2.5	褐色赤褐色スクリニア 褐色赤褐色スクリニア 褐色赤褐色スクリニア
IXb	自然	73YR4/6 73YR5/6 褐色 赤褐色 土質土層		Lo	⊙ +	+	+	+	2.5	褐色赤褐色スクリニア 褐色褐色スクリニア
IXc	自然	73YR4/4 73YR5/6 褐色 赤褐色 土質土層	+	Lo	⊙ +	+	+	+	2.5	褐色赤褐色スクリニア 褐色赤褐色スクリニア 褐色褐色スクリニア 赤褐色
X	自然	73YR4/4 褐色	±	Lo	⊙ +	+	+	+	2.5	褐色赤褐色スクリニア 褐色褐色スクリニア

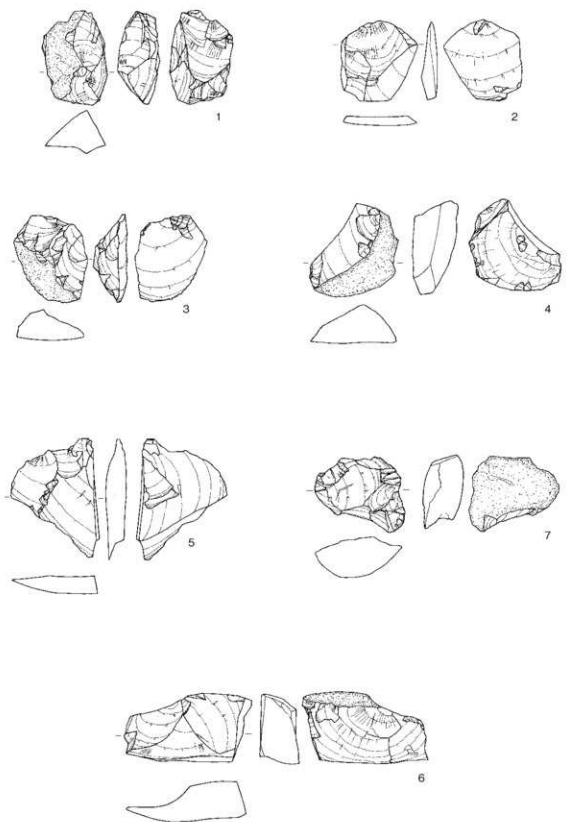


沖塚
N16-13G

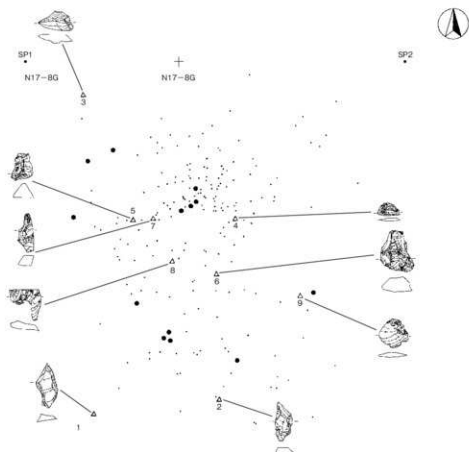
N17-18.8

2-① 明褐色土、黄褐色砂子含む、根の混入あり
12-②以下は N16に同じ

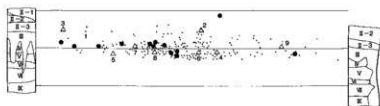
第185図 遺物集中箇所1



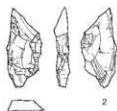
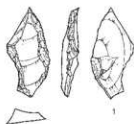
第186圖 遺物集中箇所1出土遺物



SP1 — 24.29m 中大きなドットは標を表す SP2



0 ————— 2m



0 (2/3) 5cm

第187図 遺物集中箇所2

遺物集中箇所2(第187図)

N17-8・N17-18グリッドにまたがって検出された。そもそもN17グリッド自体が、(財)千葉県文化財センターによる調査区に隣接するため、a地点のうち最も旧石器時代の文化層検出の期待がかけられていた。下層調査の結果、両グリッドともにテスト・ビットから石器類及び礫が出土したため、拡張に次ぎ拡張を行い、最終的に同一の遺物集中箇所として認定するに至った。位置的には台地縁辺部で、斜面にかかるあたりである。産出層準は立川ローム層Ⅳ層下部～Ⅴ層上部にかけて相当する。平面分布的には、3.5m×2.4m程の楕円形を呈し、垂直分布的には、レンズ状に集中する部分が存在する。第187図の土層断面図は北壁で作成したもので、東端では斜面にかかっており、標高自体が下がっている。そのため、該当する層位は遺物が集中した部分の標高とは異なり、垂直分布図では見かけ上、より上層から出土したように見えてしまっている。だが、実際は同じ産出層準であることを付記しておきたい。

遺物は石器類206点、礫15点が出土した。ちなみに、9は「二次加工のある剥片」である。

出土遺物(第187図1～第188図10)

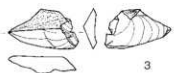
- 1はナイフ形石器。長さ35.9mm、幅16.1mm、厚さ6.2mm、重量3.10g。白滝頁岩。
- 2はナイフ形石器。長さ31.8mm、幅14.4mm、厚さ6.1mm、重量1.90g。(黒曜石)。
- 3は剥片。長さ36.75mm、幅20.40mm、厚さ7.78mm、重量3.92g。ガラス質黒色安山岩。
- 4は剥片。長さ13.84mm、幅24.04mm、厚さ4.03mm、重量1.02g。黒曜石。
- 5は石核。長さ20.17mm、幅28.66mm、厚さ19.76mm、重量7.78g。黒曜石。
- 6は石核。長さ43.13mm、幅30.97mm、厚さ16.34mm、重量21.96g。黒曜石。
- 7は削器。長さ40.54mm、幅18.75mm、厚さ11.13mm、重量7.44g。黒曜石(高原山)。
- 8は剥片。長さ33.06mm、幅30.38mm、厚さ8.64mm、重量4.26g。黒曜石(高原山)。
- 9は剥片。長さ29.92mm、幅31.21mm、厚さ8.08mm、重量5.04g。黒曜石(高原山)。
- 10は剥片。長さ50.75mm、幅52.72mm、厚さ17.55mm、重量54.62g。黒色安山岩。遺構外。

(2)調査区出土の旧石器(写真図版35)

旧石器時代の石器の実測は、専門性が極めて強く、かつ難度が高いため、今回は業者に委託したが、沖塚遺跡の場合は、既に宇田川浩一氏による実測図が幾つか残されていた。従って、宇田川氏が未実測の石器を委託に出したのである。しかしながら、石器研究者の手による実測図は完成度が高く、トレス自体の難度も高かった。結局、遺物集中箇所2のナイフ形石器2点のみが、辛うじてトレスすることができたが、それ以外は適宜選択の上で、写真図版による掲載となった。そして、縄文時代の石器もまた、宇田川氏による作図済みであったため、旧石器とのカップリングで報告する。1・2は旧石器時代の所産で、剥片。3～6は旧石器時代末～縄文時代草創期の槍先形尖頭器。7～10は縄文時代の石鏃で、全て無茎凹基式。ちなみに、1のみ宇田川氏が未実測である。

3 縄文時代

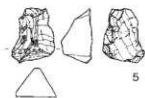
縄文時代の遺構は、数量的には多寡が認められるものの、ほぼ調査区の全域から検出されている。あえて傾向を指摘するならば、台地の縁辺部にやや集中する。陥穴10基、土坑30基が検出された。これは、あくまでも確実に縄文時代の所産として捉えられたもの数である。しかしながら、遺跡全体から見ると、縄文時代以降の遺物の出土は比較的少量であるため、後節で時期不明として報告する土坑の多くは、縄文時代の所産である蓋然性が高いと考えている。ただ、数がまとまっているため、厳密に扱うことにした。その他、人間が掘削・使用したものではないため、今回は遺構の範疇から除外したものに、風倒木痕がある。遺跡全体で5基検出され、出土遺物などから、縄文時代の所産となる可能性が高いものと捉えている。図化はしないが、事実記載のみ行うものを含む。



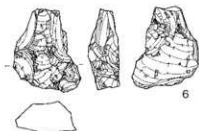
3



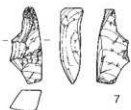
4



5



6



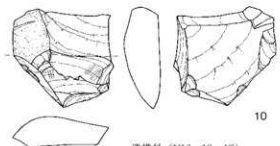
7



8



9



10

遺構外 (N16-12-4G)

※本例は下層調査による出土遺物ではない。



第188図 遺物集中箇所2出土遺物

(1) 陥穴(第189図～第193図)

P2(第189図)

位置 Q14-31・41Gにまたがる。重複関係 単独で検出。長軸 ほぼ北北東-南南西。平面形 上部、底部とも長楕円形を呈する。断面形 壁は垂直気味に立ち上がり、中段以下がオーバーハングする。底部施設 検出されず。規模 上部で2.24m×2.28m、底部で1.08m×1.84m、検出面からの深さ2.26mを測る。覆土 7層に分層でき、5～7層は埋め戻しで、他は自然堆積。遺物 なし。

P3(第189図)

位置 P15-12・22Gにまたがる。重複関係 単独で検出。長軸 ほぼ北東-南西。平面形 上部、底部とも長楕円形を呈する。断面形 横断面形は漏斗形。底部施設 検出されず。規模 上部で2.98m×0.87m、底部で0.83m×0.18m、検出面からの深さ1.62mを測る。覆土 8層に分層できた。遺物 石2点が出土した。

P6(第190図)

位置 N14-86G。重複関係 単独で検出。長軸 ほぼ西-東。平面形 上部、底部とも長楕円形を呈する。断面形 壁はほぼ垂直に立ち上がり、横断面形は漏斗形。底面は凹凸やや目立つ。底部施設 検出されず。規模 上部で2.93m×0.83m、底部で2.78m×0.12～25m、検出面からの深さ1.94mを測る。覆土 6層に分層でき、1～3層は自然堆積、4～6層は埋め戻し。遺物 なし。

P7(第190図)

位置 N15-3G。重複関係 単独で検出。長軸 ほぼ北西-南東。平面形 上部、底部とも不整楕円形を呈する。断面形 壁は垂直気味で、底面に向かってすぼまる。底面は凹凸有り。底部施設 検出されず。規模 上部で3.40m×2.00m、底部で1.76m×0.45m、検出面からの深さ2.63mを測る。覆土 16層に分層できた。遺物 石器類2点が出土。

P8(第191図)

位置 N14-38・48Gにまたがる。重複関係 単独で検出。長軸 ほぼ北西-南東。平面形 上部、底部とも楕円形を呈する。断面形 壁は垂直気味で、底面に向かってすぼまる。底面は凹凸有り。付帯施設 壁面の中段に「逆茂木状ビット」有り。規模 上部で1.68m×1.52m、底部で1.08m×0.27m、検出面からの深さ3.02mを測る。覆土 8に分層できた。遺物 なし。

P41(第191図)

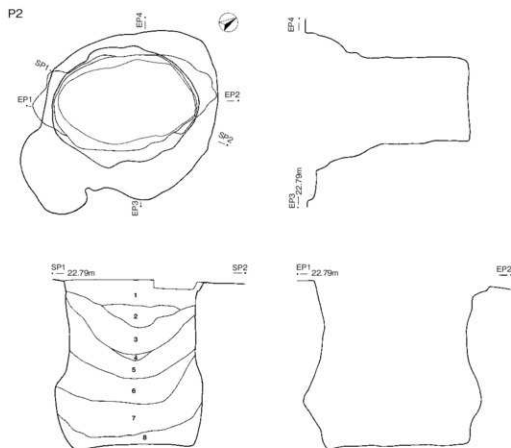
位置 N16-15G。重複関係 単独で検出。長軸 ほぼ北-南。平面形 上部は楕円形、底部では不整長楕円形を呈する。断面形 壁は垂直気味で、横断面形は漏斗形。底部施設 検出されず。規模 上部で2.35m×1.18m、底部で1.15m×0.15m、検出面からの深さ2.22mを測る。覆土 16層に分層できた。13層はしまり強く、二回目の底面か。16・17層は埋め戻しか。遺物 なし。

P42(第192図)

位置 N16-24・25Gにまたがる。重複関係 単独で検出。長軸 ほぼ北北西-南南東。平面形 上部は楕円形、底部では長楕円形を基本とするが、両端は開く形状となる。断面形 壁は垂直気味で、横断面形は漏斗形。底面は凹凸に富む。底部施設 検出されず。規模 上部で2.67m×1.00m、底部で1.72m×0.04～0.18m、検出面からの深さ1.26mを測る。覆土 6層に分層できた(本土坑はD号)。他にA号は5層、B号は4層、C号は1層に分層した。遺物 なし。備考 野帳によれば、A号～D号の4基の土坑の重複となっており、陥穴はD号である。

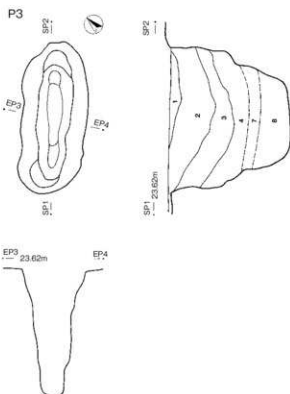
P85(第192図)

位置 N16-34G。重複関係 単独で検出。長軸 ほぼ東北東-西南西。平面形 上部、底部とも楕



P2土層説明

- | | |
|---------|-----------------------|
| 1 明褐色土 | 暗褐色土混。 |
| 2 暗褐色土 | 黒色味強い。ローム粒子少量含。 |
| 3 暗褐色土 | ローム粒子、ブロック少量、炭化物ごく少量。 |
| 4 暗褐色土 | ロームブロック混、焼土粒子ごく少量含。 |
| 5 暗黄褐色土 | ロームブロック多量含。しまり強い。 |
| 6 暗黄褐色土 | ロームブロック、5より多い。 |
| 7 暗黄褐色土 | しまりあり、崩れやすい。 |
| 8 暗黄褐色土 | ローム主体。しまり強い。 |



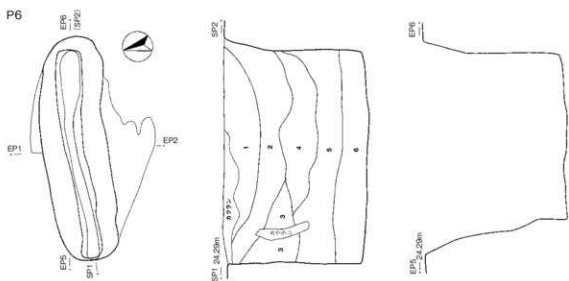
P3土層説明

- | | |
|---------|---------------------|
| 1 暗褐色土 | 黄褐色土にじむ。 |
| 2 褐色土主体 | 黄褐色土にじむ。 |
| 3 黄褐色土 | ロームブロック混。 |
| 4 暗褐色土 | ロームブロック混、崩れやすい。 |
| 5 暗黄褐色土 | 壁のロームの崩落層。 |
| 6 暗黄褐色土 | 壁のロームの崩落層、ロームブロック主。 |
| 7 暗黄褐色土 | 壁のロームの崩落層。 |
| 8 暗褐色土 | ローム、炭化物まじり。しまり強い。 |

※7, 8層は調査中に図化できなかった。
そのため、模式図的意志を込め、破線とした。

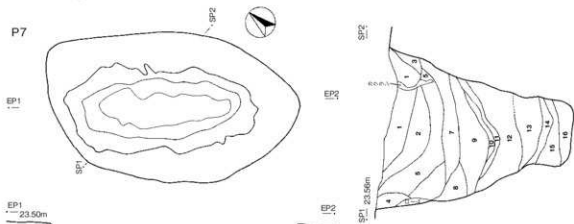
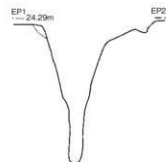


第189図 陥穴実測図(1)



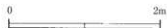
P6土層説明

- | | |
|--------|---------------------------|
| 1 褐色土 | 黄褐色の斑点あり、上層ほど暗色味強い。しまりよい。 |
| 2 明褐色土 | 褐色土、黄褐色土混。 |
| 3 明褐色土 | 黄褐色土混、しまりあり。 |
| 4 黄褐色土 | ロームブロック多量含。崩れやすい |
| 5 黄褐色土 | しまりよい。 |
| 6 暗褐色土 | ロームブロック、暗褐色土まばら。しまりやや強い。 |

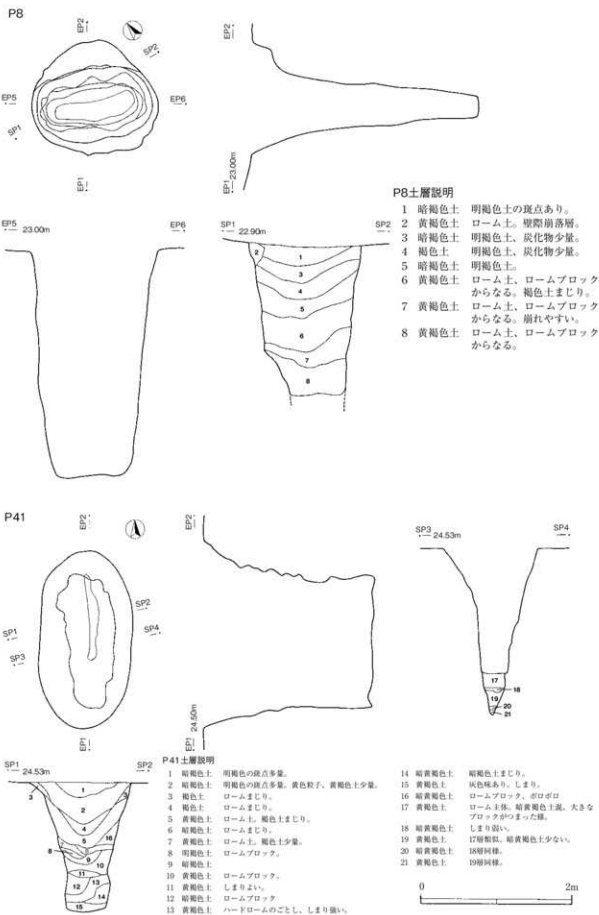


P7土層説明

- | | |
|---------|-----------------------------|
| 1 暗褐色土 | 黄褐色土まじり。しまり。 |
| 2 暗褐色土 | ローム粒子、炭化物、黄褐色土まじり。しまり。 |
| 3 暗褐色土 | ローム土体、暗褐色土混。しまり。 |
| 4 黄褐色土 | ローム土体、暗褐色土少量。暗褐色土混。しまり。 |
| 5 暗褐色土 | ローム粒子少量、炭化物少量。黄色味。しまり。 |
| 6 黄褐色土 | しまり。 |
| 7 暗褐色土 | ローム粒子、径1-2cm ロームブロック多量。しまり。 |
| 8 暗褐色土 | 径5-10cm ロームブロック、しまり |
| 9 暗褐色土 | ローム粒子、ローム土。しまり。 |
| 10 暗褐色土 | 炭化物、ローム粒子少量。しまり。 |
| 11 暗褐色土 | ローム粒子、ローム土。しまり。 |
| 12 黄褐色土 | ローム、径10cm ロームブロック、しまり。埋め戻し層 |
| 13 褐色土 | ローム粒子。しまり。 |
| 14 褐色土 | ローム粒子、ローム土。崩れやすい |
| 15 暗褐色土 | ローム土体。内層部のローム土。 |
| 16 暗褐色土 | ローム土体。15層より暗い。 |

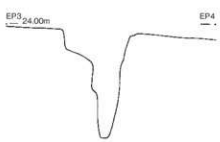
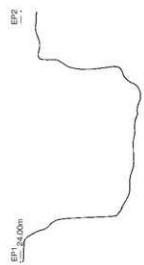
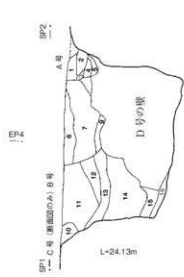
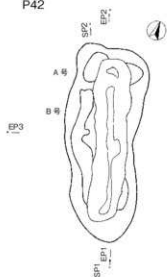


第190図 陥穴実測図(2)



第191図 陥穴実測図(3)

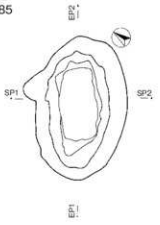
P42



P42土層説明

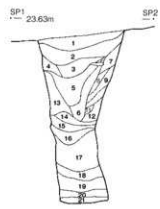
- | | | |
|----|------------------|----------------|
| 1 | 褐色土 | 明褐色土混、暗褐色土にじむ |
| 2 | 暗褐色土 | 明褐色土少量含 |
| 3 | 褐色土 | |
| 4 | 暗褐色土 | 褐色土混 |
| 5 | 褐色土 | ローム土含 |
| 6 | 暗褐色土 | ロームブロック少量含 |
| 7 | 暗褐色土 | 明褐色土含 |
| 8 | 暗褐色土 | 黒色土、ローム土含 |
| 9 | 褐色土 | ローム土含 |
| 10 | 暗褐色土 | 褐色土にじむ |
| 11 | 暗褐色土とロームブロックからなる | |
| 12 | 暗褐色土 | |
| 13 | 暗褐色土 | 均質 |
| 14 | 暗褐色土がロットしている | |
| 15 | 暗褐色土 | 黒色土含、ボロットとしている |
| 16 | 黄褐色土 | しまり強、基すきか? |

P85



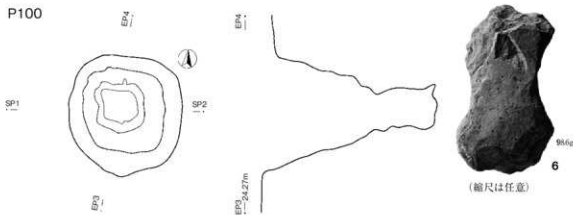
P85土層説明

- | | | |
|----|-----------|-------------------------|
| 1 | 黒褐色土 | 黄褐色土にじむ、炭化物(材)少量含、しまりよい |
| 2 | 黒褐色土 | 褐色土混、炭化材含、しまりよい |
| 3 | 黒褐色土 | 黒色味強い、しまりよい |
| 4 | 暗褐色土 | ローム混、しまりよい |
| 5 | 暗褐色土 | 褐色土混、黄褐色土、ローム粒子含、しまりよい |
| 6 | 暗褐色土 | ローム土、ローム粒子含、しまりよい |
| 7 | ローム、暗褐色土混 | |
| 8 | 暗褐色土 | ロームにじむ |
| 9 | 暗褐色土主体 | ローム混 |
| 10 | 暗褐色土 | ロームにじむ |
| 11 | ローム主体 | 暗褐色土混 |
| 12 | 暗褐色土 | ロームにじむ |
| 13 | 暗褐色土とローム混 | |
| 14 | 暗褐色土 | ローム、ローム粒子含 |
| 15 | 暗褐色土主体 | ロームにじむ |
| 16 | 黄褐色土(ローム) | 暗褐色土混 |
| 17 | 暗褐色土とローム混 | |
| 18 | 褐色土主体 | |
| 19 | 暗褐色土主体 | ローム含 |
| 20 | 暗褐色土主体 | ローム少量含、しまりあり |
| 21 | 褐色土 | しまり強、粘性強 |



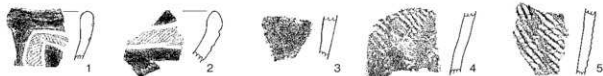
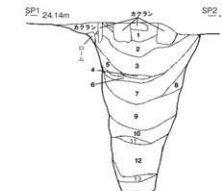
第192図 陥穴実測図(4)

P100



P100土層説明

- 1 黒色土 暗褐色土にじむ、径1mm黄色粒子含しまりよい
- 2 暗褐色土 黒色土にじむ、褐色土混、黄色粒子含
- 3 褐色土 褐色土混、黄色粒子含
- 4 暗褐色土 黒色土にじむ
- 5 暗褐色土とローム混合
- 6 暗褐色土とローム混合、径1~2cmロームブロック含
- 7 褐色土 径1cm以下ロームブロック、ローム土、暗褐色土混
- 8 暗褐色土 径1cmロームブロック含、黒色土にじむ
- 9 褐色土 しまりの弱い埋め戻し土
- 10 褐色土 しまりの弱い埋め戻し土
- 11 褐色土 しまりの弱い埋め戻し土
- 12 黒褐色土 12層と13層の層境で遺物出土



P100 出土遺物



P103



P103土層説明

- 1 黒褐色土 黄褐色土、黄色粒子少量混
- 2 黒褐色土 1層より黒い、黄色粒子混
- 3 暗褐色土 ロームにじむ
- 4 暗褐色土 3層より暗い、ローム土混
- 5 暗褐色土 3層より暗い
- 6 褐色土 ローム、暗褐色土混
- 7 褐色土 ローム土、ロームブロック混
- 8 暗褐色土 ローム土、ロームブロック混
- 9 黄褐色土 しまりやや強、粘性あり



第193図 陥穴実測図(5)

円形を呈する（底部は長方形気味）。断面形 長軸方向でオーバーハングする。底部施設 検出されず。規模 上部で1.92m×0.90m、底部で0.97m×0.25m、検出面からの深さは2.23mを測る。覆土 21層に分層できた。遺物 なし。

P100(第193図)

位置 N16-66G。重複関係 単独で検出。長軸 ほぼ西-東。平面形 上部、底部ともに隅丸長方形を呈する。断面形 壁は垂直で、四隅もきっちりと掘られている。底面は平坦である。底部施設 検出されず。規模 上部で1.58m×0.43m、底部で1.52m×0.44m、検出面からの深さ2.35mを測る。覆土 13層に分層できた。1-3層は自然堆積。4-8層はしまりよい埋め戻し土。9-13層はしまり弱い埋め戻し土である。遺物 縄文式土器5点(称名寺5)・打製石斧1点・石器類1点(黒曜石剥片)が出土。備考 本跡は後期初頭称名寺式期の所産の可能性が高い。

P103(第193図)

位置 N17-8G。重複関係 単独で検出。長軸 ほぼ北-南。平面形 上部は楕円形、底部では長楕円形を呈する。断面形 壁は垂直気味、底面やや凹凸目立つ。底部施設 検出されず。規模 上部で1.35m×0.86m、底部で1.08m×0.10-22m、検出面からの深さ1.43mを測る。覆土 9層に分層できた。7-9層は埋め戻しか。遺物 なし。

(2) 陥穴出土遺物(第193図)

P100-1-5は称名寺式土器。1・2は口縁片。予め帯縄文になるエリアに縄文を施文しておき、次いで沈線で意匠を描いてから、磨消する。いわゆる縄文充填系土器である。三段階細別でいうところの(中)段階に相当する。3-5は胴部片。3は胴下半の無文部分の破片。4・5は縄文系粗製土器で、縄文1段Lを施文するものである。おそらくは1・2と同段階か、若干先行する時期と思われる。前時期の加曾利E式から連続と続く類型の一つである。

6は分銅形打製石斧で、ほぼ完存品。片面に自然面を有する。

(3) ビット(第194図)

P15(全測図)

性格 風倒木痕である。覆土中より縄文式土器3点出土。

P16(全測図)

野帳によれば、縄文時代の所産となっているが、記録はなし。

P17(全測図)

性格 風倒木痕である。覆土中より縄文式土器3点(浮島2・五領ヶ台1)出土。

P21(第194図)

位置 N15-83・93Gにまたがる。重複関係 単独。長軸 ほぼ北西-南東。平面形 長楕円形。壁・底面 底面中央がテラス状で、両端が下がる。規模 3.22m×(0.44m)、検出面からの深さは0.37mを測る。覆土 3層に分層できた。遺物 縄文式土器1点が出土とあるが、現物なし。

P30(全測図)

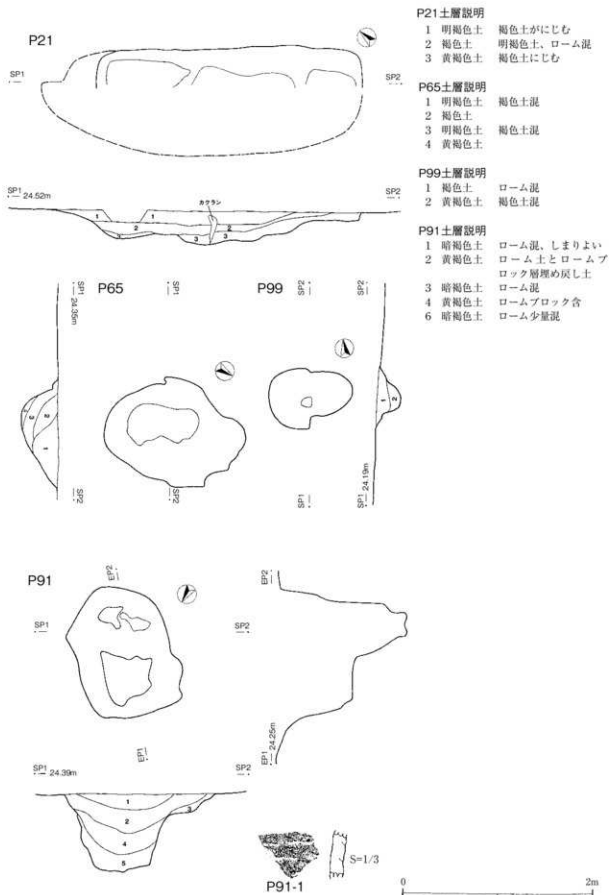
位置 N16-3G。野帳によれば、円形で尖底状となる小ビット。遺物 縄文式土器1点が出土とあるが、現物なし。

P31(全測図)

性格 風倒木痕である。遺物 縄文式土器2点(関山式)が出土。

P51(全測図)

性格 風倒木痕である。遺物 縄文式土器点(諸磯式)が出土。



第194図 縄文ピット実測図

P65(第194図)

位置 N16-25G。重複関係 単独。長軸 ほぼ北北西-南南東。平面形 不整楕円形。壁・底面壁はゆるやかに立ち上がり、底面は平坦。規模 1.51m×1.17m。検出面からの深さは0.40mを測る。覆土 記録なし。遺物 石器類1点(黒曜石剥片)が出土とあるが、現物なし。

P91(第194図)

位置 N17-8G。重複関係 M3に破壊される。長軸 ほぼ北西-南東。平面形 不整楕円形。壁・底面 壁は垂直気味で、底面はテラスを有し、一方が下がる。規模 1.43m×1.08m。検出面からの深さは0.83mを測る。覆土 5層に分層できた。遺物 縄文式土器1点(阿玉台)が出土。

P94(全測図)

性格 風倒木痕である。遺物 縄文式土器1点・石器類1点が出土。

P98(全測図)

性格 風倒木痕である。遺物 縄文式土器4点が出土。

P99(第194図)

位置 N15-61G。重複関係 単独。長軸 ほぼ西-東。平面形 楕円形。壁・底面 壁はゆるやかに立ち上がり、底面は丸みを帯びる。規模 0.91m×0.64m。検出面からの深さは0.25mを測る。覆土 2層に分層できた。遺物 縄文式土器2点・磨石片1点が出土とあるが、現物なし。

(4) ビット出土遺物(第194図)

P91-1は胴部片。輪積み痕が見られる。阿玉台式土器として捉えたいが、前期後半の可能性もある。

(5) 遺構外出土遺物(第195図～第200図)

早期燃糸文系土器(第195図1)

燃糸文系土器は、ただ1点のみ出土した。

1は胴部片。条間の密接した縄文2段RLを施文するものである。井草式土器。

早期沈線文系土器(第195図2・3)

沈線文系土器は、図示した2点のみ出土した。ともに別個体である。

2・3で、2は口縁片。3は胴部片で、細めの沈線を横及び斜方向に多条施文する。田戸下層式。

早期条痕文系土器(第195図4～8)

条痕文系土器は、合計で16点出土した。1ないし2個体からなる。

4～8は表裏面に貝殻条痕を施すもので、いずれも胴部片である。5・6は表がヨコ方向、裏はナナメ方向の貝殻条痕を施すもので、縄ヶ島台式か。他については、細別型式不明としておく。

関山式土器(第195図9～11)

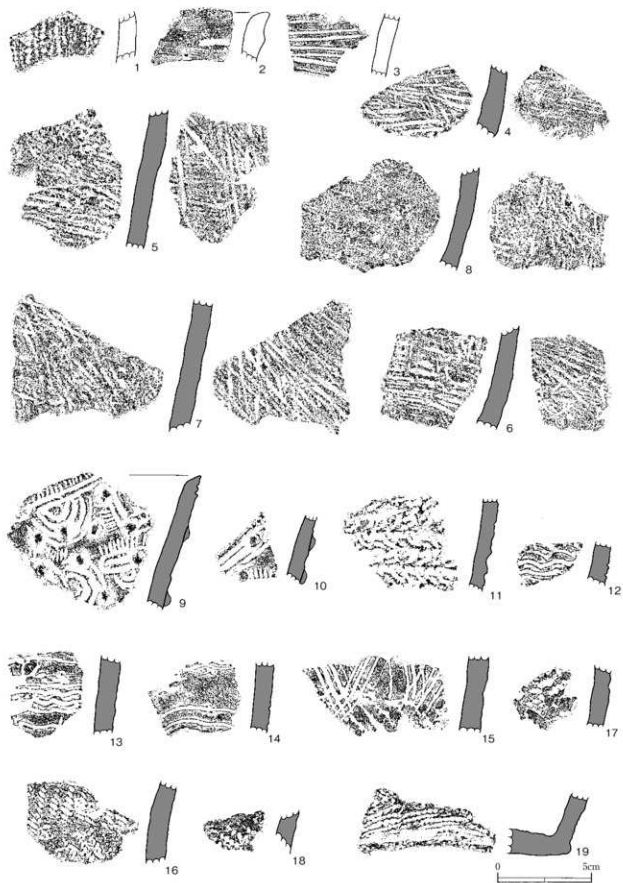
関山式土器は、図示した3点のみ出土した。最大でも2個体である。

9～11の3点。9・10は同一個体。9は波状縁で、波頂部を欠く。口縁部の文様は、平行沈線で弧線状の意匠を重ね、文様の起点や装飾として粘土粒を貼付する。さらにキザミ列を文様同士の間隙に充填するものである。10は口辺の破片で、意匠の一部や粘土粒が確認できる。11は胴部片で、ループ文を横位に重畳施文する。これらは、関山I式土器に比定される。

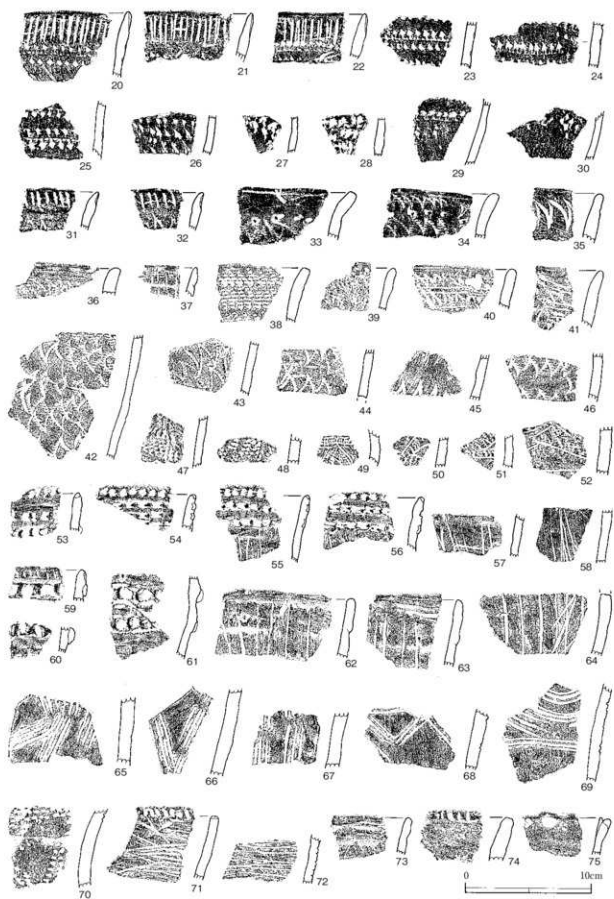
黒浜式土器(第195図12～19)

黒浜式土器は、合計で22点出土した。

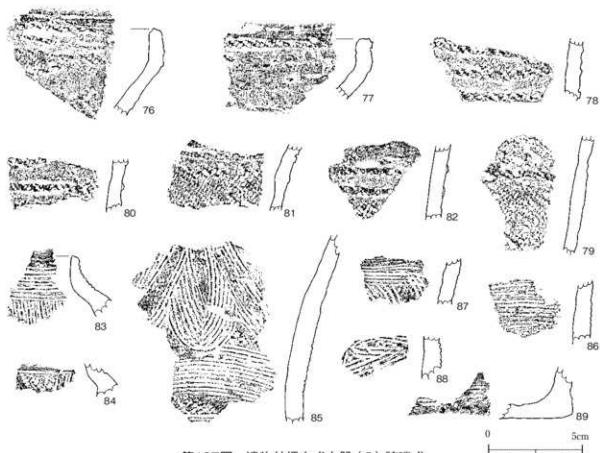
12・13は竹管の内側を用いた、櫛描状の波状文を横位に重畳施文するもので、いわゆる「植房式土器」を構成する類型の一つと同様の文様である。18は羽状縄文を施文する。これは原体を結束したり、同一原体で回転方向を変えて施文したのではなく、異種原体を用いたものである。



第195図 遺物外縄文式土器(1) 早期~前期前半



第196図 遺物外縄文式土器(2)前期後半



第197図 遺物外縄文式土器(3) 諸磯式

浮島式土器・興津式土器(第196図)

浮島式土器・興津式土器は合計279点出土した。三角文や波状貝殻文のみの胴部片など、時期区分できないものも多く、出土総数は両者を合わせたものになった。内容的な不備は報告者に責がある。

20~22は口縁部に条線帯、その下に三角文を重畳施文するもので、興津Ⅰ式。23~30は三角文を横に重畳施文するもので、23~25は興津Ⅰ式、他は興津式か。

31・32は口縁部に斜位に近い縦位の条線帯、その下に波状貝殻文を施文するもので、興津式。33・34は口縁下に楕円形刺突列、その下に波状貝殻文を施文する。興津式。35・36は口縁下に狭小な無文部をはさみ、波状貝殻文を施文する。興津式か。37~39も興津式か。40・41は波状貝殻文を施文後、沈線を引く。興津式。42~48は既ぬ波状貝殻文を横に重畳施文するもので、興津式。これらの施文原体で用いた貝殻は、ほとんどが「フネガイ科」で、45はハマグリである。

49~52は磨消貝殻文を施すもので、興津Ⅱ式。菱形を基調とした意匠と思われる。

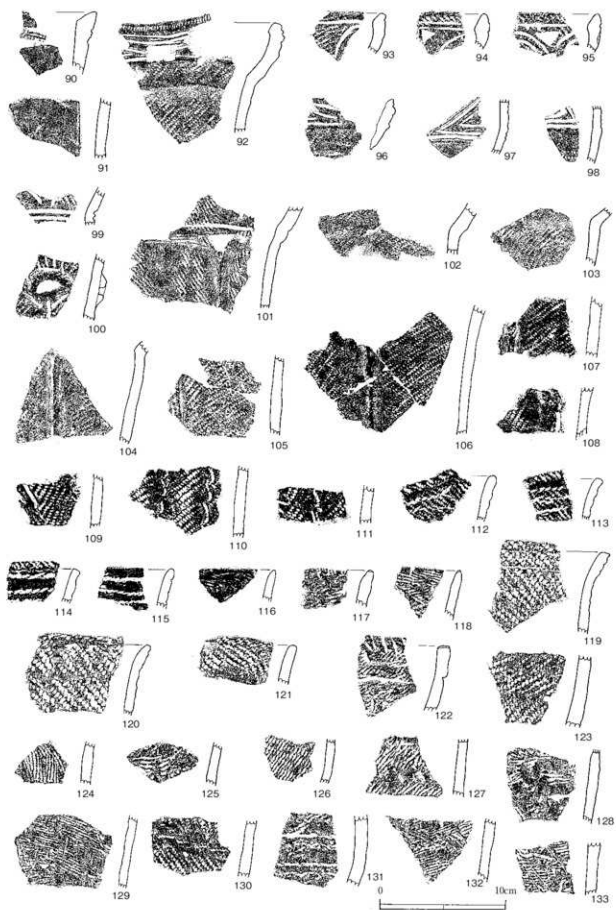
53~58は口唇上にキザミを施し、口縁下には「C字状」の刺突列を重畳施文したもので、胴部はややランダムな縦位沈線を多条化施文する。59~61は指頭によるキザミを重畳させる。いずれも興津式。

62~75のほとんどは、浮島式か。今回は粗製土器ばかりになったが、精製土器の中にも浮島式土器が含まれる可能性は否定できない。

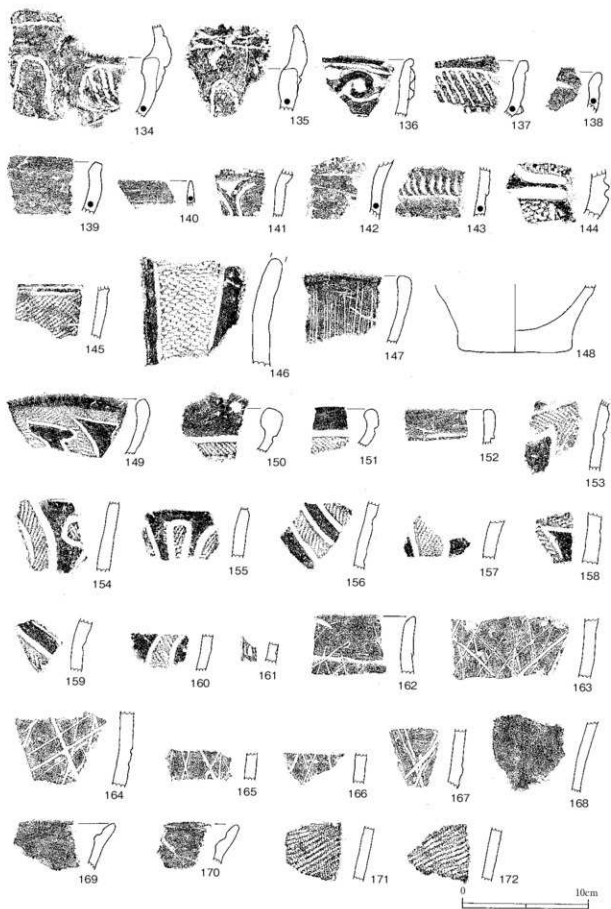
諸磯式土器(第197図)

諸磯式土器は合計で48点出土した。浮線文系2ないし3個体、集合沈線系1個体からなる。

76~82は浮線文系で、縄文地に浮線を貼付し、浮線上にも縄文を施文する。83~89は集合沈線で意匠を描くものである。83・84は口縁片で、頸部から口縁は「くの字状」に屈曲して立ち上がり、口縁端部は短く外反する。浮線文系が諸磯b式、集合沈線系は諸磯式c式に相当するか。



第198圖 遺物外繩文式土器(4)前期末~中期中頭



第199圖 遺物外縄文式土器(5) 中期前半～後期前半

五領ヶ台式（八辺式）土器（第198図90～111）

五領ヶ台式土器は合計46点出土した。

90・91は八辺式Ⅲ期。90は口縁片で、口縁下に二列の押引文を施すが、交互刺突文的な施文効果を与えている。91は胴部片で、図の右端は縦位に施文した交互刺突文の末端である。

92～111は八辺式Ⅳ期。（92・96・102・106）、（103・104）、（109～111）は各々が同一個体。これらを含めて、出土資料は最大で6個体程である。いずれも胎土に雲母・長石粒子が目立つ。

前期末葉～中期初頭の粗製土器（第198図112～133）

前期末葉～中期初頭の粗製土器は、合計103点出土した。今回は一括りで報告する。

112・113は波状縁で、口縁下に原体側面圧痕を3条施すもの。市内の芝山遺跡に類例がある。

阿玉台式土器（第199図134～143）

阿玉台式土器は合計33点出土した。

136は阿玉台Ⅰa式土器で、他はいずれも阿玉台Ⅰb式土器に位置づけられる。134・135は平縁で、扇状把手を付けたものである。137は有節線を隆線脇に単列、区画文内には多条化施文する。

加曾利E式土器（第199図144～148）

加曾利E式土器は合計24点出土した。

144・146は加曾利EⅡ式で、キャリパー形深鉢。146は地文縄文3段RLRを施文後、磨消懸垂文を施した胴部片。147・148は加曾利EⅢ式。147は条線文系粗製土器の口縁片で、148は瓢形深鉢の底部。いわゆる「逆ランプシェード形」となるもの。145は加曾利EⅣ式土器である。

称名寺式土器（第199図149～168）

称名寺式土器は合計35点出土した。

149～160は縄文充填系の精製土器で、三段階細別ならば（中）段階。161は列点充填系の精製土器で、（新）段階。162～167は格子文系粗製土器である。151は粗製土器の口縁片で、無文部分の資料。

堀之内式土器（第199図169～172）

堀之内式土器は合計16点出土した。

169・170は精製土器で、171・172は縄文系粗製土器。全て堀之内Ⅰ式土器である。

加曾利B式土器（第200図173～175・177～180）

加曾利B式土器は純粋に3個体の破片からなるものである。故に、カウントはしない。

全て加曾利B3式の精製土器に相当する。173～175・177・178は波状五山の深鉢で同一個体。口縁部文様帯は単段連刻で、頸部文様帯は波頂部を起点とする磨消弧線文、括れ部のキザミ列を介し、胴部文様帯は地文縄文に横位の沈線を多条化施文したもの。179は深鉢の胴部で、180は浅鉢の頸部～胴部。

大洞A式土器及び晩期終末の土器（第200図181～206）

大洞A式土器は合計4点（1個体）出土した。そして、晩期終末の土器は合計22点出土した。

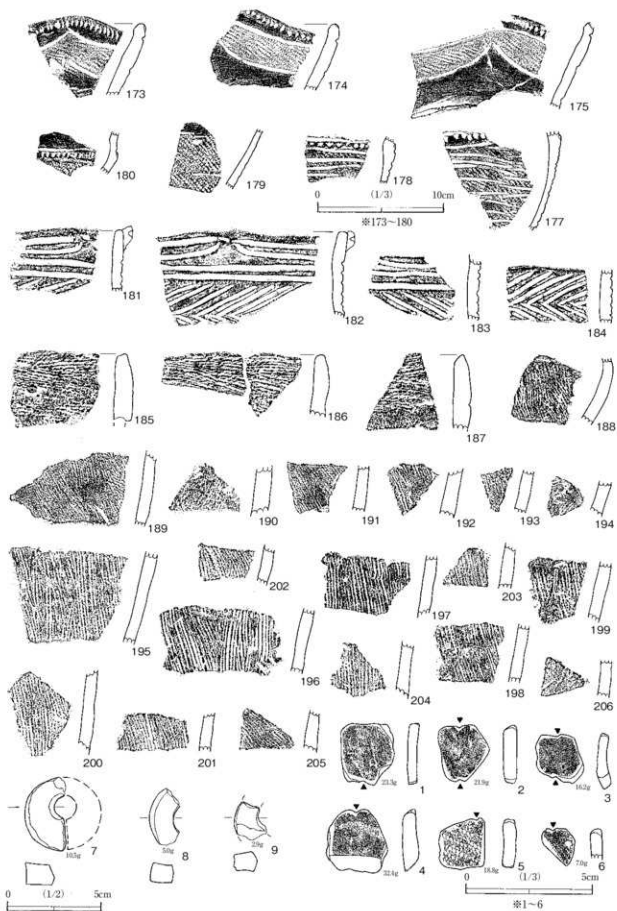
181～184は大洞A式の精製土器で、同一個体である。口縁に接して盲孔を施した突起を付す。これは小振りにした「A突起」を、口縁下に付した親がある。頸部には綾杉文を施す。

185～194は原体が極めて細い撚糸文を、195～206は細密条痕を施した粗製土器である。

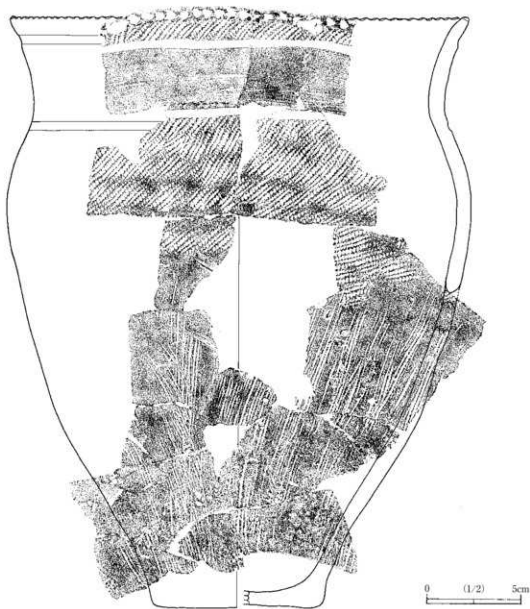
所属型式が不明なもの 縄文式土器のうち、摩滅などで、所属型式が不明なものは合計13点出土した。土製品（第200図）

1～3は土製塊状耳飾。1は半欠品で、2・3は一部が残存する。

4～9は土器片錘である。いずれも長軸中央の上下端に索溝を刻むものである。側面を磨ってあるものが多く、素材の土器片の時期は、前期末葉～加曾利E式と幅がある。中期後半の所産か。



第200圖 遺物外縄文式土器(6)後期中葉～晚期終末・土製品



第201図 遺物外出土弥生式土器

4 弥生時代

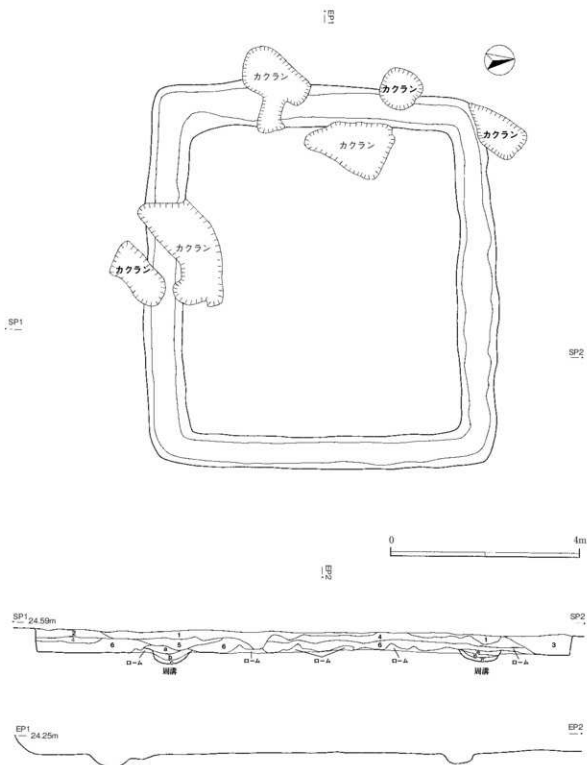
(1) 遺構外出土遺物(第201図)

1はK3盛土下出土。本土器は、既に速報として「埋やちよ」No.7で紹介されている(深谷2000)。今回はその中から、遺物の観察に関する記述を引用することにした。

「①口のへりの部分を棒状の工具で押して刻みを作っている。②その下には縄文がつけられ、胴部の上半にも縄文が施される。使用された縄は特殊なものである。③くびの部分には文様が無く、上下を棒状の工具で横方向に線を引いて区画している。④胴の下半部には、細かい線(細密条痕=さいみつじょうこん)が、斜めや縦方向に施されている。

④文様が施された順番は縄文→細密条痕→横線、である。」

同一個体を観察すると、器外面にはススの付着が認められ、いわゆる「補修孔」を穿った破片もあった。完全に復元することはできないが、まとまって廃棄されていたものとして捉えられる。



K1土層説明

- | | | |
|---|------|-----------------------|
| a | 黒褐色土 | 暗褐色土まじり、ローム粒子、ローム土。 |
| b | 暗褐色土 | 黒褐色土少量まじり。ローム粒子、ローム土。 |
| c | 暗褐色土 | ローム土。 |
| 1 | 褐色土 | 崩れやすい。 |
| 2 | 褐色土 | ローム土。盛土。 |
| 3 | 褐色土 | ローム粒子、ロームブロック。しまり強い。 |
| 4 | 暗褐色土 | ローム粒子、炭化物。しまり強い。 |
| 5 | 暗褐色土 | ローム土極少量。 |
| 6 | 褐色土 | ローム土。ロームブロック、炭化物少量。 |



遺構外の奈良平安時代遺物

第202図 K1実測図

5 古墳時代

(財)千葉県文化財センターによる東葉高速鉄道の敷設に先立つ調査では、古墳時代前期の住居跡が検出された。こうした環境であるにもかかわらず、古墳時代の遺構は皆無で、遺物も遺跡全体で土師器片が数点のみであり、いずれも小片のため、図化しなかった。

6 奈良・平安時代

(1) 方形周溝状遺構 (第202図)

I1 (第202図)

O14-45G。規模 周溝外辺長が東西8.16m、南北7.52mを測り、周溝内辺長は東西6.56m、南北5.84mを測る。やや長方形気味の方形を呈し、四辺はほぼ東西南北に沿っている。周溝 幅は0.65～0.90m、深さは0.20～0.25mを測り、幅・深度とも多少の増減はあるが、比較的一定に掘られている。封土 検出されず、埋葬施設 方形台状部・周溝内とも検出されなかった。遺物 出土しなかった。

7 中・近世

(1) 塚群 (第203図・204図)

K2 (第203図)

N15-43G。台地上平坦部に築かれている。他遺構との重複関係はない。長径4.96m、短径4.24m、高さ0.56mを測る。隅丸方形の塚である。盛土はほぼ単一の土で構成されており、盛土下の旧表土上面には焼土が分布する。盛土中に埋納施設は検出されず、盛土下からも検出されなかった。周溝などの外部施設も検出されていない。盛土中より江戸在土器1点が出土した。瓦質で、器種は不明である。

K3 (第204図)

N15-52・53G。長径6.96m、短径5.44m、高さ0.56mを測る。不整な円形の塚である。盛土は2層で構成されており、旧表土の上面には何ら手を加えていない。盛土中に埋納施設は検出されず、盛土下からも検出されなかった。周溝などの外部施設も検出されていない。盛土中より江戸在土器1点が出土した。火鉢で、格子文(回転印刻文)が胴下半～底部外面まで施される。

(2) ビット (第205図)

P88 (第205図)

位置 N16-54・55Gにまたがる。重複関係 単独。長軸 ほぼ北北東-南南西。平面形 隅丸長方形。壁・底面 壁は垂直気味で、底面は概ね平坦で、北西及び北東コーナー近くにビットを有する。壁に接して焼土が認められた。規模 2.02m×1.43m、検出面からの深さは0.27mを測る。覆土 11層に分層できた。遺物 縄文式土器1点が出土したが、本跡に伴わない。性格 炭窯である。

(3) 溝

M1 (第206図)

N15-59G 他。総延長3.60m、幅2.50mを測る。北西-南東方向の直線状の溝。底面に硬化面

M2 (第206図)

N17-28G 他。総延長9.50m、幅1.15mを測る。逆L字状の溝である。

M3 (第206図)

N17-7G 他。総延長41.80m、幅1.10mを測る。クランク状に曲折する溝である。

M4 (第206図)

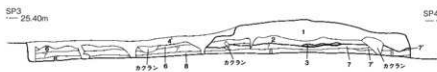
N17-7G 他。総延長21.70m、幅0.50mを測る。M3と一部並行する。

(4) 遺構外出土遺物 (第206図)

1～5は泥面子である。1は大黒天。2は火男か。3・4はお多福か。5は老人か。



※網かけは焼土範囲



K2土層説明

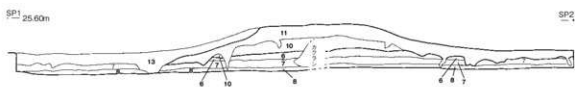
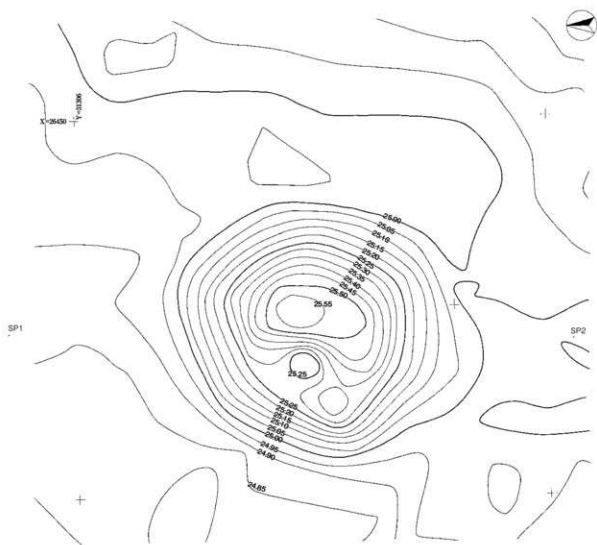
- | | |
|---------|--------------------------|
| 1 暗褐色土 | 盛土を構成する土 |
| 2 暗褐色土 | |
| 2' 暗褐色土 | 焼土極少量 |
| 3 暗褐色土 | 焼土多量、盛土下に存在する |
| 4 暗褐色土 | 表土、しまりあり |
| 4' 褐色土 | 表土。グズグズの状態 |
| 5 褐色土 | 埋土 |
| 6 褐色土 | 自然堆積土、しまり強い |
| 7 極暗褐色土 | 自然堆積土。暗褐色土、黄褐色土まじり。しまり強い |
| 7' 暗褐色土 | 7層に似るが黒色味弱い |
| 8 暗褐色土 | 7'層と褐色土のまじりあった土 |



K2 出土遺物



第203図 K2実測図



K3土層説明

6～8 K2の土層に対応

10 暗褐色土 黄褐色土少量

11 暗褐色土 黄褐色土少量

13 褐色土

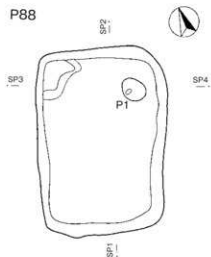


K3 出土遺物



第204図 K3実測図

P88



SP1 24.14m

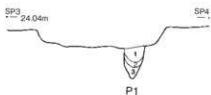


P88土層説明

- 1 ローム主体 褐色土混。炭少量。
- 2 炭化物の層 ローム、褐色土少量。炭は砕けている
- 3 褐色土 径1cm以下ロームブロック、ローム粒子。焼土、炭化物少量。
- 4 褐色土 ローム土まじり。炭化物少量。
- 4' 黄褐色土 ローム主体。褐色土、炭化物少量。
- 5 褐色土 ロームまじり。焼土、炭化物少量。
- 6 黄褐色土 ローム主体。褐色土少量、炭化物極少量。
- 7 褐色土 焼土多量。
- 8 赤褐色土 ロームの焼けた層。炭化物含む。
- 9 炭化物、褐色土まじり。床直上層。
- 10 9層と同一性格。炭少量。床面直上層
- 11 9、10層と同一性格。床面直上層

P88-P1土層説明

- 1 褐色土 ロームまじり。上面に炭、焼土含む。
- 2 径1~2cmロームブロック。
- 3 褐色土 ロームまじり。崩れやすい。



M1



M1土層説明

- 1 黒褐色土 ローム粒子少量。しまり強い。
- 2 暗褐色土 ロームにじむ。しまり強い。
- 3 暗黄褐色土 ローム。暗褐色土まじり。

M2土層説明

- 1 暗褐色土 黄色粒子少量
- 2 黒褐色土 暗褐色土まじり。黄色粒子少量。
- 3 褐色土 ロームまじり。
- 4 暗褐色土 ロームまじり。

M2



M3土層説明

- 1 褐色土 黄色粒子含む。
- 2 褐色土 黄褐色土まじり。しまり強い。
- 3 褐色土 黄褐色土まじり。しまり強い。

M3



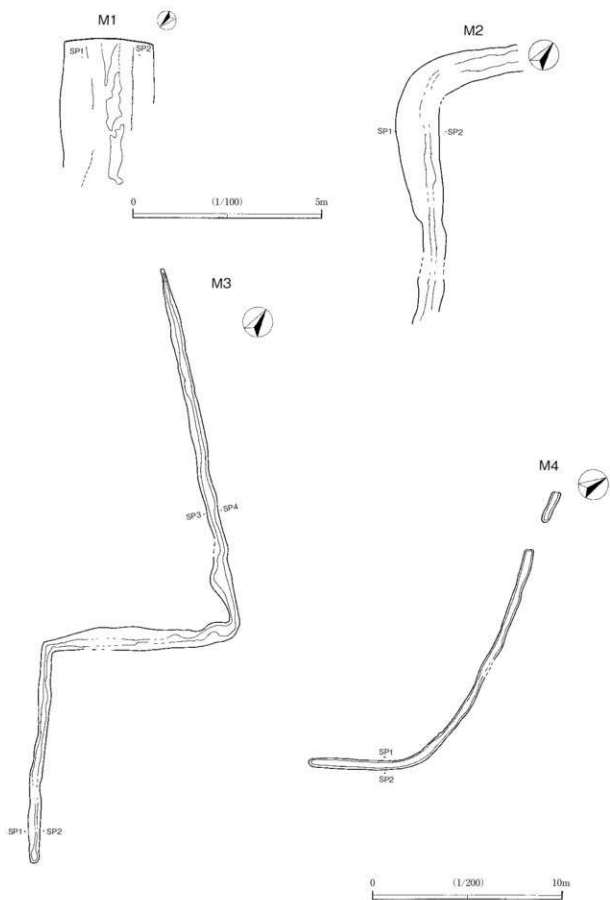
M4土層説明

- 1 褐色土 黄色粒子含む。
- 2 褐色土 黄褐色土まじり。
- 3 暗黄褐色土

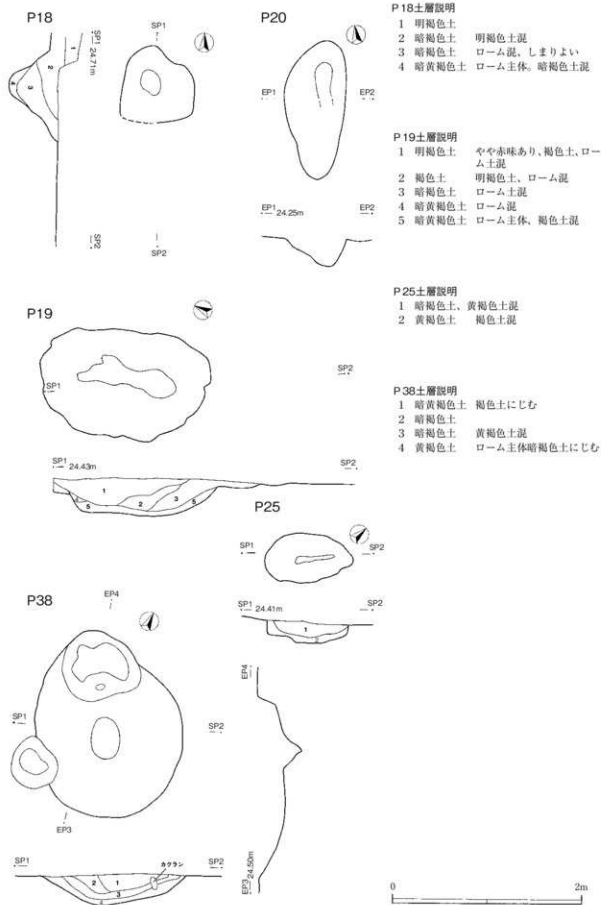
M4



第205図 ビット・溝及び遺構外遺物



第206图 沟实测图



第207図 時期不明遺構(1)

8 時期不明

ここでいう時期不明の意味及び意義付けに関しては、第2章を参照されたい。

(1) ビット (第207図～212図)

P9(全測図)

性格 風倒木痕である。

P10(全測図)

記録なし。

P11(全測図)

記録なし。

P12(全測図)

記録なし。

P13(全測図)

記録なし。

P14(全測図)

記録なし。

P18(第207図)

位置 N15-92G。重複関係 単独。長軸 ほぼ正円形なのでなし。平面形 不整楕円形。壁・底面 壁はゆるやかに立ち上がる。底面は丸みを帯びる。規模 0.83m×0.77m。検出面からの深さは0.48mを測る。覆土 4層に分層でき、暗褐色土系。遺物 なし。

P19(第207図)

位置 N15-92G。重複関係 単独。長軸 (ほぼ北-南)。平面形 不整楕円形。壁・底面 壁はゆるやかに立ち上がる。底面は凹凸目立つ。規模 1.83m×1.16m。検出面からの深さは0.38mを測る。覆土 5層に分層でき、最上層は新期テフラの可能性ある。遺物 なし。

P20(第207図)

位置 N15-84G。重複関係 単独。長軸 ほぼ北-南。平面形 楕円形。壁・底面 東から北の壁は垂直気味、西側ではゆるやかに立ち上がる。規模 (1.48m)×0.67m。検出面からの深さは0.33mを測る。覆土 2層に分層できた。遺物 なし。

P22(全測図)

位置 N15-92G。野帳によれば、柱穴状のビット。

P23(全測図)

位置 N15-92G。野帳によれば、柱穴状のビット。

P24(全測図)

位置 N15-92G。野帳によれば、柱穴状のビット。

P25(第207図)

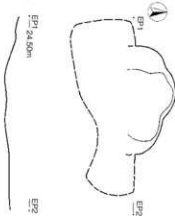
位置 N16-2G。重複関係 単独。長軸 ほぼ北西-南東。平面形 不整楕円形。壁・底面 壁は垂直気味に立ち上がる。底面は凹凸に富む。規模 0.94m×0.53m。検出面からの深さは0.24mを測る。覆土 2層に分層できた。遺物 なし。

P26(全測図)

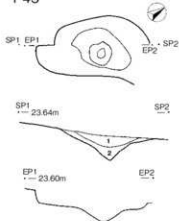
位置 N16-3G。野帳によれば、楕円形の浅い小ビット。

P27(全測図)

P40



P45



P45土層説明

- 1 黒褐色土 暗褐色土にじむ
- 2 暗褐色土 ロームにじむ

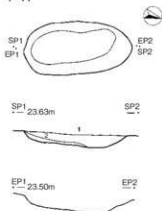
P47土層説明

- 1 黒褐色土 ロームにじむ
- 2 黄褐色土含

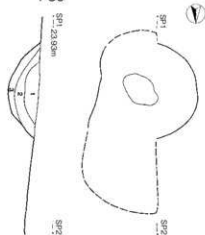
P50土層説明

- 1 黒褐色土 黄褐色土ごく少量含
- 2 黒褐色土 黄褐色土含
- 3 黒褐色土 ローム土混

P47



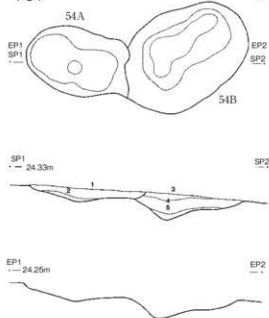
P50



P54土層説明

- | | | | |
|---|---|--------|---------------|
| A | { | 1 褐色土 | 黄褐色土混、暗褐色土少量含 |
| | | 2 黄褐色土 | 褐色土にじむ |
| B | { | 3 褐色土 | 明褐色土、少量含 |
| | | 4 褐色土 | 明褐色土、暗褐色土混 |
| | | 5 黄褐色土 | 暗褐色土混 |

P54



第208図 時期不明遺構 (2)

位置 N16-3G。野帳によれば、楕円形の小ピット。

P28(全測図)

位置 N16-3G。野帳によれば、円形の浅い小ピット。

P29(全測図)

位置 N16-3G。野帳によれば、楕円形の小ピット。

P32(全測図)

位置 N16-13G。野帳によれば、楕円形の小ピット。

P33(全測図)

位置 N16-3G。野帳によれば、円形の小ピット。

P34(全測図)

位置 N16-4G。野帳によれば、楕円形の小ピット。

P35(全測図)

位置 N16-4G。野帳によれば、円形で尖底の小ピット。

P36(全測図)

位置 N16-4G。野帳によれば、円形の小ピット。

P37(全測図)

位置 N15-84・94Gにまたがる。野帳によれば、楕円形のピット。

P38(第207図)

位置 N16-4G。重複関係 単独。長軸 ほぼ北北西-南南東。平面形 楕円形。壁・底面 壁はゆるやかに立ち上がる。皿状。規模 1.92m×1.56m。検出面からの深さは0.33mを測る。覆土 4層に分層できた。遺物 なし。備考 本跡は2基のピットの重複である。

P39(全測図)

位置 N16-14G。野帳によれば、柱穴状の尖底ピット。

P40(第208図)

位置 N16-2・3Gにまたがる。重複関係 単独。長軸 ほぼ西-東。平面形 不整形。壁・底面 壁はゆるやかに立ち上がる。底面は凹凸に富む。規模 0.66m×(0.44m)。検出面からの深さは0.13mを測る。覆土 2層に分層できた。遺物 なし。

P43(全測図)

位置 N16-25G。風倒木痕。

P44(全測図)

位置 N16-13G。野帳によれば、不整楕円形の窪み状。

P45(第208図)

位置 N16-23G。重複関係 単独。長軸 不明。平面形 不整楕円形。壁・底面 壁はゆるやかに立ち上がる。底面は先すばまり状。規模 1.02m×0.64m。検出面からの深さは0.37mを測る。覆土 2層に分層できた。遺物 なし。

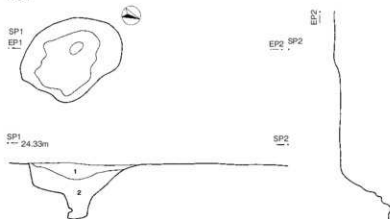
P46(全測図)

位置 N16-23G。野帳によれば、柱穴状の尖底ピット。

P47(第208図)

位置 N16-24G。重複関係 単独。長軸 ほぼ北北西-南南東。平面形 やや不整な楕円形。壁・底面 壁はゆるやかに立ち上がる。底面は丸みを帯びる。規模 1.14m×0.57m。検出面からの深さは

P61



P61土層説明

- 1 褐色土 黄褐色土混。
- 2 暗黄褐色土。

P62土層説明

- 1 褐色土 黄褐色土混。

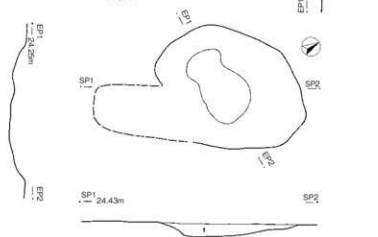
P63土層説明

- 1 褐色土 褐色土混。
- 2 暗黄褐色土 褐色土混。

P64土層説明

- 1 褐色土 明褐色土混。
- 2 褐色土 明褐色土混。

P62



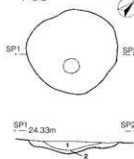
P66土層説明

- 1 黄褐色土 褐色土にじむ。
- 2 褐色土 黄褐色土にじむ。
- 3 褐色土 黄褐色土混。
- 4 黄褐色土 褐色土混。

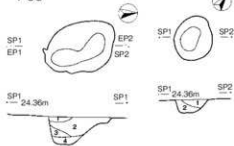
P67土層説明

- 1 褐色土 ローム土混。
- 2 暗黄褐色土

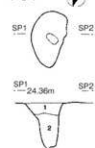
P63



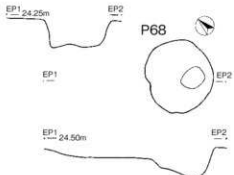
P66



P64



P68



第209図 時期不明遺構 (3)

0.14mを測る。覆土 2層に分層できた。遺物 なし。

P48(全測図)

位置 N16-24G。野帳によれば、楕円形の小ピット。

P49(全測図)

位置 N16-24G。野帳によれば、不整形の小ピット。

P50(第208図)

位置 N16-24G。重複関係 単独。長軸 (ほぼ北-南)。平面形 不整形。壁・底面 全体に揺鉢状に掘られ、壁はゆるやかに立ち上がる。底面は丸みを帯びる。規模 1.01m×1.07m。検出面からの深さは0.32mを測る。覆土 3層に分層でき、黒褐色土系。遺物 なし。

P52(全測図)

位置 N16-24G。野帳によれば、楕円形の小ピット。

P53(全測図)

位置 N16-24G。野帳によれば、楕円形の小ピット。

P54(第208図)

位置 N16-24G。重複関係 単独。長軸 A東北東-西南西、B北東-南西。平面形 A・Bとも楕円形。壁・底面 A・Bとも壁はゆるやかに立ち上がる。底面は凹凸あり。規模 A(1.15m)×0.72m、B(1.46m)×1.03m。検出面からの深さはA0.14m、B0.28mを測る。覆土 Aは2層に分層でき、Bは3層に分層できた。遺物 なし。

P55(全測図)

位置 N16-24G。野帳によれば、楕円形の小ピット。

P56(全測図)

位置 N16-25G。野帳によれば、円形の小ピット。

P57(全測図)

位置 N16-24G。野帳によれば、柱穴状のピット。

P58(全測図)

位置 N16-34G。野帳によれば、円形の小ピット。

P61(第209図)

位置 N16-36・46Gにまたがる。重複関係 単独。長軸 ほぼ北西-南東。平面形 不整形楕円形。壁・底面 壁は急に立ち上がり、底面は凹凸に富む。規模 1.14m×0.84m。検出面からの深さは0.62mを測る。覆土 2層に分層できた。遺物 なし。

P62(第209図)

位置 N16-36G。重複関係 単独。長軸 ほぼ北東-南西。平面形 不整形楕円形。壁・底面 壁はゆるやかに立ち上がる。底面は凹凸に富む。規模 1.70m×1.27m。検出面からの深さは0.19mを測る。覆土 褐色土の単一土層。遺物 なし。

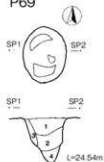
P63(第209図)

位置 N16-36G。重複関係 単独。長軸 ほぼ(北-南)。平面形 円形。壁・底面 壁はゆるやかに立ち上がる。皿状に掘り込まれる。規模 0.89m×0.93m。検出面からの深さは0.13mを測る。覆土 2層に分層できた。遺物 なし。

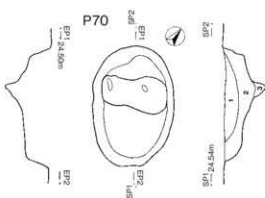
P64(第209図)

位置 N16-26G。重複関係 単独。長軸 ほぼ北西-南東。平面形 楕円形。壁・底面 壁は垂直

P69



P70



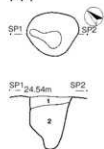
P69土層説明

- 1 暗褐色土 褐色土まじり。
- 2 暗褐色土、褐色土平々。
- 3 褐色土 ロームまじり。
- 4 黄褐色土 褐色土まじり

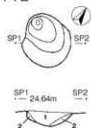
P70土層説明

- 1 褐色土 黄褐色土まじり。
- 2 黄褐色土 褐色土まじり。
- 3 黄褐色土 褐色土まじり、ロームブロック。

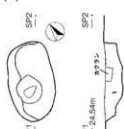
P71



P72



P74



P71土層説明

- 1 暗褐色土 黄褐色土まじり。
- 2 暗褐色土 褐色土まじり。

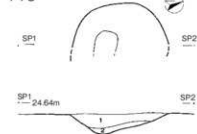
P72土層説明

- 1 暗褐色土 黄褐色土まじり。
- 2 黄褐色土 暗褐色土まじり。

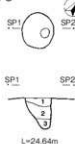
P73土層説明

- 1 褐色土 黄褐色土まじり。
- 2 黄褐色土 褐色土まじり。

P73



P75



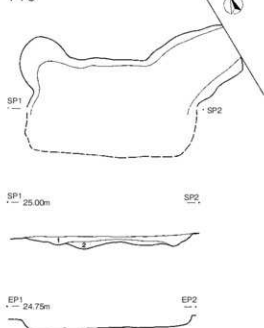
P74土層説明

- 1 褐色土 黄褐色土まじり。

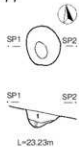
P75土層説明

- 1 褐色土 黄褐色土まじり。
- 2 褐色土 黄褐色土少量。
- 3 黄褐色土 褐色土まじり。

P76



P77



P76土層説明

- 1 暗褐色土 黄褐色土まじり。
- 2 黄褐色土 暗褐色土まじり。

P77土層説明

- 1 暗褐色土 ロームまじり、黒色味有り。
- 2 褐色土 ロームまじり。



第210図 時期不明遺構(4)

気味、底面は尖底気味。規模 0.48m×0.36m、検出面からの深さは0.49mを測る。覆土 2層に分層でき、褐色土系。遺物 なし。

P66(第209図)

位置 N16-25G。重複関係 単独。長軸 ほぼ北北西-南南東。平面形 不整楕円形。壁・底面 壁は垂直気味に立ち上がる。底面は凹凸あり。規模 0.82m×0.55m、検出面からの深さは0.14mを測る。覆土 4層に分層できた。遺物 なし。

P67(第209図)

位置 N16-26G。重複関係 単独。長軸 ほぼ(北-南)。平面形 略円形。壁・底面 壁は垂直気味に立ち上がる。底面は丸みを帯びる。規模 0.48m×0.44m、検出面からの深さは0.14mを測る。覆土 2層に分層できた。遺物 なし。

P68(第209図)

位置 N16-15G。重複関係 単独。長軸 ほぼ(北-南)。平面形 略円形。壁・底面 壁はゆるやかに立ち上がる。底面は丸みを帯びる。規模 0.77m×0.74m、検出面からの深さは0.34mを測る。覆土 3層に分層でき、最上層はしまりがよい。遺物 なし。

P69(第210図)

位置 N16-15G。重複関係 単独。長軸 ほぼ北-南。平面形 楕円形。壁・底面 壁は垂直気味で、中段にテラスを有する。底面は尖底気味。規模 0.50m×0.46m、検出面からの深さは0.48mを測る。覆土 4層に分層できた。遺物 なし。備考 柱穴状。

P70(第210図)

位置 N16-14G。重複関係 単独。長軸 ほぼ北西-南東。平面形 楕円形。壁・底面 壁は垂直気味、底面は概ね平坦。底面にピット状の深い部分あり。規模 1.29m×0.88m、検出面からの深さは0.50mを測る。覆土 3層に分層でき、黄褐色土系主体。遺物 なし。

P71(第210図)

位置 N16-4G。重複関係 単独。長軸 (ほぼ北西-南東)。平面形 不整円形。壁・底面 壁は垂直気味、底面は丸みを帯びる。規模 0.57m×0.47m、検出面からの深さは0.56mを測る。覆土 2層に分層でき、暗褐色土系。遺物 なし。

P72(第210図)

位置 N15-95G。重複関係 単独。長軸 ほぼ西北西-東南東。平面形 不整円形。壁・底面 壁はゆるやかに立ち上がる。底面は三段状となり、一端が下がる。規模 0.61m×0.55m、検出面からの深さは0.16mを測る。覆土 2層に分層できた。遺物 なし。

P73(第210図)

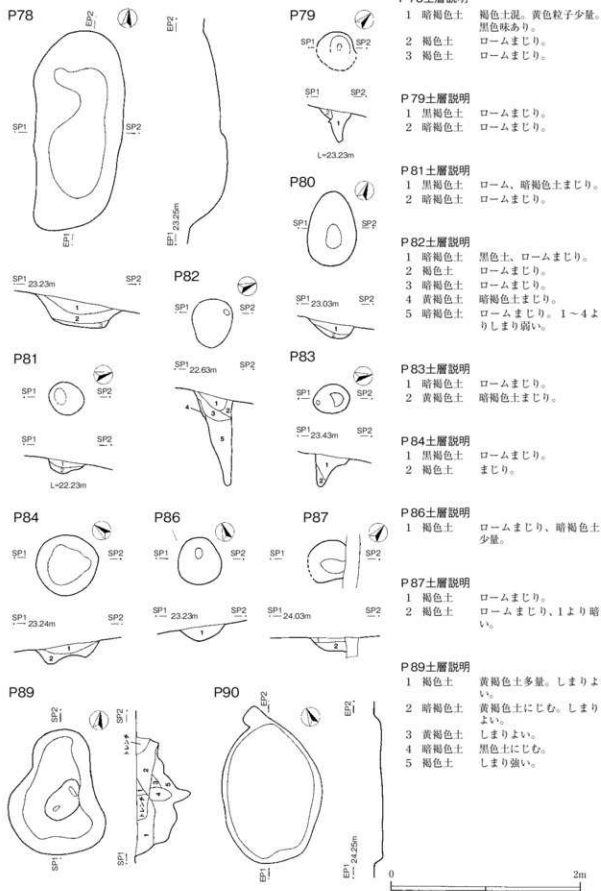
位置 N15-94G。重複関係 単独。長軸 ほぼ北北東-南南西。平面形 楕円形。壁・底面 壁はゆるやかに立ち上がる。底面は丸みを帯びる。規模 1.03m×(0.56m)、検出面からの深さは0.18mを測る。覆土 2層に分層できた。遺物 なし。

P74(第210図)

位置 N15-95G。重複関係 単独。長軸 ほぼ北東-南西。平面形 楕円形。壁・底面 壁は垂直気味。底面に小ピット状。規模 0.84m×0.50m、検出面からの深さは0.15mを測る。覆土 褐色土の単一土層。遺物 なし。

P75(第210図)

位置 N15-95G。重複関係 単独。長軸 ほぼ円形なのでなし。平面形 円形。壁・底面 壁は垂直



第211図 時期不明遺構 (5)

に立ち上がる。底面は丸みを帯びる。規模 0.36m×0.35m。検出面からの深さは0.34mを測る。覆土 3層に分層できた。遺物 なし。

P76(第210図)

位置 N15-43G。重複関係 K2に破壊される。長軸 ほぼ北西-南東。平面形 楕円の両端に円を一つずつつけた形(不定形)。壁・底面 壁はゆるやかに立ち上がる。底面は丸みを帯びる。規模 (2.37m)×(0.92m)。検出面からの深さは0.14mを測る。覆土 2層に分層できた。遺物 なし。備考 3基のピットの重複か。

P77(第210図)

位置 N16-23G。重複関係 単独。長軸 (ほぼ北-南)。平面形 円形。壁・底面 壁はゆるやかに立ち上がる。底面は丸みを帯びる。規模 0.43m×0.76m。検出面からの深さは0.18mを測る。覆土 2層に分層できた。遺物 なし。

P78(第211図)

位置 N16-23G。重複関係 単独。長軸 ほぼ北-南。平面形 やや不整な楕円形。壁・底面 壁はゆるやかに立ち上がる。底面は凹凸に富む。規模 2.16m×0.98m。検出面からの深さは0.26mを測る。覆土 3層に分層できた。下層は水平堆積。遺物 なし。

P79(第211図)

位置 N16-23G。重複関係 単独。長軸 円形なのでなし。平面形 円形。壁・底面 壁は先ずはまり状で、尖底ピット。規模 0.44m×0.40m。検出面からの深さは0.32mを測る。覆土 2層に分層できた。遺物 なし。

P80(第211図)

位置 N16-23G。重複関係 単独。長軸 ほぼ北北西-南南東。平面形 楕円形。壁・底面 壁はゆるやかに立ち上がる。底面は丸みを帯びる。規模 0.78m×0.53m。検出面からの深さは0.16mを測る。覆土 2層に分層できた。遺物 なし。

P81(第211図)

位置 N16-23G。重複関係 単独。長軸 ほぼ北東-南西。平面形 円形。壁・底面 壁はゆるやかに立ち上がる。底面は丸みを帯びる。規模 0.38m×0.35m。検出面からの深さは0.14mを測る。覆土 2層に分層できた。遺物 なし。

P82(第211図)

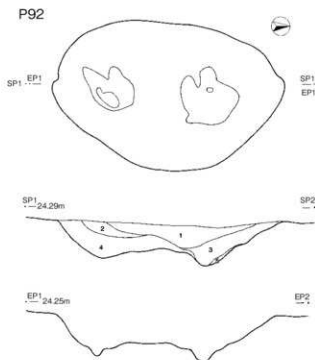
位置 N16-33G。重複関係 単独。長軸 ほぼ西北西-東南東。平面形 不整楕円形。壁・底面 壁は底面に向かって先ずはまり。規模 0.49m×0.45m。検出面からの深さは0.97mを測る。覆土 5層に分層できた。遺物 なし。

P83(第211図)

位置 N16-33G。重複関係 単独。長軸 ほぼ北-南。平面形 楕円形。壁・底面 底面はテラスを有し、一端が深くなり、先ずはまりとなる。規模 0.40m×0.28m。検出面からの深さは0.34mを測る。覆土 2層に分層できた。遺物 なし。

P84(第211図)

位置 N16-34G。重複関係 単独。長軸 円形なのでなし。平面形 不整円形。壁・底面 壁はゆるやかに立ち上がる。底面は凹凸に富む。規模 0.64m×0.61m。検出面からの深さは0.18mを測る。覆土 2層に分層できた。遺物 なし。



P92土層説明

- 1 褐色土 ロームブロック、ローム粒子、ローム土多量。黄色味強い。
- 2 暗黄褐色土 ロームにじむ。しまりよい。
- 3 褐色土 ロームにじむ。しまりよい。
- 4 黄褐色土 径5cm ロームブロック下層に多量
- 5 黄褐色土 ロームブロック主体。

P93土層説明

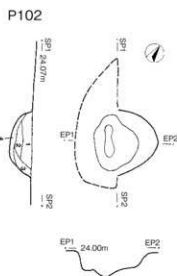
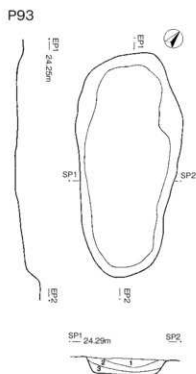
- 1 褐色土 暗褐色土にじむ
- 2 褐色土 ロームまじり。
- 3 ローム主体。褐色土まじり。

P96土層説明

- 1 暗褐色土 黒褐色土、褐色土、ロームまじり。

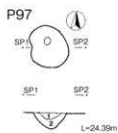
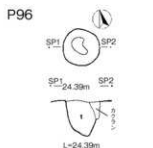
P97土層説明

- 1 褐色土 暗褐色土まじり。
- 2 褐色土 ロームまじり。



P102土層説明

- 1 暗褐色土 ロームまじり、しまりあり。
- 2 黒褐色土 ロームまじり、しまりあり。
- 3 暗褐色土 ロームまじり、しまりあり。
- 4 暗黄褐色土 しまりあり。



第212図 時期不明遺構 (6)

P86(第211図)

位置 N16-33G。重複関係 単独。長軸 (ほぼ北-南)。平面形 円形。壁・底面 壁はゆるやかに立ち上がる。底面は丸みを帯びる。規模 0.49m×0.47m。検出面からの深さは0.16mを測る。覆土 褐色土の単一土層。遺物 なし。

P87(第211図)

位置 N16-34G。重複関係 単独。長軸 ほぼ北東-南西。平面形 円形。壁・底面 壁はゆるやかに立ち上がる。底面は丸みを帯びる。規模 0.45m×(0.40m)。検出面からの深さは0.14mを測る。覆土 2層に分層でき、褐色土系。遺物 なし。

P89(第211図)

位置 N16-33G。重複関係 単独。長軸 ほぼ北-南。平面形 不整形円形(瓢箪形)。壁・底面 壁は垂直気味。底面は凹凸に富み、中央がビット状となる。規模 1.34m×1.06m。検出面からの深さは0.57mを測る。覆土 5層に分層でき、全体にしまりよい。遺物 なし。

P90(第211図)

位置 N16-65G。重複関係 単独。長軸 ほぼ北北東-南南西。平面形 楕円形。壁・底面 壁は垂直気味に立ち上がり、底面は比較的平坦。規模 1.55m×1.07m。検出面からの深さは0.09mを測る。覆土 褐色土の単一土層。遺物 なし。

P92(第212図)

位置 N15-61・62Gにまたがる。重複関係 単独。長軸 ほぼ北-南。平面形 不整形円形。壁・底面 壁はゆるやかに立ち上がる。底面は凹凸に富み、2箇所が挿鉢状にくぼむ。規模 2.46m×1.57m。検出面からの深さは0.46mを測る。覆土 5層に分層でき、全体にルーム目立つ。遺物 なし。

P93(第212図)

位置 N16-33G。重複関係 単独。長軸 ほぼ北西-南東。平面形 楕円形。壁・底面 壁はゆるやかに立ち上がる。底面は凹凸あり。規模 2.40m×1.15m。検出面からの深さは0.26mを測る。覆土 3層に分層でき、褐色土系。遺物 なし。

P95(全測図)

位置 N15-71G。野帳によれば、楕円形の小ビット。

P96(第212図)

位置 N15-81G。重複関係 単独。長軸 ほぼ北-南。平面形 円形。壁・底面 壁はゆるやかに立ち上がる。底面は比較的平坦。規模 0.40m×0.41m。検出面からの深さは0.36mを測る。覆土 暗褐色土の単一土層。遺物 なし。

P97(第212図)

位置 N15-81G。重複関係 単独。長軸 ほぼ北-南。平面形 不整形円形。壁・底面 壁はゆるやかに立ち上がる。底面は尖底状。規模 0.45m×0.42m。検出面からの深さは0.17mを測る。覆土 2層に分層でき、褐色土系。遺物 なし。

P101(全測図)

位置 N16-66G。野帳によれば、不整形で底面に凹凸目立つビット。

P102(第212図)

位置 N16-45G。重複関係 単独。長軸 ほぼ北西-南東。平面形 不整形円形。壁・底面 壁はゆるやかに立ち上がる。底面は凹凸に富む。規模 (0.70m)×(0.68m)。検出面からの深さは0.24mを測る。覆土 4層に分層でき、各層ともしまりがある。遺物 なし。

第5章 成果と課題

今回の報告は、遺跡群ということで、浅間内遺跡・白筋遺跡・沖塚遺跡の3遺跡が対象となっている。各々の関係を念頭に置きつつ、遺跡毎の成果を述べてゆくことにしたい。

(1) 浅間内遺跡

旧石器時代 第7次調査区で、小規模かつ散漫な遺物集中箇所1箇所が調査された。石器類の産出層準は立川ローム層Ⅶ層に相当する。既報告ではあるが、第5次調査でⅥ層直下及びⅦ層中より石器が出土しており、本遺跡の文化層の一つをⅦ層と認定したい。近隣では北海道遺跡の第3文化層(橋本1998)がⅦ層に相当し、遺物集中箇所26地点が検出されている。その他では第1次調査区・第2次調査区でも剥片類が抽出できた。また、第7次調査区の遺構覆土、特にM34は多く、さらにグリッドなどからも石器が検出されており、本来的には文化層・遺物集中箇所ともに複数存在した可能性が高い。

縄文時代 遺構については、陥穴6基を除くとピットであって、時期を特定すべき遺物の出土もごくわずかなものばかりである。陥穴の覆土中からは阿玉台式土器を出土するものがあるが、狩猟場と居住域が同時相で重複するとは考え難いものがあり、出土遺物での時期決定は控えたい。

ピットは柱穴状のものも含めて様々であり、本来的には各々が用途に裏打ちされた機能を備えていたことは想像に難くないが、エリア的に集中することもなく、性格を語ることは困難である。ただし、P620・P621のような、遺物が少なからず出土するものの、不整形かつ不定形のもの、それが単なる「くぼみ」であるかを含めて、調査者が遺構というものを、いかに捉えるかという、言わば認識論的レベルの議論が待っている。自他を含め、遺構とは何か、を再考する必要性を痛感している。

中期前半の阿玉台式期に限った場合、第2次調査区に隣接する第3次調査区で見られたような、遺構群(堅穴住居跡・小竪穴及び墓坑)は検出されなかった。第3次調査区の場合は、小林謙一氏の説くSO型集落に該当すると推察される。第1次・第2次・第7次調査区の場合は、集落を形成した集団そのものが別であるとか、同一集団と仮定した場合、空間利用の違いに起因するものと解釈される。

縄文式土器については早期初頭燃糸文系土器～後期前半堀之内1式土器までが検出された。このうち、早期初頭燃糸文系土器と中期前半阿玉台式土器を除き、他は比較的少量であった。

燃糸文系土器は、井草式を中心に稲荷台式及び一部それ以降と思われるものを含む。井草式の中で注目すべきは、第24図1に示した、いわゆる「井草Ⅰ式直前段階」とされている、口縁内面に施文のある土器である。これらは、前代の表裏縄文系土器群との脈絡が通れるという点で重要なだけでなく、今のところ八千代市内で最古の縄文式土器といえる。同図2の口縁下に細いへら状工具による刺突が施された土器もまた、1点とはいえず注目すべきで、小形土器という点でも貴重である。

井草Ⅱ式期では、JY型の資料が1点抽出できた。近隣では、千葉市高台向遺跡での出土例が知られており、原田昌幸氏による考察が行われている。瞥見の限りでは、第3次調査区では、井草Ⅰ式よりも井草Ⅱ式が目立つようである。第7次調査区では、井草Ⅰ式も少なからず出土しており、口縁部の資料に限れば、むしろ井草Ⅱ式の方が少ない。そして、井草Ⅰ式の口縁部を観察すると、原田昌幸氏の細分(原田編年)での「井草Ⅰ式(古)段階」の資料は少なく、「井草Ⅰ式(新)段階」から資料が増加しているようである。それは、仮称「新川谷」を隔てた対岸の、萱田遺跡群の権現後遺跡の例でも同様で、「井草Ⅰ式(古)段階」の資料は少量である。辺田前・沖塚前低地を隔てた新林遺跡の例もまた、同様の傾向を示していた。この点は留意しておきたい。

前期の資料は、出土したという程度の量であって、極めて零細である。前半黒浜式・後半浮島式・前

期末葉縄文系粗製土器の資料が抽出できた。第3次調査区では、浮島I式にややまとまりが見られた。台地全体から見れば、第7次調査区も一連であり、第2次調査区との境界などは全くの行政的な線引きに過ぎない。しかし、前期後半～中期前半を見てみると、第3次調査区を中心とするエリアと、第2次及び第7次調査区を中心とするエリアとは、空間利用そのものが異なっていたと解釈せざるを得ない。

阿玉台式土器は、I a式～II式にかけての資料が、第1次調査区及び第6次調査区を除き、多量に出土している。事実記載の際も苦慮したが、ティピカルな資料以外では、実務レベルでの細別に困難なものが少なからずあった。今回は、写真と断面図が分離した状態で掲載となり、遺憾の念に堪えない。しかしながら、今まで以上に口縁断面を純粋に観察する機会に恵まれた。その結果、刃形の口縁は阿玉台I b式土器にはほとんど継承されないこと、同期から外面の口縁端部の肥厚が目立ち、幅広い内稜を持つようになることなどが判明した。いずれも、西村正衛氏が40年近くも前に指摘していたことの再確認である。扇状把手や大波状縁を付けるために、肥厚や内稜の発達を促したことは、正鵠を得ている。ただ、阿玉台I a式土器に見られる波状縁が、前代から継承したもので、次代には廃れるという点に関しては、些かの疑問がある。例えば、「富士山状」の波状縁や、波頂部から蛇行隆線を垂下するという属性は、阿玉台I a式のみならず、阿玉台式土器の全期間を通じて見られるという点は指摘しておきたい。

勝坂式土器は、下総考古学研究会による編年の、勝坂I式～II式が出土している。これに加え、在地化した勝坂式土器を含めて挿図を作成した。勝坂III式～IV式はほとんど出土していないが（III式が1点のみ）、これは阿玉台III式～IV式土器が出土していないことと無関係ではない。要するに、その時期には人の生活の痕跡が、はなはだ希薄であったということを示す。

加曾利E式土器は、少量ながらE II式～E III式が出土しており、注目される。前述の阿玉台式期とも関連するが、八千代市内では、阿玉台III式～加曾利E II式土器を出土する遺跡が非常に少ないのである。特に、当該期をメインとして営まれた「拠点集落遺跡」ともなると、ごく限られており、神野貝塚を含めても決して多いとはいえない。逆に、阿玉台I a式～I b式土器を出す遺跡は多く、中期末の加曾利E III式～E IV式土器を出す遺跡もまた多い。今回の資料は、市内のタイムスケールの空隙を埋め、確実な報告例として、地名表に記入されるものとなろう。

称名寺式土器及び堀之内式I土器もまた、浅間内遺跡の報告では初見となる。1983年の市内分布調査報告書と、1996年の朝比奈竹男氏による論考では、後期初頭～前半の遺跡は、後期後半と比較して少なく、その中で称名寺式期の方が、堀之内式期よりも多いとされていた。10年近く経過した今日では、市内における発掘調査例及びその報告例は激増した。そうした中で、称名寺式期の土器資料は漸増しているものの、比較的少量にとどまっている。朝比奈論文は分布調査の結果から見た予察であって、発掘調査の結果が異なるとしても、元々両者は方法論も違うので、論文の評価自体が下がる訳ではない。

土製品は、土器片鉢が30点・土製円盤9点（狭義6・広義3）が出土した。土器片鉢は、そのほとんどが縁辺は打ち欠き整形の資料で、磨り上げたのは1点である。索溝の位置は、長軸中央の資料が多いものの、短軸中央の資料も少なからず存在し、注目される。両者の違いは、単なる個人的な趣味・嗜好の差であるはずはなく、背景には用途及び機能の違いが存在するものと考えられる。今回は、あくまでも形態・形状の一つとして報告することに止めたい。

土製円盤については、玉井庸弘氏による用語の定義に従う。玉井氏は神野貝塚採集の土製円盤を報告し、主に形状から広義と狭義の二つに分類した（玉井1997）。広義の土製円盤とは、『土器片を再利用したもので、形状にとらわれずに加工・磨耗が見られるもの』で、扇形・方形などが含まれるとし、狭義の土製円盤とは、『土器片を再利用し、円形に加工・磨耗したもの』と定義した。玉井氏が説くように、この種の土製品には様々な形状が存在し、それらを等閑視とまではいかないまでも、一括して「土製円

盤」の名で報告されることが多かった。かつて堀越正行氏は、問題点を踏まえた上で「板状土製品」と総称するという提案を発表した（堀越1977）が、用語として定着することはなかった。その理由については、あくまでも推測の域を出るものではないが、円形を呈するものが多いにもかかわらず、円盤の名を外すことに対しての抵抗があったのではないかと私考している。土製円盤は土器片鍾とは異なり、見かけの形状からつけられた考古学用語であるため、現状では玉井氏の定義を支持することにしたい。

弥生時代 弥生後期に比定される堅穴住居跡13軒（第1次3・第7次10）、土坑2基（第7次）が検出された。このうち、第1次調査区は同一の台地上ではあるが、第2・3・6・7次調査区とは距離が離れており、別の集落であった可能性が高い。さらに、第3次調査区と第7次調査区の間には第2次調査区が介在し、弥生時代の遺構は検出されず、遺物もまた僅少であったことから、両者を同一の集落とは見なせない。弥生後期の台地上には、都合、三つの小規模集落が存在したと捉えたい。

土器は復元可能な個体及び大破片は少ない。最近の研究成果に照らすと、時間軸的には弥生時代後期前半～後半にはほぼおさまり、臼井南式土器が主体となっており、後期初頭及び終末の資料は出土していない。東関東系との脈絡を示す櫛描文はごく少量の検出で、栃木県方面の二軒屋式土器との脈絡を示す籐状文は検出されなかった。南関東系土器は、多量ではないが、壺形土器をはじめ、付台鉢（高杯）が検出され、第7次調査区からは一定量の出土があった。この点を考慮に入れて、櫛描文の僅少性から鑑みるならば、後期後半が主体となる可能性がある。それから、第7次調査区では、弥生中期宮ノ台式土器が数点抽出された。この事実を積極的に解釈するならば、この台地における弥生時代のバイオニアの集落が存在した蓋然性が高い。台地利用の歴史に、新たなる1ページを加えることになった。

古墳時代 古墳前期の堅穴住居跡4軒（第7次4）、古墳中期～後期の移行期の堅穴住居跡6軒（第2次3・第7次3）、土坑2基（第7次）、細別時期不明の堅穴住居跡1軒（第1次）が検出された。

このうち、古墳前期の堅穴住居跡は、第7次調査区で4軒のみと、決して多くはない。しかし、土器は埋没途上の弥生時代住居の覆土への廃棄例（D108など）をはじめ、後代の住居覆土中への逆流入例を含めると、少なからず出土しており、該期の堅穴住居跡が後世の割平などで消失した可能性が高い。今回検出した堅穴住居跡が、同時相を示すかは判断に苦しむが、概して古墳中期に近い様相を持っており、千葉県文化財センターの提唱するところの、「草刈Ⅲ期」に相当しよう。

仮称「新川谷」を隔てた対岸の川崎山遺跡d地点では、複合口縁で網目状燃糸文を施文し、赤彩を施した壺形土器を伴う、弥生時代末葉～古墳時代初頭の集落が検出されているが、今回は遺跡全体の破片資料を見ても、該当期のものは見当たらない。先述した、弥生時代住居の覆土への廃棄行為を考慮に入れると、弥生時代最後の住人から、古墳時代最初の住人までは、少なくとも数十年間の「無人状態」が存在した可能性がある。その間に前代の廃屋は朽ち果て、埋没途上にあつたのではないだろうか。

第7次調査区のD99とD103は、古墳時代中期から後期の移行期の堅穴住居である。住居の内部施設の比較をすると、D99には炉跡は検出されたがカマドは付設されておらず、D103には炉のかわりにカマドが付設されており、両者はカマド導入前後の様相を示している。土器の組み合わせは共通項目が多く、遺構間接合も認められたため、両住居の営まれていた時間差は、比較的僅少と見なすことができる。その場合、先に設営されたのはD99で、やや遅れてD103が設営され、廃絶の順も同様であったとして捉える方が、より矛盾が少ない。穿った見方をするのであれば、両住居は併存していた時期が存在したと考えられよう。また、カマドの登場とともに製作されるとされている「大形瓶」は、D99から出土しており、内部施設のあり方は逆の結果を示すが、これは埋没途上にあつたD99に、D103の住人が廃棄したものと解釈したい。カマド導入時には、こうした時間差が僅少で、一時併存した2軒の住居がセットとなる例はまま存在するようで、市内では向境遺跡A002・005、A003・007、A004・006が好例

であり、報告者の宮澤久史氏は、土器様相と内部施設の変化に注目し、カマド導入直前の1期、導入後の2期に区分した。向境例は2軒×3セットの、都合6軒から構成される集落であったが、本遺跡のように1セットのみの例は、近隣では白井市神々廻宮前遺跡B地点が該当する。今回、古墳前期以外の堅穴住居跡及び土坑は、実は大半がこの時期に該当し、カマド導入直前に廃絶したものと考えられる。

古墳時代後期の遺構は検出されておらず、遺構外抽出資料に、若干土器が認められる程度であり、再び人の生活の痕跡が乏しくなる。

奈良・平安時代 奈良時代は、本遺跡の台地利用史上、最大の活況を示した時代である。今回の成果の一つは、萱田編年のI期以前、下総国府2a期、即ち7世紀末～8世紀初頭の様相が明らかになったことが挙げられる。須恵器の、いわゆる「かえり蓋」と、古墳時代からの系譜である非ロクロ整形で、器形は半球形を呈し、体部がヘラケズリ調整の土器器環が特徴的である。第7次調査区D87の資料が好例で、ここでは略完形の「かえり蓋」が3個体出土した。同伴の土器器環は、外稜を有し、内外面黒色処理のもの及び半球形のもので、一見すると古墳時代後期の例と区別がつかないものであった。

萱田編年のIV期～IX期、即ち平安前期の9世紀～10世紀は、前代の活況とは打って変わり、集落規模が縮小したとしか考えられない状況となる。萱田編年VI期の好例はD104Aで、土器器皿だけでなく、黒笹第14号窯期に比定される灰軸陶器高台付塚が出土した。同期の灰軸陶器はD1でも出土しており、同じくVI期の所産として捉えられる。そして、一部VII期を含むが、VIII期の好例がD7である。このように、VIII期までは遺構が検出されたが、IX期に相当する遺構は検出されておらず、遺構外出土物より抽出した土器器によるのみ、その存在が証明できる。それは高台の高さが増した、いわゆる足高高台付塚に近い器形を呈すると思われるもので、萱田IX期に比定される。

中・近世 検出された中世の遺構についての成果を記すことにする。第1次調査区のP16・P49は、諸般の事情により完掘できず、園化も一部(堅坑部のみ)しかできなかったが、地下式坑である。ともに南側に堅坑部、北側に主室部を持つようである。P5・P12は、平面形が長方形を呈し、底面の長軸に溝状の掘り込みを有するもので、林田利之氏の提唱する「火葬施設」(林田1992)に該当する。第7次調査区のP645は、火葬墓ないし林田氏の提唱する「焼坑転用墓」の可能性が高い。また、第1次調査区の溝群のうちの幾つかは、中世に掘られたものとして捉えられる。特に、横断面がV字状を呈するM2・M7などは、中世の所産となる蓋然性が高い。

中世の遺物は、国産陶器としては瀬戸・常滑・渥美で、他に在地土器がある。瀬戸系は古瀬戸後期の緑軸陶器・大皿・播鉢で、灰軸四耳壺・天目茶碗も含む。このうち播鉢は古瀬戸後期IV期(新)段階の資料の他、大窯期の製品も認められる。常滑系は大甕が主で、第7次調査区のM33から1点のみ控鉢が出土した。甕は口縁部が出土していないため、細別時期は不明である。在地土器は内耳土鍋・播鉢で、内耳は胎土に雲母粒を混入した常陸国産が認められた。石製品では文房具の硯(砥石に転用)・茶道具の茶臼(下臼受皿)がある。今回の資料だけではあまり多くを語ることはできないが、浅間内遺跡の中世は、やはり隣の支台に所在する正覚院館跡の存在を無視することはできない。なぜならば、零細な出土量とはいえ、文房具・茶道具が出土したからである。当時の社会構造を考慮すると、鎌倉幕府や室町幕府(鎌倉府)を頂点とする支配体制(封建制)の下部構造として、地域毎の領主層などを頂点とした支配体制が存在する。これは戦国時代となり、幕府の存在が有名無実の、「下克上」の世になっても、村落が自衛・独立でもしない限りは下部構造の支配体制は存在し続けた。さしずめ、当地域ならばその頂点には正覚院館跡の主がくるということになる。当時において、所持していた階層が比較的限られていたと考えられる、文房具(硯)・茶道具(天目茶碗、茶臼)などは、中世の浅間内集落の住人が直接入手したとは、やはり考えにくいものがある。

近世の遺構は、第1次調査区の溝群の大半が該当する。同様に、第2次・6次・7次調査区で検出された溝群もまた、近世の所産となる蓋然性が高い。これらの中には、埋没の途上で道路として利用されている形跡が認められるものも含まれ、本来的な機能は一樣ではなかったと捉えたい。第7次調査区の溝群のうち、M34からは馬骨が出土しており、溝の機能に関して何かを示唆するものかも知れない。

山本家の北側の調査区からは、19世紀代を中心とした肥前系磁器、瀬戸・美濃系・信楽系・堺系陶器が出土した。器種構成を見ると、磁器は茶碗類を中心に、陶器は灯明皿・行平鍋・播鉢、在地土器の火鉢などを含んでいる。これらをいわゆる「江戸ゴミ」と解釈するよりは、むしろそこで生活した人々の廃品と捉えられる。これは山本家とは無関係ではなく、ご先祖の方々が使用し、廃棄したものと考えてよい。当時の山本家は、北側にゴミ捨て場を設けていたと言える。

(2) 白筋遺跡

旧石器時代 Ⅹ層から石片が1点のみ出土した。これが唯一の成果である。

縄文時代 縄文時代の人々は、本遺跡にあまり足跡を残していない。早期初頭(井草Ⅰ式期)の場合、おそらくは台地上の道の通過点であると思われるが、浅間内集落と沖塚集落の中間に位置するということから見れば、「入会地」的な性格を持っていた可能性も否定できない。

古墳時代 根上神社古墳の周溝が調査された(第3章を参照)。出土遺物としては、第1次確認調査出土の土玉と、第2次調査出土の須恵器のみであり、遺構は検出されなかった。須恵器は蓋坏の蓋で、年代的には7世紀後半代のもので、根上神社古墳との関係は不明である。

奈良・平安時代 根上神社古墳周溝(M3)の擾乱部分より、奈良時代の須恵器高台付甕が出土した。

D1は萱田編年のⅥ期に比定される。出土遺物のうち、土師器皿は無高台で、この他では猿投産の灰釉陶器短頸壺が出土し、ともに時期的な証明となる資料である。灰釉陶器短頸壺はいずれも肩部小片で、意図的に損壊(毀損)したものを廃棄した可能性が高い。単独の検出なので、いわゆる「離れ国」的な印象を与えるが、何分にも調査面積が限られており、多くを語ることはできない。一つ考えられることは、前代に築造された根上神社古墳の存在が、古墳周囲を「神聖な空間」として、住居などを設営することに関する「禁忌」を生じさせた可能性がある。そのために、平安時代になり、ようやく住まう者が現れても、古墳の程近くに設営することはなかったのではないかと解釈される。

中・近世 根上神社古墳の周溝を破壊する形で溝2条が検出された。M2からは、国産陶器として常滑の大甕、在地産の土器は土鍋が出土した。間接的には溝の年代を示すものと思われる。

(3) 沖塚遺跡

旧石器時代 文化層は2枚で、遺物集中箇所2地点が検出された。N16-13Gに所在する遺物集中箇所1は、産出層準が立川ローム層Ⅵ層~Ⅶ層に相当し、石器類の岩種はガラス質黒色安山岩を主とする。N17-8G・18Gにまたがって所在する遺物集中箇所2は、産出層準が立川ローム層Ⅳ層下部~Ⅴ層に相当し、約3.5m×2.4m程の広がりを示し、焼礫を含めて221点を数える。石器類の岩種は黒曜石を主とするものである。石器組成には素材の剥片を、横剥ぎにより剥取したナイフ形石器2点を含む。この他、遺物集中箇所と認定できないとはいえ、下層調査により石器類及び石片を出土したグリッド及びトレンチは5箇所のにぼる。今回、諸般の事情により掲載できなかった石器類があるが、これについては、旧石器時代研究者諸賢の御寛恕を乞いたい。

縄文時代 草創期~晩期末にいたるまで、縄文時代人の足跡が残されている。縄文時代を通して、本遺跡とは支谷を挟んだ隣の台地の黒沢池上遺跡及び新林遺跡と、密接不離の関係にあったと考えられる。特徴的なのは、断続的な土地利用で、ほんの「立ち寄り」程度から、ある程度の期間の「滞在」を含むものである。後述するように、人間が居住するのではなく、狩猟場として機能していた期間も、比較的

長かったと捉えられる。

草創期では、安山岩製のポイント1点が検出された。全くの単独出土であることから鑑みれば、おそらくは当時狩猟場で、未回収となった石槍の槍先である蓋然性が高い。

早期以降、前期後半に到るまでの間は、前代と同様に狩猟場になっていたようで、陥穴群が検出された。出土した石器の中で石鏃が目立つという点も、このことを裏付けていよう。ただし、陥穴群は、後期初頭称名寺式期のP100を除いた他は時期決定ができず、課題として残った。同様にして、石鏃の所属時期も明らかにすることはできなかった。

P100は、底部平面形が方形を呈する深い陥穴で、寡間にして類例を知らない。今回の例は、時期決定が可能であった点でも重要と言える。なぜならば、黒沢池上遺跡において同時期・同段階の土器が出土した竪穴住居跡が2軒、検出されているからである。これにより、沖塚遺跡の後期初頭は、黒沢池上集落の狩猟場であった可能性が出てきた。

縄文式土器は、早期初頭燃糸文系土器は1点のみで、早期前半沈線文系土器も2点と少量であった。早期後半条痕文系土器は、前二者よりは出土点数があるとはいえ、同一個体の破片がほとんどなため、元々は数個体である。飾られない貝殻条痕を表裏に施した胴部片のため、属性に乏しく、細別時期は決定できない。また、野飯によると、風倒木に破壊された炉穴が存在したことになっている。検討の結果、積極的に存在を肯定する資料が乏しく、炉穴として認定することはできなかった。

前期前半岡Ⅰ式土器は、市内でも稀な出土例として注目される。P31は風倒木痕で、ここからの出土である。様々な背景が想起されるが、発掘調査報告書という点を踏まえ、今回は触れないでおく。

前期後半浮島・興津式土器は、文様属性の口縁部の縦位条線帯などを踏まえると、その大半は興津Ⅰ式に比定される。本遺跡とは支谷を挟んだ隣の台地の黒沢池上遺跡・新林遺跡では、浮島Ⅲ式～興津Ⅱ式土器が出土しており、同一の集団が移動を繰り返した可能性がある。その場合、竪穴住居跡が検出された新林遺跡がベース・キャンプで、本遺跡や黒沢池上遺跡はワーク・キャンプであるとか、夏季などの季節的な滞在地として捉えるのが妥当である。他方で、3遺跡ともに土製塊状耳飾が出土している。そのいずれもが、設楽博己氏の分類でいうⅡ型(復山谷タイプ)の範疇に納まるもので、浮島式期を特徴づけるものである。さらに、土製塊状耳飾は、土壙墓から副葬品として出土する例は比較的少なく、集落遺跡によって多寡が認められる。

前期末葉は、波状四山で口縁部に二条の原体側面圧痕を施した土器が、市内の芝山遺跡の例に近似する。他を見ると、中期初頭まで下りそうなものも含まれている。

中期初頭は、飾られた土器を見る限り、最初頭段階の資料は出土していない。五領ヶ台Ⅱ式土器段階の、八辺式Ⅲ期よりわずかに資料が見られ、次の八辺式Ⅳ期ではややまとまりが見られた。

中期前半阿玉台式土器は、(財)千葉県文化財センターによる、東葉高速鉄道敷設に先立って調査の際にも出土しており、Ⅰb式土器を中心にまとまりが見られた。今回も、時間的にはⅠb式土器がほとんどで、県セの調査内容とも一致するものである。

中期後半は、加曾利EⅡ式土器の検出が、成果の一つと捉えたい。浅間内遺跡でも出土したが、こうした零細な資料を地道に集成してゆくことが、マイクロエリアの地域研究には不可欠と考える。

後期初頭の称名寺式土器は、三細別での(中)段階及び(新)段階が確認された。格子文系の粗製土器は、1点のみ検出された列点充填の例が(新)段階(7段階区分では6段階)を示すため、これに伴うものと解釈される。P100からは(中)段階の土器が出土し、共存した打製石斧は分銅形で当該期の特徴を示しており、この時期の遺構として捉えられるだけに貴重である。近隣の黒沢池上遺跡では、(中)段階の竪穴住居跡が2軒検出されており、前述のように集落と狩猟場の関係へと言及が可能となった。

後期前半の堀之内1式土器はごく少量で、当該期の遺構も検出されなかった。発掘調査区域に限り、という但し書きを付けるが、今回報告の3遺跡とも堀之内式期の人々の活動はごく痕跡的であった。

後期中葉の加曾利B3式土器が3個体出土した。不思議なことにいずれも精製土器で、通常大多数を占めるところの粗製土器は1点も出土しなかった。波状五山を呈する深鉢は、文様帯が口縁部・頸部・胴部の三帯構成となる。口縁部文様帯は単段の連刺、頸部文様帯は波頂部を起点とした磨消弧線文、胴部のくびれ部分にキザミを廻らし、胴部文様帯は地文縄文の上に横走沈線を数条充填するものである。

晩期末葉の大洞A式土器に比定される資料が出土した。精製土器が1個体で、粗製土器は摺糸文施文が2個体、細密条痕施文が2個体で、グリッドを見ると個体毎にまとまって廃棄された可能性がある。大洞A式土器は、近隣では川崎山遺跡d地点で出土している。本遺跡の場合、粗製土器が摺糸文と細密条痕で、両者がほぼ同じ比率なので、時間的な位置づけとしては川崎山遺跡例よりは後にならうか。弥生時代 中期初頭に比定される甕形土器1個体が出土した。胴下半に施された条痕を、縄文晩期末葉の細密条痕と比較すると、使用した原体及び施文方法が異なっている。晩期末葉の方が細かい原体を用い、ていねいに施しているようである。そのことが新旧を示すのかはともかく、留意しておきたい。

奈良・平安時代 方形周溝状遺構1基が検出された。方形台状部における封土の有無であるが、セクションベルトの断面観察の結果では、攪乱が多く、明らかにすることはできなかった。また、方形台状部・周溝のいずれからも埋葬施設は検出されなかった。位置的に見て、沖塚古墳の程近くということが象徴的である。また、周囲に同時代の遺構・遺物が全く見られない点も共通している。先述の根上神社古墳の周囲と同様に、ある種の「禁忌」が存在した可能性は否定できない。

中・近世 塚2基・溝3条が検出された。塚は、2基ともに高さ約0.5m程の低マウンドである。周溝や埋納施設は検出されておらず、いかなる目的で築かれたものかは不明とせざるを得ない。K2では盛土直下に焼土の分布が見られたが、これは四街道市吉岡遺跡群の軽戸永林遺跡などに類例がある。ともに0.5m～1.0m未満の低マウンドで、盛土自体はあまり分層できず、比較的一気に築いたと考えられる点など、共通点が多く、一つの類型で捉えてもよいかも知れない。塚群の築造時期であるが、盛土中出土の江戸在地系土器により、江戸後期と位置づけておきたい。ちなみに、K3出土の刻印文の付けられた火鉢は、浅間内遺跡第1次調査区・川崎山遺跡d地点の溝からも検出されており、これらがほぼ同時期に残されたことを示すものとして重要である。即ち、江戸後期の19世紀代には、浅間内遺跡では山本家のご先祖が屋敷を構えて生活をされていた、という歴史景観を垣間見ることができるといえる。

溝のうち、M3のように、クランク状に屈曲しつつ総延長が41mを超えるものは、地割りや地境の溝でよいかも知れない。

遺物では土製玩具である泥面子が5点出土した。本遺跡では、七福神やお多福など、福の神を模ったものが多かった。八千代市内における泥面子の出土例は、多寡を含めて偏在する傾向があるようである。例えば、空前の大規模調査の報告書が堂々完結した保品・神野遺跡群では、7個所の遺跡からの総出土量は、ほんの微々たるものであった。今回も、浅間内遺跡全体ではわずか2点である。にもかかわらず、近世の遺構・遺物に比較的乏しい沖塚遺跡で、その3倍近く出土している点は留意しておきたい。

土製玩具は「有形文化財」であり、時間の経過により土中に包蔵されれば「埋蔵文化財」にもなるが、「遊び（見戯）」自体は「無形」である。現在においても、「遊び（見戯）」には小地域毎の「ルール」が厳然として存在しており、そのうちの一つを取り上げたところで、実態把握は限りなく不可能に近いものがある。こうした「埋蔵文化財」としての土製玩具も、近世の子供たちの「遊び（見戯）」の復元への一助になるのであろうが、間に横たわるハードルの数は多く、かつ高いものに違いない。

参 考 文 献

第1章に関係するもの(補遺)

浅間内遺跡に関する文献

- 八千代市教育委員会 1983 『八千代の遺跡-千葉県八千代市埋蔵文化財包蔵地調査報告書』
八千代市教育委員会 1996 『八千代市埋蔵文化財調査年報 平成6年度版』
八千代市教育委員会 1997 『八千代市埋蔵文化財調査年報 平成7年度版』
八千代市教育委員会 2000 『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書 平成12年度』
八千代市教育委員会 2002 『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書 平成13年度』
八千代市教育委員会 2003a 『千葉県八千代市浅間内遺跡発掘調査報告書 平成14年度』
八千代市教育委員会 2007 『千葉県八千代市浅間内遺跡発掘調査報告書 平成18年度』

白筋遺跡に関する文献

- 八千代市教育委員会 1983 『八千代の遺跡-千葉県八千代市埋蔵文化財包蔵地調査報告書』
八千代市教育委員会 1996 『八千代市埋蔵文化財調査年報 平成6年度版』
八千代市教育委員会 2002 『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書 平成13年度』

沖塚遺跡・沖塚古墳に関する文献

- 八千代市教育委員会 1983 『八千代の遺跡-千葉県八千代市埋蔵文化財包蔵地調査報告書』
堀部 昭夫 1991 『発掘調査の成果』: 八千代市史編さん委員会 『八千代市の歴史 資料編 原始・古代・中世』
大鷹 依子 1994 『八千代市沖塚遺跡・上の台遺跡他-東葉高速鉄道埋蔵文化財調査報告書』
日本鉄道建設公団・財団法人千葉県文化財センター
八千代市教育委員会 1996 『八千代市埋蔵文化財調査年報 平成6年度版』
深谷 昇 2000 『八千代市最古の弥生土器』 『埋やちよ』7 八千代教育委員会
八千代市教育委員会 2003b 『千葉県八千代市市内出土土人骨分析委託報告書Ⅱ』
萩原 恭一 2003 『沖塚遺跡』 『千葉県の歴史 資料編 考古2(弥生・古墳時代)』 財団法人
千葉県史料研究財団
白井久美子 2003 『沖塚古墳』 『千葉県の歴史 資料編 考古2(弥生・古墳時代)』 財団法人
千葉県史料研究財団

第2章～第5章に関係するもの(第1章と重複する文献は割愛した)

- 朝比奈竹男 1996 『八千代市の縄文時代遺跡の分布』 『貝塚博物館紀要』第23号 千葉市加曾利
貝塚博物館 47-54頁
石田 年子 2006 『利根川中流域の女人信仰 -野田市・十九夜塔を中心として-』 『研究報告』
第10号 千葉県立関宿城博物館 16-33頁
及川 司他 1986 『軽戸永林遺跡』 『古岡遺跡群発掘調査報告書』 四街道市古岡遺跡群調査会
大澤 孝 1983 『下総地方における北関東系と称される後期弥生式土器について』 『史館』
第14号 史館同人会 47-85頁
大野 康男 1989 『八千代市白輪前遺跡』 財団法人千葉県文化財センター
大村 裕・大内千年 2004 『房総半島における縄紋中期中葉の土器群について』 『下総考古学』18
下総考古学研究会 11-33頁
加藤 修司 2000 『第1章 土器編年案』 『千葉県文化財センター研究紀要』21 財団法人
千葉県文化財センター 13-27頁

- 熊野 正也 1974 「南関東地方における弥生文化の研究(1) - 佐倉市白井南遺跡出土の土器 -」
『史館』第4号 史館同人会 38-53頁
- 小林 謙一 1989 「千葉県八日市場市八辺貝塚出土土器について」『史学』第58巻2号
三田史学会 27-66頁
- 設楽 博己 1985 「D. 土製球状耳飾について」『西の台(第2次)』船橋市遺跡調査会
- 末武 直則 1988 「千葉県印旛郡白井町神々廻遺跡群発掘調査報告書」財団法人印旛郡市文化財
センター
- 杉山 秀宏 1988 「古墳時代の鉄族について」『榎原考古学研究所論集』第八 榎原考古学研究所
- 高花 宏行 1999 「印旛沼周辺における弥生時代後期の土器の変遷について」『奈和』第37号
奈和同人会 17-43頁
- 玉井 庸弘 1997 「神野貝塚における土製円盤」『貝塚研究』第2号 園生貝塚研究会 34-44頁
- 常松 成人・川口 貴明 2003 「千葉県八千代市 川崎山 d 地点」八千代市遺跡調査会
- 西村 正衛・芹沢 長介・江坂 輝彌・金子 浩昌 1955 「千葉県西之城貝塚 - 関東縄文式早期文化の研究 -」『石器時代』第2号
石器時代文化研究会 1-20頁
- 西村 正衛 1969 「千葉県香取郡小見川町木之内明神貝塚 - 東部関東における縄文中・後期文化
の研究 その1 -」『学術研究』第18号 早稲田大学教育学部 233-263頁
- 西村 正衛 1970 「千葉県香取郡小見川町阿玉台貝塚 - 東部関東における縄文中・後期文化の
研究 その2 -」『学術研究』第19号 早稲田大学教育学部 33-66頁
- 西村 正衛 1972 「阿玉台式土器編年的研究の概要 - 利根川下流域を中心として -」
『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第18輯 早稲田大学大学院 73-103頁
- 能勢 幸枝 1997 「宗吾内野台燧遺跡」財団法人印旛郡市文化財センター
- 橋本 勝雄 2000 「萱田遺跡群」『千葉県の歴史 資料編 考古1(旧石器・縄文時代)』財団法人
千葉県史料研究財団 196-209頁
- 林田 利之 1992 「駒井野荒追遺跡」財団法人印旛郡市文化財センター
- 原田 昌幸他 1989 「千葉県高台向遺跡」財団法人千葉市文化財調査協会
- 原田 昌幸 1991 「燃糸文系土器様式」『考古学ライブラリー』61 ニュー・サイエンス社
- 藤岡 孝司 1990 「八千代市萱田地区遺跡群の歴史時代土器」『研究連絡誌』第30号
財団法人千葉県文化財センター 10-20頁
- 藤澤 良祐 2005 「瀬戸窯跡群」『日本の遺跡5』同成社
- 堀越 正行 1977 「曾谷貝塚D地点発掘調査概報」市川市教育委員会
- 松田 光太郎 1995 「興津式土器の分類とその変遷(上)」『神奈川考古』第31号 神奈川考古
同人会 21-40頁
- 松本 太郎・松田 礼子 2001 「下総国府跡」市川市教育委員会
- 宮澤 久史 2004 「向境遺跡発掘調査報告書」八千代市遺跡調査会
- 宮澤 久史 2006 「栗谷遺跡の概要」『シンポジウム「印旛沼周辺の弥生土器」予稿集』
シンポジウム「印旛沼周辺の弥生土器」実行委員会 17-26頁
- 森 竜哉・松浦 史浩 2003 「千葉県八千代市 黒沢池上・新林遺跡発掘調査報告書」八千代市遺跡調査会

報 告 書 抄 録

ふりがな	ちばけんやちよしあさまうちいせき・しろすじいせき・おきづかいせき						
書名	千葉県八千代市浅間内遺跡・白筋遺跡・沖塚遺跡						
副書名	八千代市辺田前土地区画整理事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書						
編著者名	常松成人 中野修秀						
編集機関	八千代市遺跡調査会						
所在地	〒276-0045 千葉県八千代市大和田138-2 ☎047(483)1151代表						
発行年月日	2007年3月30日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号				
あさまうち 浅間内遺跡	やちよしむらかみあざ あさまうち 八千代市村上字浅間内 2818-1ほか	12221	204	35度 43分 24秒	19940411 ～ 20041130	6,889	土地区画整理
しろすじ 白筋遺跡	やちよしむらかみ あざしろすじ 八千代市村上字白筋 2700-1ほか	12221	208	35度 43分 16秒	19940601 ～ 19980911	939	
おきづか 沖塚遺跡	やちよしむらかみ あざくろさわいけがみ 八千代市村上字黒沢池 上2095-10ほか	12221	215	35度 43分 0秒	19930401 ～ 19940330	9,600	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項
浅間内遺跡	集落跡	旧石器時代 縄文時代 弥生時代 古墳時代 奈良・平安時代 中・近世	遺物集中箇所1 陥穴6基、土坑30基、 風倒木痕2基 住居跡13軒、土坑2基 住居跡11軒、土坑4基 住居跡37軒、掘立柱建物跡 6棟、土坑44基 地下式塚2基、火葬墓3基、 土坑4基、溝12条 その他ピット38基		削器、剥片 縄文土器（井草式、阿玉台 式）、土器片鉢、石鏃、 弥生土器、磁石 土師器、須恵器、磁石 土師器、須恵器、灰輪陶器、 支脚、石製紡錘車、磁石、 金床石、鉄鏃、手鎌、刀子、 火打金、帯金具 陶器、磁器、在地土器、硯、 茶臼、磨耗陶片、銅銭、板碑、 煙管、泥面子、馬骨		8世紀初頭～後半の 集落に見るべき資料 が目立つ。 墨書文字「郡」。
白筋遺跡	古墳 集落跡	古墳時代 奈良・平安時代 中・近世	根上神社古墳周溝1条 住居跡1軒 溝2条、その他ピット1基、 溝1条		土師器、須恵器、土玉 土師器、須恵器、灰輪陶器、 土玉、磁石、 中世陶磁器、中・近世在地 土器（内耳）、煙管雁首		根上神社古墳の周溝 を検出
沖塚遺跡	集落跡 ピット群 塚群	旧石器時代 縄文時代 弥生時代 古代～中・近世	遺物集中箇所2 陥穴10基、土坑6基、 風倒木痕6基 方形周溝状遺構1基、塚 2基、ピット1基、溝4条、 その他ピット75基		ナイフ形石器、石核、石楯 縄文土器（圓山式、大割入 式）、石鏃、土製球状耳飾 弥生土器（初期弥生） 須恵器、江戸在地土器、 泥面子		縄文晩期末葉土器及 び初期弥生土器出土

写 真 图 版



浅間内道跡遠景 (空から)



浅間内道跡遠景 (新川対岸から)



第6次調査区近景



第6次調査区調査前



第7次調査区調査前 (1)



第7次調査区調査終了 (1)



第7次調査区調査前 (2)



第7次調査区調査終了 (2)

図版 2

(浅間内遺跡遺構 1)



D98内 深堀り断面



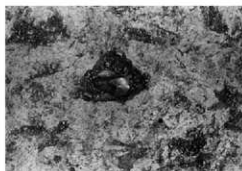
P622 断面



PTP3 出土状況



P625 完掘



PTP3 出土状況



P626 完掘



PTP3 断面及び遺物出土状況



P627 完掘



D3 遺物出土状況



D107 完掘



D9 遺物出土、焼土検出状況



D108 遺物出土状況



D86 完掘



D117 遺物出土状況



D106 遺物出土状況



D117 完掘

図版 4
(浅間内遺跡遺構 3)



D14.P53 遺物出土状況



D97 遺物出土状況



D15 遺物出土状況



D99 遺物出土状況



D85 遺物出土状況



D103 遺物出土状況



D93 遺物出土状況



D103 カマド完掘

古墳時代



D1 遺物出土状況



D17 遺物出土状況



D6 遺物出土状況



D30 遺物出土状況



D7 遺物出土状況



D74 遺物出土状況



D13 遺物出土状況



D75 遺物出土状況

図版6
(浅間内遺跡遺構5)



D83 遺物出土状況



D90 遺物出土状況



D87 遺物出土状況



D91 遺物出土状況



D88 遺物出土状況



D94 遺物出土状況



D89 遺物出土状況



D95.M34 遺物出土状況



D98 遺物出土状況



D111 遺物出土状況



D101 遺物出土状況



D115 遺物出土状況



D102 遺物出土状況



D116 遺物出土状況



D104 遺物出土状況



D118 遺物出土状況

図版 8
(浅間内遺跡遺構 7)



D84 カマド完掘



D102 カマド内支脚出土状況



D89 カマド完掘



H9 完掘



D91 カマド完掘



H10 完掘



D98 カマド完掘



P635 完掘



第1次調査区 空撮



M2 完掘



M4 完掘



M5 完掘



M34 第3硬化面検出状況



M34 完掘状況



M35 完掘状況

図版9

(浅間内遺跡遺構8)

整然と、一定の幅で硬化面が連続する。

M34の覆土中層は、このような硬化面が何面か認められる。その機能とは、言うまでもなく、道路である。

村道の類かも知れない。

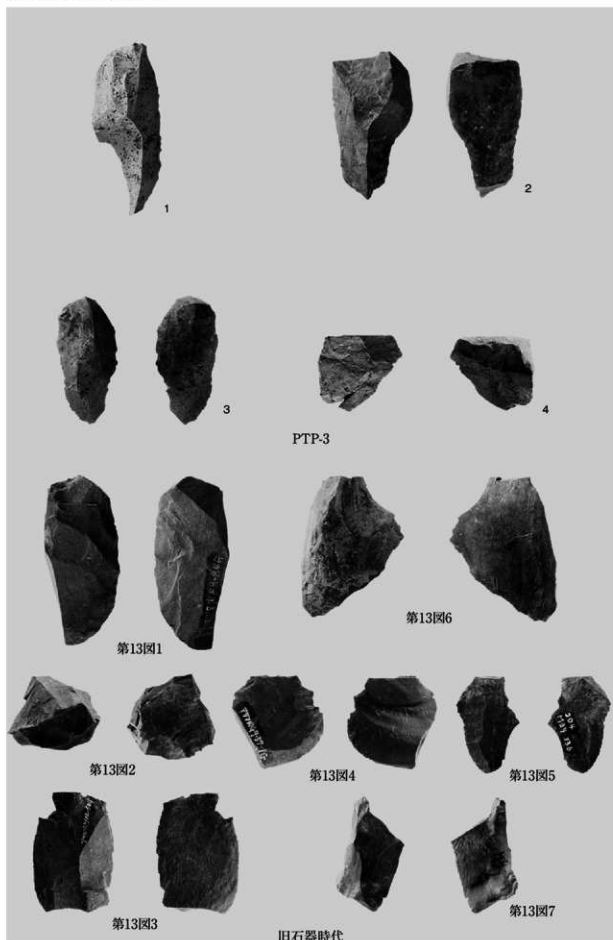
上の硬化面を除去し、さらに掘り下げたものである。極めて凹凸に富んでおり、いかなる意図によるものかは、不明。ビット状のくぼみから馬骨が出土した。

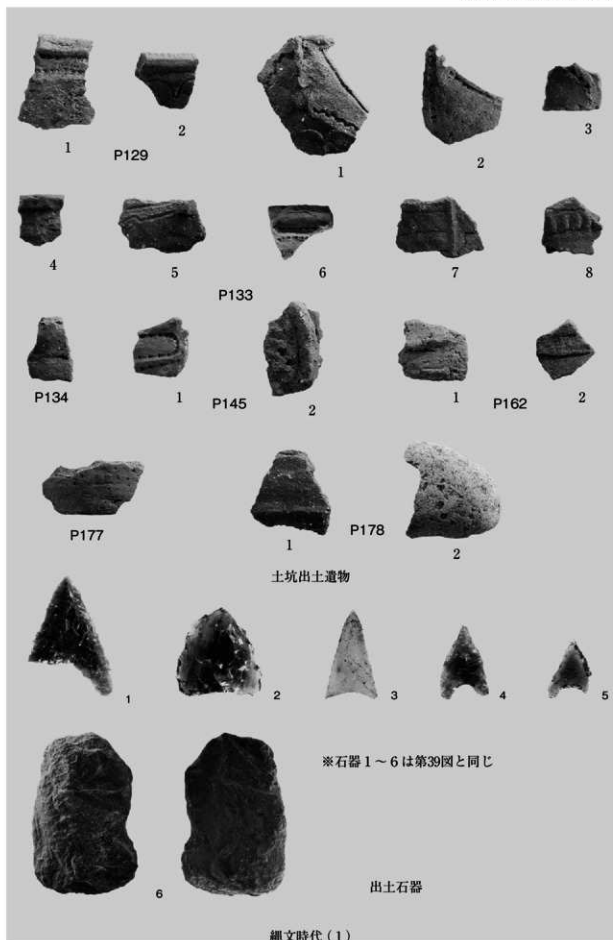
いくつもの住居跡を串刺しにしているの、断面形状は一定ではないことがよくわかる。

強いて指摘するのであれば、写真左側の立ち上がり、やや急である。

図版10

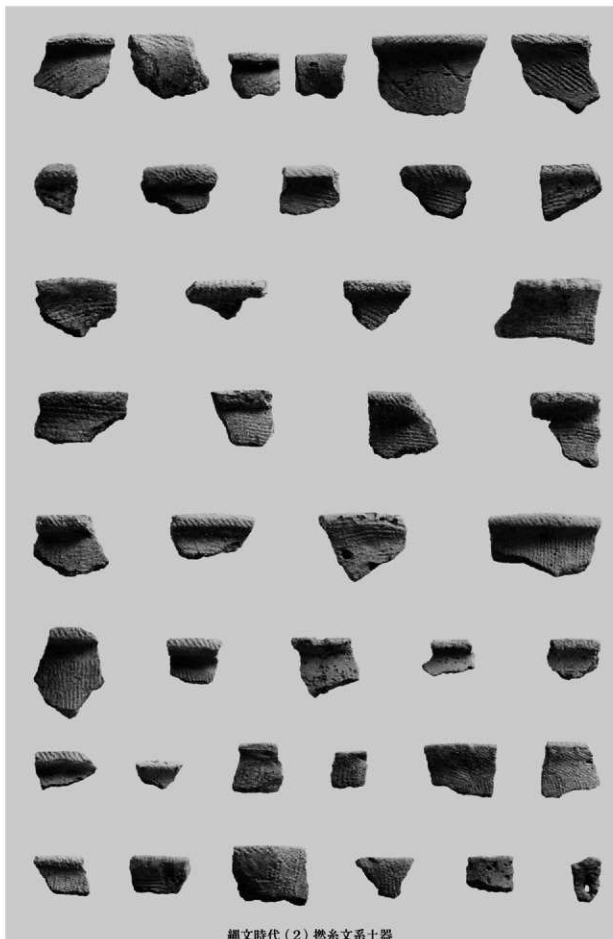
(浅間内遺跡出土遺物1)



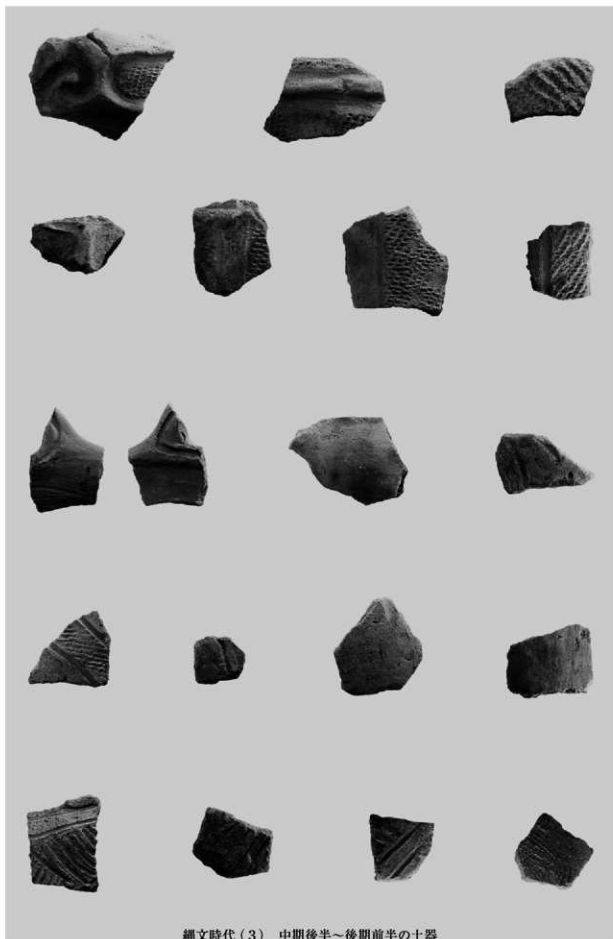


図版12

(浅間内遺跡出土遺物3)



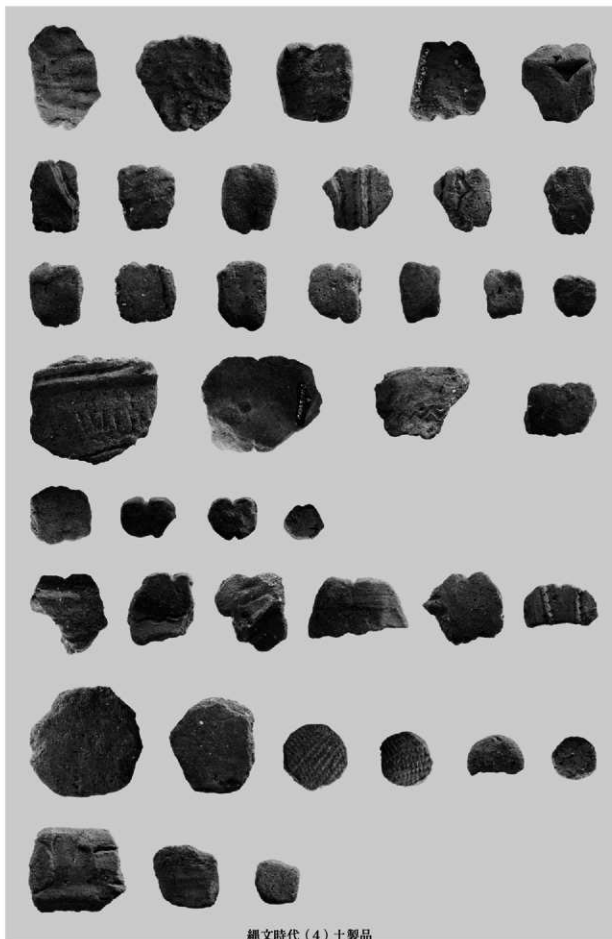
縄文時代(2) 撚糸文系土器



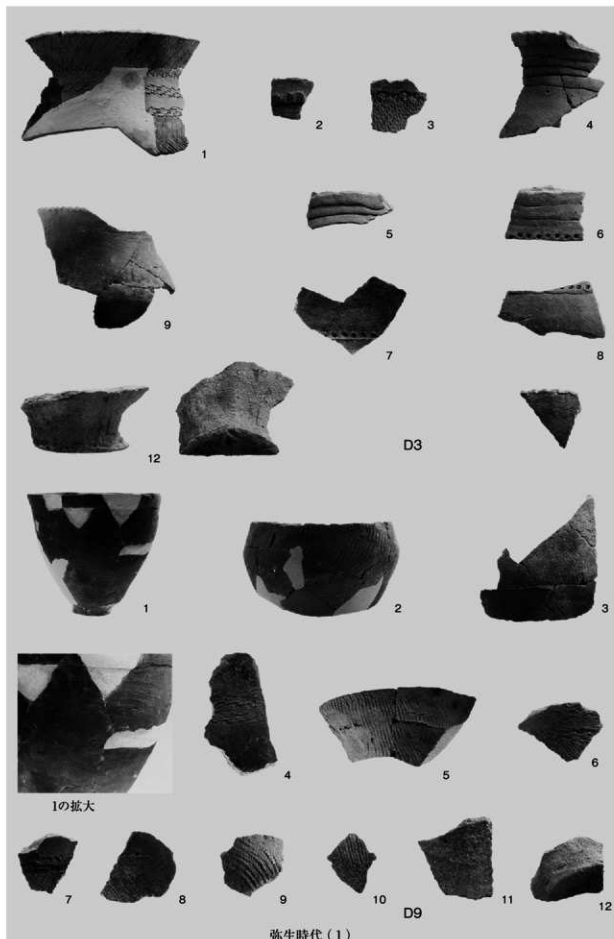
縄文時代(3) 中期後半～後期前半の土器

図版14

(浅間内遺跡出土遺物5)

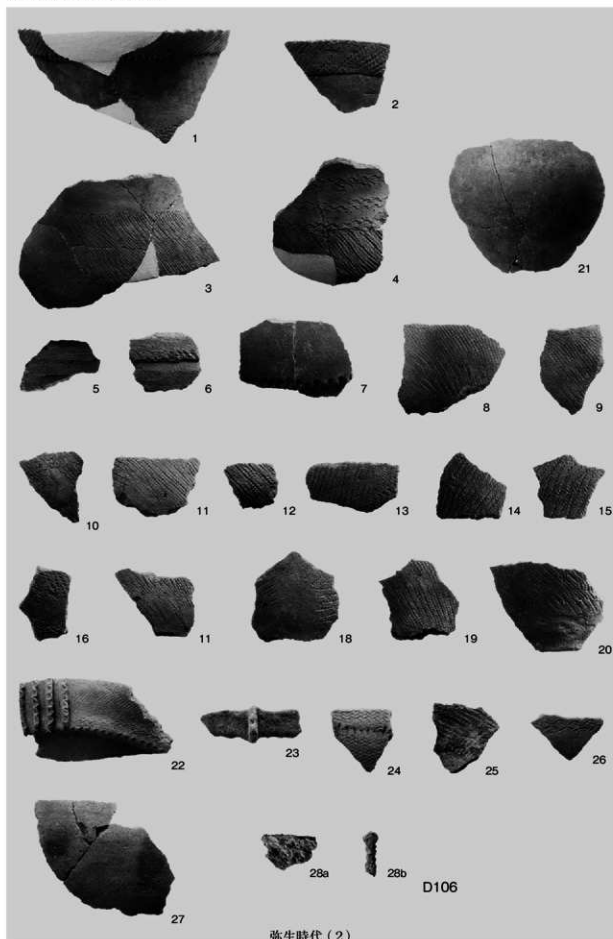


縄文時代(4)土製品

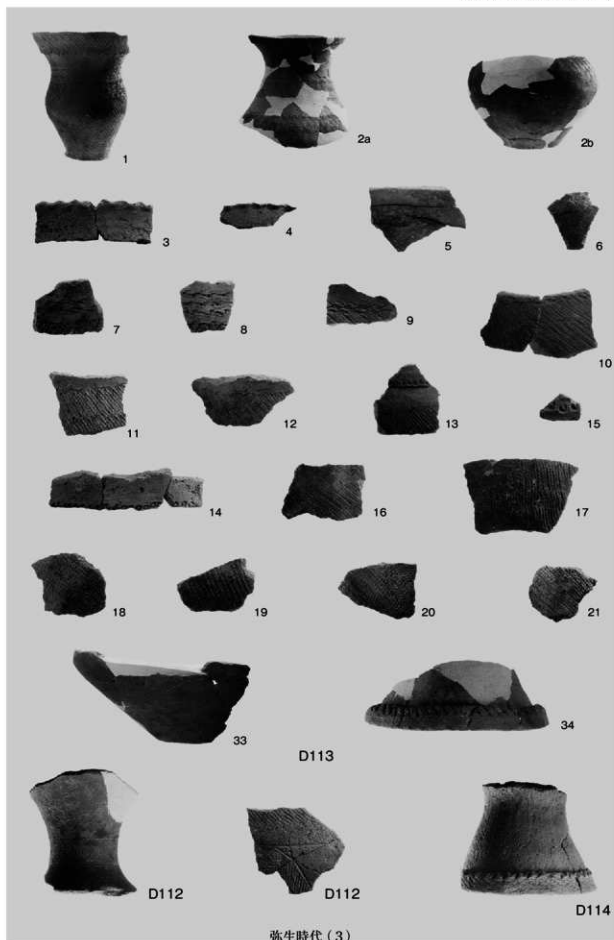


図版16

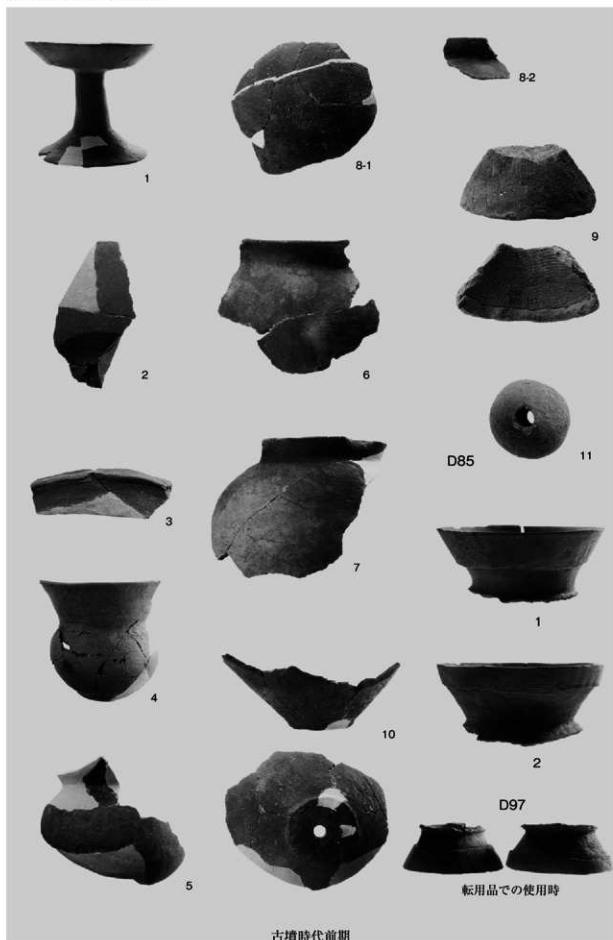
(浅間内遺跡出土遺物7)



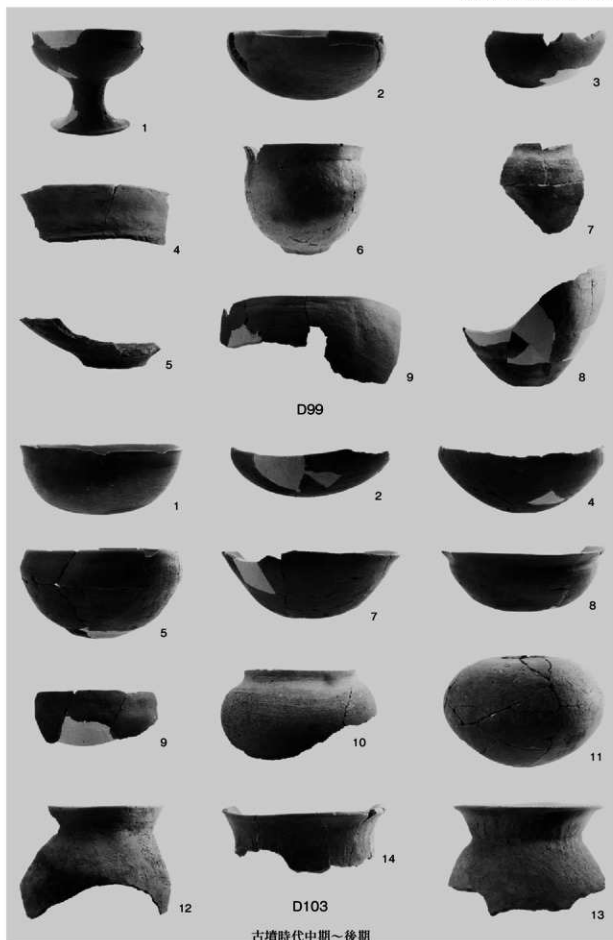
弥生時代(2)



図版18
(浅間内遺跡出土遺物9)



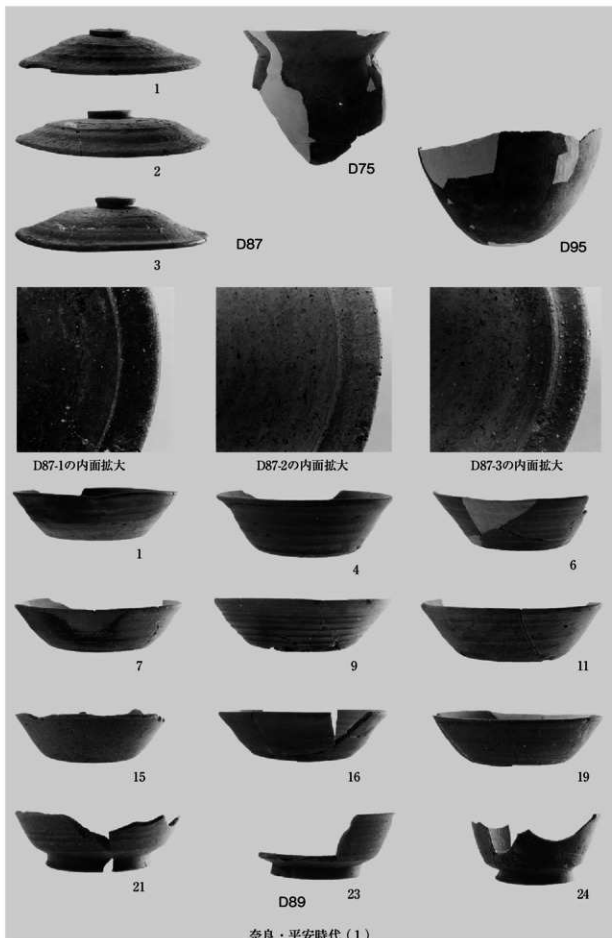
古墳時代前期

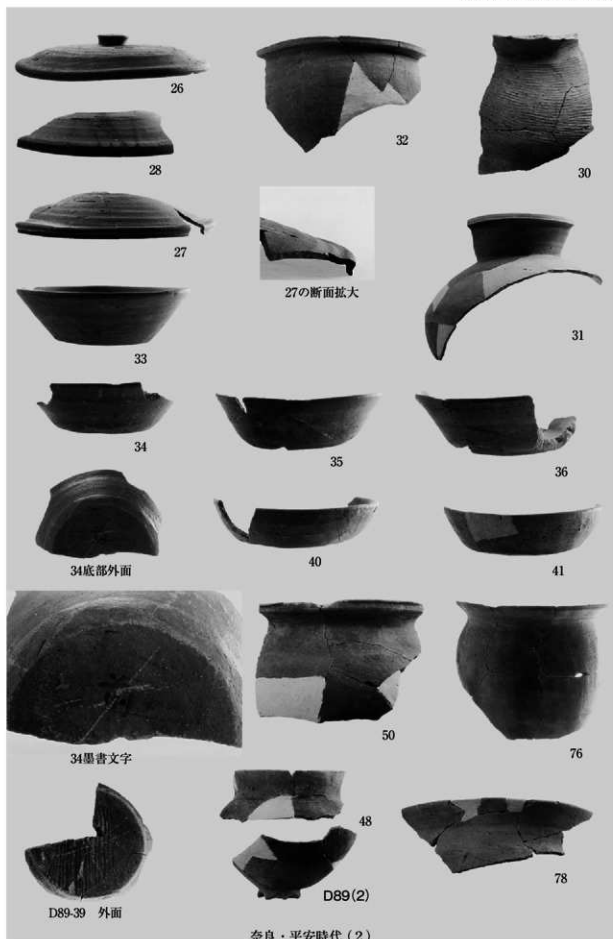


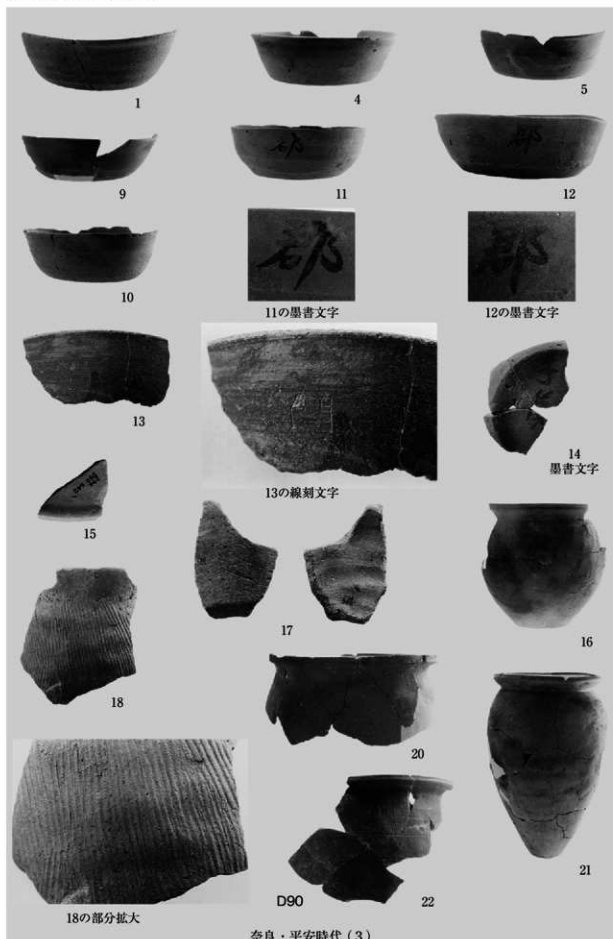
古墳時代中期～後期

図版20

(浅間内遺跡出土遺物11)









25



28



29



D98



4



8



13



墨書文字拡大



墨書文字拡大

D83



4



4 見込面



7次遺構外



墨書文字拡大

D116



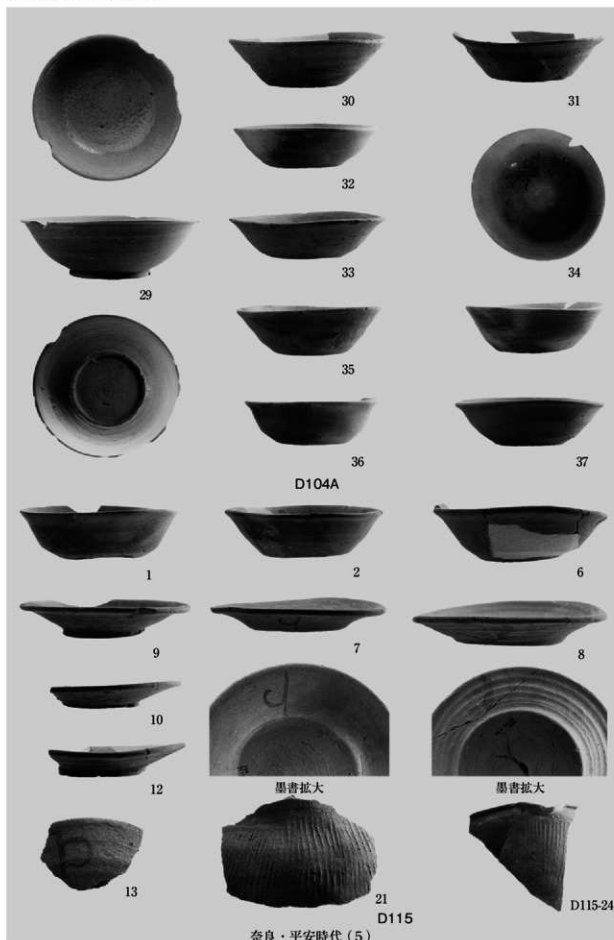
3



墨書文字拡大

図版24

(浅間内遺跡出土遺物15)





1



2



3



4



5



6



7



8



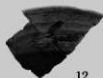
9



11



10



12



13



14



15



17



18



16



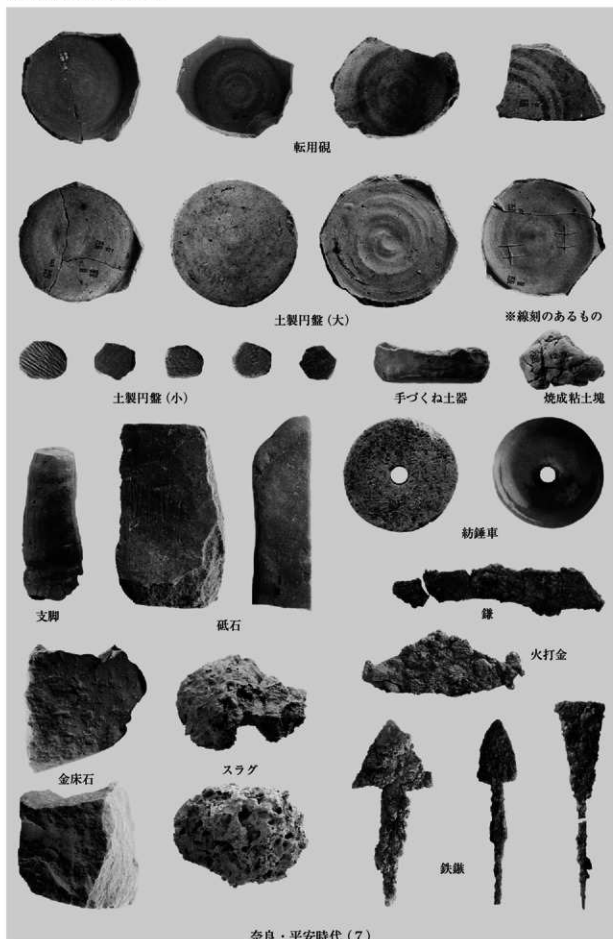
20

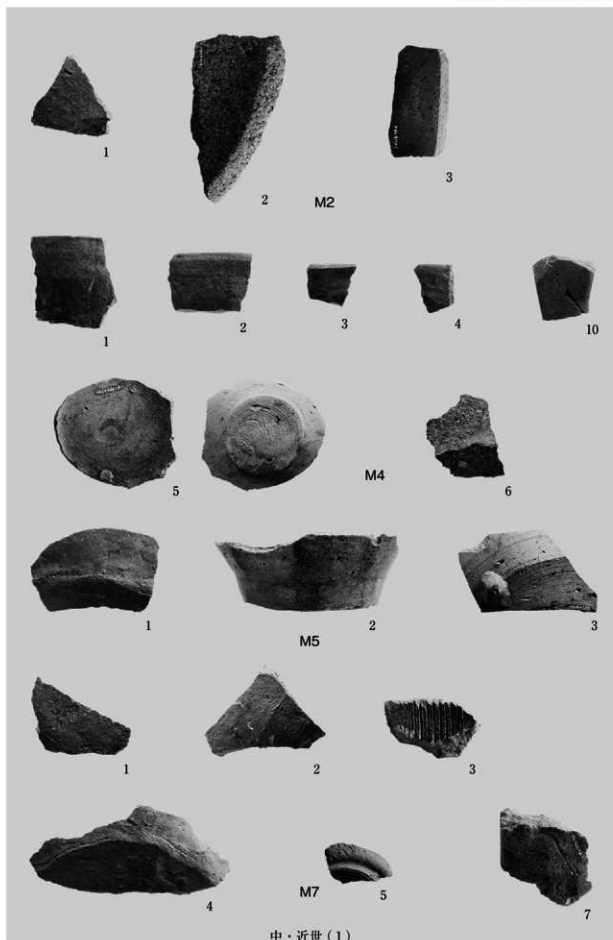


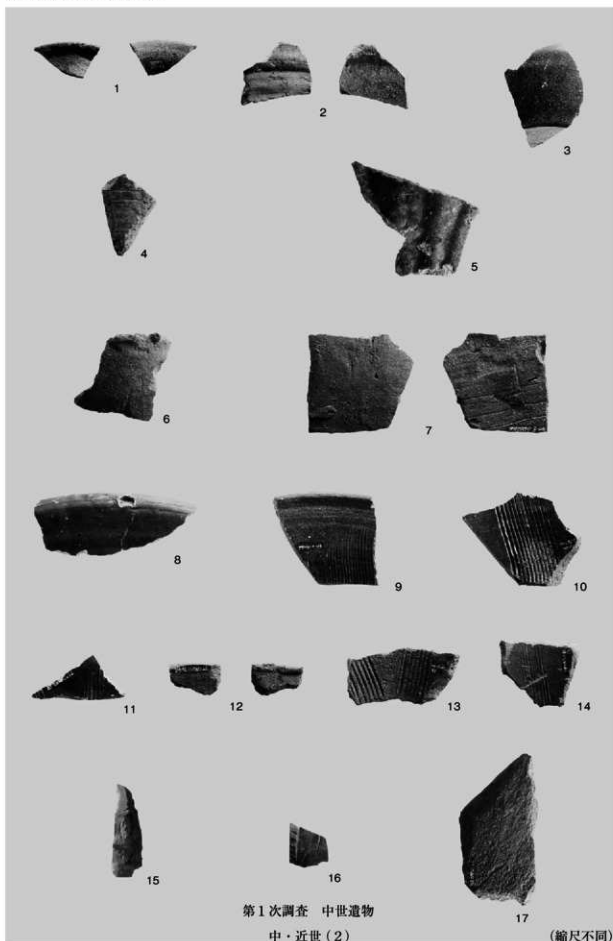
19

D7

奈良・平安時代(6)









中世 1



中世 2



近世 8



中世 3



近世 9



部分拡大



中世 4



近世 10



中世 5



近世 11



近世 6



近世 5



近世 4

第7次調査遺構外中近世遺物

中・近世(3)

図版30
(白筋遺跡遺構)



D1 遺物出土状況



M3b (根上神社古墳周溝) 検出状況



D1 炭化材等検出状況



M3b 覆土断面



D1 完掘



M2・M3 全景

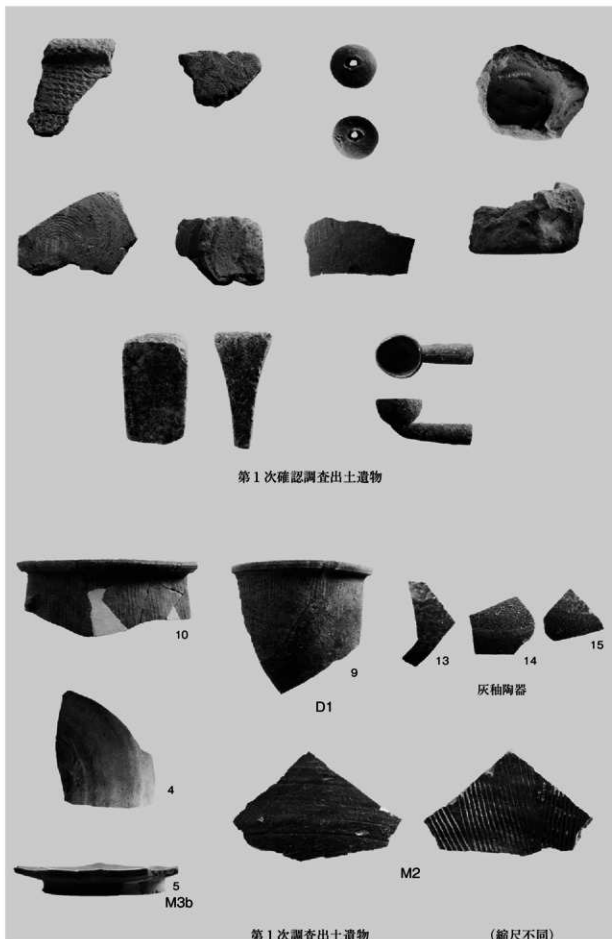


D1 カマド完掘



P1 完掘

第1次調査検出遺構



図版32
(沖塚遺跡遺構)



遺物集中箇所2 遺物出土状況



K2 調査前



P31 断面



K2 盛土断面



P85 完掘



K3 調査前

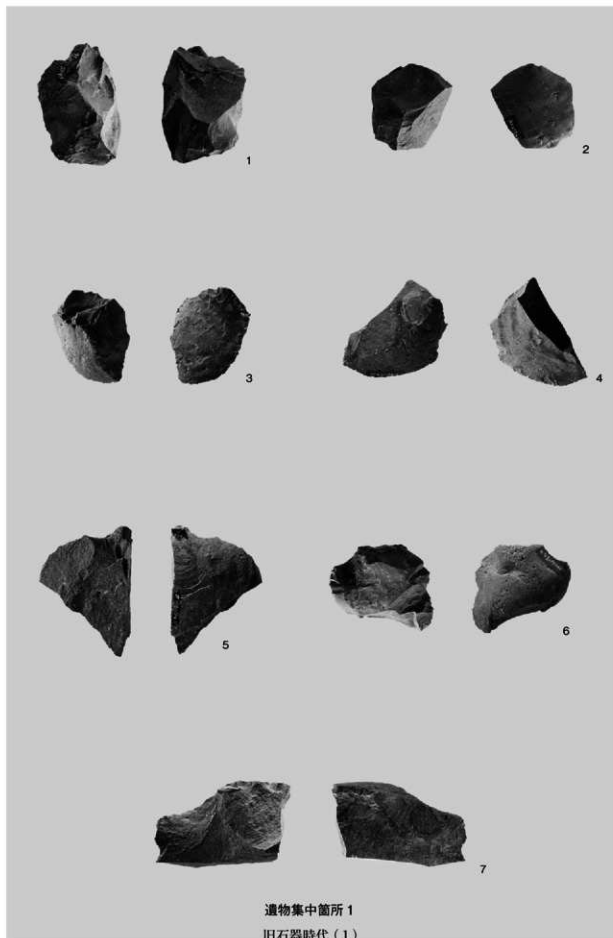


P100 完掘



K3 盛土断面

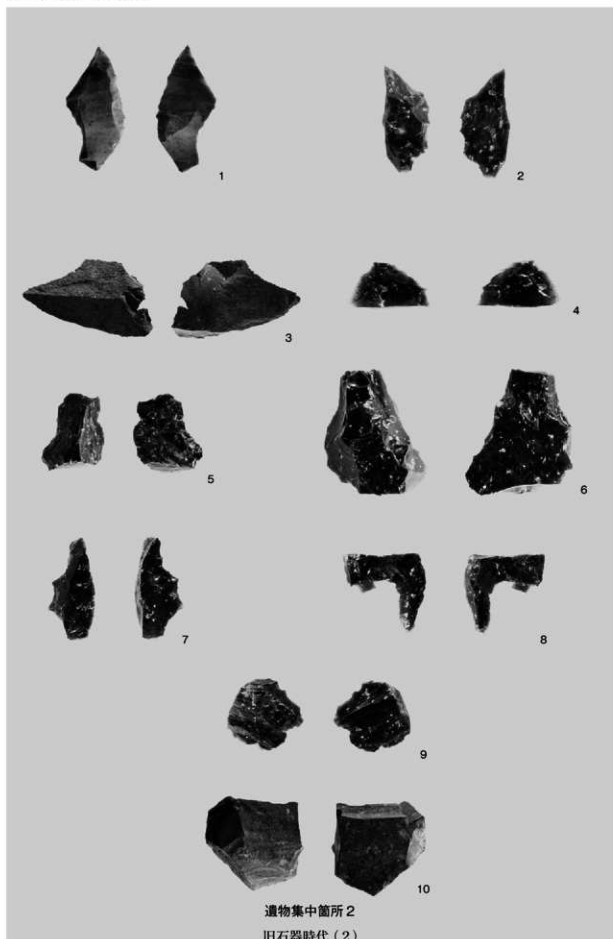
a 地点検出遺構

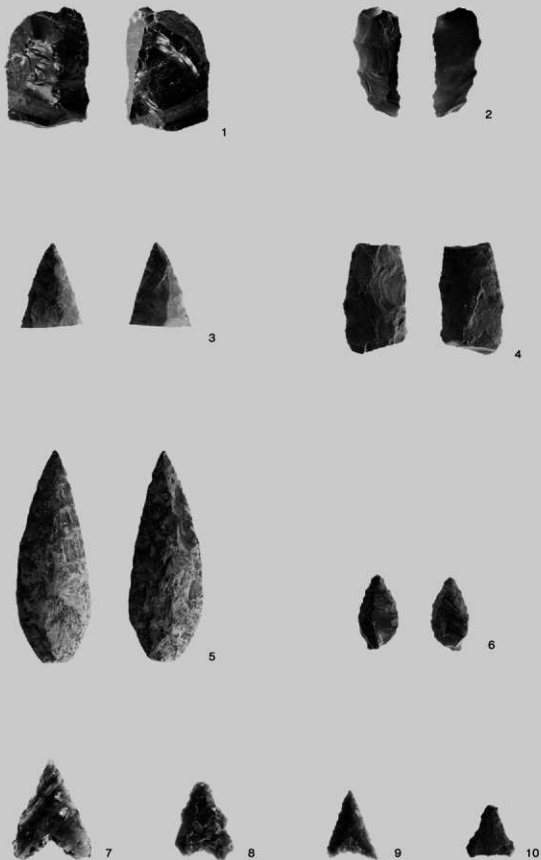


遺物集中箇所 1
旧石器時代 (1)

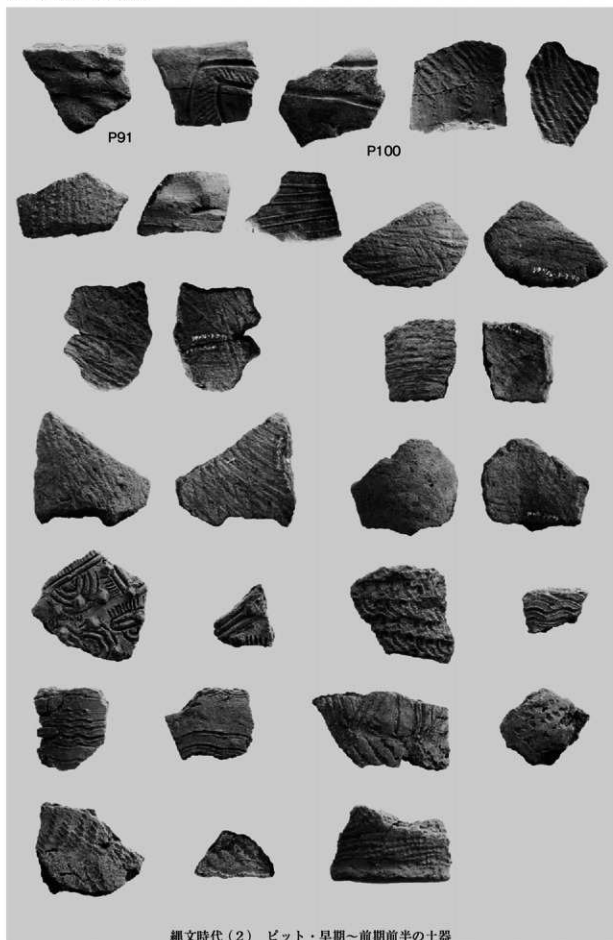
図版34

(沖塚遺跡出土遺物2)

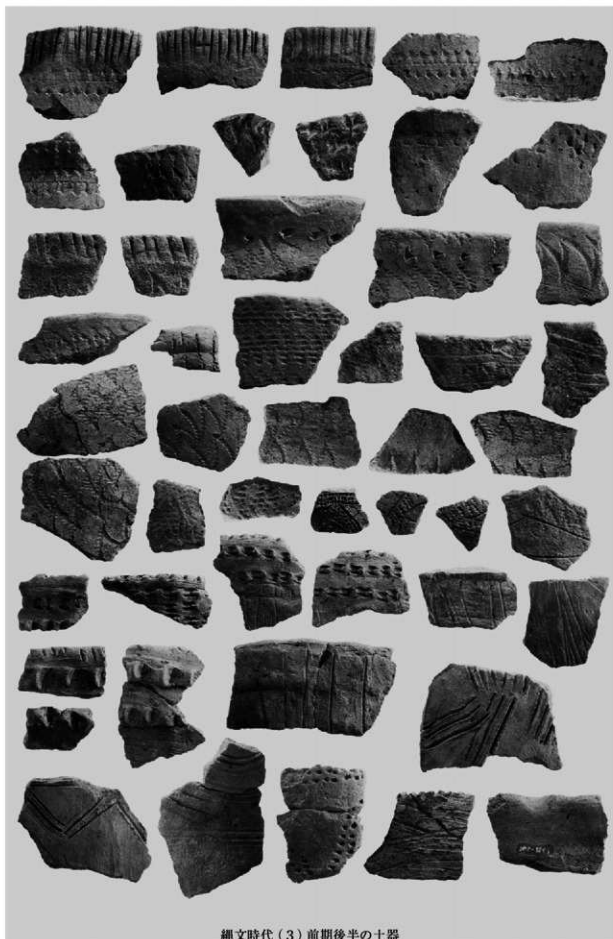




旧石器時代(3)及び縄文時代(1)



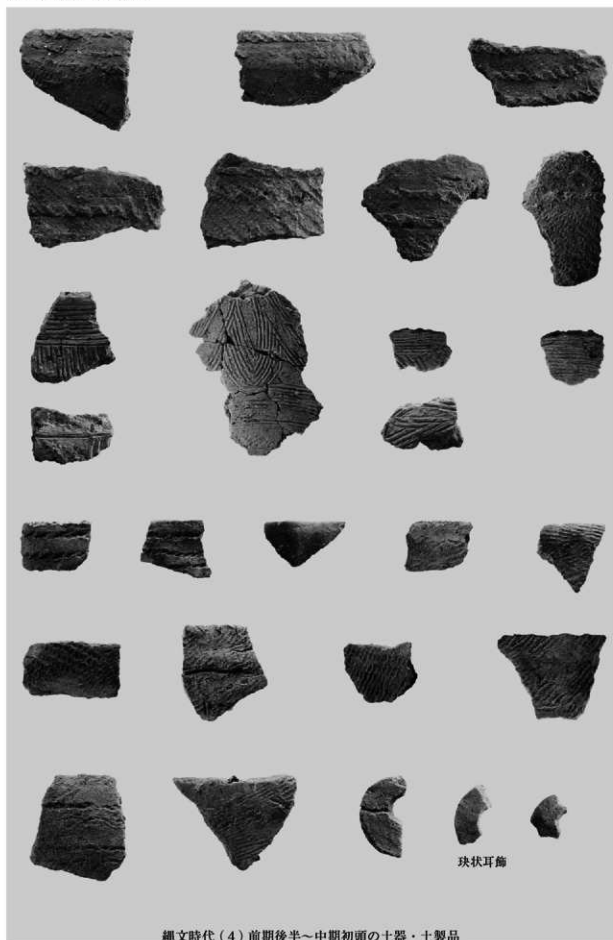
縄文時代(2) ビット・早期～前期前半の土器



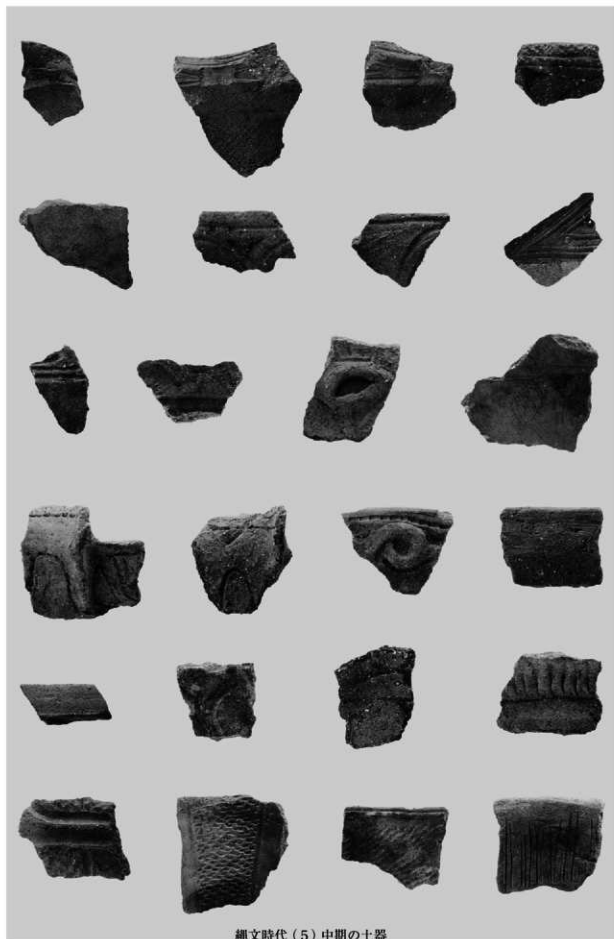
縄文時代(3)前期後半の土器

図版38

(沖塚遺跡出土遺物6)



縄文時代(4)前期後半～中期初頭の土器・土製品



縄文時代(5)中期の土器

図版40

(沖塚遺跡出土遺物 8)



縄文時代(6)後期の土器



大洞A式土器



粗製土器(細かな熱糸文)



粗製土器(細密条痕)



口縁部~頸部拡大



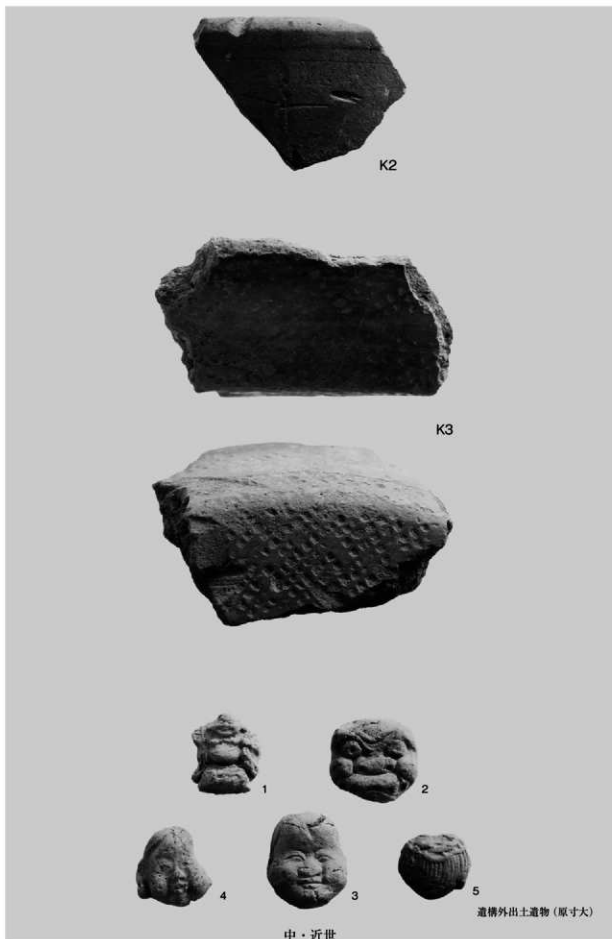
弥生式土器



胴下半部拡大

図版42

(沖塚遺跡出土遺物10)



K2

K3

1

2

4

3

5

遺構外出土遺物 (原寸大)

中・近世

千葉県八千代市

浅間内遺跡・白筋遺跡・沖塚遺跡

八千代市辺田前土地区画整理事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書

2007年3月30日 発行

編集 八千代市遺跡調査会

〒276-0045 八千代市大和田138-2

☎ 047-483-1151

発行 八千代市辺田前土地区画整理組合
